㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第91集

八寸大道上遺跡

はちすおおみちうえ

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

建設省
群馬県教育委員会
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料
No. 1-2520
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団保管
平成2年3月31日
01-330
14
(6)

八寸大道上遺跡

はちすおおみちうえ

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

竪穴住居020遺構に投棄された滑石製玉類製作工程破片

遺跡の現状　北西方向の赤城山を望む

北より見た北西側隣接地 右の丘は八寸権現山 左奥のハウスが原之城居館

古墳時代食器保管竪穴041遺構の出土遺物
手前左の須恵器は原之城居館からのもの

縄文時代集石149遺構出土の縄文土器

古墳時代の小形甑と小形甕内部に残る食料調理の跡　水気の少ない弱火によるものか

上　036遺構の612遺物
左　026遺構の383遺物

右　008遺構の073遺物
左　048遺構の762遺物

序

赤城南麓は毛野国の中心地の一つで、南流する小河川は山麓を切り開き、豊かな沃野を形成し、先人の生活の場となりました。その後連綿たる生活が続きその跡は地下に埋もれています。発掘調査によって自然災害に耐えながらしたたかに生きた先人の姿が鮮やかに蘇りました。

本遺跡は国道17号のバイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査として昭和57年度に実施され、63年度の整理事業によって多大の成果を得ることができました。

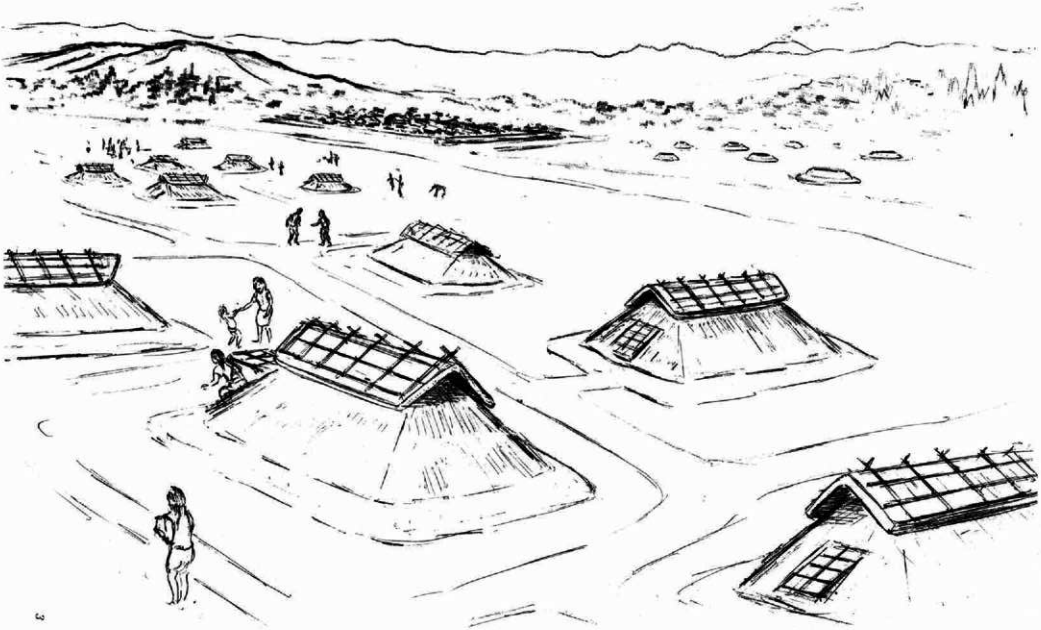
事業実施に御尽力頂きました関係各位に感謝するとともに本報告書が有効に活用されることを願いまして序と致します。

平成元年4月1日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　清水一郎

目　次

はじめに 4　中心部全景 5　周辺の景観・遺跡 7
中心部全体図 10　調査範囲全域と基本土層 12　調査成果の概要 14
特別報告　飾り玉の製作と使い方 17
竪穴住居に投げ込まれた滑石チップ 18　廃棄された滑石製品製作チップ 19
石製品完成品 20　割り工程石片 21　研磨工程石片 23　砥石 24
穿孔工程石片 24　飾り玉の製作と使用 26　飾り玉の投棄 27
竪穴住居から出た玉類 28　玉製品の生産流通産業と豪族権力 29
土製玉類・小形粗製土器など 30
成果編　1 竪穴住居の生活 31
竪穴住居の廃棄と構造 32　竪穴住居での食生活 34
古墳時代後期の竪穴住居群 35　竪穴住居文化と米食 36
2 原之城居館との関係 37
3 古代の集落 40
4 縄文集石遺構群 41
5 地名　八寸大道上 46
資料編　利用手引 47
1 古代　竪穴住居 48　掘立柱建物 61　溝 66　井戸 70
2 古墳時代　竪穴住居 71　溝 141
3 古代・古墳時代土坑 143
4 時期不明の遺構　竪穴住居 154　掘立柱建物 156　溝 159　畠 160
5 遺構に伴わない遺物　竪穴住居投棄遺物 161　遺構外遺物 171
6 縄文時代　集石 175　土坑 181
遺構に伴わない遺物　土器 184　石器 204
石器計測表 203
遺構索引 220



北東方向から見た古墳時代の景観
手前が本遺跡の村。狭い尼が池谷の対岸が原之城居館。その奥に権
現山丘陵から連なる古墳群。左遠景は、滑石原産地の三波川帯山塊

はじめに

遺跡名　**八寸大道上（はちすおおみちうえ）**遺跡（事業名　八寸A）
所在地　群馬県佐波郡東（あづま）村大字東小保方（ひがしおぼかた）八寸組字大道上及び大字西小保方（にしおぼかた）字久保内林（くぼうちはやし）

掲載資料
① 本書は、発掘調査で判明した遺跡の理解を第一にし、調査後消滅した遺構は原則として全ての写真記録を掲載した。
② 群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある遺物の掲載は最低限にとどめた。
③ 遺構・遺物はすべて通し番号をつけてある。
④ 遺構図の方位は座標北である。遺物図は、使用痕を重視した。

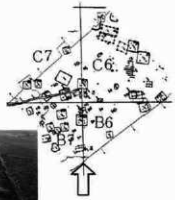
発掘調査

調査原因	国道17号線バイパス（上武道路）の建設工事
調査委託	建設省関東地方建設局
担当機関	群馬県教育委員会
調査実施機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査期間	昭和57(1982)年4月1日～58(1983)年2月28日
調査面積	16,070㎡
調査担当者	石塚久則　大木紳一郎　坂井　隆

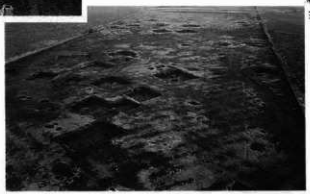
資料整理

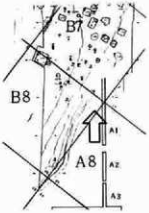
整理委託	建設省関東地方建設局
担当機関	群馬県教育委員会
整理実施機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
整理期間	昭和63(1988)年4月1日～平成元(1989)年3月31日
整理統括	桜場一寿
整理編集	坂井　隆
執　筆	坂井　隆（縄文以外）　原　雅信（縄文関係）
遺物写真	佐藤元彦
遺物保存処理	関　邦一　北爪健二　小村浩一
整理補助	青木静江　浅井良子 大川明子　大友美代子　尾田正子　小渕トモ子　笠井初子　金子吉江 串渕すみ江　関口貴子　高橋初美　田中晩美　田村紀子　土田三代子 中沢久子　新平美津子　萩原由美子　長谷川春美　蜂巣綾子　馬場信子 藤井輝子　増田政子
イラスト	平野進一

中心部全景

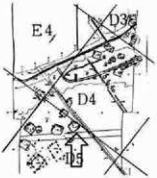


北西側竪穴集中部
南東を望む



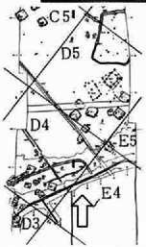


集石集中部
尼が池谷から南東方向

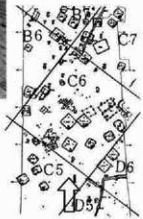


南東側低地に
沿った部分

南側から台地
中心を望む



南東側低地から
北西を望む



中央部竪穴集中部
南東から

周辺の景観と環境

現在の書上上原之城遺跡より

赤城山を望む

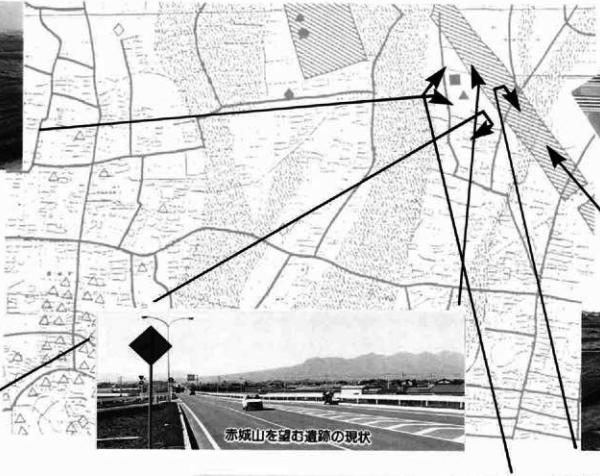
書上上原之城遺跡（現園芸試験場）

上　榛名山・子持山遠望
下　原之城居館（ハウスの位置）を望む

北西の尼が池谷を見る

八寸櫂現山方向

南から調査地遠望



調査終了後

この周辺は、大聞々扇状地桐原面の末端に当り、起伏はほとんどなく、僅かに南西１㎞に八寸権現山があるだけである。1.5㎞北から始まる尼が池谷が、遺跡のすぐ西側を南北に走る。

権現山を経て三波川帯山塊を見る

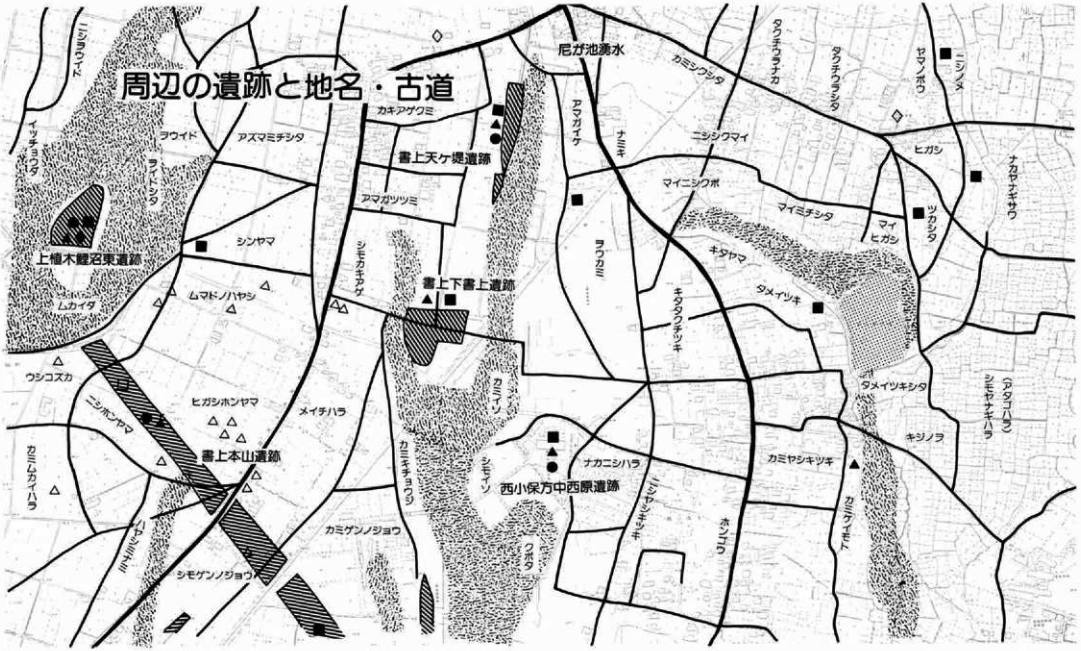
赤坂山を望む遺跡の現状

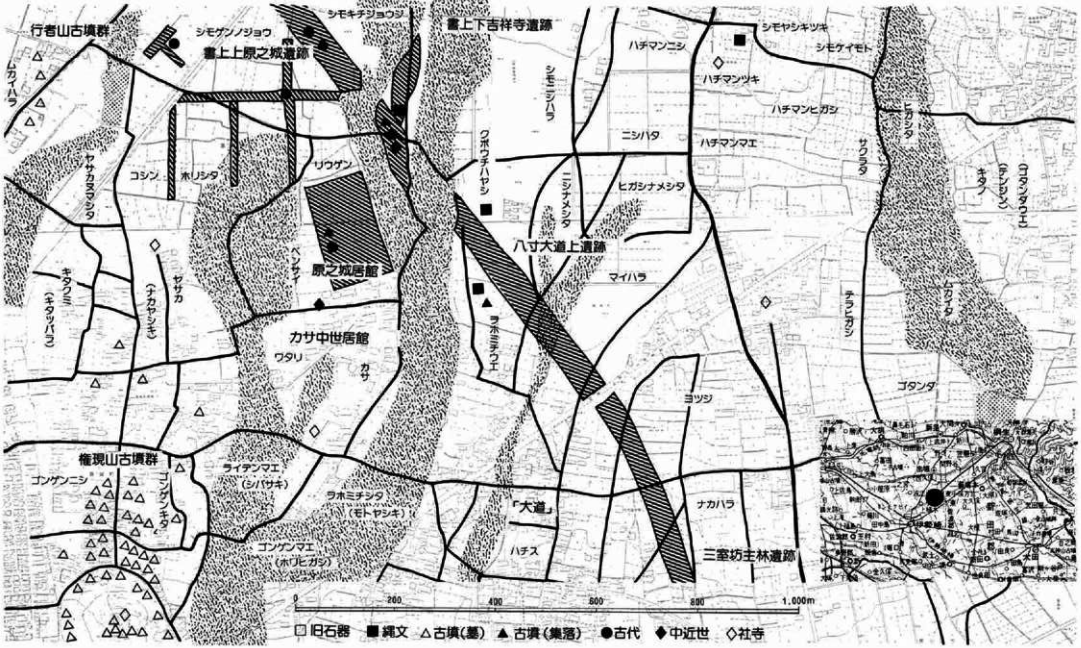
南東低地を経て北西方向

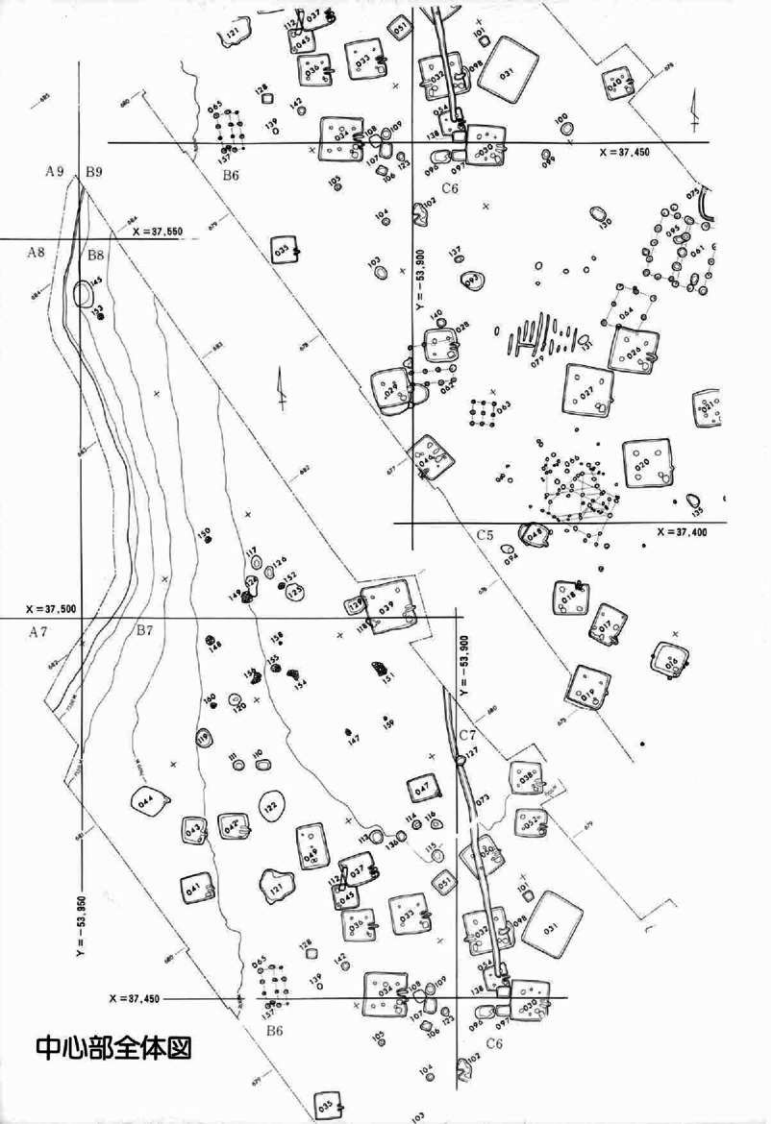
西から南東低地を見る

南東低地を経て南方向

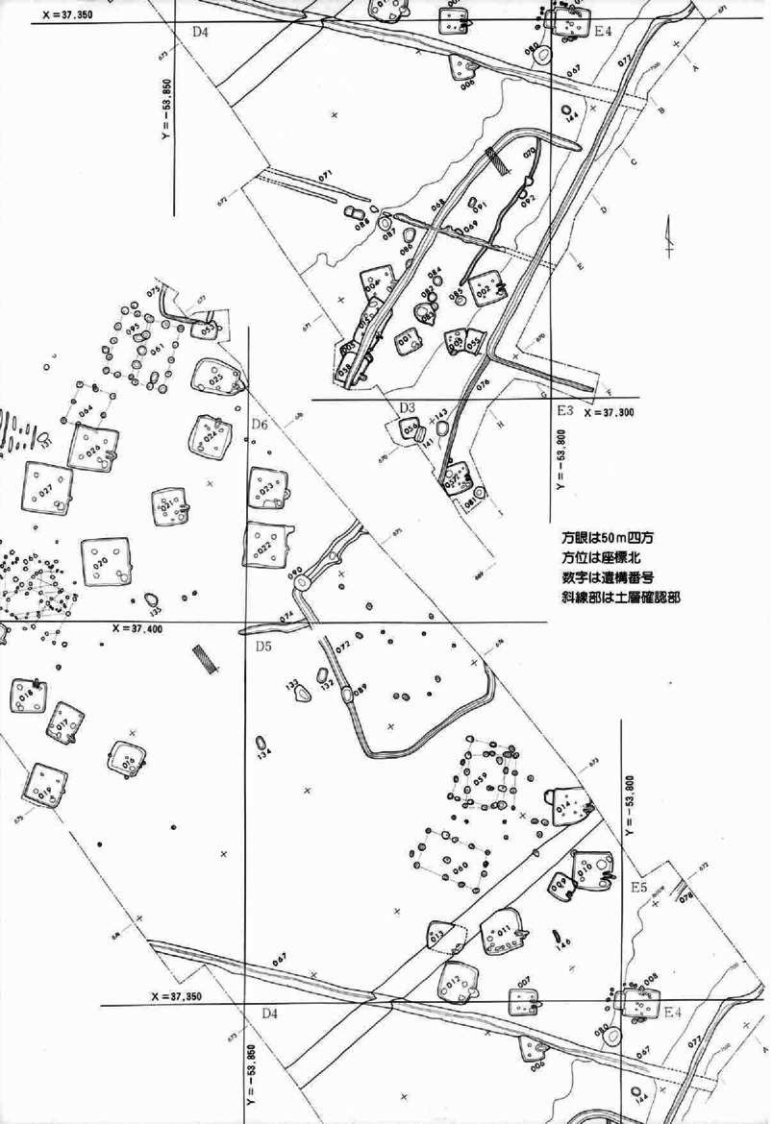
周辺の遺跡と地名・古道

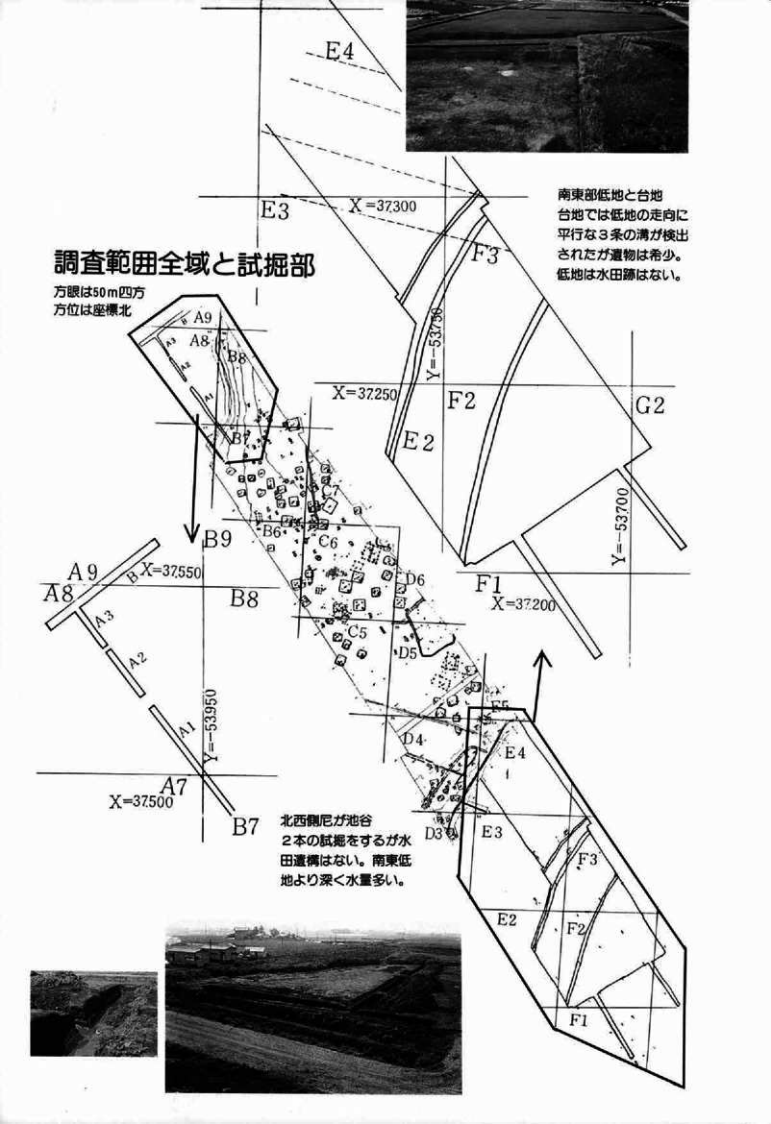

尼が池湧水
カミシクシタ
タクチウラナカ
タクチウラシタ
ニシノメ
ヤマノボウ
カキアゲクミ
アズマミチシタ
ラウイド
ライドシタ
イッチョウバ
書上天ケ堤遺跡
アマガツツミ
アマガイケ
ナミキ
ニシシクマイ
マイニシクボ
ヒガシ
ナカヤナギハウ
マイミチシタ
マイヒガシ
ツクシタ
上植木鎧塚東遺跡
シンヤマ
シモカキアゲ
書上下書上遺跡
ラウカミ
キタヤマ
キタクチツツキ
タメイツキ
ムマドノハヤシ
ムカイダ
ウシコスカ
ヒガシホンヤマ
メイチハラ
カミノ
タメイツキシタ
(アタゴハラ)
シモヤナギハラ
キジノヲ
ニシホンヤマ
書上本山遺跡
カミムカイハラ
カミキチョウ
シモイソ
ナカニシハラ
西小保方中西原遺跡
カミヤシキツキ
ニシシツキツキ
カミケヤモト
ホンゴウ
カミゲンノジョウ
シモゲンノジョウ

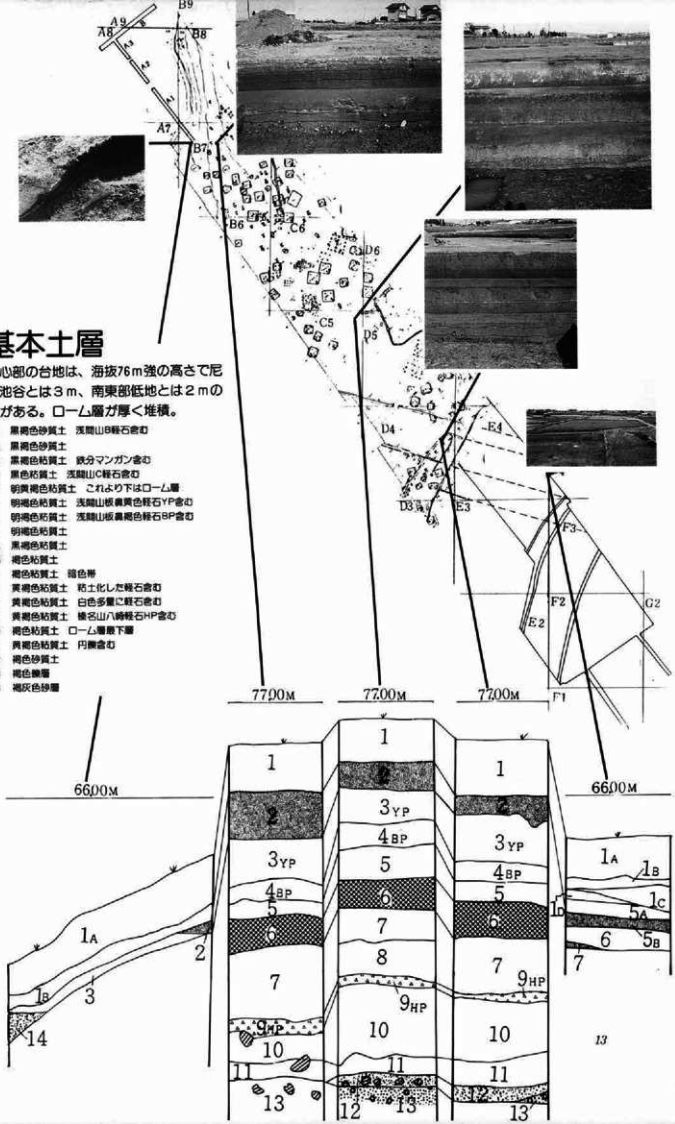

行者山古墳群
シモゲンノジョウ
シモキチジョウジ
善上下吉祥寺遺跡
善上上原之城遺跡
ムカイハラ
ヤサカスシタ
コシン
ホリシタ
リウゲン
原之城居館
ヘンリウ
キタクミ
(キタツバラ)
ササカ
(ナカヤシキ)
カサ中世居館
ワタリ
カサ
ハチマンニシ
シモヤシキツキ
シモケイモト
ハチマンツキ
ハチマンヒガシ
ニシハタ
ハチマンマエ
ヒガシナメシタ
ニシナメシタ
クボウチハヤシ
八寸大道上遺跡
マイハラ
ヨツジ
ナカハラ
「大道」
ハチス
三室坊主林遺跡
ヒラシタ
サクラタ
(ヒラシタ)
(ヒラシタ)
キタノ
(ヒラシタ)
ムカイタ
ヒラヒガシ
ゴタンタ
権現山古墳群
ゴンゲンニシ
ゴンゲンキタ
ライデンマエ
(シバサキ)
ラホミチシタ
(モトヤシキ)
ゴンゲンマエ
(ホリヒガシ)
0
200
400
600
800
1,000m
旧石器
縄文
古墳(墓)
古墳(集落)
古代
中近世
社寺


A9
B9
A8
B8
A7
B7
B6
C6
C5
C7
X=37,550
X=37,500
X=37,450
X=37,400
Y=-53,950
Y=-53,900

中心部全体図


X=37,350
D4
E4
Y=−53,850
D3
E3
X=37,300
Y=−53,800
D6
X=37,400
D5
E5
Y=−53,800
X=37,350
D4
E4
Y=−53,850
方眼は50m四方
方位は座標北
数字は遺構番号
斜線部は土層確認部


調査範囲全域と試掘部
方眼は50m四方
方位は座標北
南東部低地と台地
台地では低地の走向に
平行な3条の溝が検出
されたが遺物は希少。
低地は水田跡はない。
北西側尼が池谷
2本の試掘をするが水
田遺構はない。南東低
地より深く水量多い。
E4
E3
X=37300
F3
Y=-53750
X=37250
F2
G2
E2
Y=-53700
F1
X=37200
A9
A8
B8
B7
B9
B6
C6
D6
C5
D5
D4
E5
E4
D3
E3
F3
E2
F2
F1
A9
A8
B
X=37550
B8
A3
A2
A1
Y=-53950
A7
X=37500
B7

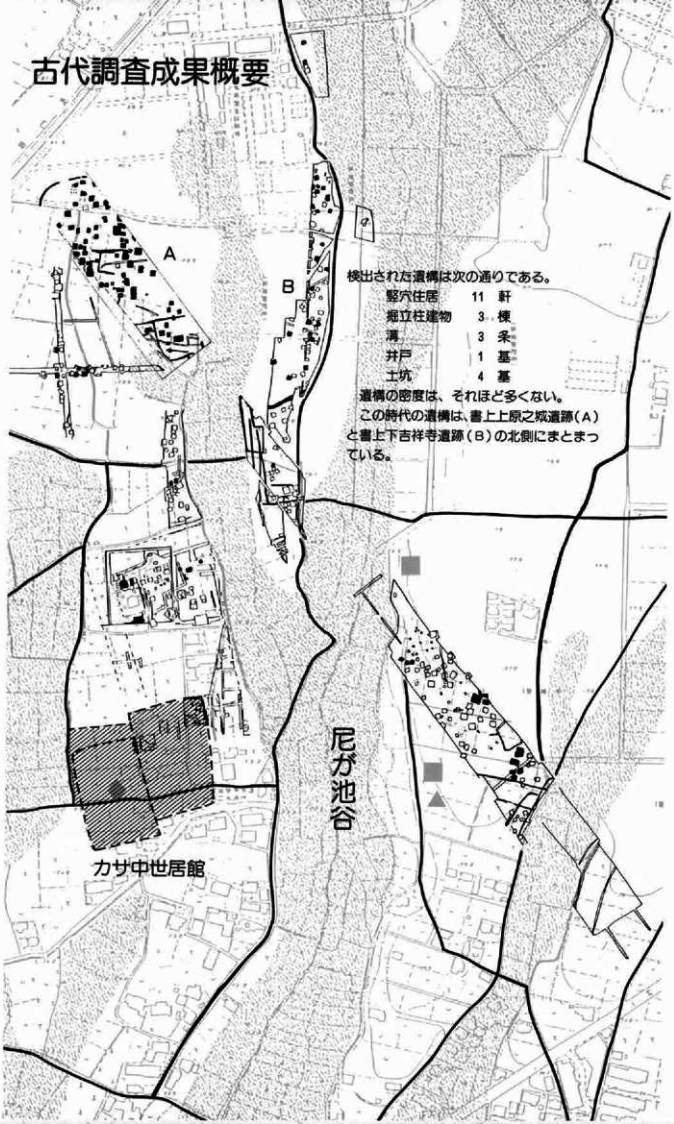


基本土層

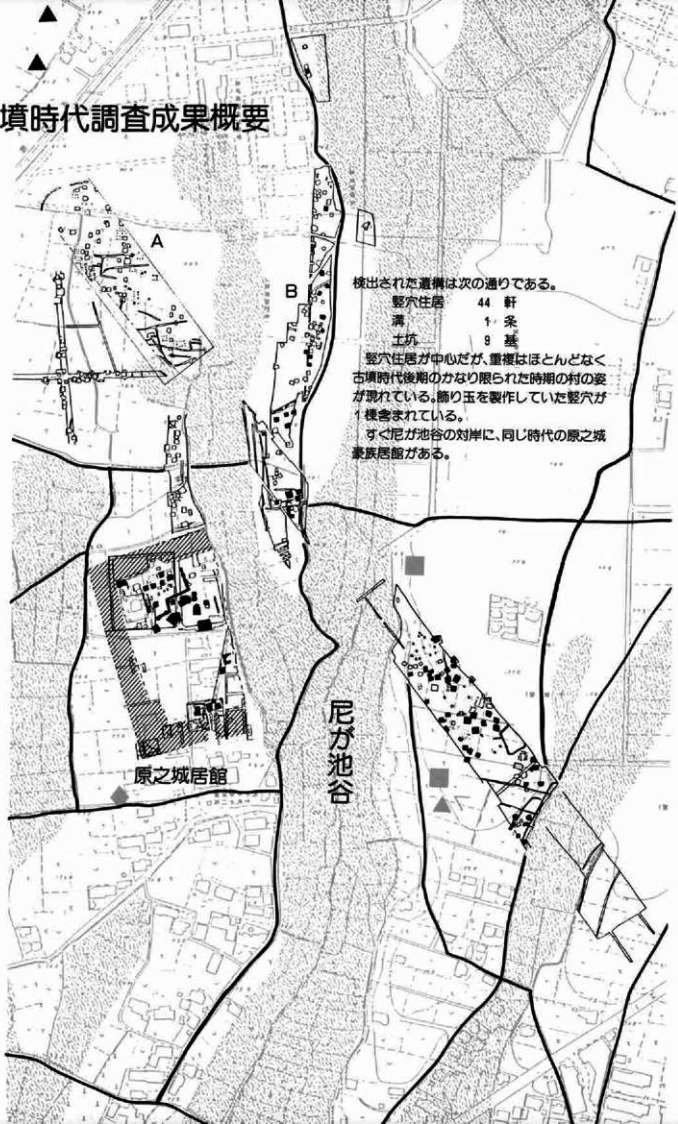
中心部の台地は、海抜76m強の高さで尼が池谷とは３m、南東部低地とは２mの差がある。ローム層が厚く堆積。

1A　黒褐色砂質土　浅間山B軽石含む
1B　黒褐色砂質土
1C　黒褐色粘質土　鉄分マンガン含む
1D　黒色粘質土　浅間山C軽石含む
2　明黄褐色粘質土　これより下はローム層
3　明褐色粘質土　浅間山板鼻黄色軽石YP含む
4　明褐色粘質土　浅間山板鼻黄色軽石BP含む
5　明褐色粘質土
5A　黒褐色粘質土
5B　褐色粘質土
6　褐色粘質土　暗色帯
7　黄褐色粘質土　粘土化した軽石含む
8　黄褐色粘質土　白色多量に軽石含む
9　黄褐色粘質土　榛名山八崎軽石HP含む
10　褐色粘質土　ローム層最下層
11　黄褐色粘質土　円礫含む
12　褐色砂質土
13　褐色礫層
14　褐灰色砂層

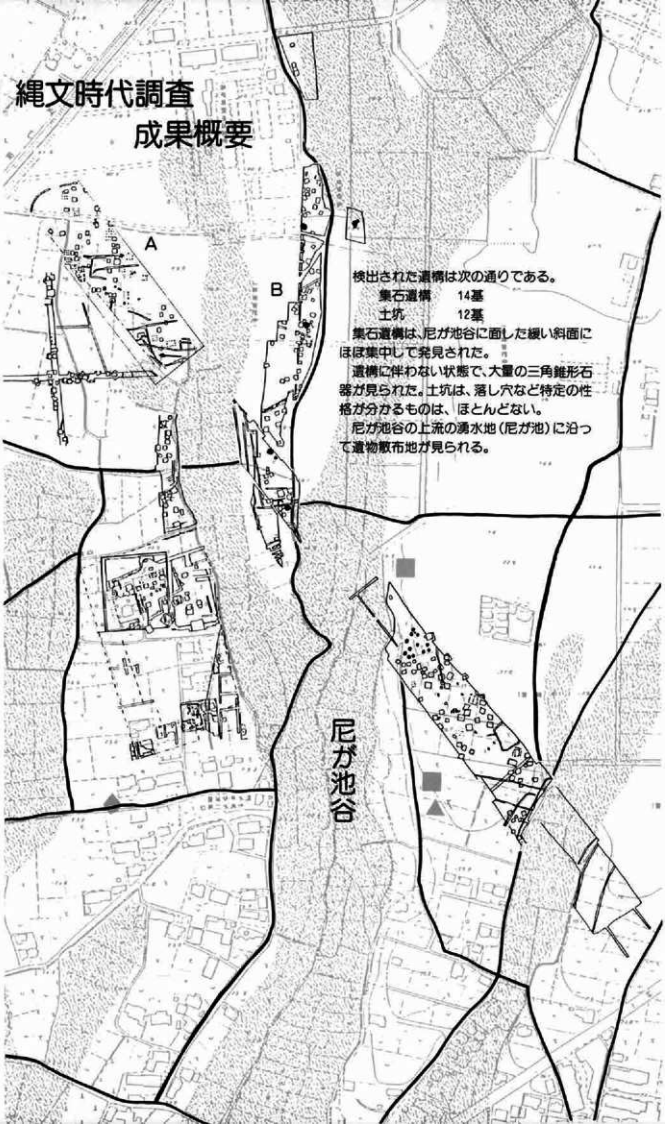
古代調査成果概要


A
B
検出された遺構は次の通りである。
竪穴住居　11　軒
掘立柱建物　3　棟
溝　3　条
井戸　1　基
土坑　4　基
遺構の密度は、それほど多くない。
この時代の遺構は、書上上原之城遺跡（A）と書上下吉祥寺遺跡（B）の北側にまとまっている。
尼ヶ池谷
カザ中世居館

古墳時代調査成果概要


A
B
検出された遺構は次の通りである。
竪穴住居　44　軒
溝　1　条
土坑　9　基
竪穴住居が中心だが、重複はほとんどなく古墳時代後期のかなり限られた時期の村の姿が現れている。飾り玉を製作していた竪穴が1棟含まれている。
すぐ尼が池谷の対岸に、同じ時代の原之城豪族居館がある。
尼が池谷
原之城居館

縄文時代調査
成果概要



検出された遺構は次の通りである。

集石遺構　14基

土坑　12基

集石遺構は、尼が池谷に面した緩い斜面にほぼ集中して発見された。

遺構に伴わない状態で、大量の三角錐形石器が見られた。土坑は、落し穴など特定の性格が分かるものは、ほとんどない。

尼が池谷の上流の湧水地（尼が池）に沿って遺物散布地が見られる。

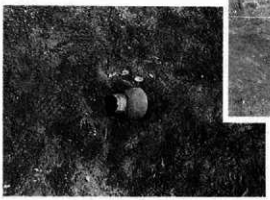
024遺構へ投げ込まれた滑石チップ

特別報告　飾り玉の製作と使い方

情景イメージ　原之城居館の巫女に完成した玉を届ける玉作りの村人

024遺構の埋土から出てきた滑石チップ
ここからは総量14kgにも達するチップと未製品が見られた。特に微細なチップ以外にも荒割工程片などの各工程の大形石片が多く見られ、また砥石（947）もあっただため製作跡とも思われたが、出土状態は全て竪穴が倒壊した後の投棄を示すものであった。そのためすぐ南東に接する製作竪穴の023遺構での製作残物が投棄されたものと考えられる。

下　024遺構へ滑石チップと共に投棄された粗製土師器（407）



024遺構へ投棄されたチップの中には大きな塊の粘土の中に混在した状態のものもあった。上の写真の左側はそのようなチップを含む粘土である。

竪穴住居に投げ込まれた滑石チップ

多くの竪穴住居から飾り玉の製作中にできた失敗破片や未完成破片（チップ）が、大量に出土した。材質は滑石が多く、また同じ系統の蛇紋岩も含まれており、他に頁岩も少し見られる。

出土状態は、次のようになる。

	古墳時代竪穴・土坑	古代竪穴
チップ出土遺構	竪穴7	
完成品出土遺構	竪穴15　土坑2	1

古墳時代の竪穴では、チップのみの出土は021と045の２遺構だけで他は完成品と共に出ている。古墳時代の竪穴は合計44軒発見されたが、その内39%にあたる17軒から各種材質の石製飾り玉類とその製作破片が出たことになる。

しかしこれらは全てが各竪穴の生活面から出たわけではなく、ほとんど多くが竪穴での生活が終了し住居としての機能が停止した時点での竪穴の埋土からの出土である。[1]

特にチップは総量14.0kg出土した024遺構や10.6kg出た020遺構に顕著に見られるように、砥石なども含めて

（26頁に続く）

1　これらは埋土を5mm方眼のふるいで振るって検出した。点数は数えることが難しいが、参考としては同時に出土した完成品の臼玉の量が020遺構では397点（遺物No.915）、024遺構では107点（同No.939）となっている。

020遺構の埋土の状態。上から二番目の層に大量にチップが含まれているが、その下の層には見られない。またこのチップを含む層はこの竪穴の中央ではかなり床の近くまで下がっている。

廃棄された滑石製品製作チップ

906　001遺構（竪穴住居）出土のチップ　総量184ｇ全てが滑石製で、色はやや褐色のものも含んでいる。この遺構からは他に各製作工程破片を含めて計10.5kg出土。

925　020遺構（竪穴住居）出土のチップ総量9.3kgの一部
ほとんど全てが滑石だが一部に蛇紋岩も含んでいる。この遺構からも他に各製作工程破片を含めて計10.6kg出土。

931　022遺構（竪穴住居）出土のチップ　総量1.3kgの一部
全て滑石製。この遺構からも他に各製作工程破片を含めて計1.6kgが出土。

938　023遺構（竪穴住居）出土のチップ　総量0.5kgの一部
ほとんど全て滑石だが、少し滑石質結晶片岩や蛇紋岩を含んでいる。他の各工程破片を含めると計9.9kgになる。

後述のようにこの遺構は唯一の製作場所跡（玉作工房址）と考えられるが、その根拠になったことは、これらのチップが他の遺構とは異なって床下の床構築土（縄り方）からという出土状態である。ただ内容は、他のチップとはほとんど同じである。

また大量の投棄チップである周辺の020・022・024の各遺構の場合よりも出土量が少ない。これは製作場所であることの証明の一つである。

948　024遺構(竪穴住居)出土のチップおよびチップを含む白色粘土　総量12.1kgの一部

基本的に大部分が滑石で、滑石質結晶片岩と蛇紋岩を少し混じえている。ここのものは、最大の量であり他の各工程破片を含めると計14.0kg（粘土含まず）に達する。

ここでの特徴は少なくない部分が白色粘土に含まれていたことである。(写真下右）粘土はそれほど粘性が強くなく土も混在していた。粘土中の破片とそれ以外のものに大きな形態・質の差はない。ただそれほど大きな破片は含んでいない。

チップはまずこの粘土中に捨てられた後に、粘土ごと024遺構に投棄されたということになる。

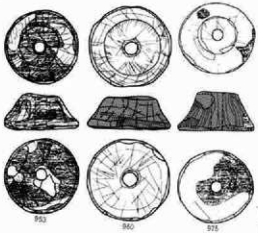
石製品完成品

臼玉以外の製品

ペンダント類

7点見られる。このうち材質では908が蛇紋岩で916が頁岩質、その他は滑石製である。

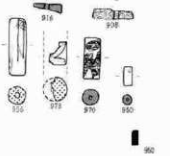
972　ほぼ完存　剣形　102遺構（土坑）出土
966　両面剥離多い　矩形形　053遺構流入
902　各端部割れる　形状不明　001遺構（竪穴）出土
940B 下端のみ割れる　半円形　024遺構（竪穴）出土
940A 右側部割れる　勾玉形か　同上遺構出土
916　両面剥離する　剣形か　020遺構（竪穴）投棄
908　上部自然剥離段差　剣形　006遺構（竪穴）出土



管玉類

4点ある。956と973は凝灰岩製で970は珪質頁岩と思われ、950は頁岩と推定。

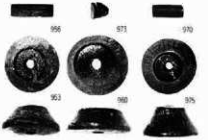
956　ほぼ完存　軟質　040遺構（竪穴）出土
973　下端も割れる　軟質　142遺構（土坑）出土
970　いわゆる粗玉に近い　被焼痕あり　056遺構（竪穴）出土
950　ほぼ完存　硬質　031遺構（竪穴）出土



紡錘車形石製品

3点ありいずれも蛇紋岩製。

963　上下面に線刻あるが全体に被焼痕多い　034遺構（竪穴）出土
960　全面に線刻　かなり光沢あり　041遺構（竪穴）出土
975　径小さく高い　光沢と被焼痕あり　遺構外出土



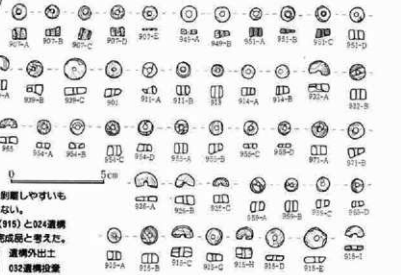
臼玉

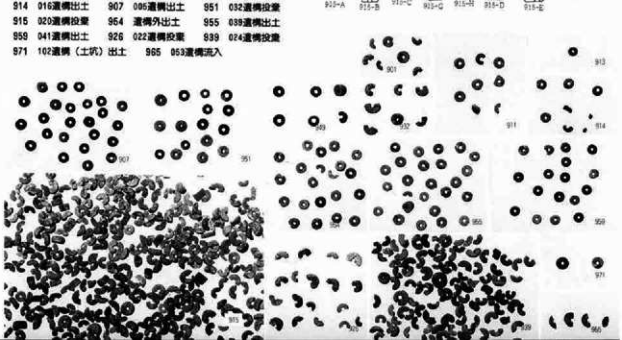
基本的に滑石製が大部分だが、稀に蛇紋岩製（907A～E, 949AB）と頁岩製（951A～C）がある。

全体に厚さや径に比べての孔の大きさなどかなり差がみられる。しかしこれは意識的に区別して作られたと言うより、もともとあるまとまりに作られたと言う方が妥当であろう。また剥離しやすいものが多く、それぞれ厚さは、当初のものかは断定できない。

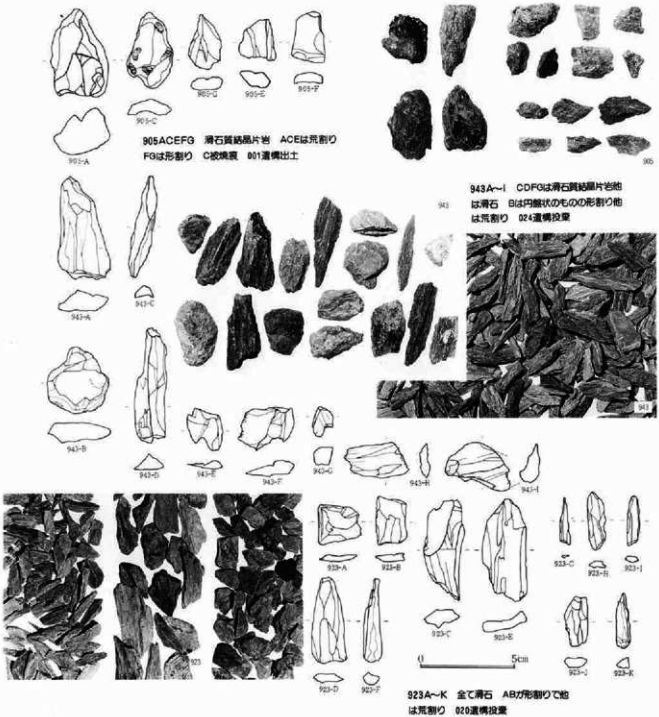
そのなかで397点及び107点と大量に見られる020遺構（915）と024遺構（939）のものも必ずしも完全でないものもあるが、完成品と考えた。

901　001遺構出土　911　010遺構出土　913　遺構外出土
914　016遺構出土　907　005遺構出土　951　032遺構投棄
915　020遺構投棄　954　遺構外出土　955　039遺構出土
959　041遺構出土　926　022遺構投棄　939　024遺構投棄
971　102遺構（土坑）出土　965　053遺構流入





割り工程石片(1)



材質は、滑石が中心で蛇紋岩と貫岩が混じる。凝灰岩はない。

大きく見れば原石を割って目的とする器形のものをつくる最初の工程としてこの割り工程があるが、ここでは目的の器形に向かう途中のものを形割りとし、それを生み出す過程で生じた剥片を荒割りとする。

ここで顕著に見られるのは、大小の縦長の荒割り剥片と長方形や円形などに近い形割り剥片である。

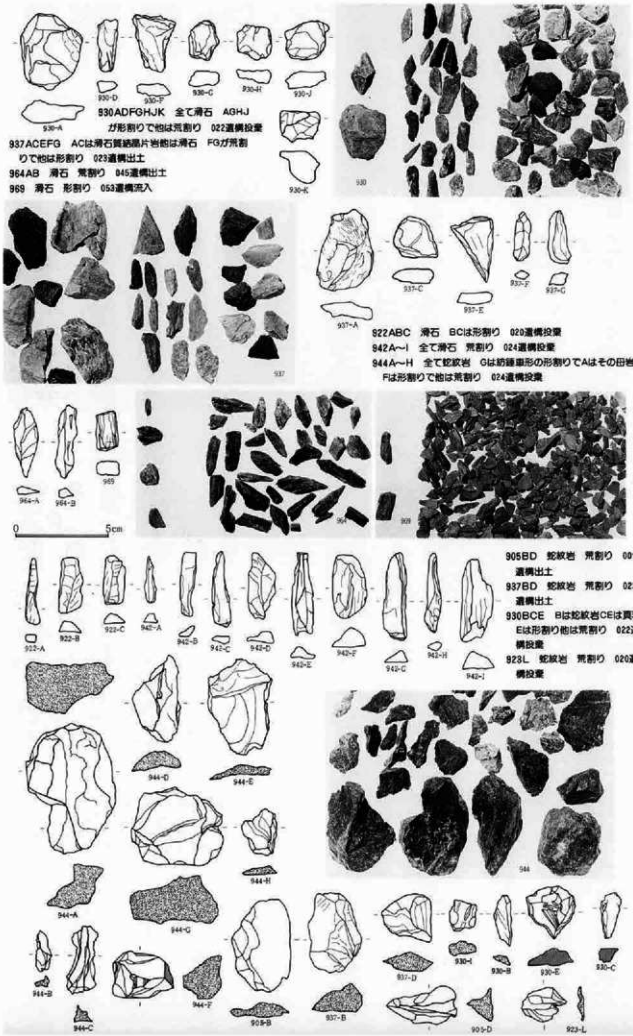
前者は極めて量が多く、特に大量に投棄された020遺構(923)と024遺構（942,943）の貫料に多く含まれている。

大きいものは一次の割り段階でまだ小さいものは二次の割り段階で生じたものだろう。

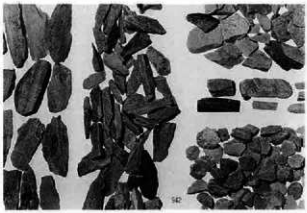
後者は、あまり多くない。001遺構の方形のもの（905F）、024遺構の円形のもの（943B）、022遺構の円形のもの（930A,E）などがある。930Eは、貫岩製である。いづれも剥形などのペンダントを作る過程のものだろう。

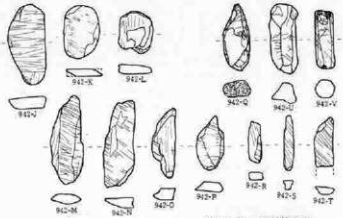
また蛇紋岩での特徴的なものには、024遺構に投棄された紡錘車形のもの（944G）がある。ここでの他の剥片もこの紡錘車形石製品を作るために生まれたものと思われる。

割り工程石片(2)


930ADFGHJK 全て滑石 AGHJ
が形割りで他は荒割り 022遺構投棄
937ACEFG ACは滑石質絶縁片岩他は滑石 FGが荒割
りで他は形割り 023遺構出土
964AB 滑石 荒割り 045遺構出土
969 滑石 形割り 053遺構流入
922ABC 滑石 BCは形割り 020遺構投棄
942A〜I 全て滑石 荒割り 024遺構投棄
944A〜H 全て蛇紋岩 Gは絶縁面形の形割りでAはその母岩か
Fは形割りで他は荒割り 024遺構投棄
905BD 蛇紋岩 荒割り 001
遺構出土
937BD 蛇紋岩 荒割り 023
遺構出土
930BCE Bは蛇紋岩CEは頁岩
Eは形割り他は荒割り 022遺
構投棄
923L 蛇紋岩 荒割り 020遺
構投棄
0 5cm

研磨工程石片（臼玉以外）





942J～V　Qは蛇紋岩他は滑石　Qは側形とも思えるが厚い　UVは多角柱状　JKLは側縁部も研磨　他は扁平で各種ペンダント形024遺構投棄

922D～M　全て滑石　いずれも上下面研磨　020遺構投棄

936ABCEF全て滑石　Aは全側縁　BCは一部側縁部研磨023遺構出土

904A～D　全て滑石　Aは上面のみ他は全面を少しづつ丸面　CDは左側縁は割れ　001遺構出土

929D～I　全て滑石　いづれも上面のみの研磨　022遺構出土

963ABC＊　全て滑石　Bは上下面研磨　ACは上面のみ　ABには切断痕跡　045遺構出土

968ABC＊　全て滑石　いづれも上下面研磨　Aは側縁部の一部も研磨　053遺構流入

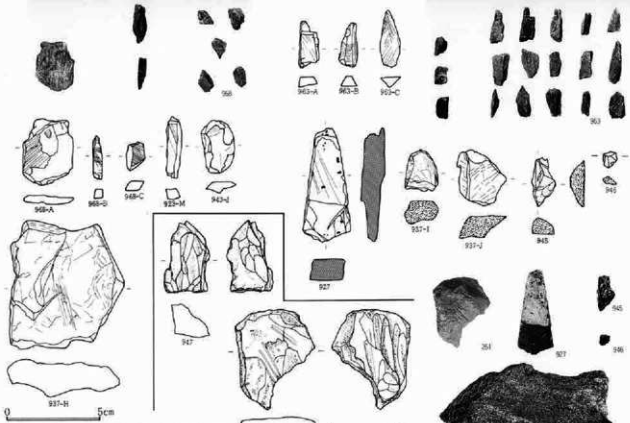
923M＊　滑石　上面のみ研磨　020遺構投棄

943J＊　滑石質結晶片岩　上面のみ研磨　024遺構投棄

材質は、滑石が主体で蛇紋岩と貢岩が少量混じる。
滑石のものは、割り段階のものの一部のみを研磨したものと、各種ペンダントの薄く板状に研磨したもの、そして円柱を生み出すために多角柱状に研磨したものがある。
最初のものは904A・P937Hのように目的とするものが分からない。ペンダントを目指すものは、ほぼ形が整えられたもの（942J）から割れた小片（929G）まで多様である。
多角柱状のものは、典型的な942Vに見られるように縦切りにして円盤にするためのものだろう。臼玉を作る一つの方法である。
蛇紋岩のものの目的とする器形は、分からない。特に945と946の緑色系のものは、他に全く類片がない。僅かに管玉の完成品に同系統の石質が見られるのみである。

927＊貢岩　上面のみ研磨　被焼裏　022遺構投棄
937IJ＊　蛇紋岩　IはほぼJは上面と側面の一部研磨　023遺構出土
945＊貢蛇紋岩　濃緑色臼玉に近い　上面一部のみ研磨　024遺構投棄
946＊　蛇紋岩　浅緑色　上面多面に研磨　024遺構投棄
937H＊　滑石　側縁部の一部のみ研磨　023遺構出土

＊は次頁に図掲載



砥石

947　砂岩製　上下面と右側面15～20mmの薄状の切り合い研磨　024遺構投棄

261　砂岩製　上面に筋状の擦痕部分が二ケ所　その下と下面に10～20mmの薄状切り合い研磨痕　020遺構投棄

穿孔工程石片（臼玉以外）

大きく研磨の無いものとあるものに分かれる。

無研磨　ペンダント状の形割り片に穿孔しただけの、全て滑石。これらは、穿孔の失敗で廃棄されたようだ。大形の876と962の穿孔は、興味深い。

920CN　滑石　020遺構投棄　　928L　滑石　022遺構投棄

941OP　滑石　024遺構投棄　　919B　滑石　020遺構投棄

976　滑石　遺構外出土　　962　滑石　046遺構出土

有研磨　全体にそれほど丁寧な研磨ではない。一次的な研磨を形割り片に施してからの、穿孔の失敗で廃棄となった。本来はこの穿孔の次に仕上げ研磨がなされると思われる。蛇紋岩のもの（924）には、極めて細い穿孔がなされている。

920CKM　滑石　020遺構投棄　922NM　滑石　020遺構投棄

935A　滑石　023遺構出土　919ABC　滑石　020遺構投棄

928EFN　頁岩　022遺構投棄　924　蛇紋岩　浅緑色　020遺構投棄

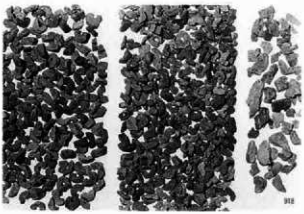
これらを見ると穿孔と研磨に決まった順序はないようだ。

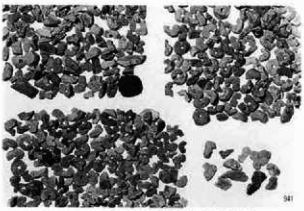
研磨工程石片（臼玉）

上下両面を研磨した板状の石片を径1cm弱ほどの多角形に削ったもの。

側縁部は上下両方向から削り取るため、中央が最も飛び出ている。この形態のものは、厚さがほぼ一定している。多角柱状のもの（942vなど）の輪切りから作られたのではないだろう。

921CD　滑石　020遺構投棄
903G　滑石　001遺構出土
929ABC　滑石　022遺構投棄
936D　滑石　023遺構出土
904EF　滑石　001遺構出土
942W～Z　滑石　024遺構投棄



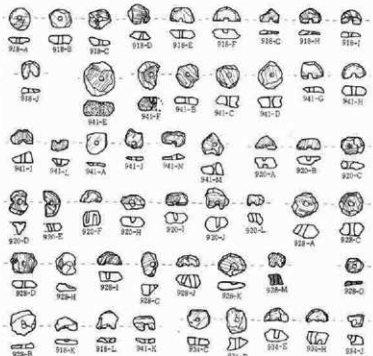


穿孔工程石片（臼玉）

基本的には研磨した後に穿孔しているが、無研磨で穿孔のあるものが僅か見られる。また上のような定形的な円盤に穿孔したものもあるが、それだけでなくまだかなり形の不揃いな状態、特に研磨が片面のみの段階で何回も穿孔を試みたものもある。

材質は、ほとんど滑石だが、蛇紋岩と頁岩も一部に見られる。

これらの執拗な穿孔の試みが、臼玉製作の本質のようだ。



918A～J　020遺構投棄
941A～JLMN　EF蛇紋岩　024遺構投棄
920A～FHIJL　020遺構投棄
928A～DG～KMO　M蛇紋岩　O頁岩　022遺構投棄
918KL　020遺構投棄
941K　024遺構投棄

934A～K　023遺構出土
967A～D　053遺構流入
915F　020遺構投棄
921AB　020遺構投棄
903A～FHIJ　001遺構出土

023遺構の方形施設。壁に沿って土堤状に床よりやや高く掘り残し、中央はくぼんで隅角に至る。この周辺で多くのチップが見られた。

（18頁より）

投げ込まれた状態がはっきりしている。出土状態から、竪穴の使用時点でチップが大量に存在したのは、023遺構だけである。

飾り玉の製作と使用

023遺構には、南壁に沿って中央がくぼみ周囲が土堤状に掘り残された他にはない方形の施設が見られた。その周辺の床には大量のチップが散っていた。ここが玉類の製作場所であったと思われる。

他の竪穴に投棄されたものも含めた製品と原材料は、次のようになる。[2]

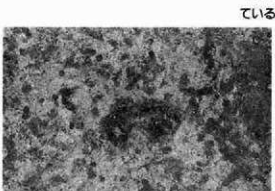
臼玉	滑石（一部蛇紋岩・頁岩）
紡錘車形石製品	蛇紋岩
ペンダント（円盤形・方形盤形・剣形）	滑石・蛇紋岩・頁岩

この内、蛇紋岩製臼玉の製品は全く出土していなく、蛇紋岩・頁岩製のペンダントの完成品も極めて少ない。それらの製品は後述のように他へ搬出されたと考えられる。紡錘車形石製品[3]は、3点の完成品が出土している。

ここで作られここで消費されたものは、滑石製臼玉である。臼玉の製作は特定の製作工程のもとに定形的な規格品を作るということとはほど遠く、ただ孔のあいたものを作るということが中心になっている。

完成品の出土状態を見ると、古墳時代の12軒の竪穴と1基の土坑から出ているが、それらの竪穴の中で確実に居住終了時に遺棄された状態で臼玉が検出されたのは、005遺構のみである。

ここで伴出した装身具類は、頁岩製臼玉24点（907）の他に同べ



005遺構の頁岩製臼玉出土状態。すぐ近くで頁岩製ペンダントも見られた。唯一の竪穴住居生活面に残された例。

2　他にチップでは濃緑色の黄蛇紋岩（945）及び淡緑色蛇紋岩（946）の研磨片、そして淡緑色の微小滑石片（924）が、各1点づつ見られた。製品では、管玉に凝灰岩製（969、973）管玉に近い硅質頁岩製（970）淡緑色（959）がある。

これらの内、淡緑色蛇紋岩の小管玉は製作していた可能性が強く、濃緑色黄蛇紋岩と硅質頁岩は類似しているためこの管玉も可能性は残る。ただし製作していたとしても量的には極めて少ない。凝灰岩の管玉は製作していない。

3　紡錘車形石製品は、なぜか実用品と混同されているが、製作地である本遺跡で発見された点数は、竪穴の数に比べ極めて少ない。実用品が模造品かは臼玉と同じ関係にあるだろう。

ンダント（908）と土錘形土玉３点（909 ABC）である。ペンダントと日玉は、ほとんど同じ位置での出土であり、本来おなじ紐に通されたものだろう。005遺構は、一辺３ｍ程度の小形の竪穴であり、出土位置は竈の左側床上である。

この005遺構の玉が竪穴での居住との関係を示す唯一の例と言うことは、本来的に玉の最終の使用状態が土器などの一般生活具と共に遺棄されるものでないことを示している。

飾り玉の投棄

上の図に現したのは、竪穴に投棄された玉類及び同じ性格を持つと思れる粗製土師器の出土状態である。古墳時代の竪穴44軒の中で43%にあたる19軒で玉類か粗製土器が投棄されている。また日常土器の投棄もそれに重なっている例が多い。

石製の飾り玉類が明らかに投棄された竪穴は11例あり、概して20平米以上の大形になると他のものもいっしょに投棄している。火災との因果関係は、明瞭でない。

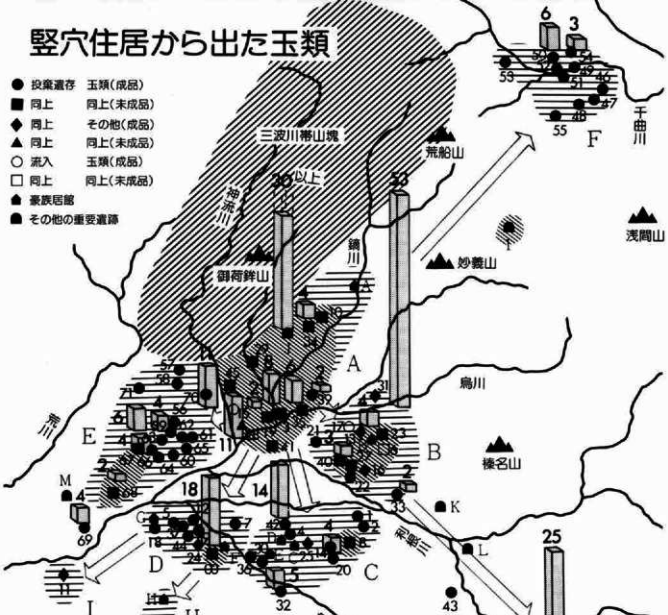
また石製玉類と粗製土器を同時に投棄した例はなく、基本形は、これらの玉類あるいは粗製土器を日常土器と共に投棄することと言える。

020遺構や024遺構でのチップの大量投棄は、023遺構から百m以上離れた001遺構へのチップ投棄に見られるように、単なる廃棄物の処理ではない。竪穴住居の廃絶に関する意図的な投棄行為の一種であり、

竪穴への投棄物

○はチップ検出竪穴　　数字はチップ総重量(kg)及び遺構番号

竪穴住居から出た玉類



群馬県

0 佐波郡東村八寸大道上
1 前橋市青柳引切塚
2 前橋市青柳宿上
3 高崎市岡八津田端
4 前橋市荒子柳久保
5 佐波郡境町三ツ木堂前
6 群馬郡群馬町保渡田
7 伊勢崎市八幡町上
8 前橋市小坂子芳賀東部団地
9 伊勢崎市日乃出町高通団地
10 富岡市田篠原田篠
11 邑楽郡大泉町吉田本郷
12 佐波郡境町十三宝塚
13 群馬郡群馬町井出村東
14 前橋市勝沢九料
15 藤岡市上戸塚栃木
16 前橋市元総社国分寺中隠地域
17 高崎市大八木無野堂
18 新田郡尾島町世良田歌舞伎
19 高崎市木部寺東
20 前橋市小神明清荒
21 高崎市上大類東朝
22 前橋市元総社明神
23 群馬郡群馬町三ツ寺Ⅲ
24 佐波郡東村三室流通団地
25 前橋市富田宮下
26 利根郡月夜野町新後田
27 前橋市元総社屋敷
28 勝岡市岡之郷恩井
29 勝岡市西平井功迫
30 前橋市西大室柳木
31 高崎市八幡中原
32 勢多郡粕川村勝新宿
33 北群馬郡吉岡村大久保A
34 甘楽郡甘楽町小川笹
35 高崎市下佐野長者屋敷
36 佐波郡赤堀町下触牛伏
37 佐波郡境町下淵名栄女小校庭
38 太田市吉沢反丸
39 高崎市寺尾鶴辺
40 前橋市鳥羽
41 高崎市新貫
42 前橋市荒口鶴谷
43 勢多郡赤城村勝保沢寺内
44 佐波郡境町下淵名
45 勝岡市本郷山根

長野県

46 小諸市耳取宮ノ北
47 小諸市五貫五ケ城
48 佐久市長土呂北近津
49 佐久市上桜井上桜井北
50 佐久市三塚市道
51 佐久市跡部町田
52 佐久市三塚
53 南佐久郡臼田町三分
54 佐久市小宮山後沢
55 佐久市安原宿上屋敷

埼玉県

56 児玉郡児玉町浅見鹿電下
57 児玉郡児玉町金屋三カド
58 児玉郡児玉町金屋意林後
59 本庄市四方田後張
60 本庄市弓の出薬師堂
61 本庄市旧富田本郷
62 本庄市旧富田新田
63 本庄市東姥宮谷
64 本庄市東五十子鶴跡
65 本庄市東富田下田
66 大里郡岡部町畠沢六反田
67 大里郡岡部町畠沢大寺B
68 深谷市上敷免
69 大里郡寄居町飯塚飯塚南
70 児玉郡神川村新里中道西北原
71 児玉郡美里町白石字佐久保

豪族居館

A 富岡市一宮本宿郷土
B 群馬郡群馬町三ツ寺Ⅰ
C 前橋市東沢丸山
D 前橋市荒子
E 前橋市西大室柳木
F 伊勢崎市曲輪原之城
G 新田郡尾島町世良田水久保
H 太田市成塚住宅団地

その他の主要遺跡

I 北佐久郡軽井沢町入山峠
J 多野郡吉井町神保羽田倉
K 渋川市行幸田中前
L 北群馬郡子持村北牧黒井峰
M 熊谷市西別府

参考文献

各市町村教育委員会・当事業団発掘調査報告書
各市町村誌
小野眞一「祭祀遺跡地名総覧」ニュー・サイエンス社 1982
「祭祀関係遺物出土地地名表」『国立歴史民俗博物館研究報告』7 1985

たまたま製作場所に近かったため量が多くなったと考えられる。

石製飾り玉の機能は、執拗な穿孔努力に見られるように、あくまで紐を通して身に付けたり木の枝などの特定のものに下げることが第一義的なものだろう。しかし、最終的には祈りをこめて捨てられることも重要な役割であり、チップはそれのみを担ったのだろう。

玉製品の生産流通産業と豪族権力

滑石と蛇紋岩の原産地は、群馬県南東部と埼玉県北西部の神流川流域を中心とする三波川帯である。この地域での石製玉を出土した竪穴住居の分布は、左図のようにいくつかのグループを形成している。

		住居総数	未製品チップ出土地	豪族居館
A	鏑川流域	90以上	10遺跡	本宿郷土
B	榛名山麓	67	4遺跡	三ッ寺Ⅰ
C	赤城山麓	31	1遺跡	丸山・荒子・柵木
D	粕川下流域	26	1遺跡	原之城・水久保
E	本庄・鄕挽台地	36	2遺跡	
F	千曲川上流域	17	10遺跡	
G	利根川上流域	25	1遺跡	
H	渡良瀬川中流域	1	1遺跡	成塚
I	利根川中流域	1	1遺跡	

A～DとHは豪族居館と未製品チップ出土地がセットになっており、その周辺に集落遺跡が固まると言う形になっている。そして三波川帯に近いほど未製品チップ出土遺跡が多い。またこれらの外側のFからHのグループでは未製品チップが出ていない。

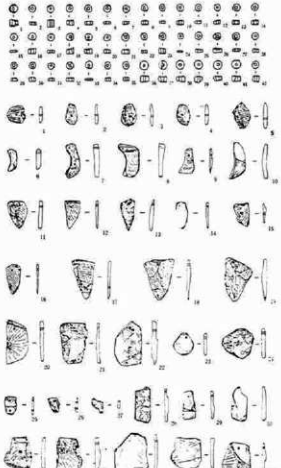
このような分布から考えられるのは、次のようなことである。

原料を掌握しているAが主体的な生産を行うが、BからEにも原料を供給している。このいわば第二生産地ではそれぞれグループ内への製品の供給と共にGHはどの地域へも製品を供給している。そしてこれらの生産と流通を管理しているのが、各グループの豪族である。

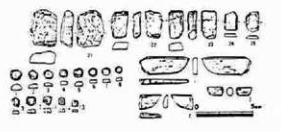
このような構造では、Aから外側へ行くに連れて力関係が弱くなるはずだが、古墳や居館の規模はそのような順になっていない。そのためこれらの各グループ間の関係は商品流通の取引関係とするのが、考えやすい。原料や製品の見返りに例えば食料のような代価を払うというような交易構造を想定すれば、逆に玉類の意味はそのような代価を賄える価値を持っていたことになる。

入山峠で未製品の出る意味は、Fへ向けたBからEのような第二生産地とするのが理解しやすい。Fへ供給する拠点が峠の群馬側の麓に存在していたと思われる。

本遺跡の玉類の生産は、域内と東方地域へ向けた生産流通の拠点としての姿であり、それは原之城居館豪族の権力基盤の一画であったと推定される。

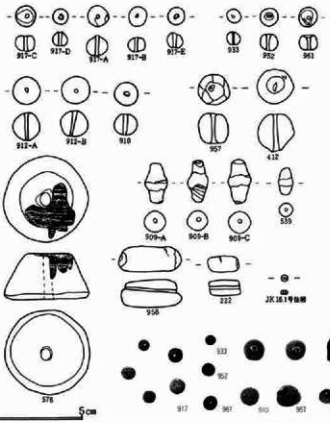


原之城居館手捏土器集積部祭祀出土の玉類
大部分が真岩製（『粘板岩』と表記）
伊勢崎市教育委員会「原之城遺跡」1988による



入山峠出土の滑石製品未製品
神坂峠でも未製品は出土してお
り、問題はまだ残っている。
軽井沢町教育委員会「入山峠」1983による

土製玉類



全体としては、還元焼成で研磨した精製品と酸化焼成の無研磨の粗製品に分かれる。ただし土錘形の玉（909,539）は、酸化ながら研磨されている。管玉の958はかなり粗製で乳が大きければ土錘でもあかしくない。

丸小玉

917A～E　CDは研磨精製品で還元焼成　他は酸化焼成　Cは白玉状

020遺構投棄

933　研磨精製品　還元焼成　023遺構出土

962　無研磨　還元焼成　032遺構投棄

961　無研磨　還元焼成　上端少し割れる　041遺構出土

丸玉

912AB　研磨精製品　酸化焼成　010遺構投棄

910　研磨精製品　酸化焼成　007遺構投棄

957　無研磨　還元焼成　040遺構出土

412　無研磨　下端ヘラ当て無調整　酸化焼成　027遺構投棄

土錘形玉

908A～C　いづれも中央の膨れた部分を研磨　酸化焼成　005遺構出土

539　やや研磨ざみ　酸化焼成　034遺構投棄

紡錘車形土製品

576　砂粒多　酸化後還元焼成　上面やや摩耗　スス付着　035遺構出土

管玉

958　無研磨　還元焼成　かなり雑な製形　040遺構出土

222　研磨精製品　還元焼成　018遺構出土

参考資料　ガラス小玉

JK16.1　コバルトブルー色

善上下吉祥寺遺跡1住出土

小形粗製土器など

石製及び土製玉類の参考として基本的に赤日常見である小形粗製土器などを一括して掲載する。（各遺構・遺構外遺物欄に同掲）

椀形　066　007遺構出土　164　014遺構出土

582　036遺構投棄　854,860　遺構外出土

極小形　409　027遺構出土

410,411　027遺構投棄

壺型形　407　024遺構出土　473　031遺構出土　090　口縁ベンガラ付着　008遺構投棄

小形精製土器　壺形　621　030遺構出土　505　033遺構投棄

椀形　008　002遺構投棄

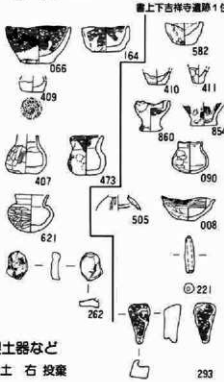
土錘　221　018遺構投棄

その他　260　円盤状　把手の可能性あり　スス付着　020遺構出土

293　三角盤状　自然物の可能性あり　022遺構投棄

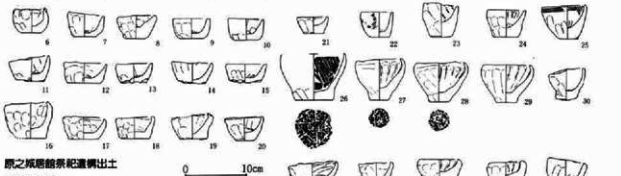
これらは全てが玉類と同じ性格のものとは考えられず、一般的な状態から見れば、椀形・極小形・壺型形の三者にしぼった方が良いかもしれない。

なお、原之城恩能の手捏土器集積部祭祀に玉類と共に集中していたのは、下図のようなもので壺型形は報告されていない。ここでは玉類と小形粗製土器が共伴している。



小形粗製土器など

左　遺存出土　右　投棄



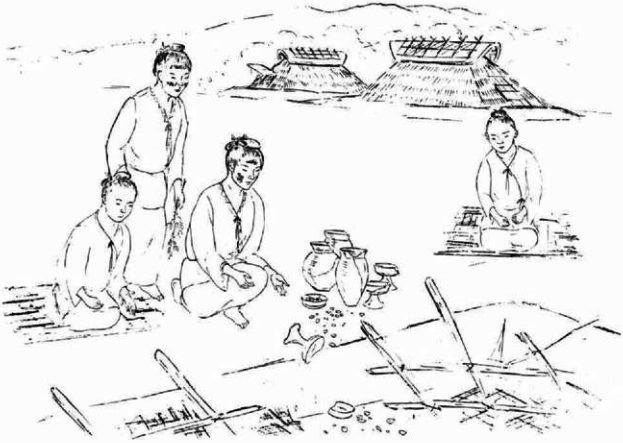
原之城恩能祭祀遺構出土

の手捏土器

伊勢崎市教委「原之城遺跡発掘調査報告書」1988による

廃絶後の竪穴（031遺構）に投棄された大量の土器

成果編 1 竪穴住居の生活



情景イメージ　火事で焼けた竪穴へまかれる玉と土器

竪穴住居の廃棄と構造

写真上の038遺構の埋土第２層の完存に近い土師器壁(609)や写真右の035遺構の第３・４層中の土師器群は、その竪穴での生活時のものとは考えられない。038遺構では、第３・４層が初期埋没土である。
この竪穴は完全な火災廃棄であり、第３層は炭化層の上の屋根土崩落土である。

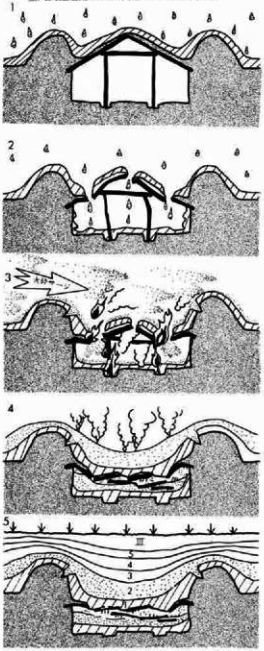
竪穴の生活に伴う遺物
床からの高さと平面位置で区分した。初期埋没の起きた以後の床面中央部のものと周辺でも高さの高いもの、そして接合破片が離れた場所に四散しているものは、基本的に投棄遺物として生活資料とは別けた。
特に従来単純に生活資料の要素としてきた床面直上の場合も中央部では初期埋没以後であることもあり、それだけで判断するのは危険である。

竪穴の調査では、さまざまな遺物が埋土の中から出てくることが多い。しかし、それらの埋土の中から出てくる遺物は、基本的にその竪穴での生活に使われたものでないことを注意する必要がある。それは、遺物の残存状態や量とは関係ない。生活時と投棄の遺物の区分をするためにも重要なことが、竪穴の廃棄の状態であり、それに伴う初期埋没である。

竪穴の床近くから構造物の炭化材が検出できたのは、古墳時代後期44軒の中で8軒ある。しかし火災廃棄はそれだけではない。通常火にかけることが考えにくい杯形態の土器に製作時でも廃棄後でもない被焼痕の炭化状態が見られることが少なくない。明り皿として使った場合を除けば、これも火災の可能性を示しているだろう。このような例は44軒中の23軒になり、全体では７割ほどが火災廃絶と推定できる。つまりそれが普通ということである。

良好な状態で炭化材の残る014遺構
この炭化材の上にローム粒塊含有の屋根土崩落土が堆積していた。
炭化材の残存状態は、一様ではない。構造・材質・火災の状態などの原因によるものか。

竪穴式住居跡の火山災害による崩壊過程



第8図　竪穴式住居跡の火山災害による崩壊過程模式図

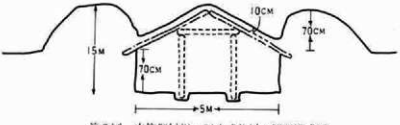
渋川市中筋遺跡での状態により推定される火山災害による竪穴住居の埋没過程（左模式図）この遺跡の場合は、本遺跡の中心的な時期より半世紀ほどさいの世紀初頭頃の榛名山二ツ岳爆発により埋まっている。最終埋没段階の地表には、本遺跡と近い時期の北群馬郡子持村の黒井峰遺跡の村が形成されている。

竪穴住居021遺構の復元過程（写真）上は柱組みの状態下は茅での屋根葺　しかし中筋遺跡や黒井峰遺跡での様子より、同じ時代の柱組みはもっと当時の地表より低いものであり、勾配の低い屋根の茅の上には土が載せられていたことが分かっている。この復元は今日ではかなり実際とは異なったものとしなければならない。

近年渋川市行幸田（ぎょうこうだ）の中筋遺跡などで火山災害に伴う竪穴の廃絶状態が明らかになりつつある。そこでは倒壊した屋根材の下に火山灰が、上に屋根土・周堤崩壊土と軽石などの流入物の堆積が見られた。

一般の火災の場合、床近くに炭化した柱屋根材と屋根土・周堤崩壊土が、まず堆積する。これが初期埋没である。炭化材は必ずしも全て良好には残存はしてないが、屋根土・周堤土と考えられるローム塊混入土は、多くの竪穴の埋没土下層に見られる。この初期埋没土をもって生活時とそれ以後を区分できる。

周堤　台地上の一般の遺跡の場合、周堤が検出されることは極めて稀れである。中筋や黒井峰での想像以上に巨大な周堤は、竪穴廃棄土の処理を考えれば普通のものであってもおかしくない。ローム台地での竪穴であれば周堤土の中には大量のローム塊が入る。



第7図　中筋型屋根・竪穴式住居の解明模式図

中筋遺跡で想定された左図のような竪穴住居の状況は、これまでの本遺跡での復元のような長野県塩尻市平出遺跡の調査以来の竪穴住居観に大きな訂正を迫るものだった。「土饅頭」との形容がぴったりする景観である。本遺跡の竪穴もこのようなものであったろう。

（この頁の図は渋川市教育委員会『中筋遺跡第２次発掘調査概要報告書』1986による）

竪穴住居での食生活

037遺構の竈周辺（左）と008遺構の竈（下）

共に小形の特別竪穴である。037では竈左と前に大形甕4個小形甕2個右に小形甕2個そして写真左に離れて大形甑があった。

008の竈内にあったのは大形甕1個小形甕2個で、小形甕1個は竈の右に、甑大小各1個は左に、大1個は床中央にあった。

古墳時代後期の竪穴住居出土の土器の大半は、食生活に関する煮炊具（甕・甑）、貯蔵具（壺）、供膳具（杯）である。

作り付け竈を火処とする煮炊具の使用痕を見ると、甑では大形が弱い火で水気が多い状態、小形は強い火で水気が少ない状態で蒸したことが問われる。

甕は、大形のものは最も竈での使用頻度が高く、水の流農判用が多いようだ。小形のものは、煮炊具の場合の用途は食物を煮ることが多かったと思われる。

次に食器の１軒の竪穴当りの単純な所有状況を見ると、大形甕1.1大形甑0.4小形甑0.2小形甕0.7壺0.5杯3.2となる。つまり大形甕・杯が最も普遍的な食器で、これに次ぐのが小形甕になる。

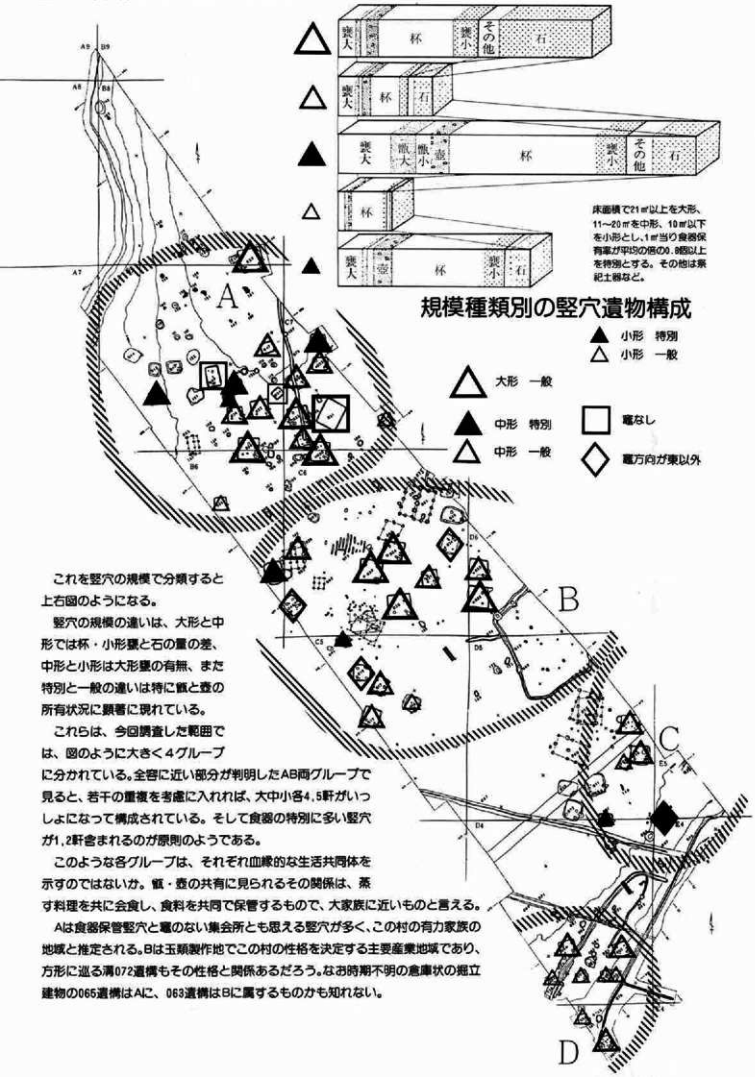
煮炊土器の使用痕　スス（黒色）・有機物（白黄色斑点状）そして炭化有機物（淡黒色斑点状）の三種類が少なくとも見られる。水気の多い状態での調理痕と思われる有機物は、小形甑の内面全体に濃厚に付着していることが多い。大形甑では、内面下位にのみ付いている。

有機物の付着は甕では甑に比べはるかに少ない。特に大形甕の内面には他の痕跡が多いにもかかわらず有機物の付着は希少である。小形甕は大形甕と逆の状態である。

大形竪穴039遺構竈での出土状態

この竈内には２個の大形甕が並んで据えてあり、杯も２個出土している。竈右脇では、小形甑と２個の小形甕が甑を上に横まれていた。大形甑は貯蔵穴側で見られた。

古墳時代後期の竪穴住居群



これを竪穴の規模で分類すると上右図のようになる。

竪穴の規模の違いは、大形と中形では杯・小形甕と石の量の差、中形と小形は大形甕の有無、また特別と一般の違いは特に甑と壺の所有状況に顕著に現れている。

これらは、今回調査した範囲では、図のように大きく4グループに分かれている。全容に近い部分が判明したAB両グループで見ると、若干の重複を考慮に入れれば、大中小各4,5軒がいっしょになって構成されている。そして食器の特別に多い竪穴が1,2軒含まれるのが原則のようである。

このような各グループは、それぞれ血縁的な生活共同体を示すのではないか。甑・壺の共有に見られるその関係は、蒸す料理を共に会食し、食料を共同で保管するもので、大家族に近いものと言える。

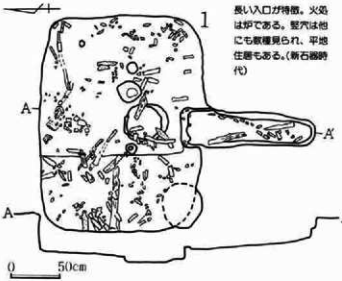
Aは食器保管竪穴と竈のない集会所とも思える竪穴が多く、この村の有力家族の地域と推定される。Bは玉類製作地でこの村の性格を決定する主要産業地域であり、方形に巡る溝072遺構もその性格と関係あるだろう。なお時期不明の倉庫状の掘立建物の065遺構はAに、063遺構はBに属するものかも知れない。

竪穴住居文化と米食

Aの稲作地帯は、いわゆる照葉樹林文化圏である。韓半島から日本列島の本来の稲作地帯はA1で、A2まで拡大は部分的な現象ではないか。

Bの竪穴住居地帯は、西はチベット、北は黒竜江流域まで広がる。

日本の状態は問題あるが、静岡県の稲作集落の登呂遺跡は、竪穴でないことに注意を要する。



半坡の41号住居
長い入口が特徴。火処は炉である。竪穴は他にも数種見られ、平地住居もある。(新石器時代)

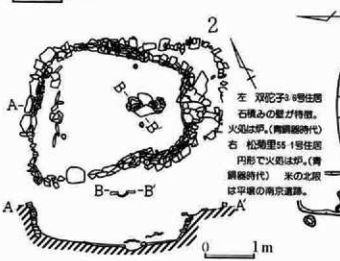
竪穴住居は、東日本で縄文時代より少なくとも近世初めまで続いている。そこでの食生活の中心は中世では麦だが、弥生時代から古代までは、税の対象が米であることから昆同されて、主食まで米食であったかのような誤解がある。

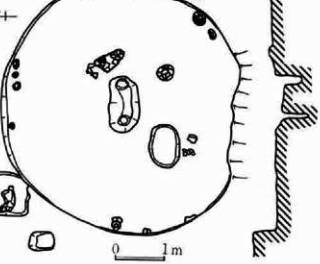
稲作の原産地のインド・アッサム地方 (6) や中国雲南省 (7) また東アジア最古の栽培稲が発見された浙江省河姆渡遺跡 (4) では、いづれも住居は高床構造である。

それに対し陝西省半坡遺跡 (1) や遼寧省双砣子遺跡 (2) などで発見された竪穴住居の集落の主食はアワである。

ここで高床・稲と竪穴・アワという文化の差が見られる。ただ韓国では扶余松菊里遺跡 (3) などで竪穴住居から米が発見されており、この二大文化圏の概念は韓半島から日本列島でややねじれている。

本遺跡の飯付着有機物がどんな食物であるかは、特定できていない。ただ前橋市荒口の鶴谷遺跡 (5) の竪穴住居より米と共にアワが大量に出土したことは、重要である。

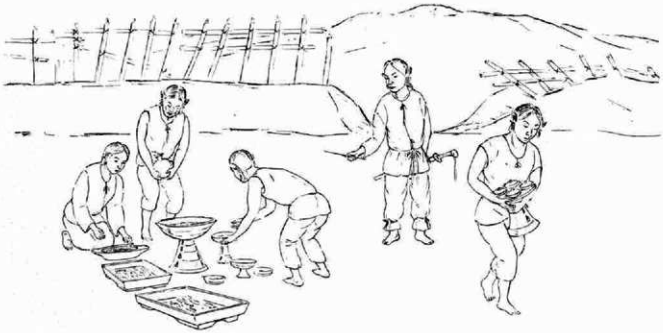




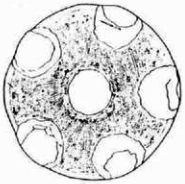
左　双砣子3・9竪住居
石積みの壁が特徴。
火処は炉。(青銅器時代)
右　松菊里55・1号住居
円形で火処は炉。(青銅器時代)　米の北限は平壌の南京遺跡。

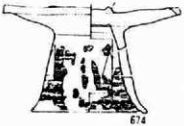
竪穴住居041遺構での須恵器子持器台（674）の出土状態

成果編 2 原之城居館との関係



情景イメージ　衰弱した原之城居館からの祭儀用器の強奪





674

675

694

6世紀中頃の豪族居館である原之城居館は、尼ガ池からの幅約150mの谷をはさんだ西にある。この谷に水田はない。原之城居館と本遺跡集落の特殊な関係を示す材料には、飾り玉の製作に並んで、041遺構出土須恵器がある。041遺構は小形に近い中形竪穴で、本遺跡集落Aグループでも最も居館よりにある。ここには、食器だけで19個体の土師器が収蔵されていた。

しかし他の保管竪穴と異なり、須恵器子持器台・高杯がそこに加わっていた。さらに興味深いことは、子持器台は上面杯部が全て取られ上下逆に壁近くで出土している。何か木材をのせて竪穴内への昇降用の台として使われていた感じである。

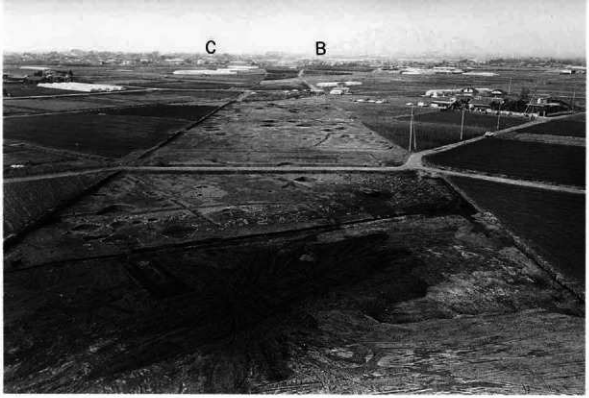
原之城居館では重要な祭祀に関係する中溝から、2点の須恵器子持器台と高杯が出土している。13の子持器台を除いて、極めて041遺構出土のものに類似している。

これらの須恵器は、一般竪穴からの出土は通常考えにくく、居館の祭祀場所や古墳への副葬品として使われる。それがこのような状態で使われたことは、非日常的な事件の結果だろう。以下それを推定する。

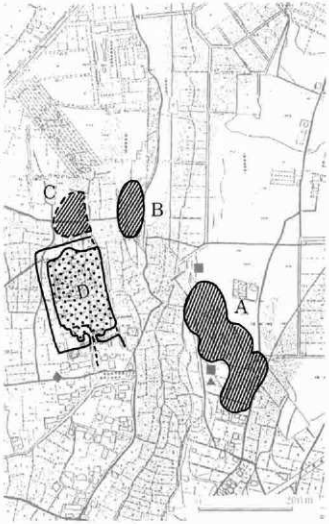
これらは、当然居館での祭祀に使われた王者の宝器だった。しかし豪族の権力あるいは宗教的権威が衰えたため、豪族への反抗としてお膝元の村の有力者がこれを盗んで、特に子持器台を用途が正反対の踏台にして使ったのではないか。

いづれにしてもこの須恵器の存在は、居館権力の衰弱を

左　041遺構出土の須恵器　子持器台は、上面と脚部末端をきれいに欠いている。この竪穴も火災で廃棄されているため、その時のススが付着している。下　同出土状態の高杯675は完存で保管。



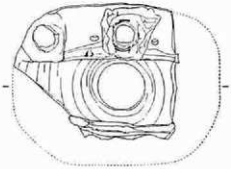
尼が池谷の本遺跡集落（A）の対岸に原之城居館（D）があり、枝谷との合流点の台地には喜上下古祥寺遺跡の集落（B）、居館の北側にも同じ時代の集落（C）がある。写真は本遺跡南東からの景観。

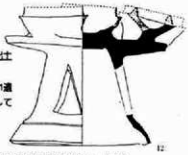


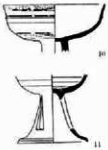
意味している。かつてこの村は、原之城居館豪族の権力の源泉の有力な要素である飾り玉の生産加工を行う忠実な産業センターであった。この役割は、周辺の他の村では見られない。

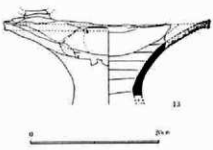
しかしどのような理由からか、居館豪族に対し反発するようになった。

原之城豪族の盛時を玉類のチップが投棄された020遺構の時期とし、その衰弱期をこの041遺構の時期と見た場合、両者にそれほど極端な土器型式の変化は考えられず、その期間は半世紀以内の幅に収まるだろう。









原之城遺跡中出土の須恵器
13は外はかなり041遺構のものに類似している。

〈前掲『原之城遺跡発掘調査報告書』より〉

古代の集落

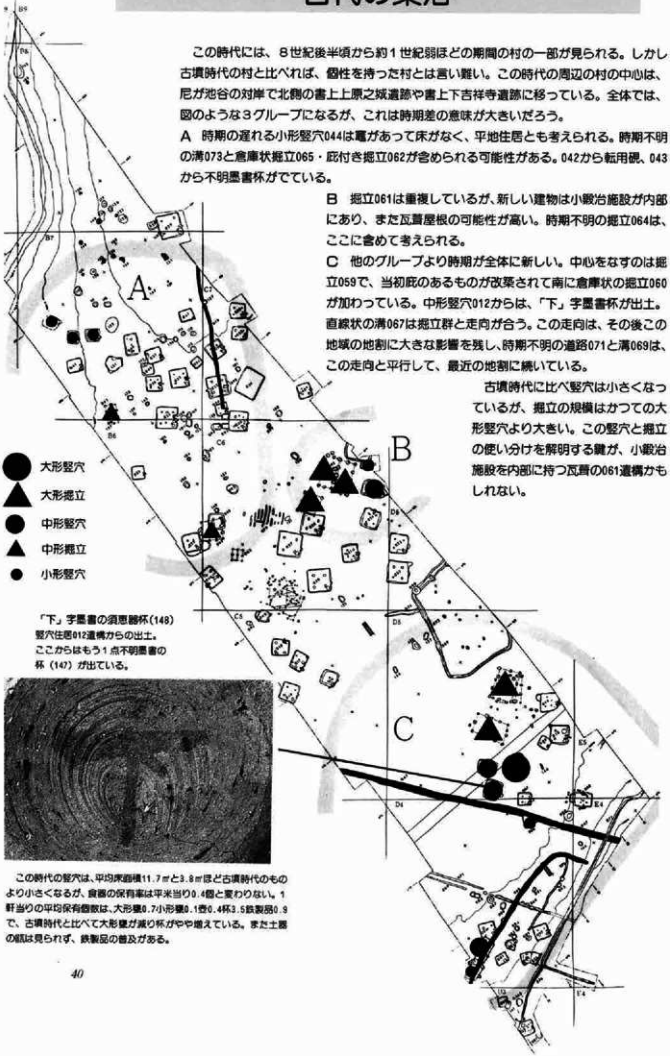
この時代には、8世紀後半頃から約1世紀弱ほどの期間の村の一部が見られる。しかし古墳時代の村と比べれば、個性を持った村とは言い難い。この時代の周辺の村の中心は、尼が池谷の対岸で北側の書上上原之城遺跡や書上下吉祥寺遺跡に移っている。全体では、図のような3グループになるが、これは時期差の意味が大きいだろう。

A　時期の遅れる小形竪穴044は竈があって床がなく、平地住居とも考えられる。時期不明の溝073と倉庫状掘立065・庇付き掘立062が含められる可能性がある。042から転用硯、043から不明墨書杯がでている。

B　掘立061は重複しているが、新しい建物は小鍛冶施設が内部にあり、また瓦葺屋根の可能性が高い。時期不明の掘立064は、ここに含めて考えられる。

C　他のグループより時期が全体に新しい。中心をなすのは掘立059で、当初庇のあるものが改築されて南に倉庫状の掘立060が加わっている。中形竪穴012からは、「下」字墨書杯が出土。直線状の溝067は掘立群と走向が合う。この走向は、その後この地域の地割に大きな影響を残し、時期不明の道路071と溝069は、この走向と平行して、最近の地割に続いている。

古墳時代に比べ竪穴は小さくなっているが、掘立の規模はかつての大形竪穴より大きい。この竪穴と掘立の使い分けを解明する鍵が、小鍛冶施設を内部に持つ瓦葺の061遺構かもしれない。



「下」字墨書の須恵器杯(148)
竪穴住居012遺構からの出土。
ここからはもう1点不明墨書の
杯（147）が出ている。

この時代の竪穴は、平均床面積11.7㎡と3.8㎡ほど古墳時代のものより小さくなるが、食器の保有率は平米当り0.4個と変わりない。1軒当りの平均保有個数は、大形壁0.7小形壁0.1壺0.4杯3.5鉄製品0.9で、古墳時代と比べて大形壁が減り杯がやや増えている。また土器の甑は見られず、鉄製品の普及がある。

149遺構の焼石の出土状態

成果編 3 縄文集石遺構群

情景イメージ　石蒸し料理の風景

縄文時代の本遺跡

今回の調査で得られた縄文時代の遺構、遺物類については、資料編に示すとおりであるが、質・量とも多数にわたるものであり、良好な資料といえよう。

出土土器から本遺跡の時期をみると、縄文時代早期から後期にわたるもので、時期毋の遺物量の多少、型式的な断絶期などを含みつつ、比較的長期に営まれた遺跡といえよう。

遺構、遺物の分布状況をみると、古墳時代居住域と重複する部分が多く、年代的格差、時代背景は全く異なるものの、居住地とすれば適した所に存在したものといえよう。

土器、石器などの遺物類も、当時の日常生活用具を主とするものであり、この点からみても居住域としての性格が看取される。

ただ、遺構についての内容をみると、まず第１に生活の拠点となるべき住居の存在が確認されていないことが注意されよう。このことは、調査区域近接地に住居の存在を想定しなければならず、立地からみて、おそらく調査区東側に遺跡としての広がりをもち、その部分に住居が占地するものとみられる。

縄文時代の遺構としては、集石遺構と土坑がある。土坑については、形態的にも不定形なものを含み、又、時期についても出土土器の有無により判断しているものの、いずれも埋土中からの出土であり、その状況からみれば、積極的に肯定し得ない点もある。そのため、土坑については、縄文時代の遺物が出土した土坑として記録、報告するにとどめ、次に計14基確認された集石遺構に関して見るものとしよう。

集石遺構とは

集石遺構については、焼礫が集積された特徴的な形態を示すことから、比較的古くから注目されると共にオセアニア・アフリカ等をはじめとする各地の民族例についても比較検討資料として積極的に援用されている。

群馬県内においても、調査例が増加しており、縄文時代早・前・中期の各期にわたり類例が検出されている。

また、全国的にも同じように調査例が増加・蓄積しており、特に量的には東日本を主として確認され、西日本には希薄な傾向であったが、最近では奈良県桐山和田遺跡でおよそ20基の集石遺構が集中的に検出され注目されている。

すなわち、これらのことは縄文時代の遺構としては、一般的な存在として集石遺構が利用されたということを示すものといえよう。

時期的にみると、最近の集成的研究によれば、早期から中期にわたるが、中でも早期と中期に多い傾向があり、特に遺跡数自体が多い中期に量的ピークが認められる。

形態的には、焼礫の集積状態、土坑の有無などのもとにいくつかの種類が認められている。県内例からみると、まず集石下に土坑をもつものと、もたないものの相違があり、土坑をもつ場合、その土坑自体の形態差もあるが、焼礫が土坑上部に集積されるもの、中層に集積するもの、下部に集積されるもの、土坑全体に集積されるものが存在する。また、土坑がないものについては、焼礫が小範囲に集中するものと、やや分散的に広がりをもつものがみられる。このような形態の相違は、当然用途の相違に起因するものも含まれるとみられるが、構築→使用→廃棄という一連の使用経過の時間的相違に基づく差も存在するものといえよう。

ここでは、焼礫の集積された状態である集石遺構については一定の目的、用途上基づくものと考えておこう。

発見された集石遺構

本遺跡では、集石遺構は台地縁辺付近に集中して検出されている。縄文時代住居については、先にふれたように存在しないため、調査区域内は集石遺構を使用した区域にあたり、住居区域とは場所を異にしていたと考えられる。ただ、遺物類については、日常生活用具を大量に出土していることから、この区域が生活域として利用されたものとみられることから、近接して住居が営まれたであろう。すなわち、本来この遺跡は、今回調査された集石遺構に加えて、各時期に伴う住居が存在することにより居住域が形成されるものといえよう。

各集石遺構は、調査所見では土坑の有無は確認されていないが、焼礫の出土状況から判断すると浅い掘り込み内に礫が集積されたものと考えられる。さらに、これらの礫は浅い掘り込み底面に集積されており、これは今回検出例に共通する特徴である。

集石遺構の検出された最下面は、ローム層を削り込んだ面で確認されているが、調査所見ではこの周辺のローム層について火熱を受けた痕跡や炭化物の存在は確認されていない。

集積されている礫は、すでに触れているようにいずれについても火熱を受け赤化もしくは破砕している。この破砕礫については、接合関係からみると、それぞれの集石遺構内で破砕したものと判断され、このことから、その場所で礫が加熱されたものといえる。

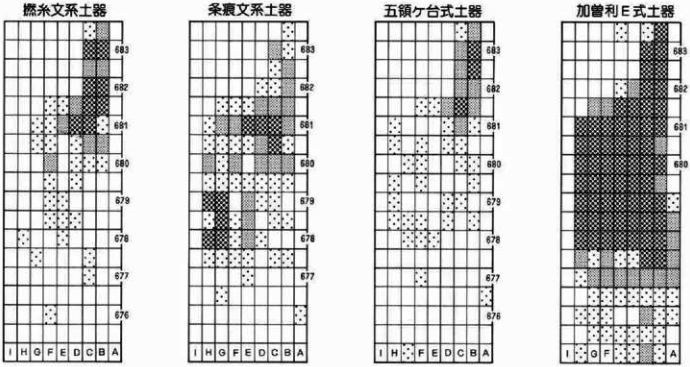
集落単位の共食の場

このような検出状況および礫の被熱状態からみれば、掘り込み内に礫が投入され、その上で燃料材などを利用し火熱し、さらに礫を投入、焼礫として使用したように観察される。こうした使用状態を考えた場合、本集石遺構については、調理施設として利用された可能性が高いといえよう。

すなわち、この場合は集石遺構＝アース・オーブンとして理解するものであり、いわゆる〝石蒸し料理〟施設と考えるものである。ただ、そこで行われる料理の性格については、日常的な炊飯として利用されたか否かについては問題が生じるであろう。

日常的な生活は、食事行為を含め、通常住居を基本として行われたものと考えられ、集石遺構を使用する料理行為はそのような日常的食事とは異なったものと考えられる。

集石遺構を調理施設と考えた場合、その必要とされる理由は、①土器などの調理用具が欠除している場合、②大量の料理を必要とする場合が考えられる。旧石器時代であれば、①の理由は成り立つものの、縄文時代の場合、土器類は豊富に存在し、時代的特徴を示す代表的存在であることから、①は考えられず、②についての可能性がうかびあがってくる。大量の料理とは、すなわち人数に関わるもので、多人数を示すことになる。通常の食事行為は、住居毋に炉と土器をもって行うことを前提とすれば、その住居単位の食事行為を超える食事行為について、集石遺構という施設を必要としたことになろう。その意味についてはここではおかざるを得ないが、集石遺構については、このように集落単位における共食の場と理解しておきたい。



縄文時代の土器類、石器類の分布状況について概観し、さらに集石との関係についてみてみよう。

縄文土器の分布

出土した土器を概観すると、早期撚糸文系土器（第Ⅰ群土器）、田戸下層式土器（第Ⅱ群土器）、鵜ケ島台式土器（第Ⅲ群土器）、前期黒浜式―有尾系土器（第Ⅳ群１類）、諸磯Ｃ式土器（第Ⅳ群２類）、中期五領ケ台式土器（第Ⅴ群１類）、加曽利Ｅ４式土器（第Ⅴ群２類）、後期加曽利Ｂ２式土器（第Ⅵ群土器）となるが、ここでは出土量の多い撚糸文系土器、鵜ケ島台式―条痕文系土器、五領ケ台式土器、加曽利Ｅ式土器についてその分布を表示しておこう。

基本的に台地縁辺付近に集中する傾向は、各期とも共通しており、分布範囲および濃淡についてはそのまま出土量に応じたものとなっている。

撚糸文系土器――遺跡北側にあたる台地縁辺部に分布する。台地中央部にかけては、極めて希薄ながら散布が認められる。

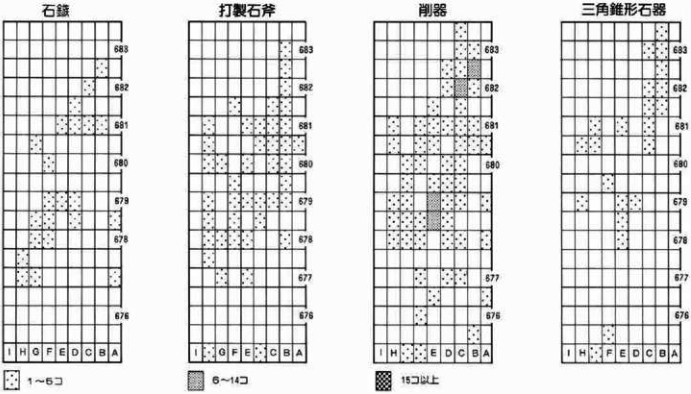
条痕文系土器――台地縁辺部からやや中央部にかけて分布する。

五領ケ台式土器―台地縁辺部に分布する。

加曽利Ｅ式土器―出土土器中、最も多量に出土しているため、台地縁辺部から中央部にかけ濃密な分布をみせる。各期土器の分布域を全て包括する範囲となっている。

石器の分布

石器についても、豊富な量が得られており総点約2,000点（石器類400点、剥片・砕片類1,600点）におよんでいる。資料編には、各器種にわたり図化・報告しているので参照してもらいたい。分布については、代表



的な4器種について表示してある。いずれの器種についても、量に差はあるものの、台地縁辺から中央部にかけて散布する傾向がみられる。基本的に分布域を共有しているものといえ、器種間における分布差は認められない。石器類にみられる分布傾向は、土器類における分布傾向と一致するもので、これらの範囲は少なくとも縄文時代各期の居住域として認識できるものといえる。

集石遺構の時期

このような土器類、石器類の分布する範囲内に、集石遺構も存在していることになる。このように、遺物類、遺構類とも分布域を共有しているため、集石遺構の時期について特定しきれない状況である。つまり、早期から後期まで可能性があるとともに、ある特定時期の同時存在基数も確定できないことになる。さらにつけ加えるならば、集石遺構自体、アース・オーブンとして利用される限り基本的に土器は必要とせず、このことも時期の特定を困難にしている。計14基認められた集石が同時存在したのか、時期差をもっていたのかについても、決して積極的に考える材料はないものの、遺跡の構造が各期を通じて大きな差が認められない点を考えると、各集石は時期差をもって存在した可能性が高いと思われる。その場合、かなり近接して存在することから、礫の再利用、廃棄などもあったと考えられ、調査過程で認められた礫の散乱状態はそのためによるものとみられよう。

成果編　5　地名　八寸大道上

調査地南東部より「大道」方向を望む　道路右手の家並が東小保方の八寸（新田八寸）の集落で、「大道」はその手前を左に走る。

本遺跡の位置する小字は、旧東小保方（ひがしおほかた）村八寸組の大道上（おおみちうえ）である。

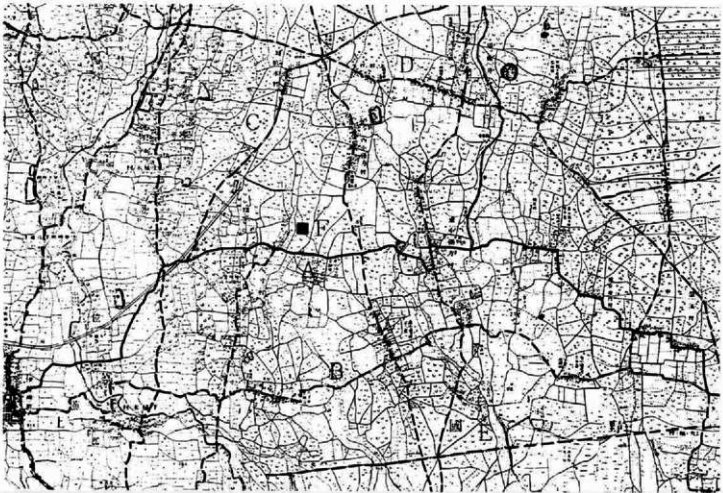
この小字は、本遺跡の南側を東西に走る道（下図A）より付いたもので、道の南側が大道下（おおみちした）になっている。この道は、伊勢崎市街地より旧新田郡大根（おおね）村（現新田町）に至るもので、さらに南に走る足利街道（B）のバイパスのような路線になっている。

この道の北で景之城居館の南西には中世居館も見つかっており、中世に遡る可能性はある。ただ「おおみち」と言う名のみで、古代の東山道とするような考えには根拠がない。

近世の幹線道

明治10年代の地図に残っている状態で、「大道」と言う小字は、伊勢崎から桐生へ向かう道である（C）の両側にも見られる。近世の幹線道に対する普通名詞であろう。

本遺跡（F）の北には中世の幹線道の「あづま道」（D）が走り、足利街道（B）の南には古代の幹線道の「牛堀道」（E）が見える。



資　料　編

利用の手引

1　遺構の取扱いについて

遺構として認定したものは、全て通し番号を付けて時代別・種類別に掲載した。

2　遺物の取扱いについて次の順序と手続きで掲載した。

① 取り上げた遺物の全てから、A希少価値のあるもの、B残存状態の良いもの、C遺構に伴う可能性の大きいものの基準で選択。

② ①全体の竪穴住居に関係するものの中で、明らかに廃絶後のものを**投棄遺物**として、次の接合破片の出土位置の基準で生活時の遺物（「出土遺物」とする）から分けた。

イ　床面からの高さ20㎝以上のものを50%以上含む

ロ　床面からの高さ10㎝以上のものを80%以上含む

ハ　床面からの高さ5㎝以上のものを90%以上含む

ニ　床面からの高さ50㎝以上のものを含む

ホ　表面採集のものを含む

ヘ　平面位置の修正として、壁近くで30㎝以上、中央部で5㎝以上の接合破片を含む

③ ②の中から実測図掲載を次の基準で選択。

イ　竪穴住居出土遺物は、似た種類・器形のものは代表１点

ロ　竪穴住居投棄遺物と遺構外出土遺物は、希少価値のあるもの

ハ　その他の遺構出土遺物は、全点

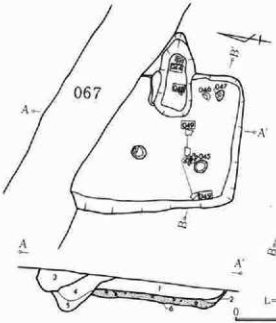
④ ③で実測図を掲載しないものも写真は全て掲載。また出土位置は全て表示し、遺構出土遺物は枠で番号を囲む。

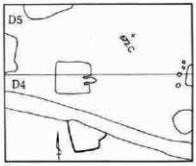
⑤ 以上の操作の結果竪穴住居での生活時の器物は、出土遺物としたものの中に含まれる。

⑥ 石製・土製の玉類は上記基準に関わらず、ここでは掲載せず特別報告にのみ掲載した。

⑦ 実測図は**使用痕の表現**に重点を置いた。

1 古代 006遺構（竪穴住居）





位置 D4とD5の境界

重複 北側で溝067に切られる

埋土 1～3溝067埋土 4黒褐色土 人為的な埋設 5 4層にローム粒混入 6ローム塊貼り床

床面積 8㎡以上

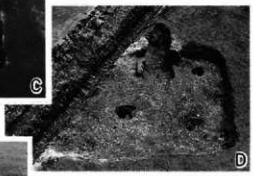
柱穴 やや不揃いな位置で15～20cmほどの深さのものが3ヶ所で見られる

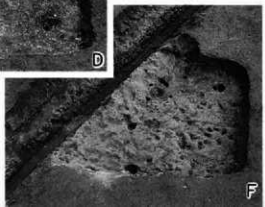
竈 東壁南より

遺物 竈内より倒立して土師器甕（044）と酸化焼成の須恵器杯（048） 床近くで須恵器大甕（049） 044は内面に有機物外面にススと炭化有機物 048は内外面にス

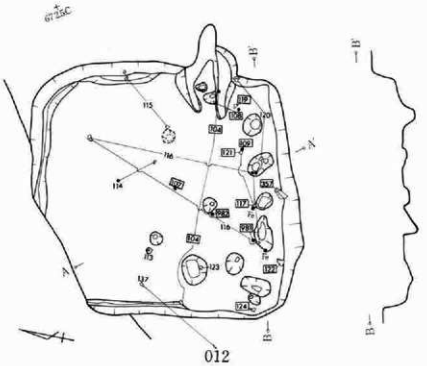
破片総数 土師器甕222 杯53 須恵器甕1 杯14 蓋2

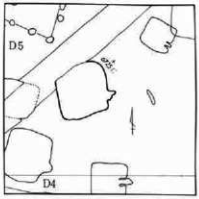
遺構写真 A 南北土層 B 東西土層 C 遺物出土状態 D 掘り上がり E 竈 F 掘り方





1 古代 011遺構（竪穴住居）





位置 D5南側

重複 なし 北西側水路で撹乱

埋土 1 暗褐色砂質土 2 1層にローム粒混入 3 2層にローム塊多く含む

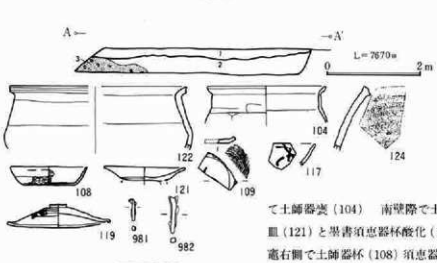
床面積 22㎡

柱穴 30cmほどの深さのものが南壁側で9ヶ所で見られる 竈前のは掘り方検出で70cmの深さ

竈 東壁南より

遺物 竈内から散乱して土師器甕（104） 南壁際で土製竈材（357）須恵器鉢（122）同皿（121）と墨書須恵器杯蓋化（109）・還元（117）鉄釘（981,982） 竈右側で土師器杯（108）須恵器蓋（119） 中央で土師器杯（107） 南西角で須恵器壺（124） 108は内外面に炭化有機物 119は外面にスス

破片総数 土師器甕1,665 杯488 須恵器甕10 杯234 蓋33 椀4 鉄滓1



011遺構

遺構写真

A 東西土層

BF 竈

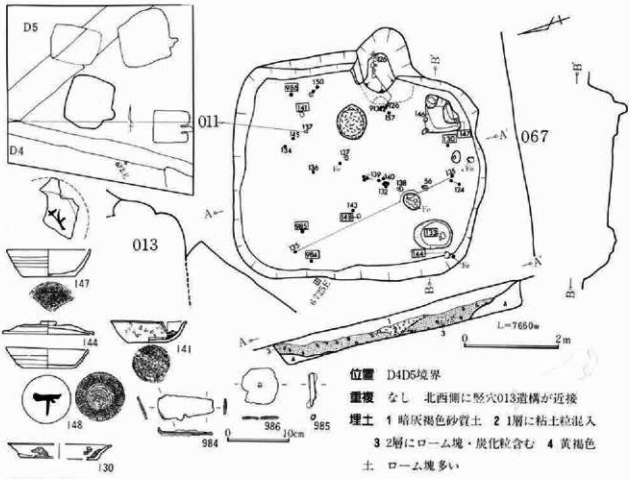
CG 遺物出土状態

D 掘り方

EH 掘り上がり

012遺構

1 古代 012遺構（竪穴住居）



位置 D4D5境界

重複 なし　北西側に竪穴013遺構が近接

埋土 1 暗灰褐色砂質土　2 1層に粘土粒混入　3 2層にローム塊・炭化粒含む　4 黄褐色土　ローム塊多い

床面積 17㎡

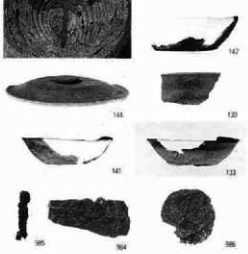
柱穴 不揃いな位置でやや大きいピットがいくつかある　竈前には粘土の入ったもの　その南西には鉄滓がつまった20cmほどの深さのものがあり　南東と南西の角には10cmほどの浅くて広いものがある　南東のものの一部は柱穴状に深い　竈前にも掘り方検出で70cmの深さのものがある

竈 東壁やや南より

遺物 南東側ピット付近で土師器杯（130）墨書須恵器杯（147）竈左で須恵器杯（141）と紡錘車形鉄製品（986）　西壁近くで墨書須恵器杯（148）鉄鎌（984）釘状鉄製品（985）　南西側ピット付近で須恵器杯（133）同蓋（144）また鉄滓が散乱している　130は内外面に炭化有機物付着

破片総数 土師器甕1,090 杯151　須恵器甕14 杯112　灰釉陶器4

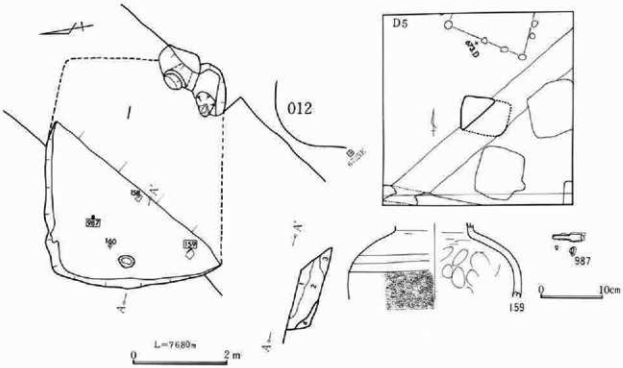
備考 この遺構は、鉄製品の出土量が多い。しかも鉄滓がかなり見られることに特徴がある。小鍛冶の可能性も考えられる。また「下」字の墨書も、本遺跡の墨書の中では字形が判明する数少ない例である。



遺構写真

A 南北土層　B 東西土層　C 遺物出土状態　D 掘り上がり　E 鉄滓出土状態　F 竈　G 掘り方

1 古代 013遺構（竪穴住居）



位置　D5南側

重複　なし　南東側に竪穴013遺構が近接中央部は水路の攪乱で大きく破壊される

埋土　1 黒褐色土　2 暗褐色土　3 2層にローム粒含む　4 暗黄褐色土　ローム塊主体

床面積　17㎡

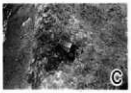
柱穴　竈右には25cmほどの深さのものがあり　西壁際のものは5cmほどで浅い

竈　東壁南より

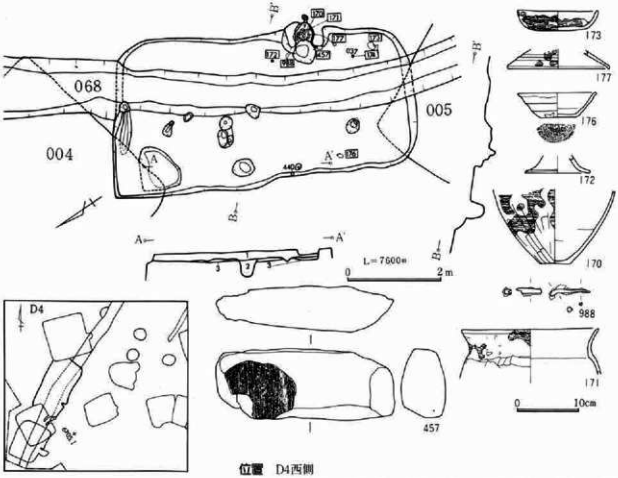
遺物　南西角付近で須恵器壺（159）　北西角近くで鉄製刀子（987）

破片総数　土師器甕166 杯51　須恵器杯16 蓋4

遺構写真　A 東西土層　BD 159出土状態　C 158出土状態　E 遺物出土状態　F 掘り上がり



1 古代 015遺構（竪穴住居）



位置 D4西側

重複 溝068遺構に切られる　北側で竪穴004遺構　南側で竪穴005遺構を壊す　南で竪穴058遺構が近接

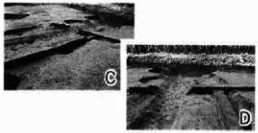
埋土 1 暗褐色砂質土　2 1層にローム粒含む　3 黄褐色土　ローム粒主体

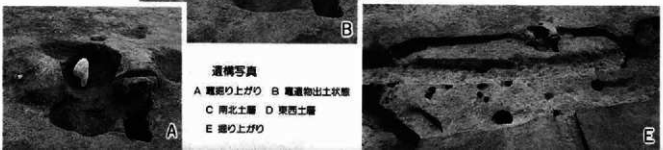
床面積 18㎡

柱穴 20～30cmほどの深さのものが不揃いな位置で7個西壁側で見られる　北西角の落込みは浅い　**竈** 東壁南より

遺物 竈内で土師器甕（170,171）右袖で方形加工石（457）　竈左前で土師器甕（172）釘状鉄製品（988）　竈右で土師器杯（173,174）須恵器蓋（177）　西壁際で須恵器杯（176）　170,171,173,177,457にはスス付着　173は内外面に油煙状に付く

破片総数 土師器甕463 杯29　須恵器杯3





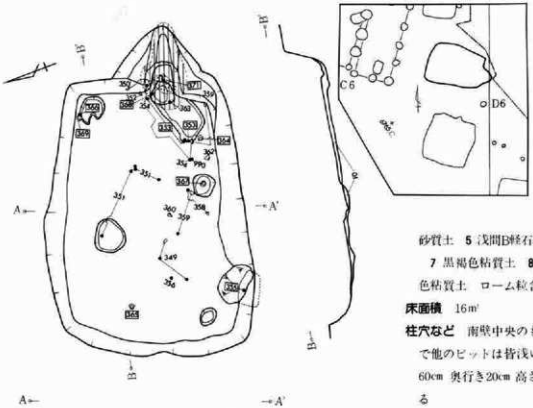
遺構写真

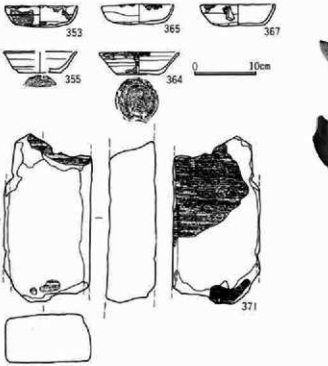
A 竈掘り上がり　B 竈遺物出土状態

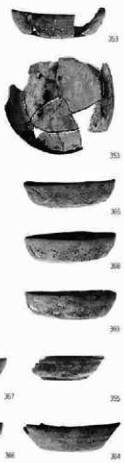
C 南北土層　D 東西土層

E 掘り上がり

1 古代 025遺構（竪穴住居）







位置 C6東側

重複 なし

埋土 1 黒褐色砂質土 2 暗褐色砂質土 3 黒褐色粘質土 4 黒褐色砂質土 5 浅間B軽石純層 6 黄褐色粘質土 7 黒褐色粘質土 8 黒褐色粘質土 9 褐色粘質土 ローム粒含む

床面積 16㎡

柱穴など 南壁中央のものが30cmほどの深さで他のピットは皆浅い 南壁西よりに間口60cm 奥行き20cm 高さ40cmほどの横穴がある

竈 東壁中央 焼成部両側が棚状に広がる

遺物 竈内で方形土製品(371)土師器杯(368) 北東角で土師器杯(366,369) 竈右前で土師器杯(353)須恵器杯(364) 南壁ピット内で土師器杯(367) 横穴で須恵器杯(355) 西壁近くで土師器杯(365) 土師器杯と須恵器杯の364はいづれも油煙が付着 371は片面のみ二次焼成

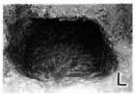
破片総数 土師器甕655 杯111 須恵器甕58 杯44

備考 遺物は油煙のついた杯が多い。明り用としての使用方法を示すにしては数が多いので、火災状況の現れと思えるが、同様の遺構でも見られる。横穴は貯蔵穴か。壁は傾斜がある。

A 東西土層
B 南北土層

C 浅間B軽石層
D 遺物出土状態
E～J 南壁側遺物出土状態

K 掘り上がり
L 横穴
M 竈掘り上がり

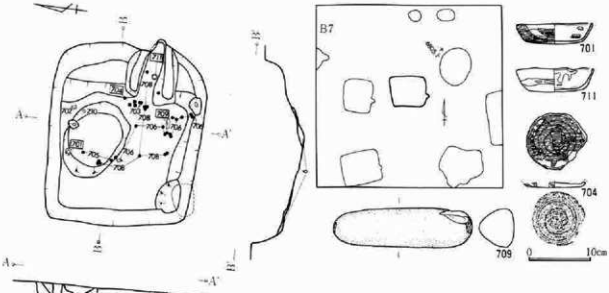


NO 竈内371出土状態

Q 竈掘り方
R 掘り方

PS 竈内炭化材

1 古代 042遺構（竪穴住居）



位置 B7西側

重複 なし

埋土 1 黒色砂質土 2 浅間B軽石純層 3 暗褐色砂質土 4 黄褐色粘質土 ローム粒含む 5 明黄褐色粘質土 炭化粒含む 6 ローム粒貼り床

床面積 6㎡ 床面は不均一

柱穴など 南東角壁中に20㎝ほどの深さのもの 北壁際の土坑状の落込みの中に小さな40㎝の深さのものがある 南西角には間口160㎝ 奥行き50㎝ 高さ40㎝ほどの横穴がある

竈 東壁やや南側 燃焼部両側が広がって床から30㎝以上の段差の棚のようになっている

遺物 竈内で土師器杯（711） 竈前で棒状礫（709）と須恵器杯底転用硯（704） 北壁際で土師器杯（701） 土師器杯はいづれも油煙が付着 704は内側に摩耗痕とスス 709は両端に摩耗痕

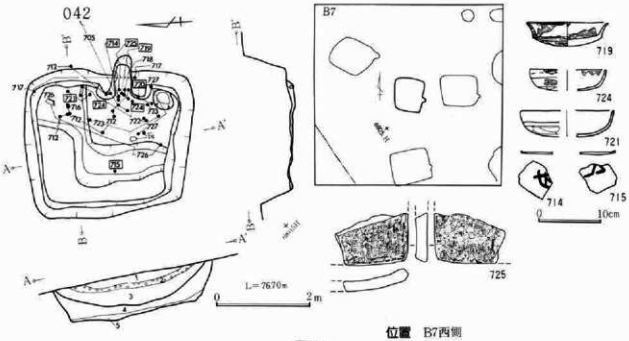
破片総数 土師器甕64 杯123 須恵器杯7

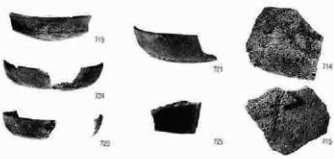
備考 横穴の位置と形、竈両側の棚状部分など、面積は狭いが全体の構造は竪穴住居025遺構に似ている。時期も埋土中のB軽石の位置などからかなり近いだろう。ただ床の状態は、このままで居住していたとは思えない。

A 南北土層
B 東西土層
D 竈
F 掘り上がり
G 掘り方

C 遺物出土状態 E 横穴

1 古代 043遺構（竪穴住居）





位置 B7西側

重複 なし

埋土 1 黒色砂質土 2 浅間B軽石純層 3 暗褐色砂質土 4 黄褐色粘質土 ローム粒含む 5 明黄褐色粘質土 炭化粒含む 6 ローム粒貼り床

床面積 6㎡ 床面は不均一で中央は溝状に10cmほど深い

柱穴など 竈右のピットは10cmほどの深さ他に顕著なピットは見られない

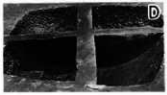
竈 東壁やや南側

遺物 竈内で土師器杯墨書(714)同杯(719)平瓦(725)竈前で土師器杯(720)左にやや散乱して同杯(721,724)中央部西側で土師器杯墨書（715） 719と724はいづれも油煙が付着 墨書は判読できない

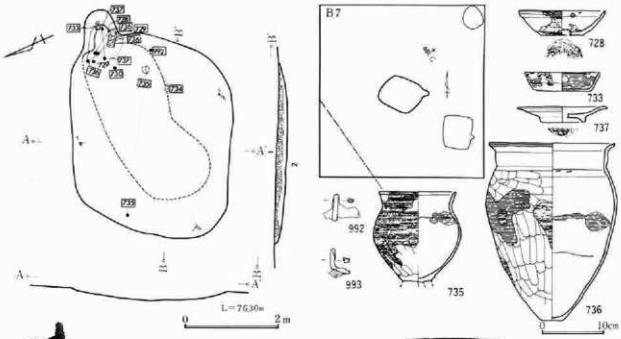
破片総数 土師器甕142 杯111 須恵器杯10

備考 埋土状態と大きさ形は、竪穴住居042遺構に似ている。042で硯が、ここで墨書があることは、同時期で相互補完的役割があったのだろう。床状態は、やはりこのままで居住していたとは思えない。

遺構写真 A 南北土層 B 遺物出土状態 C 竈 D 東西土層 E 掘り上がり F 掘り方



1 古代 044遺構（竪穴住居）



位置 B7西側

重複 なし

埋土 1 黒色粘質土 炭化物含み硬い 2 明黄褐色粘質土 ローム粒含む

床面積 約6㎡ 確認面が床面と思われ範囲は明確でない

柱穴など 不明 **竈** 東側

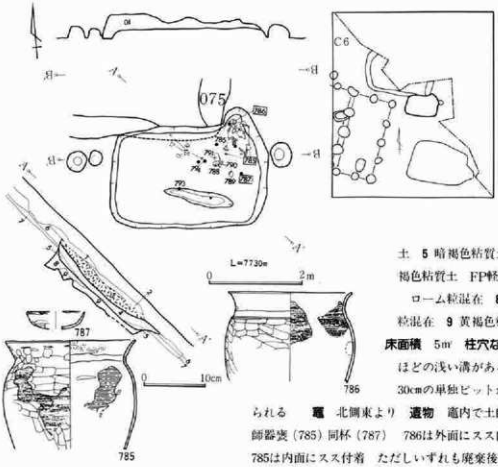
遺物 竈内で須恵器杯(728)同皿(737)土師器杯(729,730,733)同甕（736） 竈右前で不明鉄製品（992） やや中央で須恵器杯（734） 散乱して土師器台付甕（735） その他位置不明で鉄小片（993）も出ている 728,733,735,736はいづれも外面スス内面炭化有機物が付着 736の外面は炭化有機物もある

破片総数 土師器甕76 杯35 須恵器杯2

備考 調査では確認時にすでに床が出ていたのが、分からなかった。この場合、はたして掘り込みが存在した竪穴であったかは、不明である。一応斜面でその可能性が否定できないため竪穴住居にしたが、平地住居とも考えられる。

遺構写真 A 竈内炭化物 B 竈前遺物出土状態 C 南北土層 D 東西土層 E 竈遺物出土状態

1 古代 053遺構（竪穴住居）



位置 C6北東側

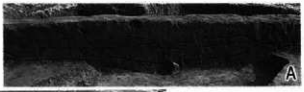
重複 溝075遺構を北側で切る

埋土 1 黒色砂質土 炭化物含む 2 暗褐色砂質土 3 暗褐色粘質土 僅かに滑石チップ含む 4 黒褐色粘質土 5 暗褐色粘質土 ローム粒含む 6 暗褐色粘質土 FP軽石混じる 7 褐色粘質土 ローム粒混在 8 暗褐色粘質土 ローム粒混在 9 黄褐色粘質土 同前

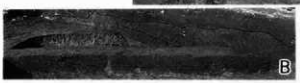
床面積 5㎡ **柱穴など** 竪穴内には深さ5cmほどの浅い溝があるのみ 外側に深さ25～30cmの単独ピットがあり壁外柱穴とも考えられる **竈** 北側東より **遺物** 竈内で土師器甕（786） 竈前で土師器甕（785）同杯（787） 786は外面にスス内面に炭化有機物付着 785は内面にスス付着 ただしいずれも廃棄後の可能性もある 埋土中に滑石玉類未製品があり投棄遺物に瓦が多い

破片総数 土師器甕417 杯43 須恵器杯19

備考 投棄遺物に瓦が多いことは、南の竪穴025遺構も同様である。この瓦は、掘立061遺構のものと思われる。この3遺構の同時存在が考えられ、煮炊具の多いのが本遺構の特徴である。

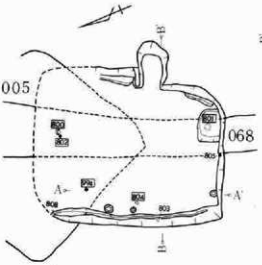


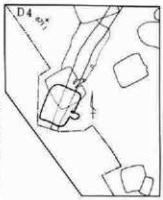
遺構写真 A 075との重複面土層 B 東西土層 C 遺物出土状態 DE 竈遺物出土状態



F 掘り方 G 掘り上がり

1 古代 058遺構（竪穴住居）





位置 D4南側

重複 溝068遺構に中心を壊される　北側で竪穴住居005遺構を切る

埋土 1 黄褐色粘質土　2 黒褐色砂質土　ローム塊含む　3 暗褐色粘質土　ローム塊多い　4 3層よりローム塊多量　5 3層に粘土塊含む　6 4層にさらにローム塊多い　7 黄褐色粘質土　ローム粒混在　8 砂層

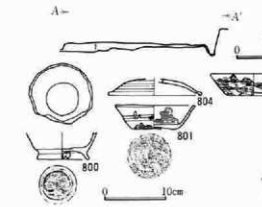
床面積 約10㎡　**柱穴など** 南東側に深さ20cmほどの貯蔵穴状のピットがある　南壁から西壁に沿って3個の10cm以下の深さの小ピットがある

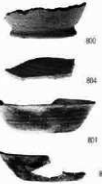
竈 東側南より

遺物 貯蔵穴状ピット内で須恵器杯（801）西壁際で須恵器蓋（804）と釘状鉄製品（994）北壁側で須恵器瓶（800）同杯（802）801は外面にスス内面に炭化有機物付着　802は内外面にスス付着

破片総数 土師器甕290 杯67 須恵器杯7 蓋1 甕1 粘土塊8

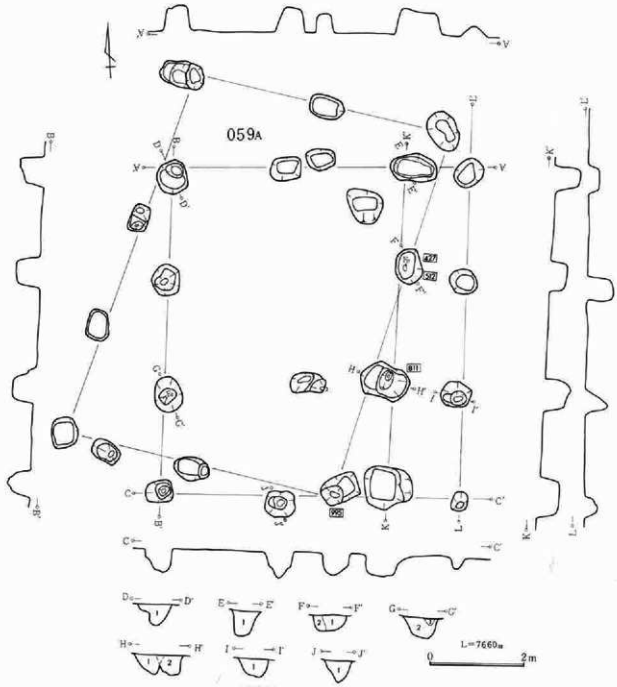
備考 重複が大きいため調査時に当初新旧が把握しにくかった。北側に形状は異なるが走向の似た竪穴住居015遺構が近接する。時期はやや本遺構が古いだろう。

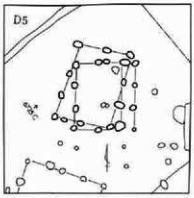


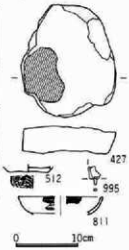


遺構写真 A 東西土層　B 遺物出土状態　C 竈付近遺物出土状態　D 貯蔵穴遺物出土状態　E 掘り上がり　F 竈土層　G 掘り方

1 古代 059遺構A（掘立柱建物）







位置　D5中央

重複　同一の建物059遺構Bより古い

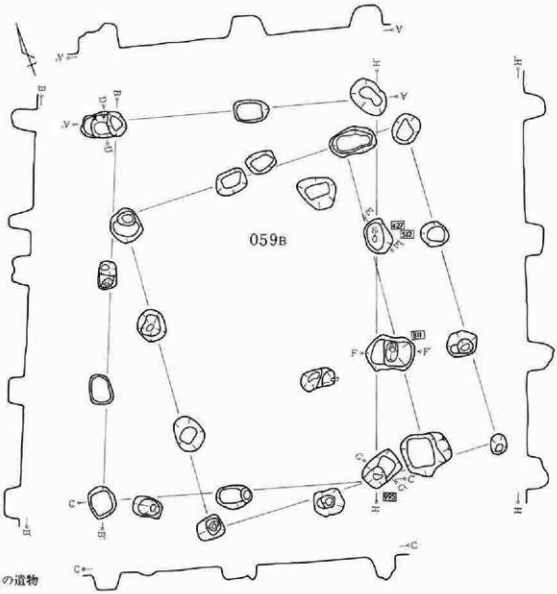
埋土　**1** 暗褐色粘質土　ローム粒塊混在　**2** 黄褐色粘質土　ローム塊多い　**3** 黒褐色粘質土　ローム粒僅か混じる

床面積　A34㎡　B46㎡

柱穴　柱間　A南北3間東西2間　東側に庇　B南北3間東西2間

柱間距離　A南北2.2～2.3m　東西2.4m　B南北2.7m　東西2.8～3.0m

1 古代 059遺構B（掘立柱建物）



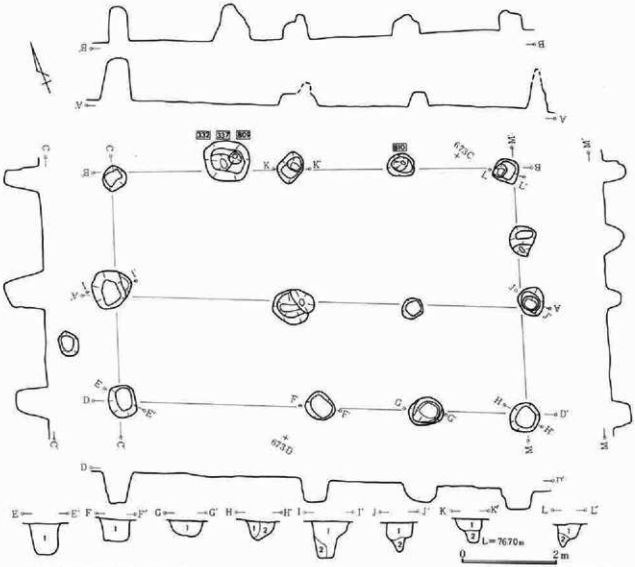
遺物　どちらの遺物になるかは判然としないが　図に示した各柱穴内から柱痕の残る測石（427）須恵器杯（512）土師器杯（811）鉄製品小片（995）が見られた　811は内外面にスス付着

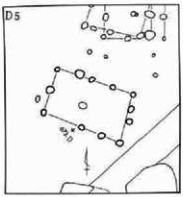
破片総数　不明だが微小と思われる

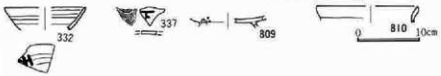
備考　当初このような重複が明確に捉えられず調査がやや混乱した。ABは規模・走向がやや異なるが、基本的には同一の施設の建て替えと考えられる。Bは南側の掘立060遺構と走向が同一。周辺にはまだピットがあり、この他にも建物があった可能性は残る。

遺構写真　A 059遺構B　B 059遺構A　共に北方向から

1 古代 060遺構（掘立柱建物）







位置 D5中央 **重複** 同一の建物059遺構Bより古い

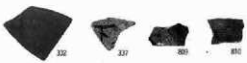
埋土 1 暗褐色粘質土 ローム粒塊混在 2 黄褐色粘質土 ローム塊多い

床面積 43㎡ **柱穴** 柱間 南北2間東西3間総柱 柱間距離 南北2.4～2.6m 東西は東側と西側の大きな差があり 東側2.2m西側3.9～4.1m

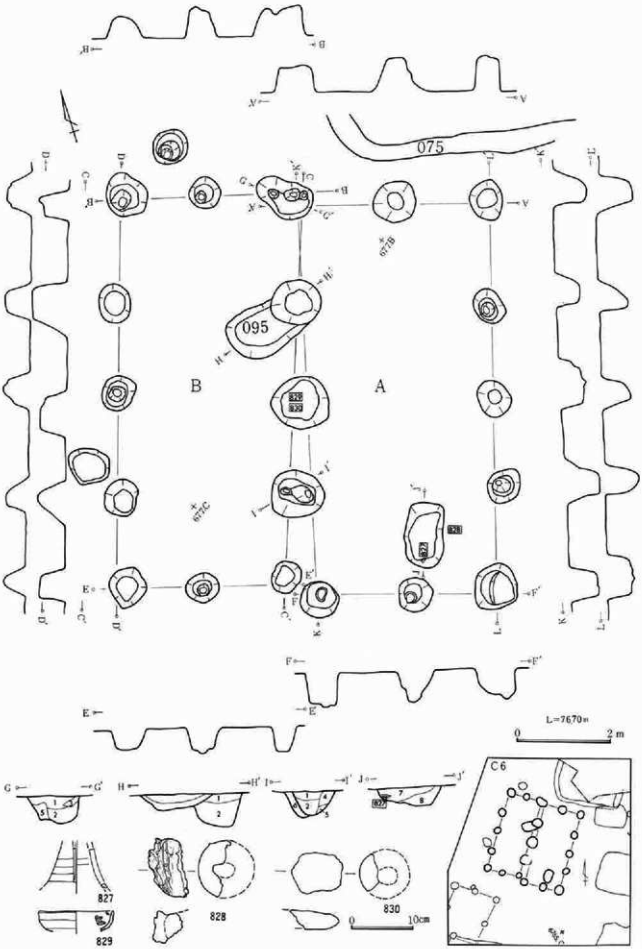
遺物 北辺の西から二番目の柱穴から須恵器杯墨書(332)酸化の同杯墨書(337) 須恵器椀（809） 北辺の東から二番目の柱穴から土師器甕（810） 332の墨書は「天」か 337の墨書は「下」 809は外面にスス付着 **破片総数** 不明だが微小と思われる

備考 3点の遺物の出土した柱穴は、中央辺と南辺との関係からはおかしな位置だが、北辺だけを見ると中央の柱穴を除いて3間の並びは整然として見える。どのような関係かは、不明。「下」墨書は、竪穴住居012遺構でも見られる。北側の059遺構Bと走向が同じ。

遺構写真 西方向から



1 古代 061遺構（掘立柱建物）



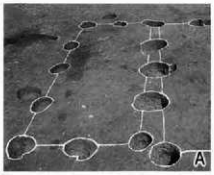
位置　C6北東　**重複**　土坑095遺構が柱穴を壊す　北で溝075遺構　東で竪穴住居025,053遺構　南西で掘立064遺構が近接　**埋土**　1 暗褐色粘質土　榛名FP軽石含む　2 1層よりしまり弱くローム粒混在　3 1層に焼土粒含む　4 褐色粘質土　5 暗褐色粘質土　ローム塊含む　6 2層よりローム塊さらに多い　7 黒褐色粘質土　8 暗褐色粘質土　焼土・ローム粒含む

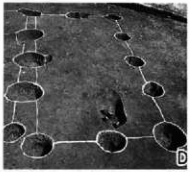
床面積　A32㎡　B30㎡　**柱穴**　柱間　A南北4間東西2間　B南北4間東西2間　柱間距離　A南北2.1～2.2m　東西側1.9～2.0m　B南北2.7m　東西1.8～1.9m

遺物　Aの内部南側の深さ40cmほどの長方形の掘り込みから土製輪羽口（828）鉄滓（996）と流入の須恵器高杯（827）　ABに共通する中央の柱穴から土師器杯（829）と土製輪羽口（830）　829は内面にスス付着　**破片総数**　土師器甕26 杯12　須恵器甕3　鉄滓1

備考　AB両者はほぼ同一規模でAが新しい。調査時には828の出土した掘り込みは単独の土坑としたが、830の出土などからA内部の小鍛冶施設との可能性が大きい。

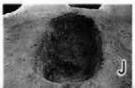
また東側竪穴では、廃棄後瓦が投棄されており、この遺構が瓦葺であった可能性が考えられる。2軒の竪穴が居住施設で、この掘立は鉄製品生産施設と思われる。南東側掘立064遺構も走向が似ている。



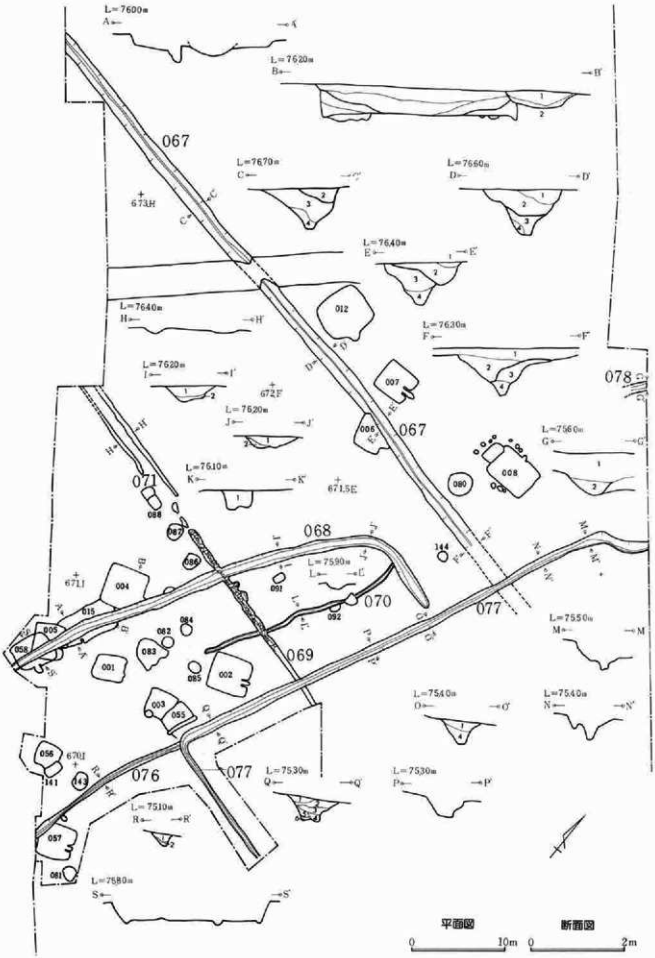


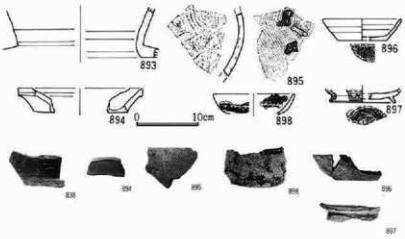
A 南方向からB部分
BC 重複柱穴土層
D 南方向からA部分
E 小鍛冶掘り込み土層

FGH 同遺物出土状態
IJK 同掘り上がり



067～071・076～078遺構(溝)





溝０６７遺構（古代）位置 C5南側～E4北側 **重複** 竪穴住居006遺構を壊す

走向 東西方向直線状 掘立059B,060・溝069,077・道路071の各遺構と平行

断面形 V字形 **埋土** 1 黒褐色砂質土 2 黒褐色砂質土 ローム塊多く含む 3 黒褐色粘質土 4 黒褐色粘質土 ローム塊多く含む

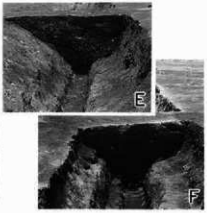
遺物 埋土中より須恵器壺（893,894）同甕（895）同杯（896）同椀（897）土師器杯（898）

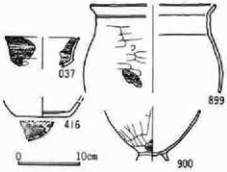
破片総数 不明 **遺構写真** A 西方向より B 東方向より C～F 各土層断面

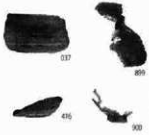
溝０６８遺構（古代）位置 D4～E4西側 **重複** 竪穴住居004,005,015,058遺構を壊す 溝069,070遺構と重複するが関係不明

走向 地形に沿うが北側で低地方向に向かう 溝076,077遺構と平行

断面形 U字形 **埋土** 1 暗褐色砂質土 浅間B軽石含む 2黄褐色砂質土 1層にローム粒多く含む







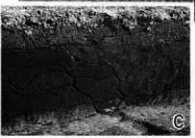
GH 屈曲部周辺土層断面

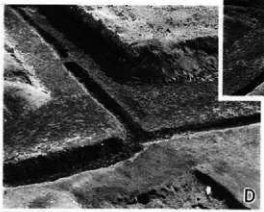
遺物　埋土中より酸化須恵器杯(416)土師器甕(899,900)
同杯（037）　899,900の外面と037の両面スス付着
破片総数　土師器甕223 杯44　須恵器杯12

溝069遺構（時期不明）　位置　D4中央　**重複**　溝068,070遺構と重複するか関係不明　**走向**　東西方向直線状　道路071と同一線上で溝067,077と平行　**断面形**　不均一に底に穴が多くあいている

備考　地境植生痕と思われる。

溝070遺構（時期不明）　位置　D4東側　**重複**　溝068,069遺構土坑092遺構と重複するか関係不明　**走向**　地形に沿ってやや蛇行　**断面形**　U字形





道路071遺構（時期不明）　位置　D4西側　**重複**　なし　**走向**　東西方向直線状　溝069遺構と同一線上で溝067,077遺構と平行

断面形　1ｍの路面幅をはさんで平行する2本の幅40cmほどの側溝が走る

備考　調査時には2本の溝として認識。路面は確認せず。土地改良前の地境と一致。

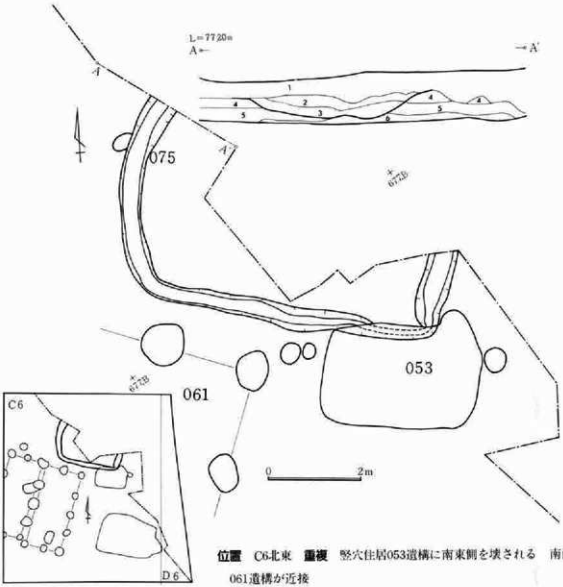
溝076遺構（時期不明）　位置　D3D4　**重複**　竪穴住居057を壊す溝077とは同一か　**走向**　地形に沿う　**断面形**　V字形　**埋土**　1 暗褐色砂質土　2 1層にローム塊含む

溝077遺構（時期不明）　位置　D4E4　**重複**　溝067,069と重複するか関係不明　**走向**　地形に沿って走るが 溝076と接して直角に低地に向かう　**断面形**　V字形　2条以上の掘り込みがある　**埋土**　1 暗褐色砂質土　2 1層に炭化物含む　3 2層にローム粒含む　4 2層にローム塊多い　5 暗褐色粘質土　6 5層にローム塊含む

溝078遺構（時期不明）　位置　E5　**重複**　不明　**走向**　地形に沿うか　**断面形**　U字形　**埋土**　1 耕作土　2 暗褐色砂質土

A 068,069遺構交点
B～H 076,077遺構走向と土層

時期不明　０７５遺構（溝）



位置　C6北東　**重複**　竪穴住居053遺構に南東側を壊される　南西側で掘立061遺構が近接

走向　東西6m南北4m以上の方形状に巡り囲む　周辺の掘立・竪穴と東西方向の走向が平行に近い

埋土　**1** 耕作土　**2** 黒色砂質土　B軽石混じる　**3** 黒褐色砂質土　B軽石混じる　**4** 暗褐色粘質土　FP軽石混じる　**5** 4層より暗色　**6** 暗褐色粘質土　ローム粒混在

断面形　U字形

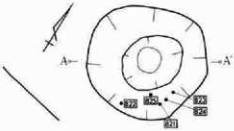
備考　平面的には底の一部を確認したに過ぎない。そのためこの遺構の大きな特徴である方形の走向内の面積は、図に示したものより狭くなる。当然内部空間を区切るための溝だが、大部分が調査範囲外になるため、その性格は不明である。ただ近接しているが、掘立061遺構など周辺の遺構と走向が近いことは、注意する必要がある。時期は古代の可能性がある。

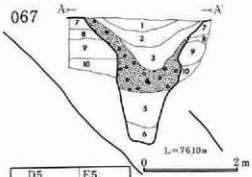
遺構写真

A　南方向からの掘り上がり　手前側の部分は掘りすぎ

B　土層堆積状態

080・081遺構（井戸）





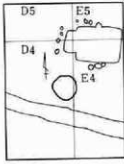
080遺構（古代） **位置** D4北東 **重複** なし 竪穴住居008と溝067が近接 **埋土** **1** 黒色粘質土 砂含む **2** 黒褐色粘質土 FP軽石含む **3** 2層より黒色 **4** 2層にローム粒を多く含む **5** 黒色粘質土 **6** 5層にローム粒混じる 遺物含む **7** 暗褐色粘質土 ローム暫移層 **8** 黄褐色粘質土 YP軽石含む **9** 黄褐色粘質土 砂粒含む **10** 暗黄褐色粘質土 暗色帯

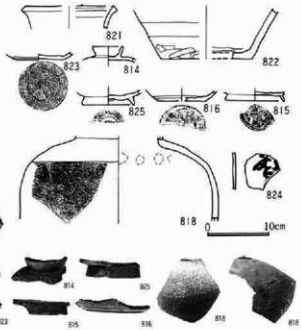
平面形 円形 **断面形** 朝顔状に上面が開く

遺物 6層中から須恵器甕（818）蓋（814）椀（815）杯（816） 1層から4層中で須恵器甕（822）瓶（821）椀（825）杯（823）土師器墨書杯（824）

破片総数 土師器甕4 杯9 須恵器甕1

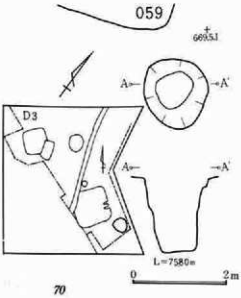
備考 湧水層は断面の彩状より10層の下と思われる。位置的に近い竪穴住居008遺構とは時期が異なる。





A 掘り上がり

B 上層断面



081遺構（時期不明）

位置 D3東側 **重複** なし 竪穴住居057遺構が近接

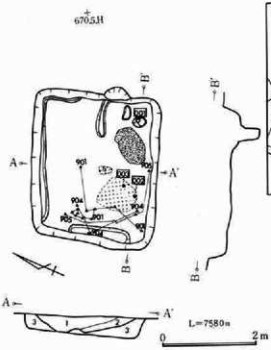
埋土 記録漏れのため不明

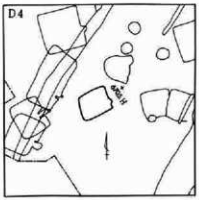
平面形 楕円形 **断面形** 筒状

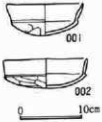
備考 この遺構を井戸と断定するのはやや根拠が少ないが、筒状の断面の土坑は他にないため、一応井戸と想定する。竪穴住居057遺構は位置的に近すぎるので時期が異なるだろう。

遺構写真 **C** 掘り上がり

2 古墳時代　００１遺構（竪穴住居）







位置　D4南側

重複　なし　土坑083遺構が近接

埋土　1 暗褐色粘質土　ローム粒混じる　2 黒褐色粘質土　FP軽石含む　3 暗黄褐色粘質土　ローム粒主体

床面積　6 ㎡　竈右前に炭化粒が散り　その上にローム塊が乗っていた

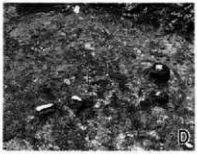
竈　東壁南より

柱穴など　南東角に深さ50cmのピットがあるが　位置的には貯蔵穴と思われる　掘り方調査で中央に深さ25cmのピットが見られた　柱穴の可能性がある

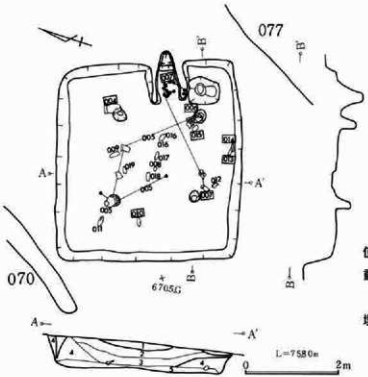
遺物　南西側の図示した範囲で　滑石玉類（901,904,905）がある　貯蔵穴内より土師器杯（001）南西側床近くで同杯（002,003）出土

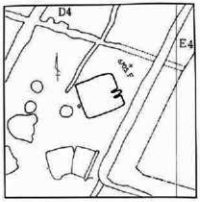
破片総数　土師器甕34 杯46 須恵器杯7 蓋1

遺構写真　A 南北土層　B 東西土層　C 竈土層　DE 遺物検出状態　F 竈掘り上がり　G 掘り上がり　H 掘り方



2 古墳時代　００２遺構（竪穴住居）

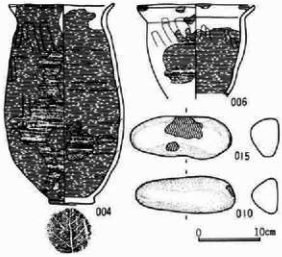




位置　D4南東側

重複　なし　溝070,077遺構と土坑085遺構が近接

埋土　1 暗褐色砂質土　B軽石混じる　2 暗褐色粘質土　FP軽石含む　3 2層より暗色　4 暗褐色粘質土　茶褐色土塊混在　5 褐色粘質土　上面は平坦で新しい時期の貼り床層



床面積　12㎡　床面は5層の上で2面ある

竈　東壁南より

柱穴など　ほぼ等間隔に近い位置で下の床面より30cmの深さのものが見られるが　新しい床面の時には埋められている　竈右には深さ50cmの貯蔵穴がある

遺物　竈内から南西に散って土師器甕（007）　北東柱穴側で同甕（004）　南東柱穴上で同小形甑（006）と円筒形自然石（015）　南壁際から円筒形自然石（013,014）また西壁側でも円筒形自然石（010）が出土　004は内外面ススと炭化有機物付着　006は外面ススと炭化有機物内面に炭化有機物付着　010と015には図示した位置に平滑面がある

破片総数　土師器甕69 杯5

遺構写真　A 東西土層　B 南北土層　C～N 遺物検出状態　O 貯蔵穴掘り上がり　P 掘り方　Q～T 竈炭化材出土状態と掘り上がり　U 掘り上がり（十字形は上の床面の一部）

A

B

C

D

E

H

L

F

I

G

J

M

N

K

P

O

Q

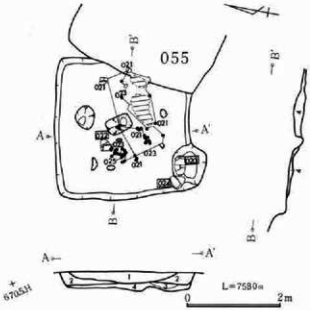
R

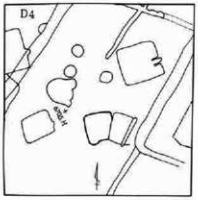
S

T

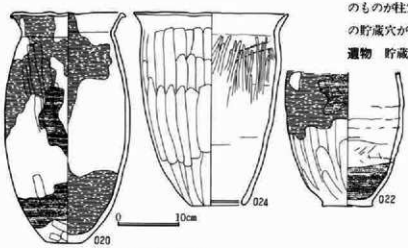
U

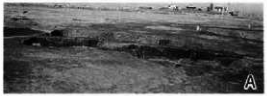
2 古墳時代 003遺構（竪穴住居）





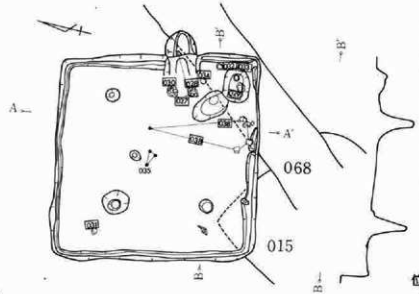
位置 D4南東側
重複 東側で竪穴住居055遺構に壊される
埋土 1 暗褐色砂質土 FI軽石含む 2 1層にローム粒多く含む 3 黄褐色粘質土 ローム粒含む 4 3層よりローム粒多い
床面積 7㎡ 床面は3,4層の上面 中央東側で粘土散布 **竈** 粘土が竈の痕跡と思われる東壁南よりの位置になる **柱穴など** 中央の床面より25cmの深さのものが柱穴であろう 南西角には張り出して深さ30cmの貯蔵穴がある 北側のピットは15cmの深さ
遺物 貯蔵穴から土師器甕（020）同大形甑（024）中央柱穴側で同甕（022）が出土020は内外面炭化有機物と外面スス付着022は内外面ススと外面炭化有機物付着
破片総数 土師器甕45 杯14
遺構写真 A 東西土層 BDEI 遺物検出状態 C 南北土層 FGHKL竈粘土 M 掘り上がり N 掘り方

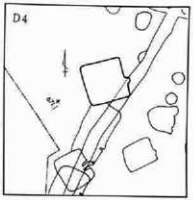




2 古墳時代　００４遺構（竪穴住居）

2 古墳時代　004遺構（竪穴住居）





位置　D4南側

重複　東側で溝068遺構に南側で竪穴住居015遺構に壊される

埋土　1 暗褐色砂質土　FP軽石含む　2 1層にローム粒と黒色土塊多く含む　3 暗黄褐色粘質土　ローム塊主体　4 黒色粘質土　炭化粒含む　5 暗黄褐色粘質土　ローム粒主体　6 黄色粘質土　ローム塊主体

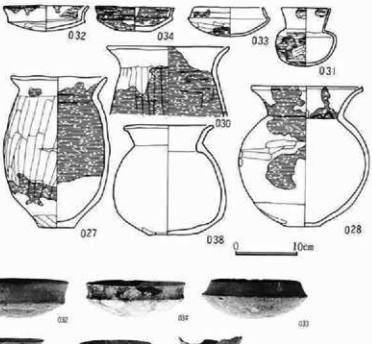
床面積　14㎡　均一な状態で重複遺構も掘り方が浅いため検出は良好

竈　東壁南より

柱穴など　ほぼ等間隔の位置で70cmの深さのものが4個並ぶ　中央北よりのものは深さ25cmと浅い　南東角の貯蔵穴は深さ30cm

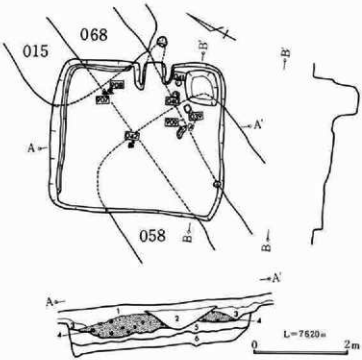
遺物　竈の袖の芯として土師器甕（027,030）同壺（028）が使われる　竈右から貯蔵穴側で同甕（029）同杯（032,033,034）が出土　南壁際からやや散って同壺（038）　北東角で内面にベンガラが残る同小形精製壺（031）が出土　廃棄後に焼けた038以外全てに炭化有機物が付着

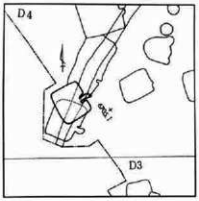
破片総数　土師器甕131 杯172　須恵器甕4 杯2 灰釉陶器5



遺構写真　A 東西土層　B 南北土層　C～F 遺物検出状態　G 掘り上がり　H 掘り方

2 古墳時代 005遺構（竪穴住居）

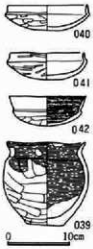




位置 D4南側

重複 東側で溝068遺構に北側で竪穴住居015遺構に南側で同058遺構に壊される

埋土 1 耕作土 2 黒褐色砂質土 B軽石含む 3 暗黄褐色粘質土 4 3層にローム塊含む 5 暗褐色粘質土 ローム・焼土粒混じる 6 黄褐色粘質土 ローム塊混在



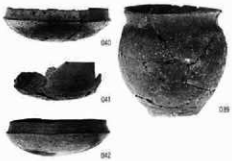
床面積 9 m² 均一な状態で重複遺構も掘り方が浅いため検出は良好

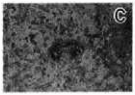
竈 東壁南より

柱穴など 不明 中央南よりと南西角近くに10cmの深さの小ピットがあるが柱穴とは考えられない 南東角に深さ55cmの貯蔵穴がある

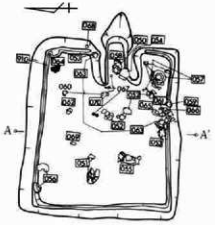
遺物 竈の左と右で滑石玉類（907,908,909） 貯蔵穴付近で土師器杯（040,041）と同小形甕（039） 中央で同杯（042）が出土 042は内面全面炭化 039は内外面に炭化有機物が付着 **破片総数** 土師器甕27 杯97

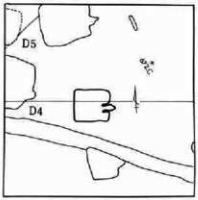
遺構写真 A 南北土層 BEF 竈土層と遺物検出状態 C 玉類出土状態 D 掘り上がり G掘り方





2 古墳時代 007遺構（竪穴住居）





位置 D4 D5 境界

重複 なし　南側で溝067遺構に近接

埋土 1 暗褐色粘質土　FP軽石含む　2 暗黄褐色粘質土　ローム粒多く含む　3 黄褐色粘質土　ローム塊主体　4 黒色粘質土　有機物痕　5 暗褐色粘質土　6 黄褐色粘質土　ローム粒主体

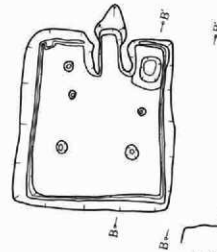
床面積 9㎡　**竈** 東壁中央

柱穴など 20～50cmの深さの柱穴が5個検出北側及び南側中央のものは浅い　南東角に深さ60cmの貯蔵穴がある

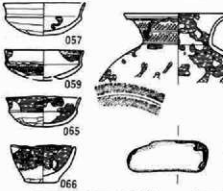
遺物 竈内に設置していたような状態で土師器甕（050）とその下に同杯（058）そしてそこに棚などから落ちた状態で同小形甕（054）貯蔵穴内とやや散って同壺（052）と同杯（057）　南壁中央に固まって同甕（053）同杯（059,061,066）同小形組製土器（066）またそこから散って同杯（063）　南東側で同大形甑（055）　西壁中央で同甕（051）北西角で須恵器壺（056）北壁中央で土師器杯（062）円筒形自然石（069,070）　北東角で土師器杯（064）と土製玉（910）が出土　ほとんど全ての内外面に炭化有機物とススが付着　055の内面下位に有機物が残る

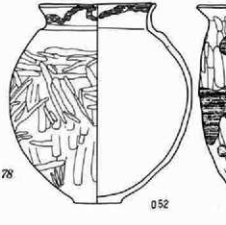
破片総数 土師器甕86 杯86 須恵器甕5 杯9

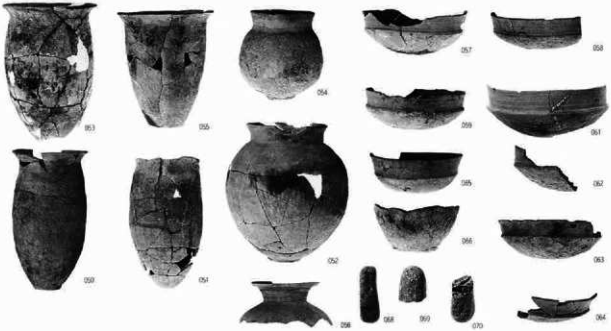
遺構写真 A 南北土層　B 東西土層　C～HJK 遺物検出状態　I 掘り上がり



備考 この竪穴は、遺物が極めて多く検出されており、同一の器形が複数あることや一般に少ない大形甑を持つなど、特別の保管施設であったと思われる。






053
055
054
057
058
059
061
050
051
052
065
062
066
063
056
068
069
070
064

A

B

C

E

D

F

G

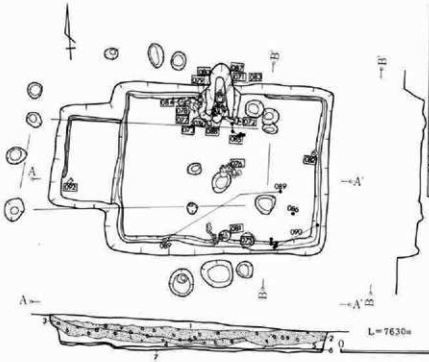
H

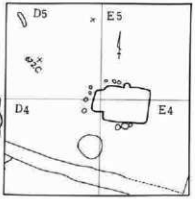
I

J

K

2 古墳時代 008遺構（竪穴住居）





位置 D4D5E4E5境界

重複 なし 井戸080遺構近接

埋土 1 黒褐色砂質土 FP軽石含む 2 茶褐色砂質土 ローム炭化焼土粒多い 3 2層よりローム塊多い 4 茶褐色粘質土 ローム粒含む 5 4層よりローム粒多い 6 ローム粒主体 7 6層よりローム多い

床面積 14㎡ 7層が地山か埋土かは不明 西側張り出しは5cm高い

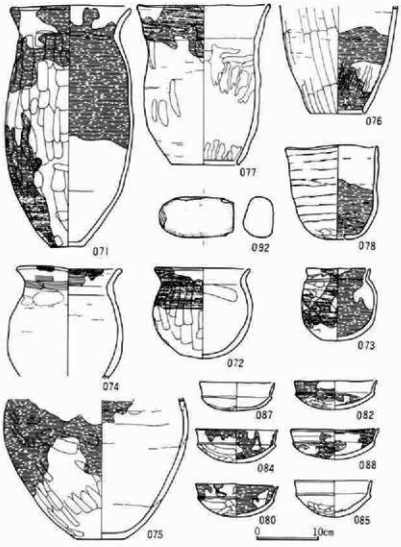
竈 北壁中央

柱穴など 内部のピットは10～25cmの深さが大半で南壁東側のものだけが40cmである 外側にも10～30cmのピットが大小10個あるが全てが関係するかは不明 図の位置で平行している

遺物 竈設置の状態で土師器甕 (071) その下に同小形甕 (073,074) 杯 (080,085,087,088) 竈左で同大形甑 (077) 小形甑 (078) 杯 (079,084) 竈右袖芯として同小形甕 (072) 中央で同大形甑(076) 東壁際で同杯(082) 南壁際で同壺(075) 杯(081) 西張り出しで円筒形自然石 (092) が出土 ほとんど全てに炭化有機物とスス付着 092には摩耗痕が図の位置にある

破片総数 土師器甕146 杯17 須恵器甕1

遺構写真 AB 東西土層 C 南北土層 D～P 遺物検出状態 QS 掘り上がり R 掘り方



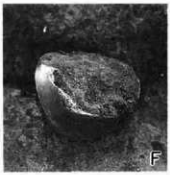
A

B

C

D

E


F

G

H

I

P

J

K

L

Q

O

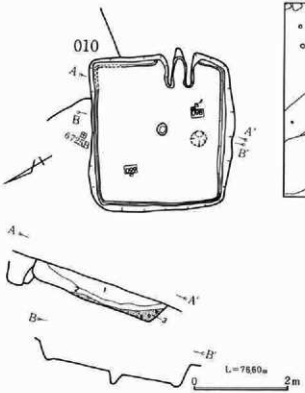
M

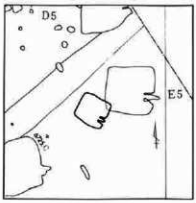
N

R

S

2 古墳時代 009遺構（竪穴住居）





位置 D5東側

重複 東で竪穴010遺構を壊す

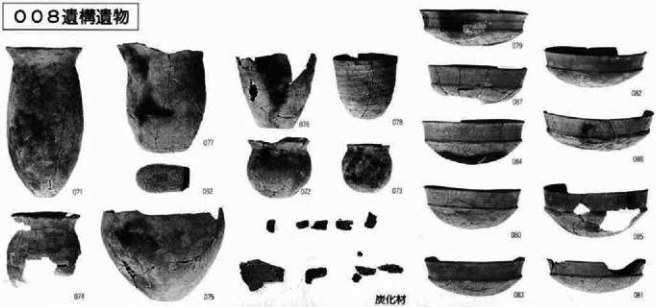
埋土 1 黒褐色砂質土　FP軽石含む　2 暗黄褐色粘質土　ローム粒多い　3 黄褐色粘質土　ローム塊主体

床面積 8㎡　**竈** 東南壁南より　**柱穴など** 中央のピットは20cmの深さ　南よりは掘り方で50cm

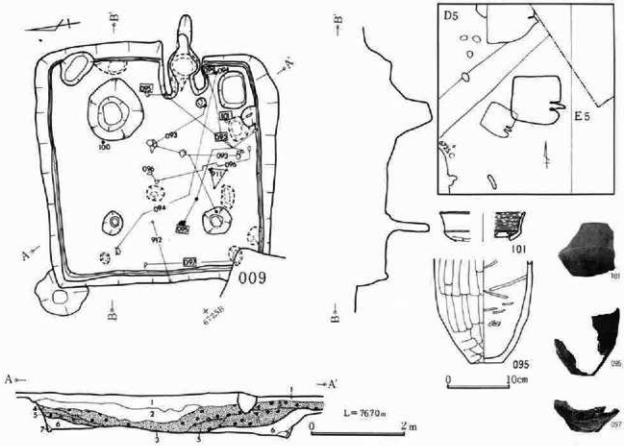
遺物 図の位置で土師器杯（098,099）　いづれも炭化有機物付着　**破片総数** 010遺構と分けられず

遺構写真 A 南北土層　B 東西土層　C～E 掘り上がり　F 掘り方

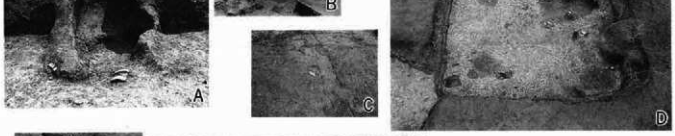
008遺構遺物



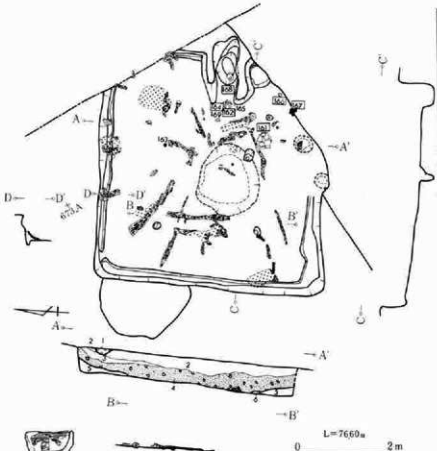
2 古墳時代　０１０遺構（竪穴住居）

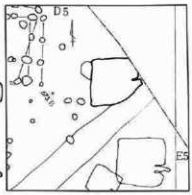


位置　D5東側　**重複**　南西で竪穴009遺構に壊される　**埋土**　1 耕作土　2 暗褐色粘質土　3 2層にローム塊多く含む　4 3層に有機物含む　5 ローム塊主体　6 黒褐色粘質土　炭化粒含む　7 暗褐色粘質土　ローム粒含む　**床面積**　19㎡　**竈**　東壁南より　**柱穴など**　等間隔位置で４個　北東と南西は上面が広く深さ90cm　南東の竈前のは浅く30cm　南東角の貯蔵穴も深さ90cm　掘り方でも30～50cmのピットが７個見られた　**遺物**　竈から散って土師器甕（095）　西壁際で同甕（097）　貯蔵穴側で同杯（101）出土　011内面炭化有機物付着　**破片総数**　009遺構との合計　土師器甕135 杯173 須恵器甕1 杯20　粘土塊一括　陶器1　**遺構写真**　A 竈掘り上がり　B 土層　CD 遺物検出状態　E 竈土層　F 掘り上がり　G 掘り方



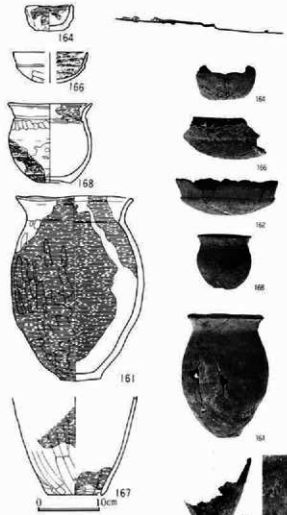
2 古墳時代 014遺構（竪穴住居）





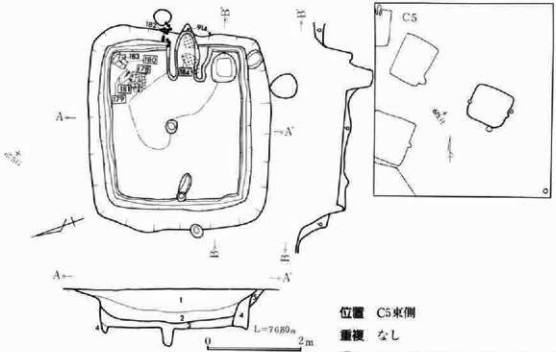
位置 D5東側 **重複** 南東側攪乱 **埋土** 1 黒褐色砂質土 浅間B軽石主体 2 黒褐色砂質土 FP軽石焼土粒を含む 3 暗褐色粘質土 ローム粒多い 4 暗黄褐色粘質土 ローム塊主体 5 暗褐色粘質土 炭化粒含む **床面積** 11m² 炭化材と焼土が良く残っていた

竈 東壁中央 **柱穴など** 等間隔位置で深さ30～50cmの柱穴が4個と中央やや南東側に1個 径は10～15cmと細いが炭化材の大きさに合う 掘り方でも60～100cmのピット2個と中央の土坑が見られた **遺物** 竈内に土師器小形甕(168) 杯(162) 小形組製土器(164) 南東側で同大形甑(167) 杯(166) 竈右前に同甕(161) 出土 166内面は全面炭化 他も多く内外面炭化有機物付着 **破片総数** 土師器甕50 杯134 須恵器甕1 杯14 粘土塊一括 **遺構写真** A 東西土層 B 南北土層 CD 炭化材検出状態 EH 遺物検出状態 F 掘り上がり GI 竈 JKL 掘り方



2 古墳時代 016遺構（竪穴住居）

2 古墳時代 016遺構（竪穴住居）



位置 C5東側

重複 なし

埋土 1 黒褐色砂質土 FP軽石含む 2 暗褐色砂質土 3 暗褐色粘質土 ローム粒多い 4 暗褐色粘質土 ローム粒含む 5 褐色粘質土 ローム粒混じる

床面積 9 m² 壁上は広がる 竈前硬い

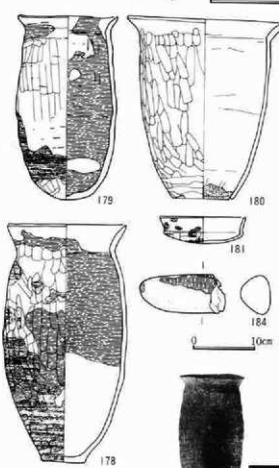
竈 東壁中央

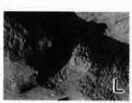
柱穴など 中央は深さ50cm 西壁際に細いが70cmのピットがある ピット4個あるが関係不明

遺物 竈内で円筒形自然石（184） 竈左角で土師器甕（178,179）大形甑（180）杯（181）が出土 180は内面下位に有機物付着 他も外面にススと炭化有機物 甕は内面に炭化有機物付着

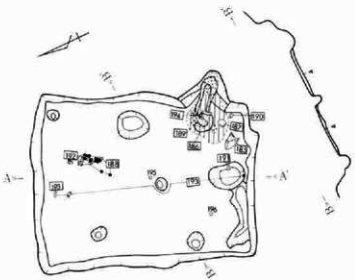
破片総数 土師器甕138 杯103

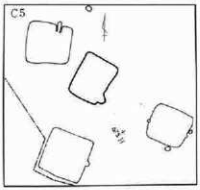
遺構写真 A 南北土層 B 東西土層 C～J 遺物検出状態 K 掘り上がり（以上85頁） L 竈 M 掘り方

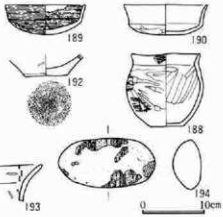


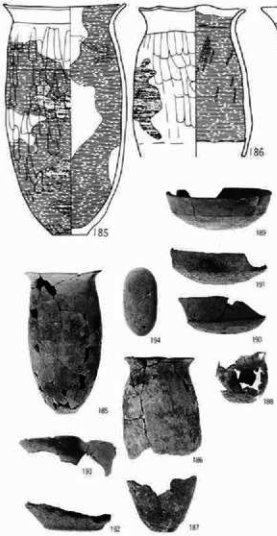


2 古墳時代　017遺構（竪穴住居）









位置　C5北側

重複　なし　西側に竪穴住居018遺構が近接

埋土　1 黒褐色砂質土　FP軽石含む　2 褐色粘質土　炭化焼土粒混じる　3 暗褐色粘質土　炭化焼土ローム粒混じる　4 黄褐色粘質土　ローム粒含む

床面積　14㎡　竈前に粘土散る

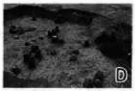
竈　東壁南より

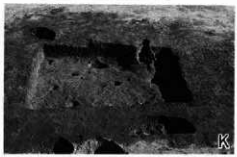
柱穴など　中央は深さ20㎝　他の大小5個のピットは10～15㎝と浅い　柱穴は中央のもののみだろう

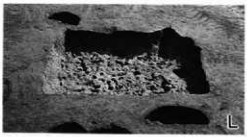
遺物　竈内で土師器甕（186）杯（189）円筒形自然石（194）竈左前で同甕（185,187）杯（190,191）　北側で同小形甕（188）壺（192）　南北に散って同大形甑（193）が出土　188と194にスス付着　194には摩耗痕が片側端にある　甕は内面に炭化有機物外面にススが共通　189は内外面炭化有機物付着

破片総数　土師器甕240 杯127

遺構写真　A 東西土層　B 南北土層　C～H 遺物検出状態　IJMN 竈　K 掘り上がり　L 掘り方

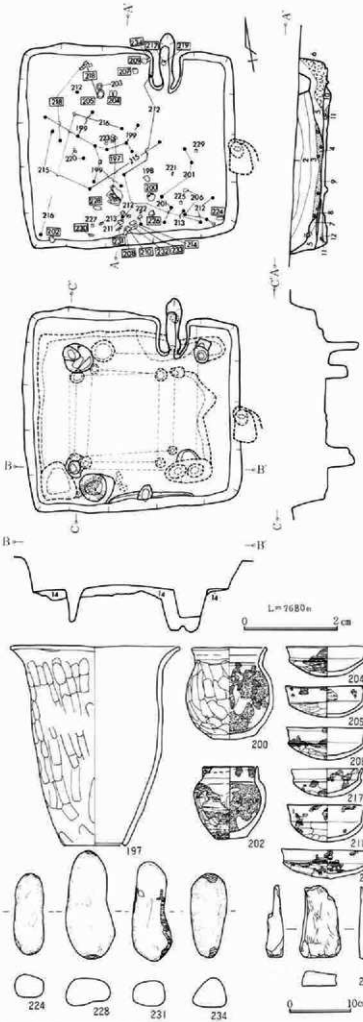


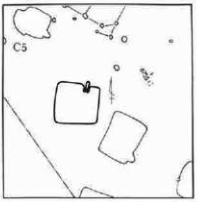




2 古墳時代 018遺構（竪穴住居）

2 古墳時代　０１８遺構（竪穴住居）





位置　C5北側

重複　なし　東側竪穴住居017遺構が近接

埋土　1 黒褐色砂質土　FP軽石含む　2 暗褐色砂質土　FP軽石含む　3 褐色粘質土　4 3層にローム塊含む　5 褐色粘質土　6 5層に粘土混在　7 黄褐色粘土　8褐色粘質土ローム粒含み硬い　9 8層と同質　10 9層より軟質　11 ローム塊　12 暗褐色粘質土　ローム塊含む

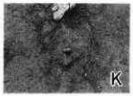
床面積　15㎡　8,9,12の各層の上面が３次の建替えの各床面　第３次は拡大南東側に炭化材痕残る　**竈**　北壁東より

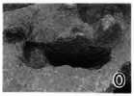
柱穴など　図示したように３次以上の建替えの柱穴がそれぞれ検出された　最後の床からの深さ60～80cmを測る　最後には北と東方向に拡大　東側壁外にも50cmのピットがある

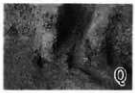
遺物　各時期のものが混在　竈内で土師器杯(217,219)　竈左側で同杯（207,209）円筒形自然石(234)　北西側で同杯(204,205,218)中央でやや散り同大形甕(197)　南壁際で同小形甕(200,202)杯(208,210,214,218)砥石(226)円筒形自然石(224,228,230～233)が出土　円筒形自然石は先端に摩耗痕　小形甕内面に有機物外面にススは内外面にスス付着

破片総数　土師器甕323　杯481　粘土塊

遺構写真　A 東西土層　B 南北土層（以上前頁）　C～M 遺物検出状態　MPQ 竈　Oピット土層　R 掘り上がり　S～V 掘り方と土層・遺物検出状態

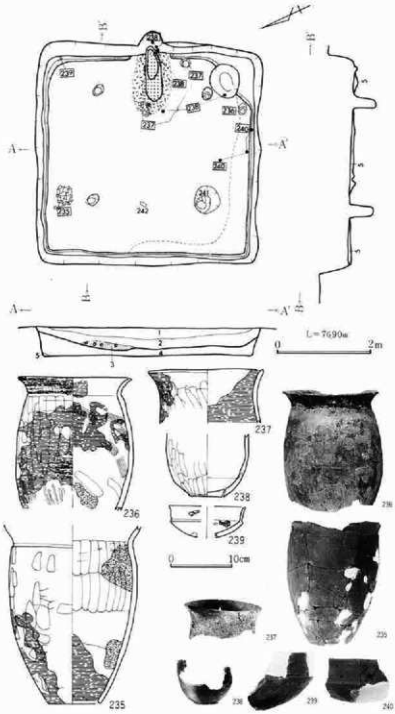


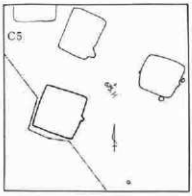




2 古墳時代 019遺構（竪穴住居）

2 古墳時代　０１９遺構（竪穴住居）





位置　C5中央　**重複**　なし

埋土　1 黒褐色粘質土　FP軽石含む　2 暗褐色粘質土　FP軽石含む　3 2層にローム塊含む　4 褐色粘質土　ローム塊含む　5 ローム塊含む貼り床

床面積　18㎡　南西側壁際を除いて硬い

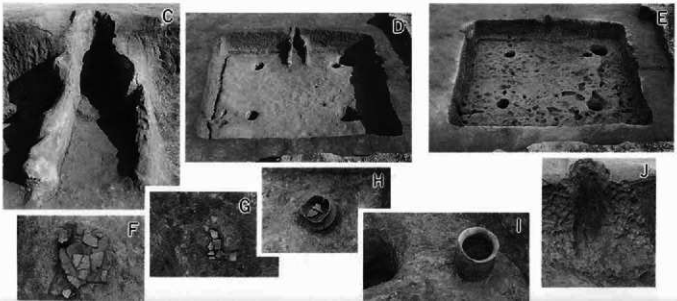
竈　東壁中央　粘土と炭化物が散乱

柱穴など　等間隔の位置の４個の柱穴で深さ50～60cmを測る　南東角の貯蔵穴も同じ深さ

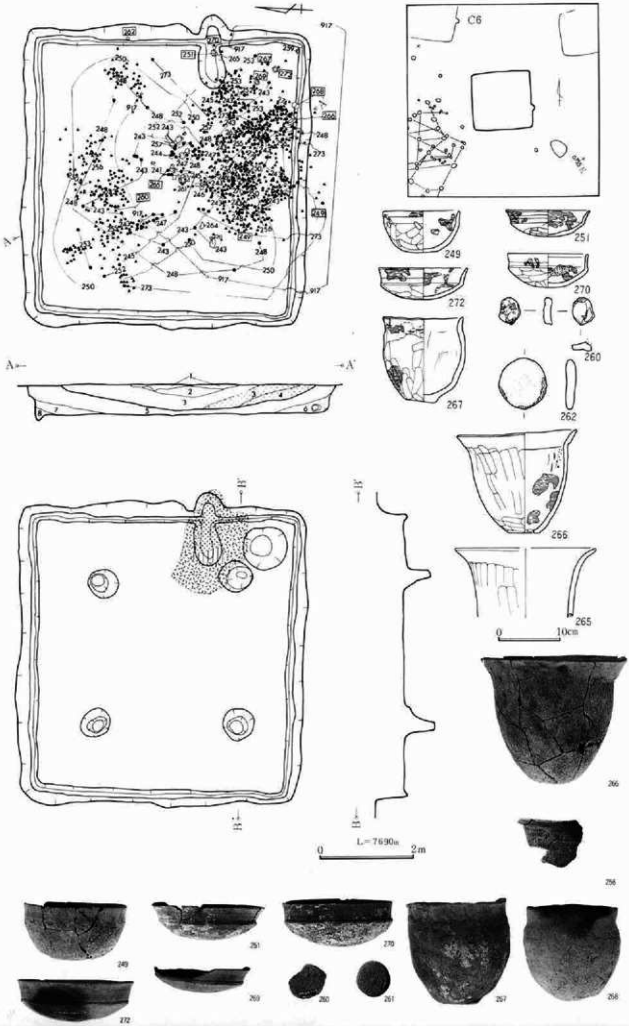
遺物　竈から右にやや散って焼成前に細い孔があいた土師器小形甕(238)甑(237)　南壁東側で同甕（236）杯（240）　北壁西側で同大形甑（235）同杯（239）が出土　甕甑は内面に有機物と炭化有機物外面にススと炭化有機物付着　杯は内外面にスス付着

破片総数　土師器甕78 杯31

遺構写真　A 東西土層　B 南北土層（以上前頁）　C 竈　D 掘り上がり　EJ 掘り方　F～I 遺物検出状態



2 古墳時代 020遺構（竪穴住居）



位置 C6南側

重複 なし　西側にピット群066遺構近接

埋土 1 黒褐色砂質土　B軽石含む　2 黒褐色粘質土　3 黒褐色粘質土　FP軽石混じり南側に大量の滑石チップ含む　4 暗褐色粘質土　大量の滑石チップ含む　5 褐色粘質土　6 黄褐色粘質土　ローム粒含む　7 暗褐色粘質土　黒褐色土混在　8 7層にローム粒含む

床面積 29㎡　**竈** 東壁南より　粘土が散乱

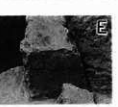
柱穴など 等間隔の位置の4個の柱穴で深さ50～70㎝を測る　南東角の貯蔵穴は80㎝の深さ

遺物 南側から大量の滑石チップ（▲）が投棄されている　竈内で土師器杯（251,270）貯蔵穴付近で同小形甑（266）小形甕（267,268）杯（269,272）　中央で同大形甑（265）把手状土製品（260）やや散って同椀（249）東壁際で円盤形自然石（262）が出土　多くが内外面に炭化有機物付着　262は端に摩耗痕

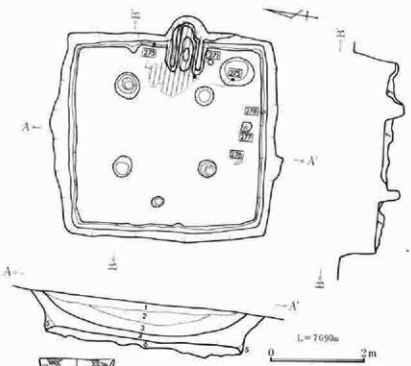
破片総数 土師器甕705 杯419　須恵器杯4　蓋1　不明土製品2

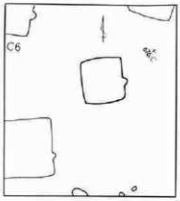
備考 この竪穴住居は面積が大きく遺物総量は多いが、大半は滑石チップを含めた投棄遺物である。

遺構写真 A 東西土層　B 南北土層　C～F チップ投棄状態　G～L 遺物検出状態　MOP 竈　N 掘り上がり　QR 貯蔵穴



2 古墳時代 021遺構（竪穴住居）





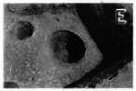
位置 C6南東側 **重複** なし

埋土 1 黒褐色砂質土 B軽石含む 2 黒褐色粘質土 3 暗褐色粘質土 FP軽石混じる 4 褐色粘質土 ローム粒含む 5 黄褐色粘質土 ローム粒含む 6 5層よりローム塊多い

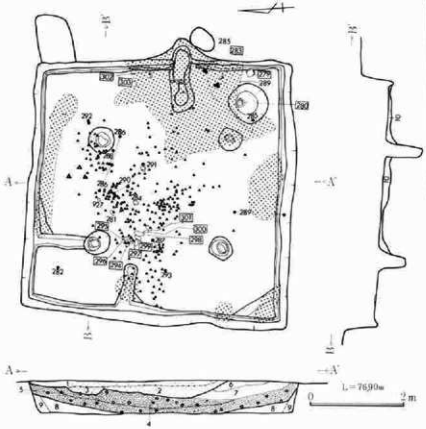
床面積 14㎡ 6層上面が床だがあまり硬化せず 壁上部は広がる **竈** 東壁南より 地山掘り残し 全体に灰が散乱

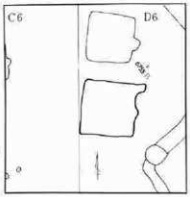
柱穴など 等間隔の位置の4個の柱穴で深さ50～60cm 南壁際に20cmのピットがある 南東角の貯蔵穴は80cmの深さ

遺物 竈右で土師器杯（271） 両側に散って同杯（275） 南壁際で円筒形自然石（276～278） 潜石チップは1点のみ 竈左の生活面で出土 杯は炭化有機物とスス付着 自然石には端に摩耗痕 **破片総数** 土師器甕67 杯33 須恵器杯3 蓋1 灰釉陶器1 **遺構写真** A 南北土層 B 東西土層 CD 遺物検出状態 E 貯蔵穴 FH 掘り方 G 掘り上がり



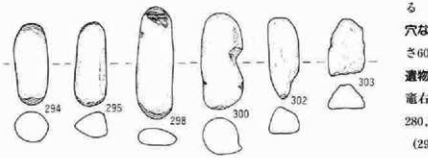
2 古墳時代 022遺構（竪穴住居）

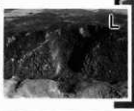


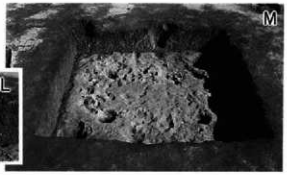


位置 D6西側　**重複** 北東角で未命名土坑と重複　**埋土** 1 黒褐色粘質土　FP軽石と滑石チップ含む　2 褐色粘質土　滑石チップ多く含む　3 黒褐色粘質土　滑石チップとローム粒含む　4 黄褐色粘質土　ローム粒含む　5 4層よりローム塊多い　6 黄褐色粘質土　ローム粒含む　7 黒褐色粘質土　8 褐色粘質土　ローム粒含む　9 8層よりローム粒多い　10 ローム粒含む貼り床　**床面積** 25㎡　周縁に焼土散乱　北西角に間仕切り溝がある　**竈** 東壁　中央炭化材残る　**柱穴など** 等間隔の位置の4個の柱穴で深さ60～80cm　南東角の貯蔵穴は80cm

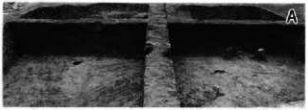
遺物 西側から滑石チップ（▲）が投棄　竈右から貯蔵穴にかけ土師器甕（279，280，283）　北西柱穴近くで円筒形自然石（294～301）　竈左で同（302，303）が出土　甕は炭化有機物とスス付着　自然石には端に摩耗痕　**破片総数** 土師器甕166 杯142　須恵器 杯5　**遺構写真** A 東西土層　B 南北土層　CDI 遺物検出状態　E 掘り上がり　F 貯蔵穴　G 炭化材　HJK 竈　LM 掘り方



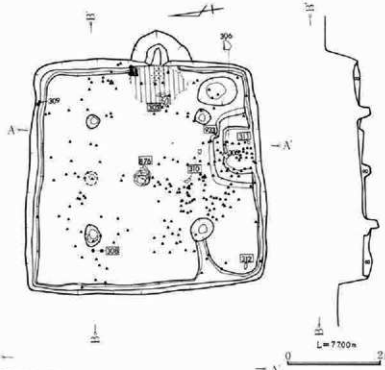


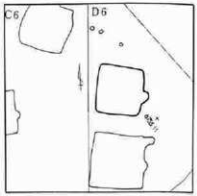


2 古墳時代 023遺構（竪穴住居）



2 古墳時代 023遺構（竪穴住居）





位置 D6西側

重複 なし

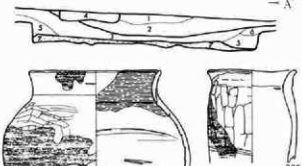
埋土 1 黒褐色砂質土 B軽石含む 2 暗褐色粘質土 FP軽石含む 3 暗黄褐色粘質土 ローム粒多く含む 4 撹乱 5 3層より粘性強い 6 3層よりローム粒多い 7 明黄褐色粘質土 ローム粒が主体で滑石チップ含む 8 貼り床

床面積 18㎡ 南西角に間仕切り溝がある 床は7層上面

竈 東壁中央 灰が散る

柱穴など 等間隔の位置の4個そして北側中央掘り方で1個の柱穴で深さ20～50cm 南東角の貯蔵穴は50cm 南壁北よりに中央がくぼみ周囲が土堤上に少し高まった特殊ピットがある

遺物 特殊ピットを中心に全体に滑石チップ（▲）が床とその下から出土 竈前で土師器小形甕(305) 特殊ピット周辺で須恵器杯（310）土製丸玉（933）円筒形自然石（311） 中央で土師器壺（876） 北西で同杯（308） 南西で円筒形自然石（312）が出土 壺甕は内面炭化有機物と外面スス 308内面炭化有機物付着 自然石には端に摩耗痕

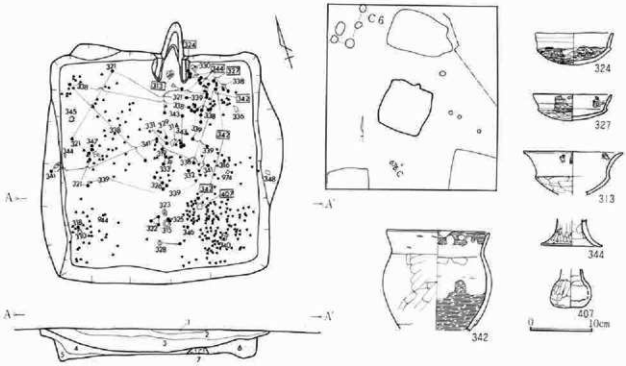


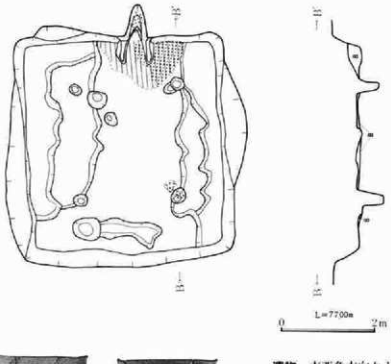
破片総数 土師器甕184 杯141 須恵器甕1 杯3

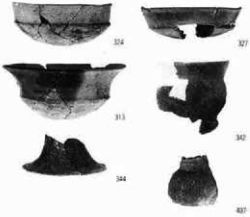
備考 滑石チップの出土状態は他の遺構と異なっており、特殊ピットの存在と併せて玉類製作竪穴と考えられる。

遺構写真 A 南北土層 B 東西土層 C～N 遺物検出状態 O 竈（以上前頁） P 特殊ピット Q 掘り上がり

2 古墳時代 024遺構（竪穴住居）







位置 C6東側

重複 なし

埋土 1 黒褐色砂質土 B軽石含む 2 黒褐色粘質土 FP軽石含む 3 黒色粘質土 ローム粒含む 4 褐色粘質土 5 黄褐色粘質土 ローム粒多く含む 6 褐色粘質土 大量の滑石チップ含む 7 青灰色粘土 大量の滑石チップ含む 8 貼り床 **床面積** 18m² 南東角に7層の粘土流れ込む 東西各壁側は二段の面で中央より5cmほど下がる

竈 北壁中央 灰と焼土が散る

柱穴など 等間隔の位置の4個は深さ40～50cm そして北側中央で2個南壁際で1個のピットは30～40cmの深さ

遺物 南西角方向からを中心に全体に滑石チップ（▲）とそれを含む粘土が埋土下層（4層以下）に見られる 竈内に土師器高杯（313） 竈右に同高杯（344）杯（324,327） 東側でやや散って同小形甕（342） 南東側の滑石粘土中から同小形粗製土器（407）が出土 多くが内外面炭化有機物付着

破片総数 土師器甕540 杯582 須恵器杯44

備考 滑石チップの出土状態は埋土下層で量は最も多い。しかし粘土などは床との間に間層があり、床下での出土は見られないため、早い段階での投棄と思われる。

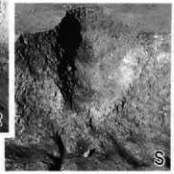
A 南北土層　B 東西土層

C 滑石粘土断面

DNOP 遺物検出状態

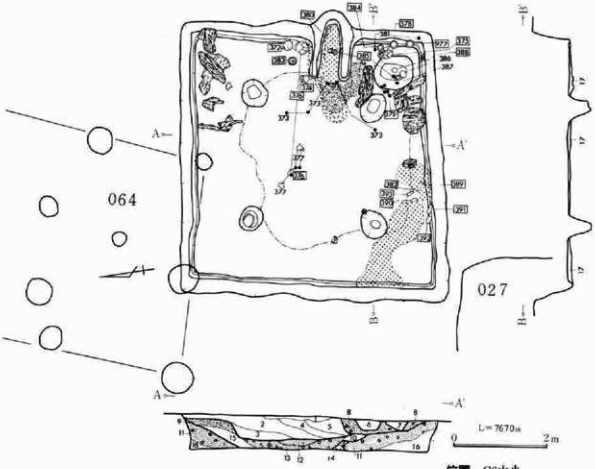
E～M 滑石チップ検出状態

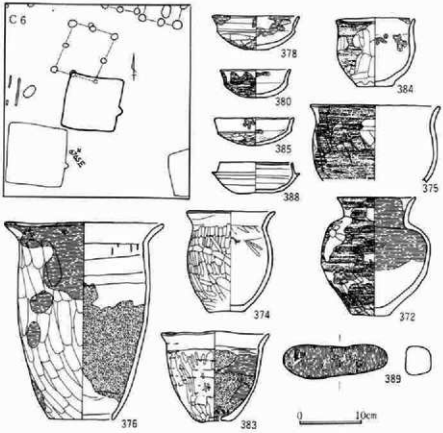
Q 掘り上がり



RS 竈　T 掘り方

026遺構（竪穴住居）





位置 C6中央

重複 北側で掘立柱建物064遺構と重複(関係不明) 南西側で竪穴住居027遺構が近接

埋土 1 暗褐色砂質土 2 1層にローム粒含む 3 2層より粘性ある 4 暗褐色粘質土 5 褐色粘質土 6 黒褐色砂質土 ローム粒混じる 7 6層より明色 8 明黄褐色粘質土 ローム塊主体 9 黒褐色粘質土 炭化粒含む 10 黄褐色粘質土 ローム粒含む 11 褐色粘質土 ローム粒多い 12 9層よりローム粒多い 13 暗褐色粘質土 ローム多い 14 明青灰色粘土 15 暗褐色粘質土 ローム粒含む 16 褐色 粘質土 炭化粒含む 17 貼り床

(つづく)

床面積　25㎡　北側に炭化材　南東角付近には焼土残る　中央部床面硬い

竈　東壁南より　地山掘り残し　炭化物と焼土が散る

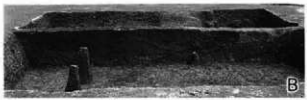
柱穴など　等間隔の位置の4個は深さ50～60㎝　南東角の貯蔵穴は60㎝の深さ

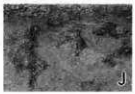
遺物　竈内に土師器杯（380）　そこからやや散って同杯（385）貯蔵穴周辺で同甕（375）杯（378,379,977）小形甕（384）須恵器杯（388）　竈左で土師器壺（372）小形甕（374）小形甑（383）そこから散って同大形甑(376)　南壁際で円筒形自然石(382,389～393)が出土　大形甑には内面に有機物小形甑にはさらに炭化有機物付着　円筒形自然石を含め多くが内外面にススと炭化有機物が見られる

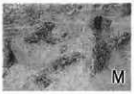
破片総数　土師器甕70 杯153 須恵器杯5

備考　埋土は他の竪穴と異なって大きく乱れた感じである。特に初期の下層の堆積後にかなり掘られた状態が見られる。あるいは重複の掘立に起因することか。

遺構写真　A 東西土層　B 南北土層　C～F 遺物検出状態（以後次頁）　H～R 炭化材検出状態　S 炭化材　TU 竈　W 掘り上がり　VX 掘り方



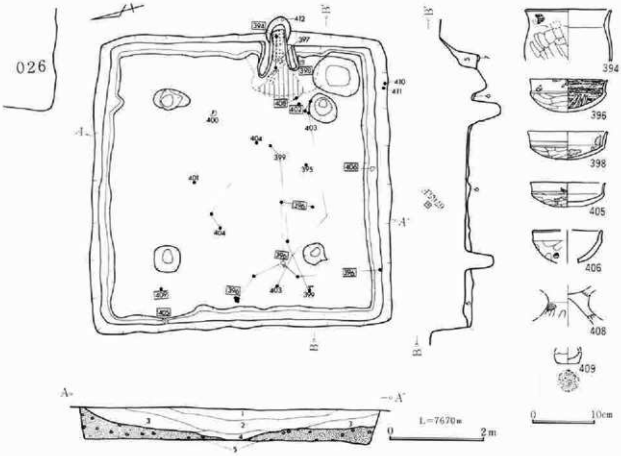


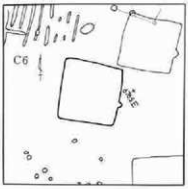


０２６遺構

（前頁より）

2 古墳時代 027遺構（竪穴住居）





位置 C6中央

重複 北東側で竪穴住居026遺構が　北西側にはサク079遺構が近接

埋土 1 黒褐色砂質土　B軽石混じる　2 1層より粘性あり3層を斑状に含む　3 暗褐色粘質土　ローム粒混じる　4 黒褐色粘質土　5 暗褐色粘質土　ローム塊多く含む　6 貼り床　7 黄褐色粘質土　ローム粒含む

床面積 28m²　中央部床面硬い

竈 東壁南より　灰と焼土が散る

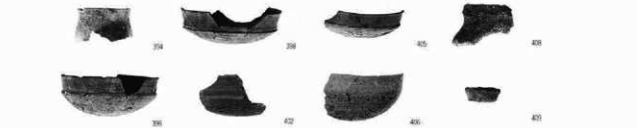
柱穴など 等間隔の位置の4個は深さ60～70cm　南東角の貯蔵穴は60cmの深さ

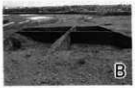
遺物 竈内に土師器小形甕（394）　竈右に同杯（398）　竈前に同杯（402）高杯（408）　南壁で同椀（406）　北西角付近で同杯（405）小形粗製土器（409）　南東側で散って同杯（396）が出土　396は内面全体を炭化　他の多くも少しづつ炭化有機物が付着

破片総数 土師器甕536 杯766

備考 竪穴住居026遺構との距離はあまりに近すぎるため、同じ時期の共存はありえない。ただ方向そして規模も似ているので、かなり接した時期の建て替えと思われる。

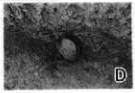
遺構写真 A 南北土層　B 東西土層　C～HO 遺物検出状態　IJK 掘り上がり　LM 竈炭化材　Q 竈　PR 掘り方

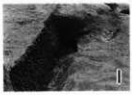


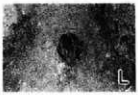


０２７遺構

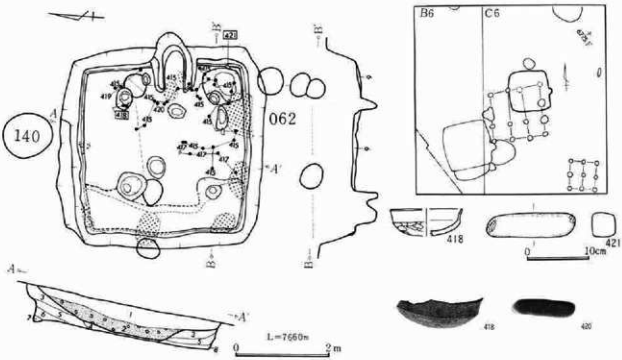
（前頁より）







2 古墳時代 028遺構（竪穴住居）



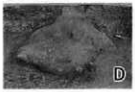
位置 C6西側

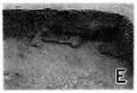
重複 掘立柱建物062遺構と重複（関係不明） 北側には土坑140遺構が近接

埋土 1 暗褐色粘質土 FP軽石混じる 2 1層にローム塊含む 3 黒褐色粘質土 ローム粒混じる 4 黒褐色粘質土 5 褐色粘質土 ローム粒混じる 6 暗褐色粘質土 ローム粒混じる 7 黄褐色粘質土 ローム粒含む 8 褐色粘質土 焼土含む 9 貼り床 **床面積** 13㎡ 西と南側に焼土散る

竈 東壁南より 焼土が散る 地山掘り残し **柱穴など** 等間隔の位置の4個は深さ50～60㎝ 南東角の貯蔵穴は60㎝の深さ その他に10㎝ほどのピットが4個見られる **遺物** 貯蔵穴側で円筒形自然石（421） 北東側柱穴側で土師器杯（418）が出土 421は端に摩耗痕がある **破片総数** 土師器甕245 杯119 須恵器杯3 粘土塊一括

遺構写真 A 東西土層 B 南北土層 C～G 遺物検出状態 H 掘り上がり **次頁** I 竈 JK 掘り方

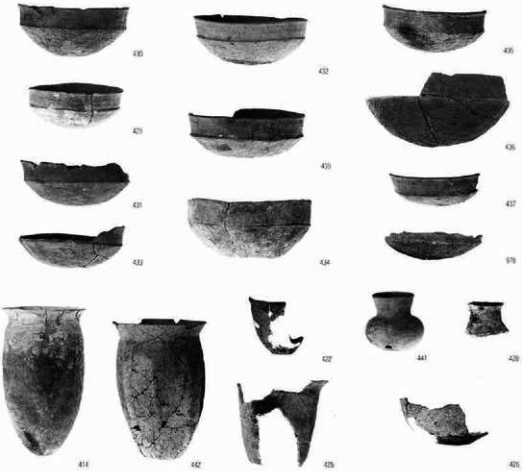




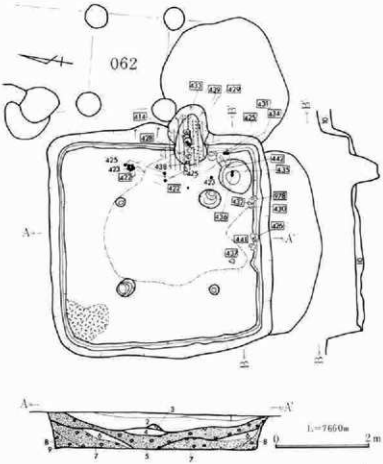
2 古墳時代 029遺構（竪穴住居）

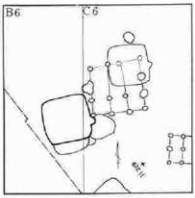
位置 B6C6境界

重複 掘立柱建物062遺構と重複（関係不明） 東側と南側で未命名土坑と重複（関係不明）



2 古墳時代 029遺構（竪穴住居）





埋土 1 黒褐色砂質土 B経石混じる 2 1層より明色 3 黄褐色粘土 4 暗褐色砂質土 5 黄褐色粘質土 ローム塊含む 6 暗褐色粘質土 7 褐色粘質土 ローム塊含む 8 7層より暗色 9 黄褐色粘質土 ローム粒多い 10 貼り床

床面積 16㎡ 北西角に粘土散る 中央部硬い

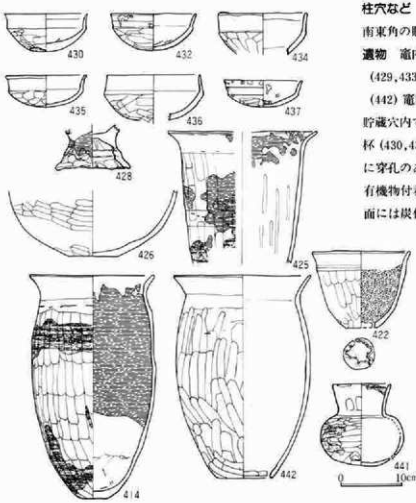
竈 東壁南より 灰と焼土が散る 杯を重ねて支脚とする

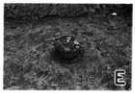
柱穴など 等間隔の位置の4個は深さ30～60cm 南東角の貯蔵穴は60cmの深さ

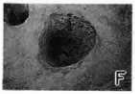
遺物 竈内で土師器甕（414）粗製高杯（428）杯（429,433,439） 竈右で同杯（431,434） 大形甑（442）竈前で散って同小形甑（422）大形甑（425）貯蔵穴内で同杯（435,436） 南壁際で同壺（426）杯（430,432,437,978） そして赤色研磨され下位に穿孔のある小形壺（441）が出土 小形甑内面に有機物付着 大形甑の425と甕内面そして423の外面には炭化有機物が見られる 甕の外面はススが付く

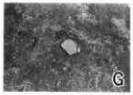
破片総数 土師器甕299 杯380 須恵器杯4

遺構写真（次頁） A 南北土層 B 東西土層 C～J 遺物検出状態 K 掘り上がり L～Q 竈 RS 掘り方



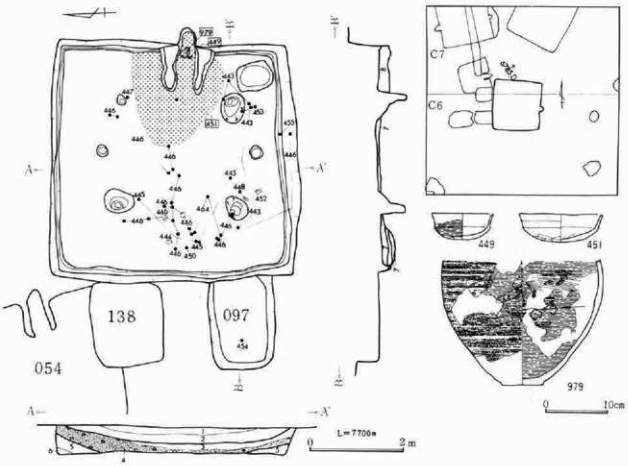






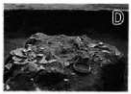
０２９遺構

2 古墳時代　030遺構（竪穴住居）



位置　C6C7境界　**重複**　北西側で竪穴住居054遺構　西側で土坑097，138遺構と重複（関係不明）
埋土　1 褐色粘質土　黒色土塊混じる　2 1層にローム粒混じる　3 黄褐色粘質土　ローム塊多く含む　4 褐色粘質土　ローム塊と焼土混在　5 褐色粘質土　6 暗褐色砂質土　ローム塊混じる　7 硬い貼り床　8 軟らかい貼り床　**床面積**　21㎡　中央部硬い　**竈**　東壁南より　焼土が散る　杯を重ねて支脚とする　**柱穴など**　等間隔の位置の4個は深さ60cm　さらに南北各辺の中央に深さ10cmの柱穴などが各1個　南東角の貯蔵穴は60cmの深さ　**遺物**　竈内で土師器壺（979）杯（449）　竈前で同杯（451）が出土　壺は内外面に炭化有機物と外面にスス付着　449外面には炭化有機物が見られる
破片総数　土師器甕244 杯142　須恵器杯4　**遺構写真**　A 東西土層　B 南北土層　C 竈　D 炭化材　E 遺物検出状態　（以後次頁）F 掘り上がり　G 掘り方

2 古墳時代 031遺構（竪穴住居）



遺構写真　A 東西土層　B 南北土層　C～F 投棄遺物検出状態　G 掘り上がり　H 掘り方

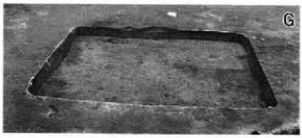
位置　C7南西側

重複　なし　西側で竪穴住居032遺構土坑098，101遺構と近接　**埋土**　1 暗褐色粘質土　2 褐色粘質土　3 暗褐色砂質土　4 暗褐色砂質土　炭化物焼土粒含む　5 黒褐色粘質土　ローム塊混在　硬い　6 焼土

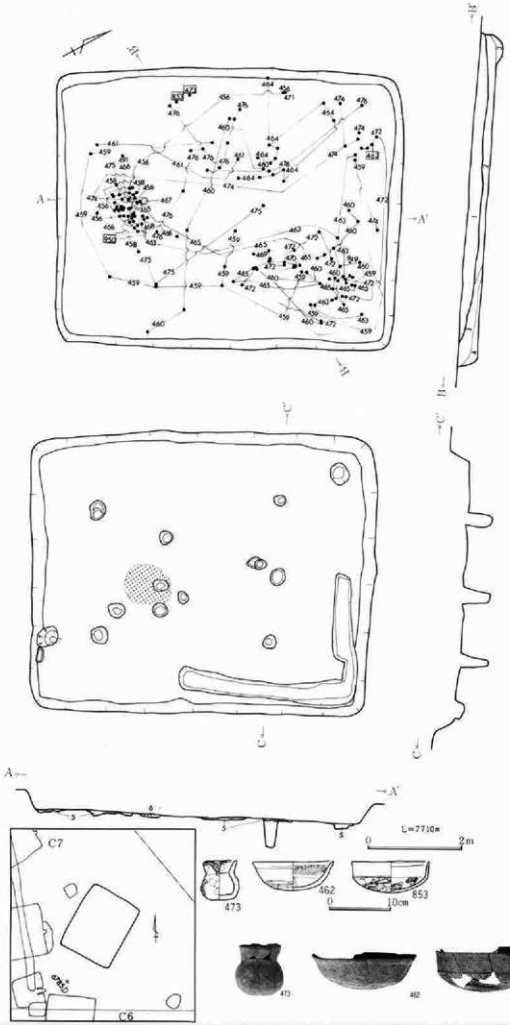
床面積　38㎡　東側角に深さ10cmほど幅30cmのL字形に延びる溝がある

竈　なし　中央南よりに浅い焼土ピットがある

柱穴など　いづれも掘り方での検出　やや変形だが等間隔の位置で北より3・2・2個の柱穴などが並ぶ　両端は深さ60cm　中央の2



2 古墳時代 031遺構（竪穴住居）



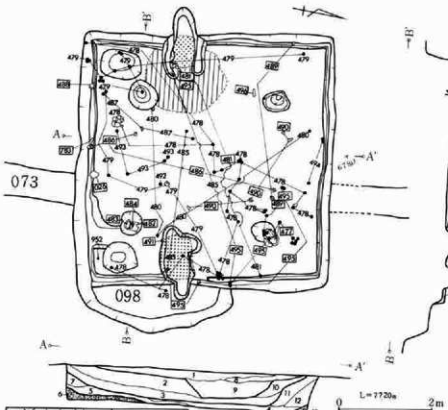
個は20cmである　また南端壁際のピットは外向きで70cm
その他は浅い

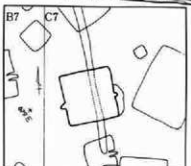
遺物　南側と北東側を中心に大量に土器が投棄されている
確実な出土遺物は西壁際で土師器小形粗製土器(473)杯(853)
南側で凝灰岩管玉(950)　北壁際で土師器暗文杯(462)のみ　853は内外面にススス　473は外面に炭化有機物ススス付着

破片総数　土師器甕1,006 杯372　須恵器杯2　粘土塊一括

備考　最大規模の大きさの竪穴であるが、一般のものと異なり竈がない。投棄遺物も須恵器が比較的多く他と差がある。集会場などと考えられる。

2 古墳時代 032遺構（竪穴住居）





位置 C7南西側　**重複** 溝073遺構より旧　土坑098遺構と関係不明

埋土 1 黒褐色砂質土　2 暗褐色粘質土　3 褐色粘質土　4 暗褐色粘質土　ローム粒含む　5 褐色粘質土　炭化物ローム粒含む　6 黒褐色砂質土　炭化物主体　7 褐色粘質土　8 暗褐色粘質土　9 黒褐色砂質土　10 褐色粘質土　11 褐色粘質土　12 11層にローム塊含む　13 褐色粘質土　炭化物ローム粒含む　14 硬い貼り床　15 軟らかい貼り床

床面積 23㎡　中央部硬い

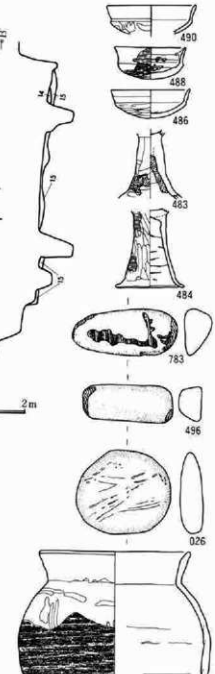
竈 東壁（旧）と西壁（新）西竈で焼土と灰　東竈で焼土が散る

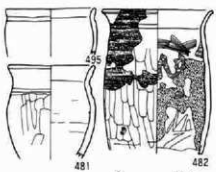
柱穴など 等間隔位置の4個は深さ70cm　南東角貯蔵穴は50cm　南西角貯蔵穴は40cm

遺物 西竈から散って土師器小形甕（481,495）南壁際で擦痕のある円盤状自然石（026）土師器杯（488）円筒形自然石（783）　南東柱穴など内に土師器甕（482）高杯（483,484）　東竈で杯（491）　北西側で円筒形自然石（496）北東側柱穴など付近で壺（477）　北側でかなり散って杯（486,489,490）が出土　482内面に有機物と炭化有機物　有機物は483にも見られ　484と488に炭化有機物　477,482,783にスス付着　496と783は端に摩耗痕がある

破片総数 土師器甕329 杯415　須恵器杯1　粘土塊一括

備考 竈は、本来他と同じように東壁南よりに設置されていた。甕482は、旧竈で使っていたものを柱の支えに転用したとしか考えられない。

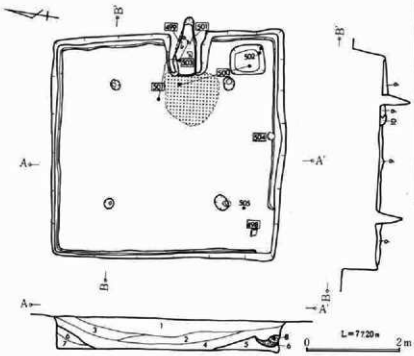


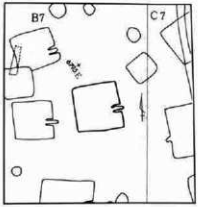


遺構写真 A 東西土層 B 南北土層 CFGI 遺物検出状態 DE 貯蔵穴土層 H 掘り上がり（東から）
K 掘り上がり（西から） J 西竈 L 掘り方（西から）

032遺構

2 古墳時代　０３３遺構（竪穴住居）



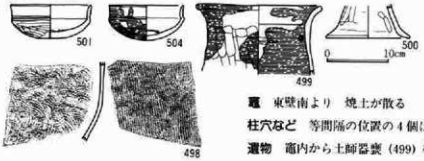


位置　B7南東側

重複　なし

埋土　1 暗褐色粘質土　ローム塊混じる　2 褐色粘質土　黒色土塊混じる　3 1層のローム塊なし　4 2層に黄色土塊混じる　5 褐色粘質土　炭化物混じる　6 黒色粘質土　炭化物含む　7 黄褐色　粘質土　ローム粒多い　8 ローム塊　9 硬い貼り床　10 軟らかい貼り床

床面積　19㎡　中央部硬い



竈　東壁南より　焼土が散る

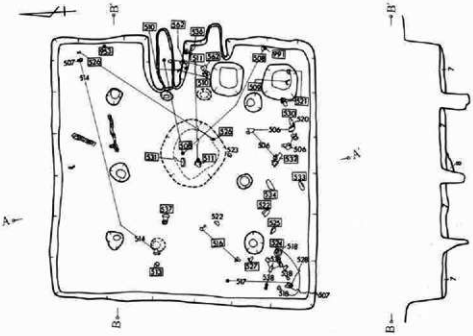
柱穴など　等間隔の位置の4個は深さ60～70㎝　南東角貯蔵穴は50㎝

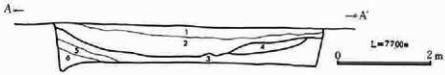
遺物　竈内から土師器甕（499）杯（503）　やや散って杯（501）高杯（500）　南壁際で同杯（504）　南西角で須恵器甕（498）が出土　499内外面と504外面に炭化有機物スス付着

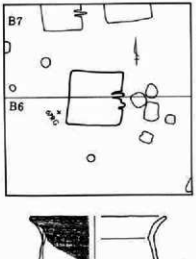
破片総数　土師器甕131 杯152　須恵器甕5 蓋1

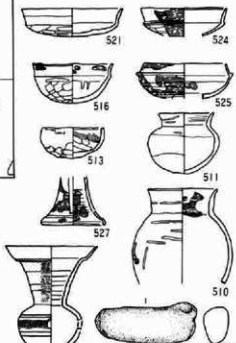
遺構写真　A 南北土層　B 東西土層　CD 竈　E 掘り上がり　F 掘り方

2 古墳時代 034遺構（竪穴住居）









位置 B6B7境界

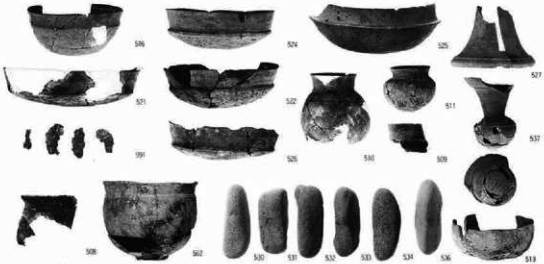
重複 東側で土坑108遺構が近接

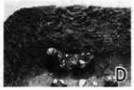
埋土 1 暗褐色砂質土 B軽石含む 2 黒褐色粘質土 3 褐色粘質土 ローム粒含む 4 2層より明色 5 黒褐色粘質土 4層に似る 6 黄褐色粘質土 ローム粒多い 7 硬い貼り床 8 軟らかい貼り床

床面積 27㎡ 中央部硬い **竈** 東壁南よりに2基 北側新しい **柱穴など** 等間隔位置の6個は深さ60cm 南東角の新旧2個の貯蔵穴いづれも60cm 新竈前と対応する西側に旧柱穴など2個 中央の掘り方土坑は深さ60cm

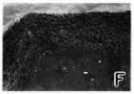
遺物 北竈内から散って土師器甕(508) 小形壺(510) 赤色研磨した小形壺(511) 北竈右側で研磨小形甕(562) 円筒形自然石(532) 南貯蔵穴付近で小形壺(509) 杯(521) 不明鉄製品(991) 南壁際で同杯(522) 円筒形自然石(530,532～534) 南西角で同杯(516,524) 須恵器杯(498) 同高杯(527) 中央で同鬚(537) 円筒形自然石(531) 西壁際で小形粗製土器(513) 北西角で紡錘車形滑石製品(953) 散って土師器杯(526)が出土 562内面に紐状のススと508外面510内面にススまたその他に炭化有機物付着

破片総数 土師器甕760 杯516 須恵器杯34 **遺構写真**(次頁) A 東西土層 B 南北土層 C～J 遺物検出状態 K 掘り上がり L 竈 M 炭化材 N 掘り方

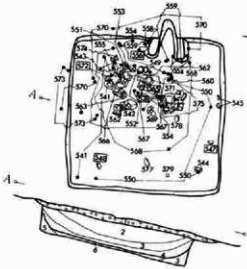


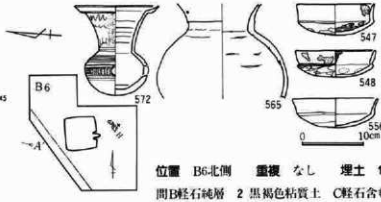


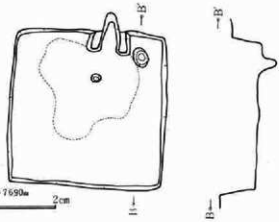
０３４遺構



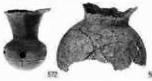
2 古墳時代 035遺構（竪穴住居）



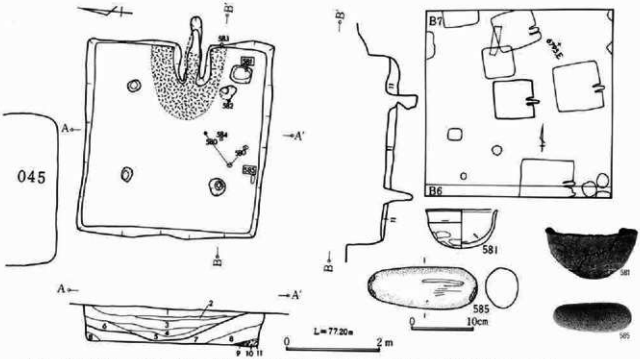




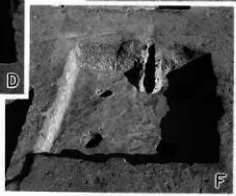
位置 B6北側　**重複** なし　**埋土** 1 浅黄B粒石純層　2 黒褐色粘質土　C粒石含む　3 2層より明色　4 3層にローム粒含む　5 暗褐色粘質土　ローム粒含む　6 暗褐色粘質土　ローム塊含む　硬い　**床面積** 9㎡　中央部硬い　**竈** 東壁南より　**柱穴など** 竈前に深さ25cmのピット1個　南東角の貯蔵穴60cm　**遺物** 埋土3層以上に大量の土器投棄　竈左で土師器杯（556）　北西側で須恵器瓮（572）　中央で紡錘車形土製品（576）土師器壺（565）　北西側で同杯（548）　南西側で（547）が出土　547と548にススと炭化有機物付着　**破片総数** 土師器甕427 杯131 須恵器杯3　**遺構写真** A 東西土層　B 南北土層　CDFG 遺物検出状態　E 竈　H 掘り方



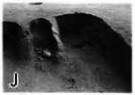
2 古墳時代 036遺構（竪穴住居）



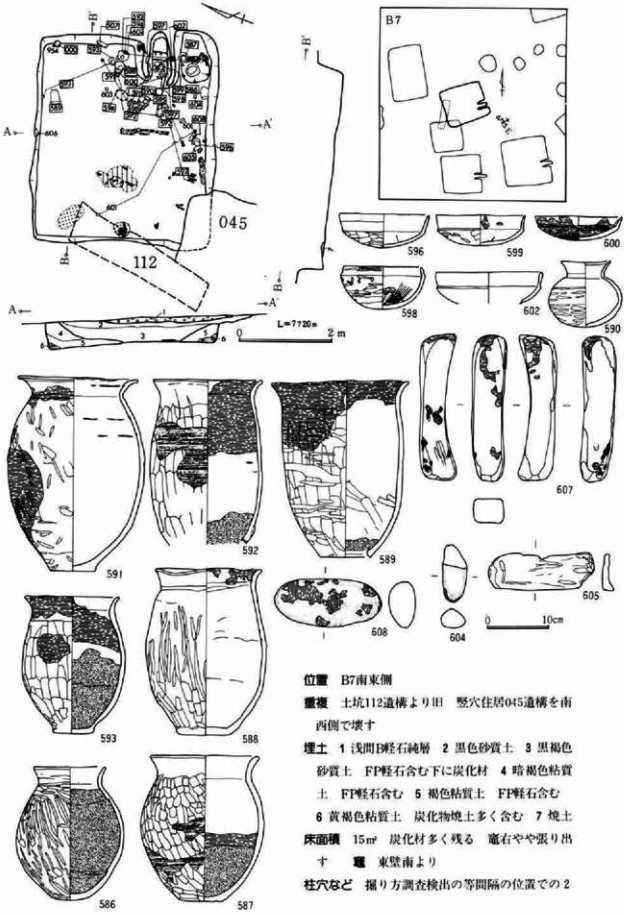
位置 B7南東側　**重複** なし　北側で竪穴住居045遺構が近接　**埋土** 1 暗褐色粘質土　2 1層にローム塊含む　3 黒褐色砂質土　ローム塊含む　4 暗褐色粘質土　5 褐色粘質土　6 3層にローム塊少ない　7 暗褐色粘質土　8 ローム塊主体　9 黒色粘質土　焼土炭化物多い　10 褐色粘質土　粘土焼土含む　11 焼土　**床面積** 13㎡　中央部硬い　**竈** 東壁南より粘土散乱　**柱穴など** 等間隔の位置の4個は深さ50～60cm南東角の貯蔵穴40cm　**遺物** 貯蔵穴で土師器杯(581)　南壁際で円筒形自然石（585）が出土　585は両端に摩耗痕　**破片総数** 土師器甕157 杯81　施釉陶器6　**遺構写真** A 東西土層　B 南北土層　C 竈　DE 遺物検出状態　F 掘り上がり　G 掘り方



037遺構



2 古墳時代 037遺構（竪穴住居）



位置 B7南東側

重複 土坑112遺構より旧　竪穴住居045遺構を南西側で壊す

埋土 1 浅間B軽石純層　2 黒色砂質土　3 黒褐色砂質土　FP軽石含む下に炭化材　4 暗褐色粘質土　FP軽石含む　5 褐色粘質土　FP軽石含む　6 黄褐色粘質土　炭化物焼土多く含む　7 焼土

床面積 15㎡　炭化材多く残る　竈右やや張り出す　**竈** 東壁南より

柱穴など 掘り方調査検出の等間隔の位置での2

個は深さ30～40cm　南東角の貯蔵穴40cm

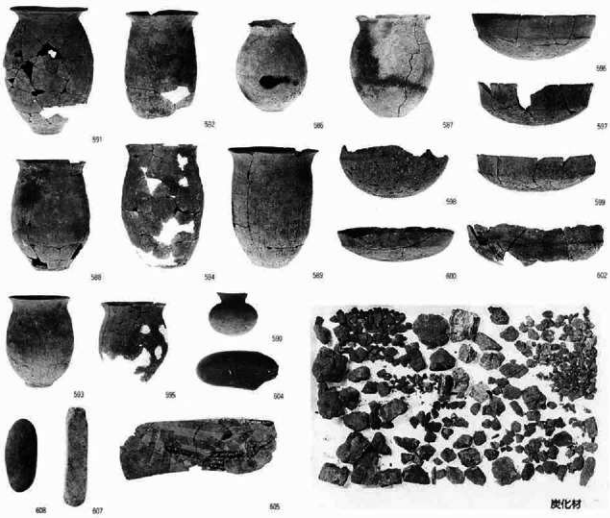
遺物　竈内で土師器杯（598,599）そこから散って甕（591,592）杯（597）　竈前で赤色研磨小形壺（590）小形甕（595）　竈左で同甕（588,594）小形甕（593）杯（600,602）砥石（607）　貯蔵穴周辺で同小形甕（586,587）円筒形自然石（604）　南壁際で同杯（596）砥石（605）　円筒形自然石（608）　北東角側で土師器杯（000紛失）大形甑（589）が出土　小形甕の内面には有機物が残り大形甑と甕592の内面下位にも見られる　全体に多くのものに炭化有機物が外面に付着　604,608は端に摩耗痕

破片総数　土師器甕134　杯46　須恵器杯10

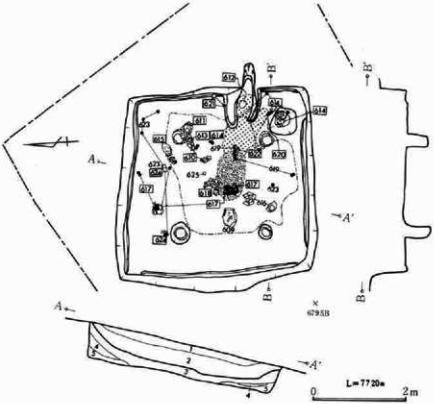
備考　この竪穴は面積に比べ出土遺物が極めて多く、保管用の特殊竪穴の典型である。それは第一に煮炊器の異常な量を見れば、容易に理解できる。ただし保管だけではなく、非日常的な甑や小形甕を使った調理も竈の存在から伺われる。さらに砥石は、金属利器の研磨がここでなされたことを想定させる。つまり特殊の意味は、居住が常にはなされず、特別の調理や作業が行われ、普通はそれらの道具が保管されている竪穴施設と思われる。

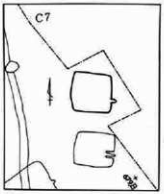
遺物写真右下は、炭化材。

遺構写真（119頁）　A 南北土層　B 東西土層　C～I 遺物検出状態　N 掘り上がり　M 掘り方



2 古墳時代 038遺構（竪穴住居）





位置 C7西側

重複 なし　南に竪穴住居052遺構が近接

埋土 1 黒色砂質土　FP軽石含む　2 暗褐色砂質土　3 黄褐色粘質土　4 炭化物　5 黒褐色粘質土　ローム粒含む

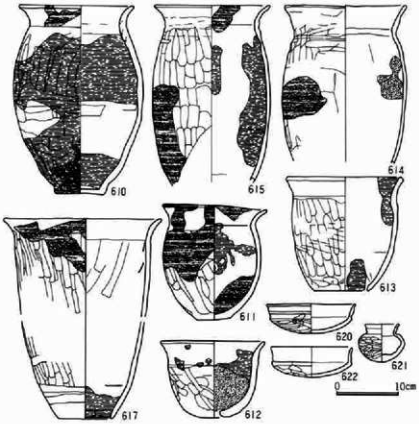
床面積 13㎡　中央に炭化粒散る　中央硬い

竈 東壁南より　焼土散る

柱穴など 掘り方調査検出の等間隔の位置での4個は深さ50～60cm南東角の貯蔵穴70cm

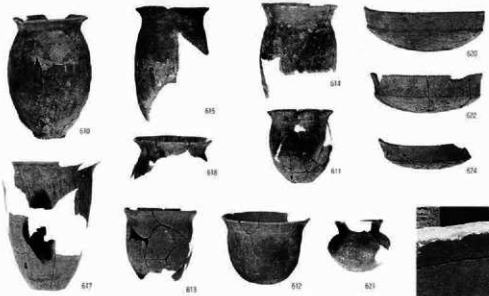
遺物 竈内で土師器小形甑(612)竈左で同甕(610,615)小形甕(611)小形甑(613)小形精製土器(621)貯蔵穴周辺で同甕(614)杯(620)中央で同甕（618）杯（622）北壁側で散って同大形甑（617）杯（624）が出土　小形甑612と甕614の内面には有機物が残りその他の甑と甕の内面には炭化有機物が見られる　全体に多くのものに炭化有機物とススが外面に付着

破片総数 土師器甕365 杯80



備考 この竪穴も面積に比べ出土遺物が極めて多い特殊竪穴である。遺物写真右上は、炭化材。

遺構写真 A 東西土層　B 南北土層　C 投棄遺物　D～G 遺物検出状態　HIK 竈　JL 貯蔵穴　M 掘り上がり


610
615
614
620
622
炭化材
618
611
624
617
613
612
621

C

A

B

D

E

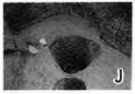
G

F

H

I

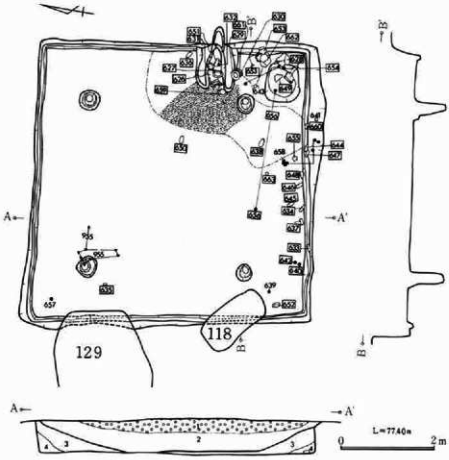
K


J

L

M

2 古墳時代 039遺構（竪穴住居）



位置 B7B8境界

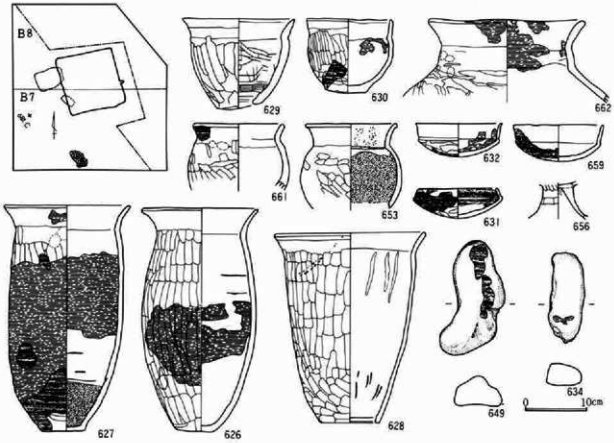
重複 土坑118，129，052遺構と重複 関係不明

埋土 1 浅間B軽石純層 2 黒褐色砂質土 FP軽石含む 3 黄褐色粘質土 4 暗褐色粘質土 炭化物とローム塊多く含む

床面積 31㎡ 竈周辺硬い

竈 東壁南より 炭化粒散る

柱穴など 掘り方調査検出の等間隔位置での4個は深さ50～70cm 南東角の貯蔵穴60cm



A

B

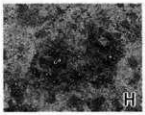
C

D

E

F

G


H

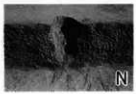
K

I

J

L

M


N

O

P

遺物　竈内で並んで2個の土師器甕（626,627）と杯（631,632,659）棒状自然石（651）竈右で同小形甑（629）　小形甕（630,661）が重なる　竈左から前で円筒形自然石（636,650）貯蔵穴周辺で同大形甑（628）く字形自然石（649）小形甕（653）壺（662）小形甑（654）　そこからやや散って高杯（656）　南壁際で円筒形自然石（633,634,637,638,640,642,644～648,652,663）　杯（660）小形甕（655）　北西角で円筒形自然石（635）が出土　小形甕653甕627の内面には有機物が残り　杯631は内外面炭化　626,627,630,632,662の内面に炭化有機物付着　その他の全体に多くのものに炭化有機物とススが外面に付く

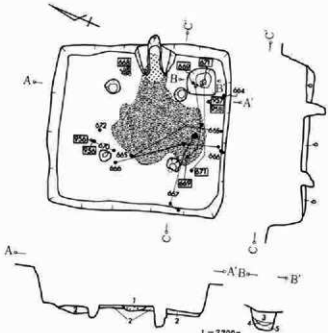
破片総数　土師器甕125 杯19　須恵器杯21

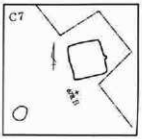
備考　滑石玉類（955）が北西柱穴周辺に見られるが、柱穴にからんでいるため、投棄として考えられる。竈での2個の甕は、明らかに同時に並んで据えられた状態である。またその右にあった小形甑（629）は、一番下の小形甕（661）が置き台であり、その上の小形甕（630）と組み合わされて使われたと思われる。南壁側の円筒形自然石の散乱もそれほど珍しくはないが、興味深い出土状態である。

遺構写真（前頁）　A 東西土層　B 南北土層　C～J 遺物検出状態　KLM 竈　O 掘り上がり　NP 掘り方

039遺構（前頁より）

2 古墳時代　０４０遺構（竪穴住居）





位置　C7南東側

重複　なし

埋土　1 暗褐色粘質土　焼土塊含む　2 黒褐色粘質土　ローム塊含む　硬い　3 明オリーブ灰色粘土　褐色土混在　4 3層粘土純層　5 3層にローム含む

床面積　10㎡　中央硬く炭化粒散る

竈　東壁南より　焼土散る

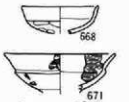
柱穴など　掘り方調査検出の等間隔の位置での４個は深さ20～40cm　南東角の貯蔵穴60cm

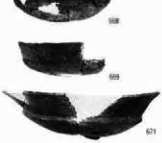
遺物　竈左で土師器杯（668）　貯蔵穴から散って同高杯（671）杯（669）貯蔵穴側で土製丸玉（957）同管玉（958）　北西柱穴など側で凝灰岩管玉（956）が出土　高杯は内外面炭化有機物付着

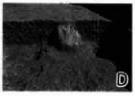
破片総数　土師器甕69 杯103　須恵器杯3　施釉陶器5

備考　埋土土層は実測図記録紛失。写真記録では他と比べそれほど極端な変化は見られない。

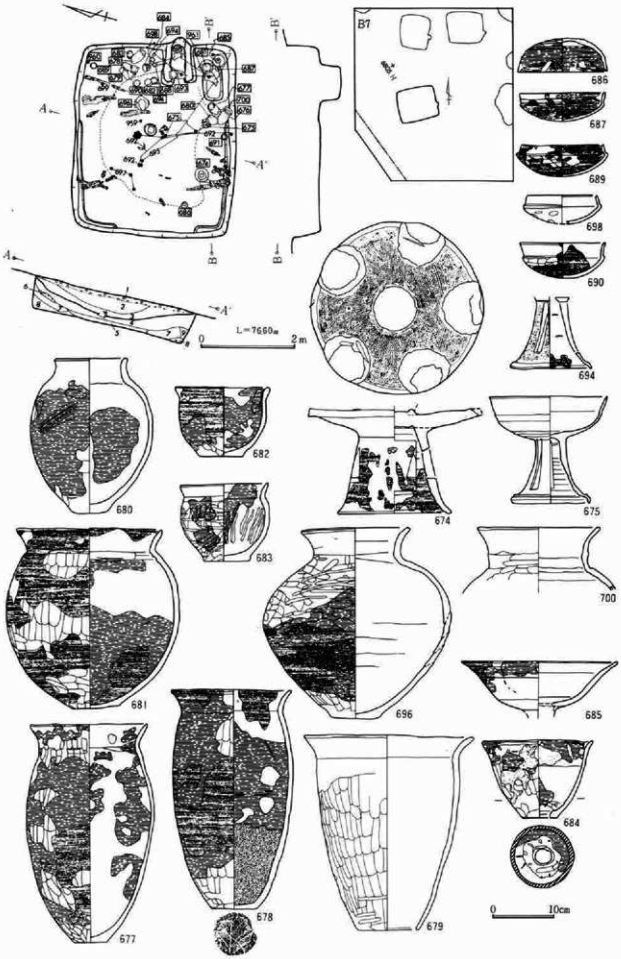
遺構写真　A 南北土層　B 東西土層　CD 遺物検出状態　EG 竈　F 貯蔵穴土層　H 掘り上がり







2 古墳時代 041遺構（竪穴住居）



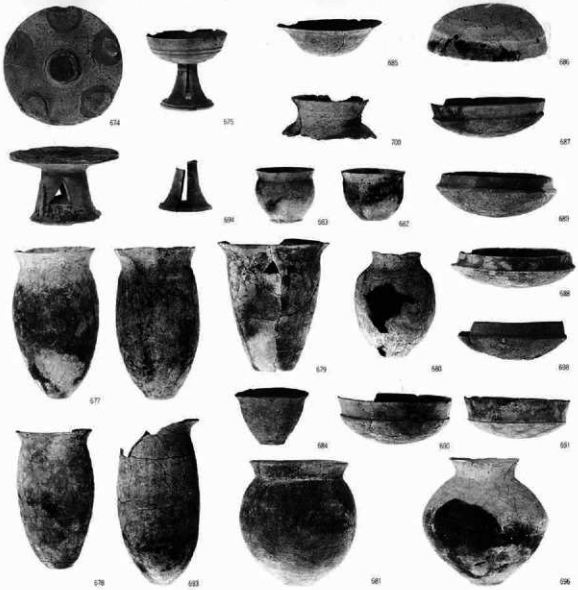
位置　B7南西側

重複　なし

埋土　1 浅間B軽石純層　2 黒褐色粘質土　3 2層とほぼ同質　4 褐色粘質土　5 4層より明色　6 焼土　7 黄褐色粘質土　ローム塊含む　8 炭化物主体　9 褐色粘質土

床面積　11㎡　中央硬く　周辺に炭化材残る

竈　東壁南より　土師器高杯脚部(紛失)を支脚と



041遺構 （前頁より）

する　**柱穴など**　掘り方調査で中央の位置に深さ35cmの柱穴など検出　南東角の貯蔵穴50cm

遺物　竈内に土師器甕（693）　竈左で同大形甑（679）小形甑（684）甕（678）小形甕（682,683）杯（688,689,690,698）壺（696）須恵器高杯（694）紡錘車形滑石製品（960）　貯蔵穴周辺で土師器丸甕（681）高杯（685）杯（687）土製丸玉（961）　南壁際で土師器甕（676,677）壺（700）小形壺（680）杯（691）須恵器子持器台（674）高杯（675）蓋（686）が出土　小形甑684甕678の内面に有機物付着　その他ほとんどの内外面に炭化有機物とスス付着

破片総数　土師器甕44 杯46

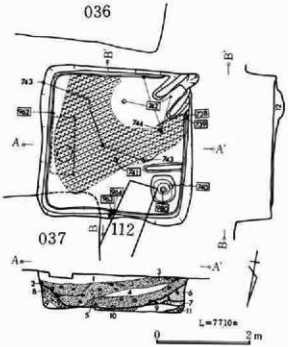
備考　この竪穴も他の遺物を多数残した保管用と、非日常の調理用の特別な竪穴の例の一つである。ただ他のそのような竪穴と大きく異なる点は、成果編で記したような子持器台674を中心とする一群の祭儀用の須恵器の存在である。

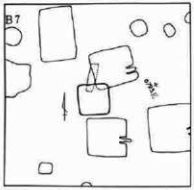
しかも最も興味深いのは、火災で廃棄されたままの出土状態の中で、子持器台は写真に見られるように杯部をきれいに欠いて、倒立で南壁際にあったことである。

この状態から考えられる子持器台の用途は、竪穴への昇降用の木製梯子の支えの他は想定できない。

遺構写真（前頁）A 炭化材　B 東西土層　C 南北土層　DEFHI 遺物検出状態　G 竈　J 掘り上がり　K 掘り方

2 古墳時代　045遺構（竪穴住居）





位置　B7南東側

重複　北側で竪穴住居037遺構土坑112遺構に壊される南側で竪穴住居036遺構が近接

埋土　1 黄褐色粘質土　2 暗褐色粘質土　3 1層にローム塊多く含む　4 3層よりローム塊少ない　5 褐色粘質土　黒色土塊混在　6 暗褐色粘質土　ローム塊含む　7 焼土　8 炭化物と焼土　9 暗褐色粘質土　10 焼土と炭化物の混土で硬い　11 炭化物　12 軟らかい貼り床

床面積　8㎡　中央部硬い　灰と焼土が全体に散る

竈　南西角

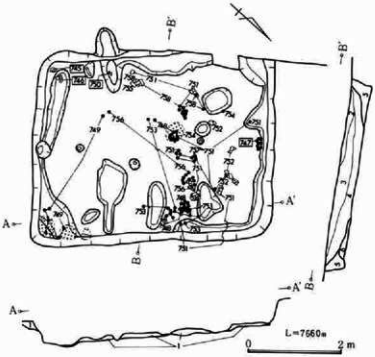
柱穴など　掘り方調査時に東壁際中央近くに深さ80cmのピット検出　北西角の貯蔵穴は40cmの深さで南側に3cmの土堤がある

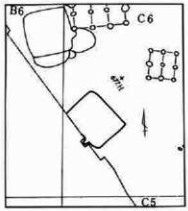
遺物　竈内から散って土師器杯(742)　竈右で同杯(738,739)　貯蔵穴内で同杯(740,980)　中央で同杯(741)　東壁際(962)と北壁際(963,964)で滑石チップが出土　多くが炭化有機物とススが付着

破片総数　土師器甕50　杯11

遺構写真　A 南北土層　B 東西土層　C～E 遺物検出状態　F 掘り上がり　G 貯蔵穴　H 掘り方

2 古墳時代 046遺構（竪穴住居）





位置 B6C6境界南側

重複 なし

埋土 1 軟らかい貼床 2 暗褐色粘質土 ローム塊含む 3 2層に褐色土塊を含む 4 黒褐色粘質土 FP軽石含む 5 暗褐色粘質土 6 灰白色粘土

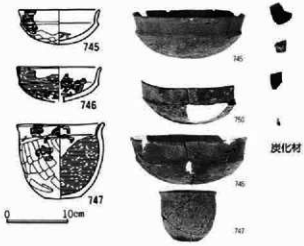
床面積 18㎡ 全体に軟らかい 周辺に塊土が全体に散り幅広く周溝状になる **竈** 西壁南側

柱穴など 深さ20～30cmのピットが南壁際中央と床中央に4個見られるが位置は不規則 その他の掘り込みは浅い検出

遺物 竈内から土師器杯(750) 竈左に同杯(745,746) 北壁際で同小形甕(747)が出土 多くが炭化有機物とスス付着

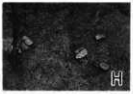
破片総数 土師器甕497 杯254

備考 この竪穴は古墳時代のものでは、方向と竈の位置が例外的である。中央に散乱する遺物は投棄と考えた。

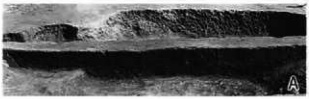


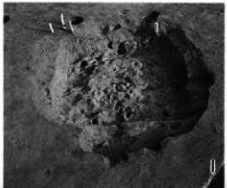
遺構写真 A 南北土層 B 東西土層 C～FH～J 遺物検出状態 G 竈 K 掘り上がり L 掘り方

写真右上は炭化材片

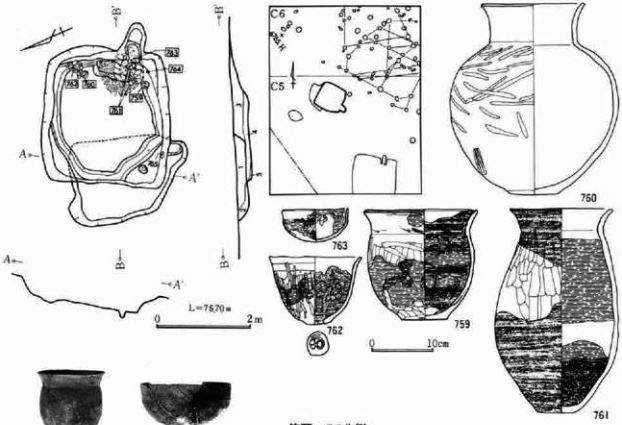


2 古墳時代　０４８遺構（竪穴住居）





2 古墳時代　048遺構（竪穴住居）



位置　C5北側

重複　西側を未命名土坑が壊す　北東側でピット群066遺構が近接

埋土　1 暗褐色砂質土　B軽石混じる　2 褐色粘質土　ローム粒含む　3 暗褐色粘質土　FP軽石含む　4 黒褐色粘質土　炭化粒混じる　5 黄褐色粘質土　ローム粒混じる

床面積　6m²　全体に軟らかく周辺は特に脆弱で幅広い周溝状になる

竈　東壁南側　焼土炭化粒散る

柱穴など　深さ20cmのピットが南西角に見られるのみ

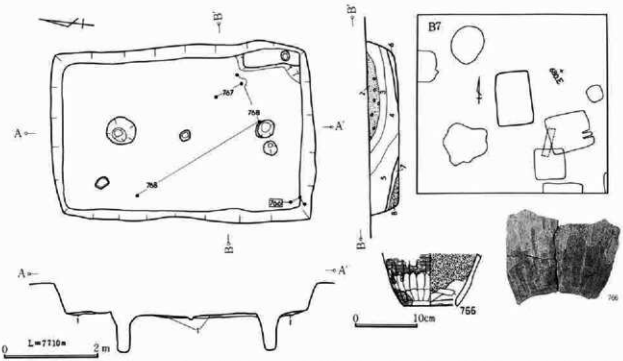
遺物　竈内に土師器甕（761）杯（763）　竈右に同小形甕（759,764）　北東角で同壺（760）小形甑（762）が出土　762は内面に有機物残る　その他多くが内外面に炭化有機物とススが付着

破片総数　土師器甕132 杯14

備考　この竪穴は古墳時代のものでは、最も規模が小さい。

遺構写真（前頁）　A 東西土層　B～D 遺物検出状態　EHG 竈　F 掘り上がり　IJ 掘り方

2 古墳時代 049遺構（竪穴住居）

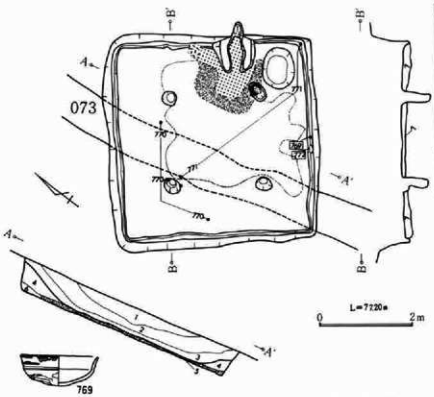


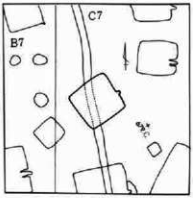
位置 B7中央　**重複** なし　東に竪穴住居037遺構　西に土坑121,122遺構が近接　**埋土** 1 軟らかい貼り床　2 褐色粘質土　ローム塊混じる　3 暗褐色粘質土　炭化物混じる　4 黄褐色粘質土　炭化物混じる　5 黄褐色粘質土　6 4層に黒色土塊混在　7 黒色粘質土　硬い　8 黄褐色粘質土　炭化物含む　**床面積** 16㎡　南東角に10cm以上の床より高く傾斜する細長いテラスがある　**竈** なし　**柱穴など** 深さ70cmの柱穴が中央長軸線の両側にあり　その中間に20cmのものがある　南の柱穴の脇には30cmのピットが見られる　その他のピットは浅い

遺物 南東角で土師器大形甕（766）が出土　内面に白色の有機物が残る　外面は炭化有機物付着　**破片総数** 土師器杯18　**備考** 竈がなく炉状の焼土が残る竪穴は他に031遺構があるが、この遺構は何の煮炊施設の痕跡も残さず、また遺物量は極めて少ない。集会場所としての性格が考えられる。甕のみが見られるのは、興味深い。

遺構写真 A 東西土層　B 南北土層　C 遺物検出状態　D 掘り上がり　E 掘り方

2 古墳時代 050遺構（竪穴住居）





位置 C7中央西側

重複 溝073遺構に切られる

埋土 1 褐色粘質土 ローム塊混じる 2 1層よりローム塊多い 3 2層に黒色土塊も含まれる 4 暗オリーブ褐色粘質土 5 暗褐色粘質土 炭化物多い 6 黄褐色粘質土 ローム黒色土塊混在 7 硬い貼り床

床面積 16㎡ 中央硬い

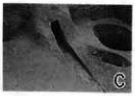
竈 東壁南より 焼土炭化粒散る

柱穴など 等間隔位置で4個深さ60cmの柱穴 南東角に60cmの貯蔵穴

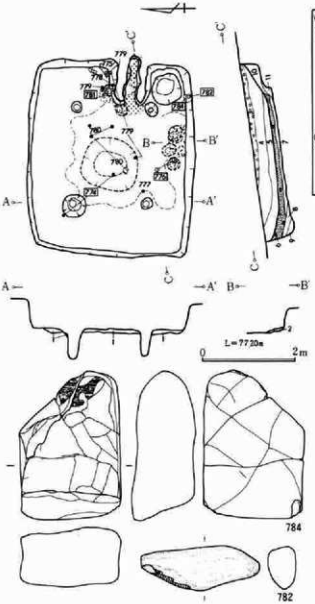
遺物 南壁際で土師器杯（769）円筒形自然石（772）が出土 共に外面にスス付着 772は両端に摩耗痕

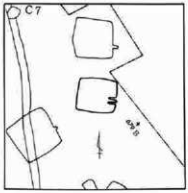
破片総数 記録漏れるが少ない

遺構写真 A 東西土層 B 南北土層 CD 竈 E 掘り上がり F 掘り方

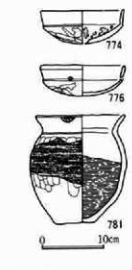


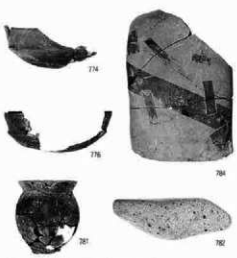
2 古墳時代　052遺構（竪穴住居）



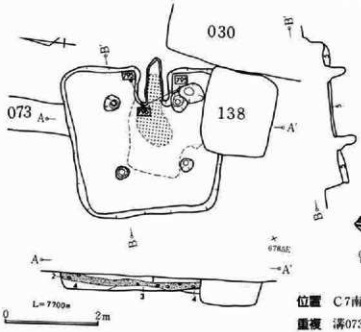


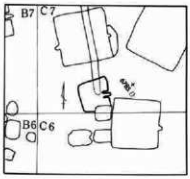
位置　C7中央西側　**重複**　なし　北に竪穴住居033遺構が同方向に位置　**埋土**　1 硬い貼床　2 黒色土と灰色粘土の混在層　3 暗褐色粘質土　C軽石多い　4 褐色粘質土　ローム炭化粒混じる　5 明褐色粘質土　6 5層にローム塊混在　7 黄褐色粘質土　炭化物ローム粒混じる　8 褐色粘質土　ローム粒黒色土粒混じる　9 炭化物　10 褐色粘質土　黒色土ローム塊含み硬い　11 暗褐色粘質土　粘土含む　**床面積**　12㎡　中央硬い　南壁際に粘土塊　**竈**　東壁南より　焼土散る　**柱穴など**　等間隔位置で4個の深さ60cmの柱穴　南東角に60cmの貯蔵穴　掘り方で中央に70cmの深さの円形土坑と南壁際竈前に30～60cmのピット4個　**遺物**　竈左で土師器小形甕（781）　貯蔵穴側で円筒形自然石（782）と方形加工石（784）　南壁近くで土師器杯(776)　中央でやや散って同杯(774)が出土　781の内面炭化有機物　外面と784にススが付着　782は図の位置に摩耗痕　**破片総数**　土師器甕50 杯57　須恵器杯3　**遺構写真**　A 東西土層　B 掘り上がり　C 掘り方





2 古墳時代 054遺構（竪穴住居）





位置 C7南側

重複 溝073遺構と土坑138遺構に壊される　東で竪穴住居030遺構と重複（関係不明）

埋土 1 暗褐色粘質土　2 1層にローム塊と炭化物混在　3 1層に粘土と焼土混在　4 褐色粘質土　5 硬い貼り床

床面積 8㎡　中央硬い　**竈** 東壁中央　焼土散る

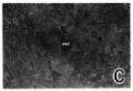
柱穴など 等間隔の位置で4個の深さ50～70cmの柱穴　南東角に60cmの貯蔵穴

遺物 竈周辺に散って内外面炭化した土師器杯（795）が出土

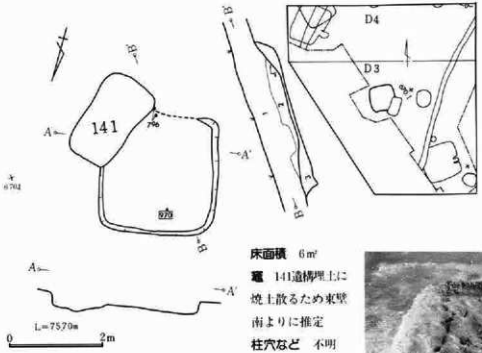
破片総数 土師器甕37 杯16　粘土塊一括

遺構写真 A 東西土層　B 南北土層　C 掘り方　D 掘り上がり

2 古墳時代 056遺構（竪穴住居）



2 古墳時代 056遺構（竪穴住居）



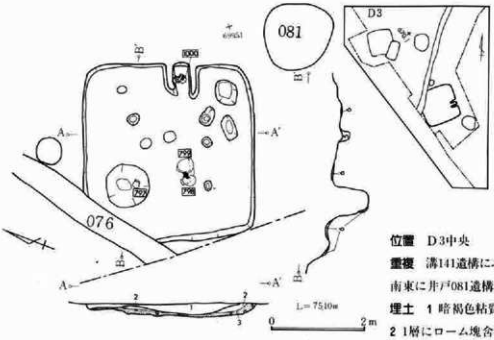
位置 D3北側
重複 土坑141遺構より旧
埋土 1 耕作土
2 黒褐色粘質土
3 茶褐色粘質土
ローム粒主体

床面積 6㎡
竈 141遺構埋土に焼土散るため東壁南よりに推定
柱穴など 不明

遺物 北壁近くで碧玉製管玉（970）が出土
破片総数 土師器甕8 杯1　**遺構写真** A 掘り上がり BC 遺物検出状態 （以上前頁） D 掘り方

2 古墳時代 057遺構（竪穴住居）

2 古墳時代　057遺構（竪穴住居）



位置　D3中央

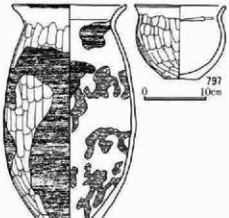
重複　溝141遺構に北西側を壊される南東に井戸081遺構が近接

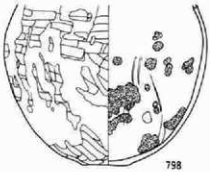
埋土　1 暗褐色粘質土　ローム粒含む　2 1層にローム塊含む　3 2層よりローム塊多い　**床面積**　12㎡

竈　東壁南より　**柱穴など**　等間隔の位置に4個見られるが北西側のもののみ大きくて深さ70cmあるのに対し他の3個は小さく20～30cmと浅い　南東角には25cmの深さの貯蔵穴がある

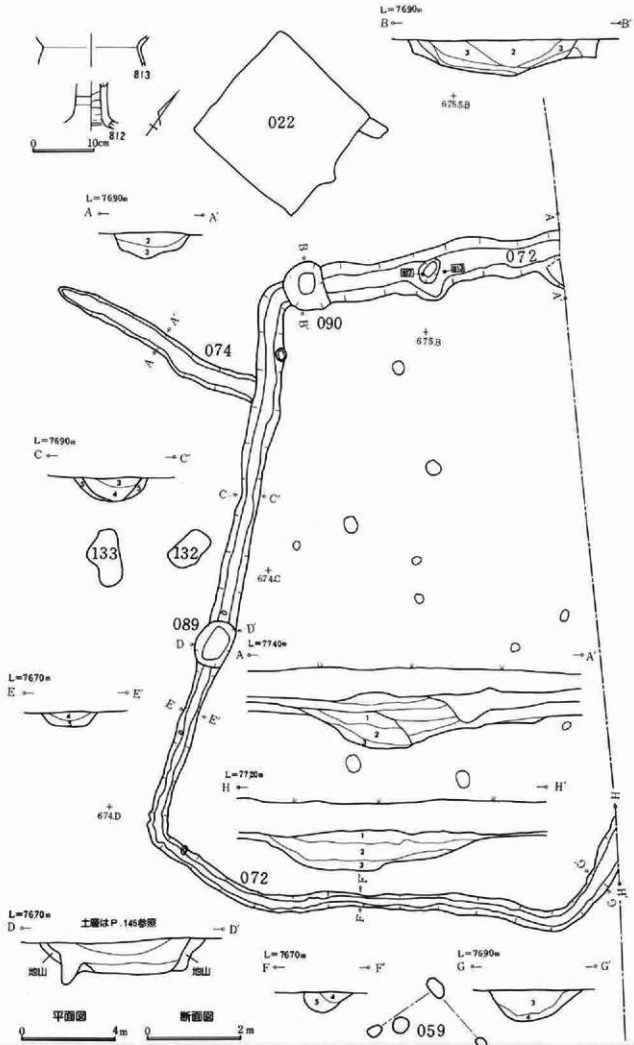
遺物　竈内で土師器甕（1000紛失）　北西柱穴内に同小形甕（797）　中央西側で同壺（798）甕（799）が出土　798の内面には有機物付着　また799の内面には炭化有機物外面にはススが付いている　**破片総数**　土師器甕72

遺構写真　A 南北土層　B 東西土層　C～E 遺物検出状態　F 掘り上がり（以上前頁）G 掘り方　H 竈　Hの上は炭化材





2 古墳時代 072・074遺構（溝）



溝０７２遺構(古墳時代)

位置　D５D６　**重複**　土坑089遺構より古く　土坑090遺構より新しい　溝074遺構との関係不明　**埋土**　1 黒褐色粘質土　褐色土塊含む　2 暗褐色粘質土　FP軽石含む　3 褐色粘質土　ローム粒含む　4 にぶい黄褐色粘質土　5 黄褐色粘質土　**走向**　全体が五角形を示すような多角形状に一周しようとしている　内部の空間は南北28ｍ東西18ｍ程度の広がりがある

断面形　U字形　**遺物**　北側で須恵器高杯（812）土師器甕（813）が出土

破片総数　土師器甕23 杯33

遺構写真　AG 断面G　B 断面H　C 断面C　D 断面A　E 断面F　F 断面E　H 南から　I 西から　JK 遺物検出状態　L 溝074遺構

溝０７４遺構(時期不明)

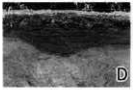
位置　D５D６

重複　溝072遺構との関係不明

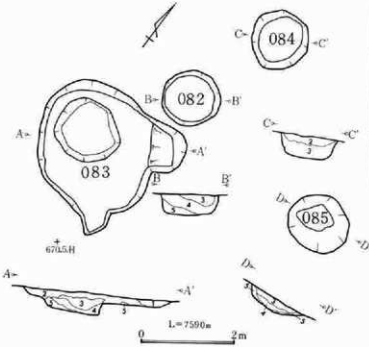
埋土　溝072遺構の2,3層

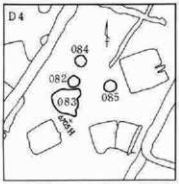
走向　東西に直線状　**断面形**　U字形

遺物　なし



3 古代・古墳時代土坑　082～085遺構





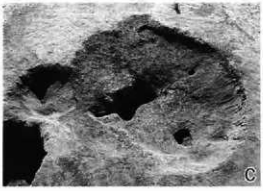
位置　D4南東側

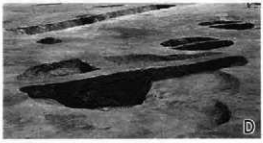
重複　なし

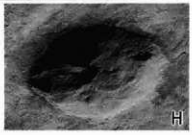
埋土　1 黒色砂質土　2 暗褐色砂質土　ローム塊含む　3 黒色砂質土　ローム粒含む　4 暗褐色粘質土　ローム粒多い　5 黒色砂質土

遺物　084遺構埋土より須恵器杯

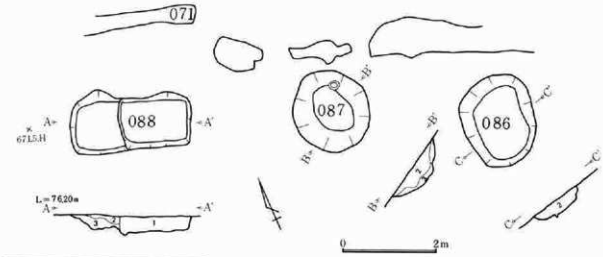
(819)　**破片総数**　082遺構土師器杯2　083遺構土師器甕11 杯3 須恵器蓋1　084遺構土師器杯2　**遺構写真**　AB 082遺構　CD 083遺構　EF 084遺構　GH 085遺構

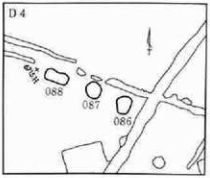






3 古代・古墳時代土坑 086～088遺構





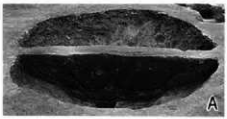
位置 D4中央　**重複** なし　溝068,069遺構・道路071遺構と近接

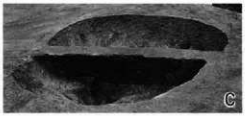
埋土 1 暗褐色砂質土　ローム塊混在　2 黒褐色砂質土　ローム塊含む　3 暗黄褐色砂質土　ローム粒含む

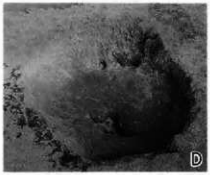
破片総数 088遺構土師器甕1 杯1

備考 086,087遺構及び088遺構西側は木根痕か

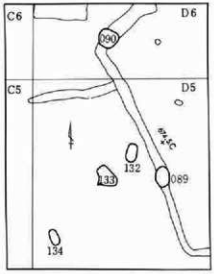
遺構写真 AB 086遺構　CD 087遺構　EF 088遺構

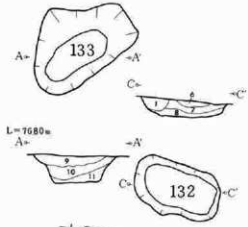






3 古代・古墳時代土坑 089,090,132～134遺構

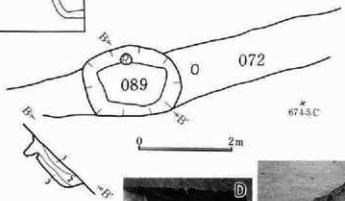


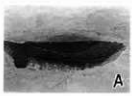


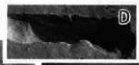
位置 D5D6

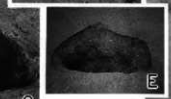
重複 溝072遺構より090遺構は古く089遺構は新しい

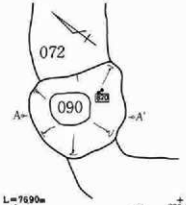
埋土 1 黒褐色砂質土 B軽石混じる 2 にぶい黄褐色粘質土 3 黒褐色粘質土 炭化粒ローム粒含む 4 褐色砂質土 B軽石混じる 5 暗褐色砂質土 B軽石混じる 6 黒色粘質土 炭化粒混じる 7 褐色粘質土 FP軽石ローム











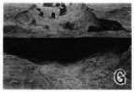
粒含む 8 黒褐色粘質土 ローム粒含む 9 褐色砂質土 B軽石混じる 10 9層にローム粒含む 11 暗褐色粘質土

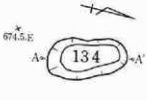
遺物 090遺構より須恵器蓋（820）出土するが072遺構の可能性もある

破片総数 090遺構 土師器杯4

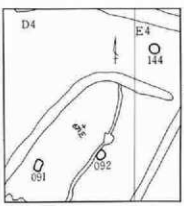
備考 133遺構は形状やや風倒木痕に似る

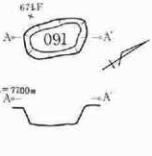
遺構写真 A 089遺構 BC 132遺構 DEF 133遺構 G 090遺構 HI 134遺構

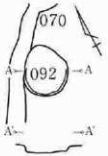


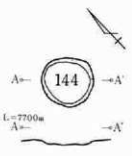


3 古代・古墳時代土坑 091～093,137,140,144遺構

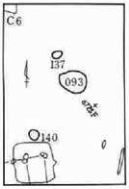


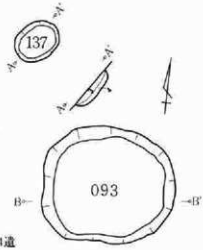






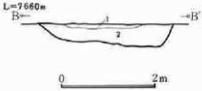
位置 C6 (093,137,140) D4 (091,092) E4 (144) **重複** 092遺構と溝070遺構及び140遺構と竪穴住居028遺構との関係不明 **埋土** 1 暗褐色砂質土 B軽石混じる 2 暗褐色粘質土 ローム塊褐色土塊混在 3 暗褐色粘質土 FP軽石混じる 4 黒褐色粘質土 FP軽石混じる 5 暗褐色粘質土 ローム粒含む

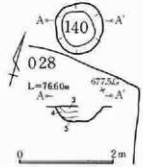




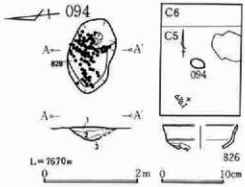
備考 093遺構の2層は人為的な埋土。

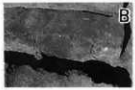
遺構写真 A 091遺構 B 092遺構 C 144遺構 D 093遺構 E 137遺構 FG 140遺構

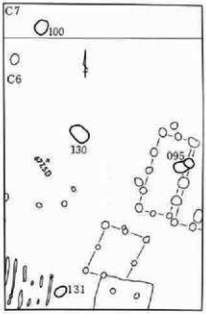




3 古代・古墳時代土坑 094,095,100,130,131遺構

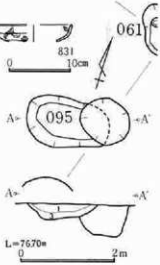






位置 C5（094,095,130,131） C7（100）

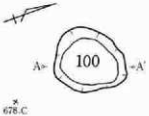
重複 095遺構は掘立061遺構より新しい 094遺構の北東に竪穴住居048遺構が近接 **埋土** 1 黒褐色砂質土 B軽石混じる 2 1層にローム粒混じる 3 暗褐色粘質土 4 暗褐色粘質土 FP軽石混じる 5 暗褐色粘質土 ローム粒含む

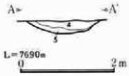


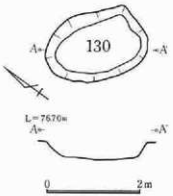
遺物 094遺構埋土より土師器杯（826）と炭化種子 095遺構埋土より炭化有機物付着の同杯（831）出土 **破片総数 094遺構**土師器甕125 杯12 **095遺構**土師器甕25 杯5

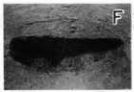
備考 094遺構の遺物は048遺構と関係あるか。

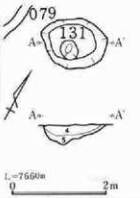
遺構写真 AB 094遺構 C 095遺構 D 130遺構 E 100遺構 F 131遺構



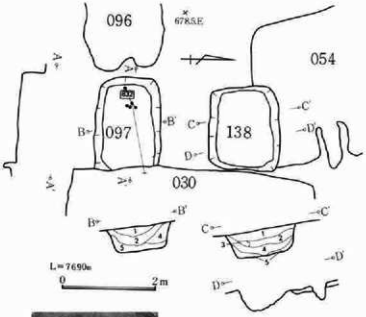




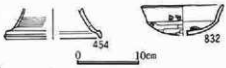


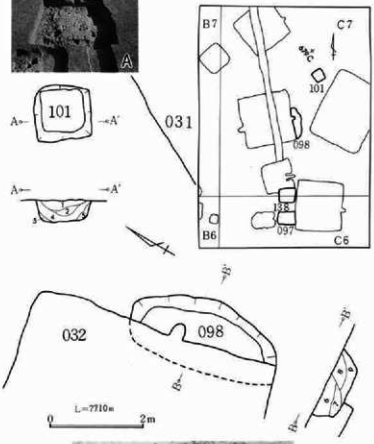


3 古代・古墳時代土坑 097,098,101,138遺構

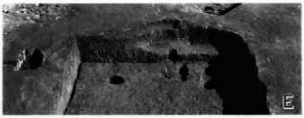


位置 C6（097）C7（098,101,138）**重複** 097,138遺構と竪穴住居030遺構は関係不明　138遺構は竪穴住居054遺構より新しい　098遺構は竪穴住居032遺構より新しい　101遺構の東に竪穴住居031遺構が近接　**埋土** 1 黄褐色粘質土 2 暗褐色粘質土 3 硬質黒色土塊 4 暗褐色粘質土 炭化物含む 5 暗褐色粘質土 黒褐色土ローム粒含む 6 暗褐色砂質土 7 6層に炭化物含む 8 6層より明色 9 8層に炭化物焼土含む　**遺物** 097

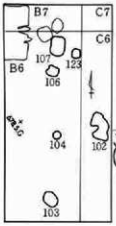


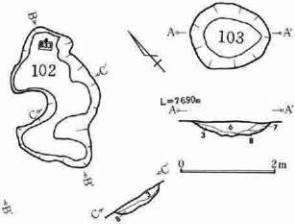


遺構埋土より炭化有機物の付着する土師器杯（832）と須恵器高杯（454）出土　**破片総数** 097遺構土師器甕20杯2　101遺構土師器甕2　138遺構土師器甕3 杯1　**備考** いずれも短期間の人為的な埋没。　**遺構写真** A 097,138遺構　B 138遺構　C 097遺構　DF 101遺構　E 098遺構



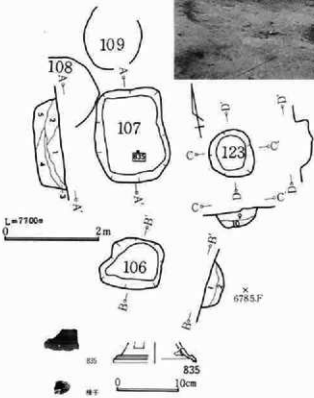
3 古代・古墳時代土坑 102～104,106,107,123遺構



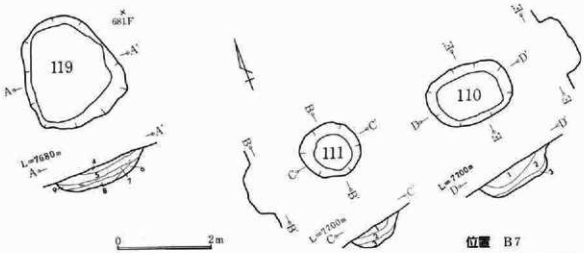


位置 B6 (103,104,106,107,123) C6 (102)　**重複** 107遺構は縄文土坑108遺構と重複　**埋土** 1 暗褐色粘質土　焼土含む 2 暗褐色粘質土　炭化物含む 3 暗褐色粘質土　黒色土塊混じる 4 黄褐色粘質土　粘土含む 5 暗褐色粘質土　ローム粘土粒含む 6 暗褐色砂質土 7 6層にローム塊含む 8 黄褐色粘質土　ローム粒含む 9 暗褐色粘質土 10 9層にC軽石含む　**遺物** 102遺構より土師器杯 (833) 滑石玉類 (971,972)　103遺構より土師器台部(834)　107遺構より須恵器高杯(835)と炭化種子出土　**破片総数** **102遺構**土師器甕67 杯8　**103遺構**土師器甕8 杯27 須恵器杯1　**106遺構**土師器杯1　**107遺構**土師器小片21　**遺構写真**

A 104遺構　B 102遺構　C 103遺構
D 107～109遺構
E 123遺構
F 106遺構
G 107遺構



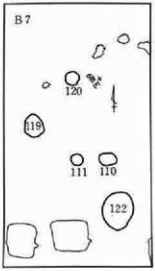
3 古代・古墳時代土坑 110,111,119,120,122遺構



位置 B7

重複 なし 122遺構は竪穴住居042遺構に近接

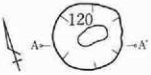
埋土 1 黒色粘質土 C軽石含む 2 暗褐色粘質土 3 1層にローム塊含む 4 暗褐色砂質土

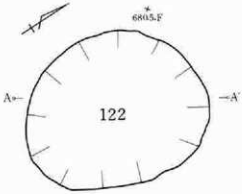


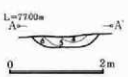
B軽石含む 5 暗褐色粘質土 ローム塊混在 6 ローム塊 7 黒褐色土とローム塊混在土 8 4層より暗色 9 黒褐色粘質土

備考 122遺構はほとんど掘り込み確認できず。

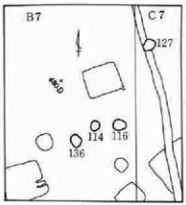
遺構写真 A 110遺構 B 111遺構 C 119遺構 D 120遺構

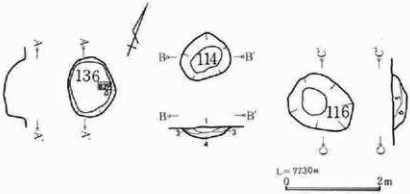






3 古代・古墳時代土坑 114,116～118,127,136遺構





位置 B7 (114,116,118,136) B8 (117) C7 (127)

重複 118遺構と竪穴住居039遺構及び127遺構と溝073遺構との関係不明

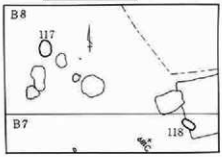
埋土 1 黒色粘質土 C軽石含む 2 黒褐色粘質土 ローム粒含む 3 暗褐色粘質土 4 1層にローム塊含む 5 暗褐色砂質土 B軽石含む 6 5層より暗色でローム粒含む

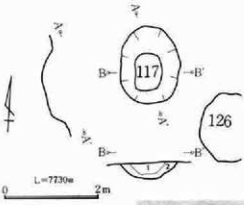
遺物 136遺構埋土より土師器高杯 (839) 出土

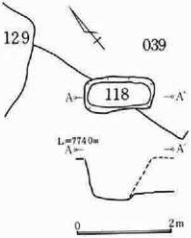
破片総数 117遺構土師器甕2
136遺構土師器杯1

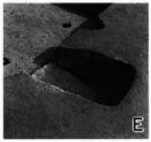
備考 118遺構は竪穴住居と共に掘ったがかなり深い。

遺構写真 A 114遺構 B 116遺構 CD 117遺構 E 118遺構

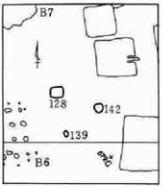


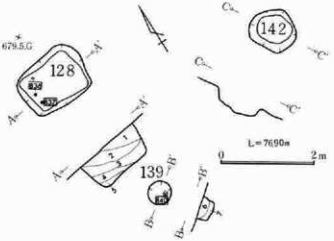






3 古代・古墳時代土坑 128,135,139,142遺構



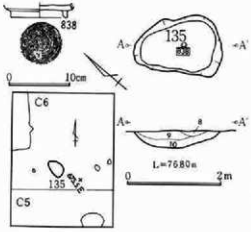


位置 B7(128,139,142)
C6 (135)

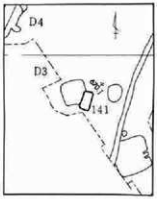
重複 135遺構と竪穴住居020遺構
142遺構と竪穴住居034遺構及び
128,139遺構と掘立065遺構が近接

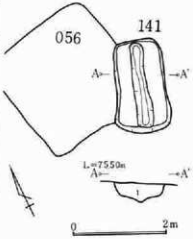
埋土 1 暗黄褐色粘質土 ローム
黒色土粒含む 2 黒褐色粘質土
ローム粒含む 3 黒褐色粘質土

褐色土ローム粒含む 4 3層にローム塊含む 5 黒褐色粘質土 ローム粒含む 6 黒褐色砂質土 7 褐色粘質土 8 褐色砂質土 B軽石含む 9 暗褐色粘質土 10 黒色粘質土 炭化粒含む **遺物** 128遺構より土師器杯 (836,837) 135遺構より須恵器瓶 (838) 139遺構より土師器杯 (840) 142遺構より凝灰岩管玉 (973) 出土 836と840にはスス付着 **破片総数** **128遺構**土師器甕20 杯2 **135遺構**土師器甕4 杯3 **139遺構**土師器甕2 **遺構写真** **AB** 139遺構 **CD** 128遺構 **EFG** 135遺構

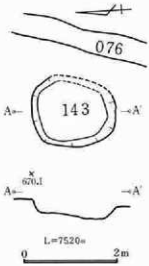


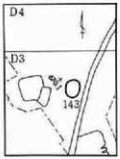
3 古代・古墳時代土坑 141,143,145,146遺構





位置 B 8 (145) D 3 (141,143) D 5 (146) **重複** 141遺構は竪穴住居056遺構を壊し 143遺構は溝076遺構と近接 **埋土** 1 暗褐色粘質土 ローム塊多く焼土粘土粒含む 2 黒褐色粘質土 3 褐色粘質土

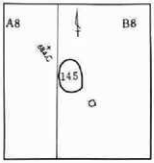


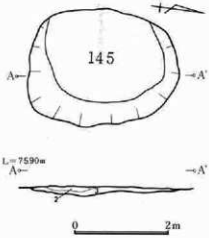


遺物 146遺構より炭化有機物の付着した土師器杯 (848) 出土

破片総数 **141遺構**土師器甕2 **143遺構**土師器甕4 杯1

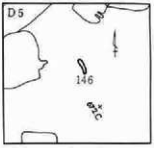
備考 141遺構は竪穴住居056遺構の廃を壊す。145遺構は当初竪穴住居を想



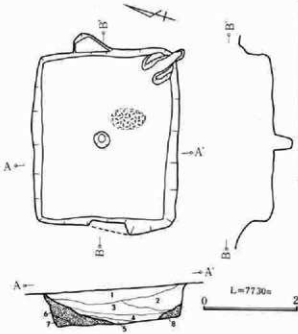


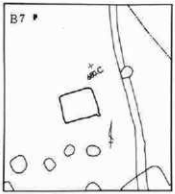
定して掘ったが、それを証明する特徴がない。

遺構写真 A 141遺構 B 143遺構 C 145遺構



4 時期不明 047遺構（竪穴住居）





位置 B7東側
重複 なし
埋土 1 暗褐色粘質土 2 黒褐色粘質土 3 2層にローム塊多く含む 4 暗褐色粘質土 ローム塊多い 5 黒褐色粘質土 ローム塊多い 6 黄褐色粘質土 炭化物多く含む 7 褐色粘質土 炭化物混じる 8 黄褐色粘質土 炭化物と焼土含む **床面積** 9m² 中央やや南東に粘土塊 **竈** 南東角 **柱穴** 中央に掘り方調査時に深さ50cmの柱穴検出 **破片総数** 土師器甕9 杯5 **備考** 形状は竪穴住居045遺構に極めて類似している。古墳時代後期の可能性が大きい。 **遺構写真** A東西土層 B南北土層 C掘り方 D掘り上がり E竈 F床面粘土塊断面

051遺構

位置 B7東側
重複 なし 東に050遺構 西に033遺構の両竪穴住居が近接 **埋土** 1 黄褐色粘質土 2 にぶい暗褐色粘質土 炭化物ローム粒混じる 3 暗褐色粘質土 ローム塊含む 4 にぶい黄褐色粘質土 ローム塊多い 5 黒褐色粘質土 炭化物多量に含む 6 炭化物焼土混在土 7 軟らかい

4 時期不明 051,055遺構（竪穴住居）

貼り床

床面積 5㎡

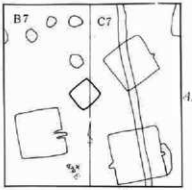
竈 なし

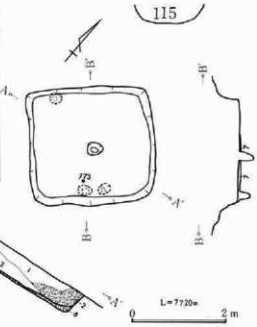
柱穴 中央に掘り方調査時に深さ30cmの柱穴検出　また東西の壁際に25cmピット3個見られる

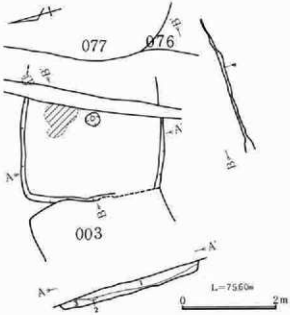
破片総数 土師器甕16 杯3

備考 規模は最小で、形状は竪穴住居045遺構に類似している。古墳時代後期の可能性が大きい。

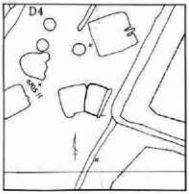
遺構写真(前頁)　A東西土層　B掘り上がり　C掘り方　D南北土層







055遺構

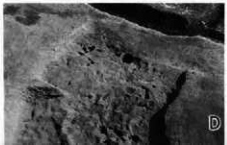


位置 D4南東側

重複 西側で竪穴住居003遺構を壊し　東側で未命名溝と溝077遺構に壊される　**埋土** 1 暗褐色粘質土　FP軽石多い

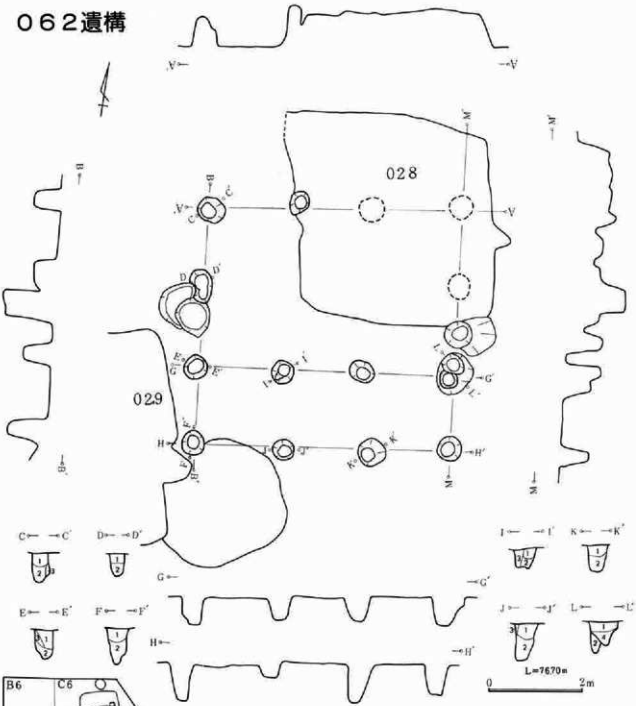
2 灰色粘土　3 1層にローム焼土粘土粒含む　4 軟らかい貼り床　**床面積** 約8㎡　中央北側に焼土含む粘土塊残る　**竈** 不明　**柱穴** 中央に掘り方調査時に深さ40cmの柱穴検出　**破片総数** 土師器甕34 杯10　須恵器杯1

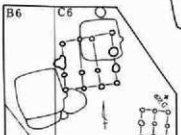
備考 形状は竪穴住居045遺構に類似している。古墳時代後期の可能性が大きい。　**遺構写真** A掘り上がり　BC粘土塊検出状態　D掘り方　EF粘土塊断面



4 時期不明 062~064遺構（掘立柱建物）

062遺構



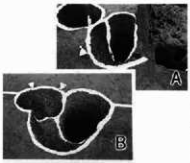


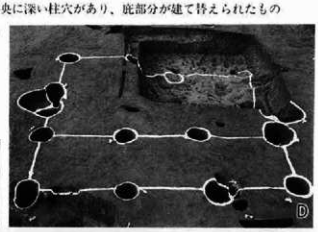
位置 C6西側　**重複** 竪穴住居028,029遺構との関係不明

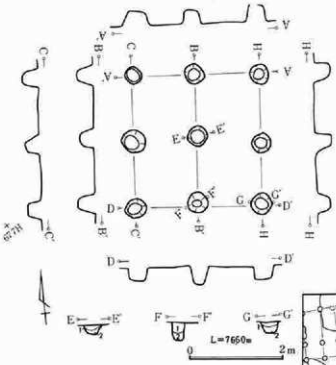
埋土 1 暗褐色結質土　FP軽石含む　2 黒褐色結質土　3 褐色結質土　ローム粒含む　4 1層よりローム粒多い　**規模** 18m²　東西3間南北2間南側庇　**柱穴間隔** 東西1.8m　南北1.1m　**破片総数** 土師器杯2

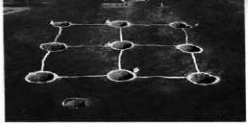
備考 東辺と西辺の中央に深い柱穴があり、庇部分が建て替えられたものか。古代の可能性がある。

遺構写真 ABC柱穴
D掘り上がり









063遺構

位置 C6南西側

重複 なし　掘立柱建物062遺構が北西側にやや近い

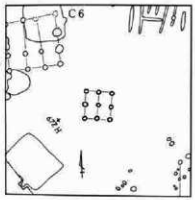
埋土 1 暗褐色粘質土　FP軽石ローム粒含む　2 黒褐色粘質土

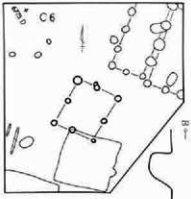
規模 8㎡　東西2間南北2間総柱

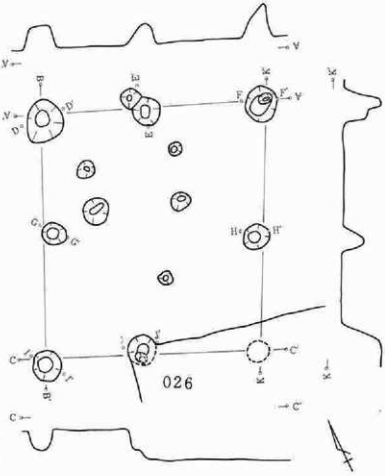
柱穴間隔 1.4m

破片総数 土師器甕7 杯3　**備考** 倉庫風の建物で方向から考えると古墳時代の可能性あり。

遺構写真 掘り上がり







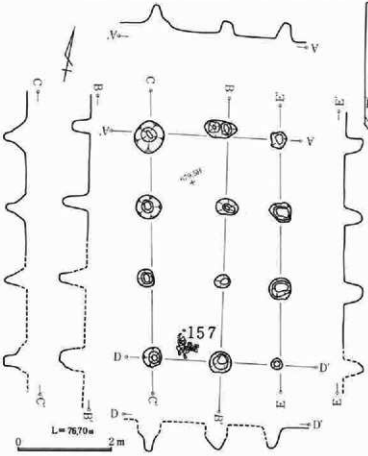
064遺構

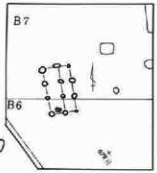
位置 C6中央　**重複** 竪穴住居026遺構との関係不明　掘立柱建物061遺構が北東側に近接　**埋土** 1 暗褐色粘質土　FP軽石ローム粒含む　2 黒褐色粘質土　**規模** 24㎡　東西2間南北2間

柱穴間隔 東西2.4m南北2.6m　内部のピット関係不明　**備考** 061遺構と似た軸方向で古代の可能性あり。

遺構写真 掘り上がり

4 時期不明 065,066遺構（掘立柱建物）



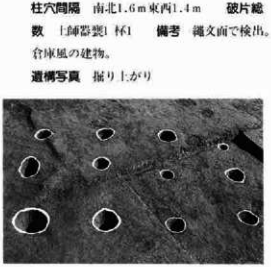


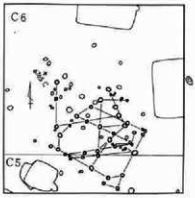
065遺構

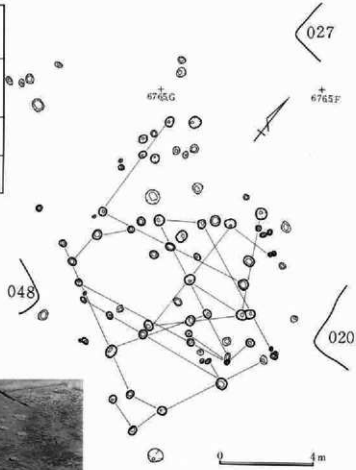
位置 B6B7境界 **重複** 縄文集石157遺構と重複 **規模** 13㎡ 東西2間 南北3間総柱

柱穴間隔 南北1.6m東西1.4m **破片総数** 土師器甕1 杯1 **備考** 縄文面で検出。倉庫風の建物。

遺構写真 掘り上がり





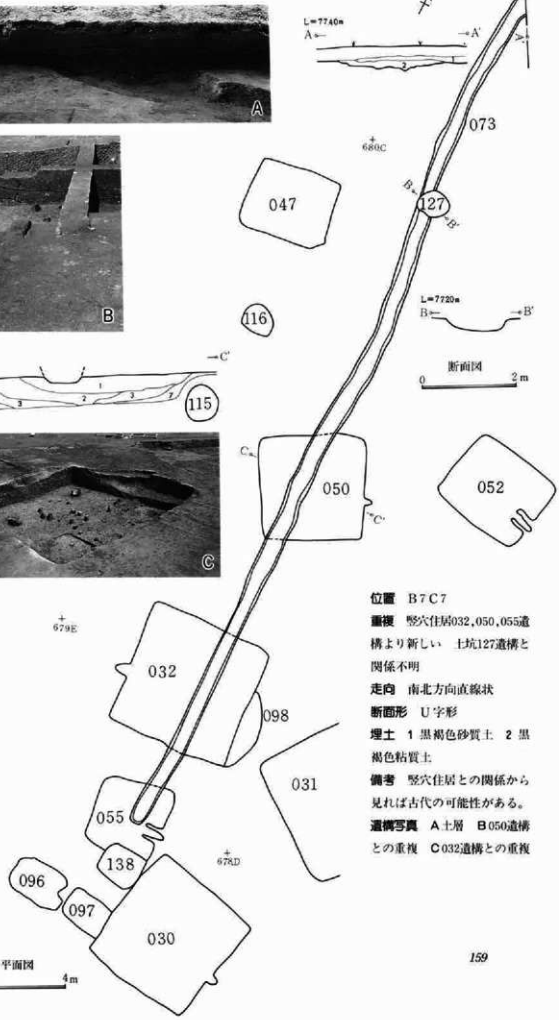


066遺構（ピット群）

位置 C5C6境界 **重複** 竪穴住居020,027,048遺構と近接 **柱穴** 図の太線が深いピット **備考** 調査時には建物に組めなかったが、図のような考察線が引ける。いくつかの建物の重複であろう。

遺構写真 掘り上がり

4 時期不明 073遺構（溝）



位置　B7C7

重複　竪穴住居032,050,055遺構より新しい　土坑127遺構と関係不明

走向　南北方向直線状

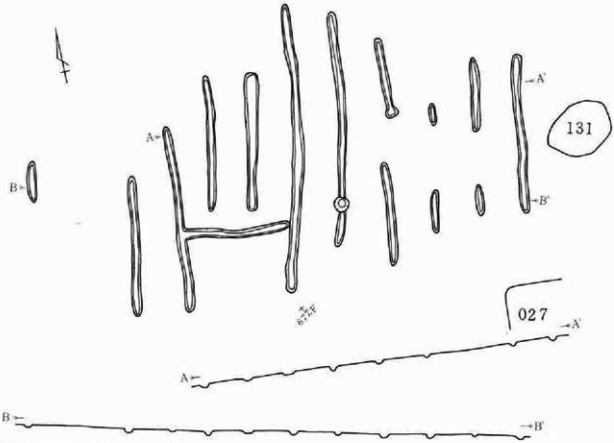
断面形　U字形

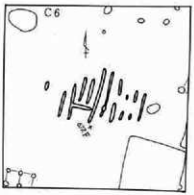
埋土　1 黒褐色砂質土　2 黒褐色粘質土

備考　竪穴住居との関係から見れば古代の可能性がある。

遺構写真　A土層　B050遺構との重複　C032遺構との重複

4 時期不明 079遺構（畠）





位置　C6中央

重複　竪穴住居026,027遺構・土坑131遺構と近接

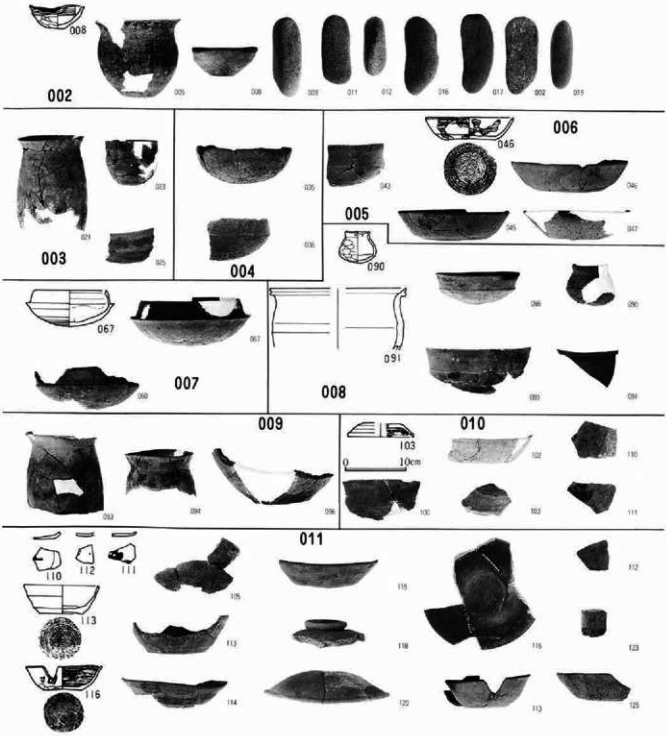
走向　南北方向11条東西方向1条のサク　間隔0.9m

埋土　暗褐色粘質土　FP軽石ローム粒含む

備考　本来の畝は無くなっている。竪穴住居との関係から見れば古墳時代の可能性がある。低地で水田は確認されず、作物は不明だがこのような畠が検出されたことは、示唆的である。

遺構写真　A掘り上がり（南から）　BC掘り上がり（南西から）

5 遺構に伴わない遺物 竪穴住居投棄遺物002～011遺構



002遺構　(005) 土師器小形甕　(008) 小形粗製土器　(009,011,012,016～019) 円筒形自然石　**003遺構**　(021) 土師器甕　(023) 同小形甕　(025) 同杯

004遺構　(035,036) 土師器杯　**005遺構**　(043) 土師器杯

006遺構　(045～047) 須恵器杯046は内外面スス付着

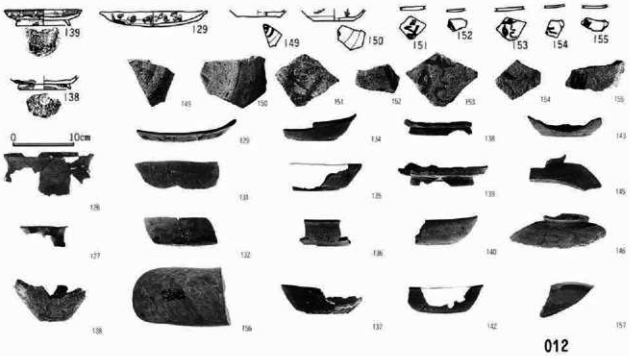
007遺構　(060) 土師器杯　(067) 須恵器杯

008遺構　(086,089) 土師器杯　(090) 小形粗製土器　口縁内面にベンガラ付着　孔あり　(091) 須恵器甕　**009遺構**　(093,094) 土師器甕　(096) 同壺

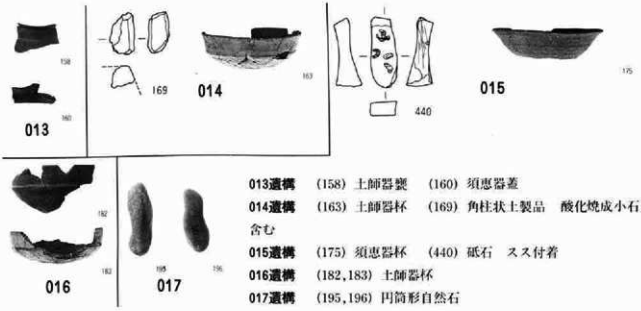
010遺構　(100) 土師器杯　(102) 須恵器杯　(103) 同蓋内面スス付着

011遺構　(110,111,112,116) 土師器杯墨書116内面は炭化　(113) 須恵器杯　(118,120) 須恵器蓋　(123) 円筒形自然石　(125) 土師器杯

5 遺構に伴わない遺物 竪穴住居投棄遺物012～017遺構

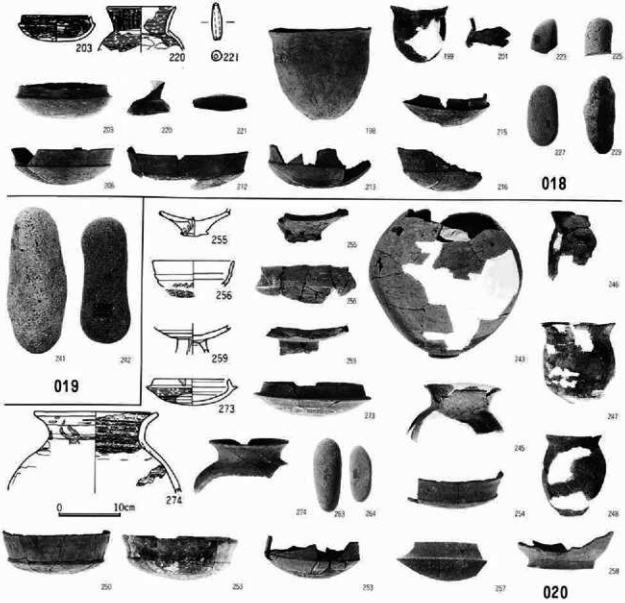


012遺構 (126～128) 土師器甕 (129)同盤スス付着 (131,132)同杯 (134～137,140,142,143) 須恵器杯 (138,139) 同皿共に炭化有機物付着 (145,146) 同蓋 (149,150) 同黒書杯 (151～155) 土師器黒書杯 (156) 円筒形自然石 (157) 須恵器壺
この竪穴の投棄遺物には黒書杯が多い



013遺構 (158) 土師器甕 (160) 須恵器蓋
014遺構 (163) 土師器杯 (169) 角柱状土製品 酸化焼成小石多く含む
015遺構 (175) 須恵器杯 (440) 砥石 スス付着
016遺構 (182,183) 土師器杯
017遺構 (195,196) 円筒形自然石

5 遺構に伴わない遺物 竪穴住居投棄遺物018～020遺構

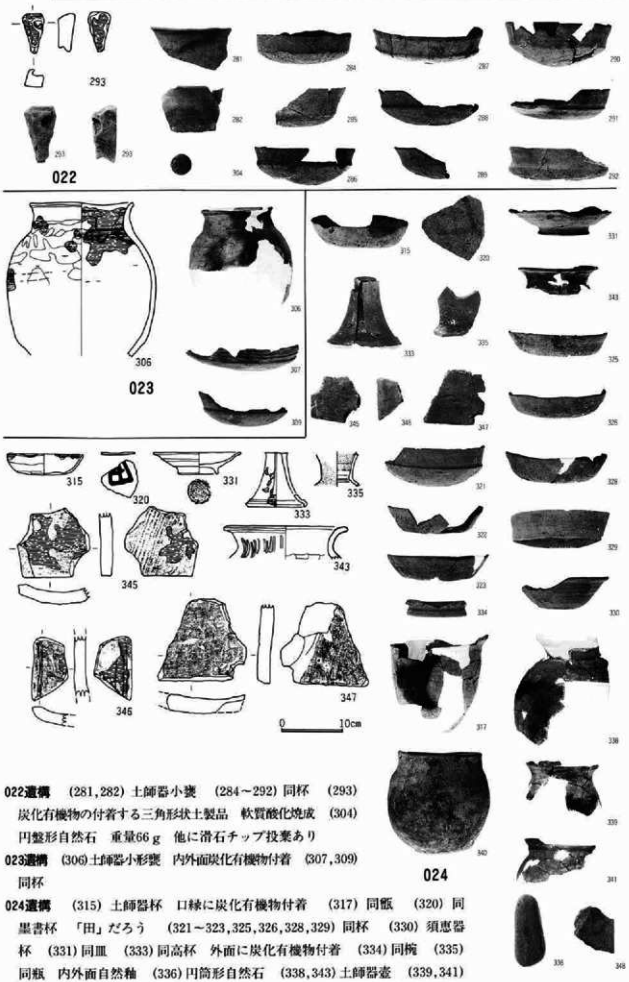


018遺構　(198,199) 土師器小形甕　(201,220) 同小形壺　220は内外面炭化有機物付着
(203,206,212,213,215,216) 同杯　203は内外面炭化　(221) 土錘　酸化焼成
(223,225,227,229) 円筒形自然石

019遺構　(241,242) 円筒形自然石

020遺構　(243,245,274)土師器壺　274外面炭化有機物内面スス付着　(246)同甕　(247,248)
同小形甕　(250,252～254) 同杯　(255) 同高杯　(256,259) 須恵器高杯　(257,273)
同杯　273外面炭化有機物付着　(258) 同椀　(263,264) 円筒形自然石
この竪穴には他に砥石 (261) を含めた玉類チップの大量投棄がある

5 遺構に伴わない遺物 竪穴住居投棄遺物022～024遺構



022遺構 (281,282) 土師器小甕 (284～292) 同杯 (293) 炭化有機物の付着する三角形状土製品 軟質酸化焼成 (304) 円盤形自然石 重量66ｇ 他に滑石チップ投棄あり

023遺構 (306) 土師器小形甕 内外面炭化有機物付着 (307,309) 同杯

024遺構 (315) 土師器杯 口縁に炭化有機物付着 (317) 同甑 (320) 同墨書杯 「田」だろう (321～323,325,326,328,329) 同杯 (330) 須恵器杯 (331) 同皿 (333) 同高杯 外面に炭化有機物付着 (334) 同椀 (335) 同瓶 内外面自然釉 (336) 円筒形自然石 (338,343) 土師器壺 (339,341) 同甕 (340) 同小形甕 (345～348) 平瓦 345,346には炭化有機物付着他に粘土を含めた玉類チップの大量投棄がある

5 遺構に伴わない遺物 竪穴住居投棄遺物025～030遺構

025遺構　(349,350)土師器甕　(351,352)同杯　(354)須恵器杯　(356)同刻書杯　(358～363)平瓦　(370)土師器墨書杯「田」か

026遺構　(373)土師器壺　内外面炭化有機物付着　(377)同大形甑　(381)須恵器高杯　(386,387)土師器杯

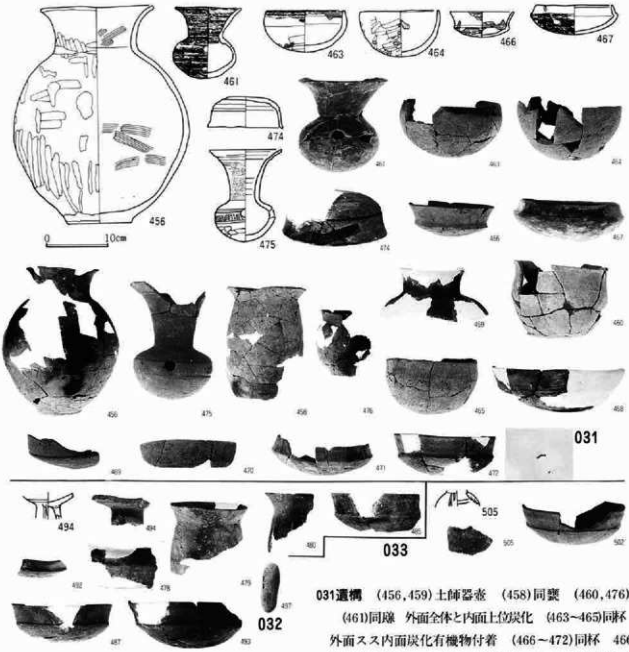
027遺構　(395)土師器小形甑？　(397,399～401,403,404)同杯　(410,411)粗製小形土器　(413)粘土塊一括

028遺構　(415,417)土師器甕　(419,420)同杯

029遺構　(423,424)土師器甕　(438)同杯

030遺構　(443)土師器椀　(444～446)同甕　(447,448,450,452)同杯　(454)小形粗製土器　(455)円筒形自然石

5 遺構に伴わない遺物 竪穴住居投棄遺物031～033遺構

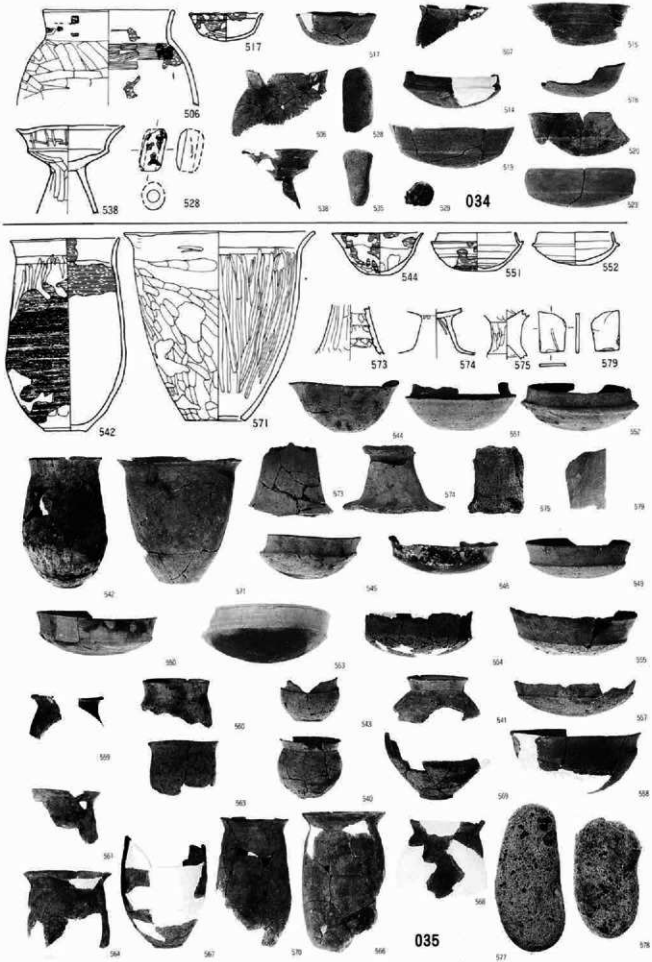


031遺構 (456,459)土師器壺 (458)同甕 (460,476)同小形甕 (461)同瓮 外面全体と内面上位炭化 (463～465)同杯 463,464 外面スス内面炭化有機物付着 (466～472)同杯 466内外面炭化有機物付着 467外面下位炭化 (474)須恵器壺 (475)同瓮 この竪穴へは土器が大量に投棄された 瓮形など特徴的である

032遺構 (477)土師器丸甕 (478～480)同甕 (485,487,492,493)同杯 (494)須恵器高杯 (497)円筒形自然石

033遺構 (502)土師器杯 (505)小形粗製土器

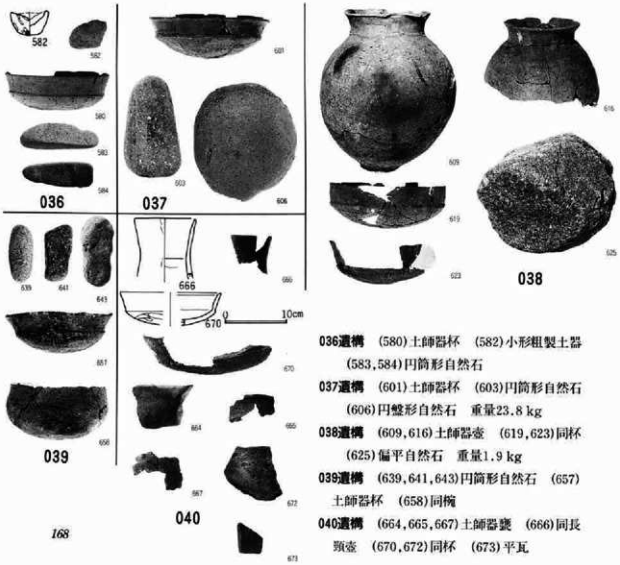
5 遺構に伴わない遺物 竪穴住居投棄遺物034～035遺構



5 遺構に伴わない遺物 竪穴住居投棄遺物034～040遺構

034遺構(前頁) (506)土師器丸甕 内外面炭化有機物付着 (507)同甕 (514,515,517～520,523)同杯 517内外面に炭化有機物付着 (528)土製轆羽口か 酸化焼成外面スス付着 (529)鉄滓 (535)円筒形自然石 (538)土師器高杯
この竪穴へは他に土製玉(539)が投棄された

035遺構(前頁) (540)土師器小形甕 (541)同壺 (542,559,560,561,563,564,566～570)同甕 (542)外面スス内面炭化有機物付着 (543)同小形甑 (544)同椀 内外面炭化有機物付着 (545,546,549,550,553～555,557,558)同杯 (551,552)須恵器杯 (551)外面炭化有機物付着 (571)同大形甑 使用痕不明 (573,574,575)同高杯 (577,578)円筒形自然石 (579)石板
この竪穴への土器の投棄も甕類を中心に大量である もちろん579は古墳時代のものではなく 近代のものである なお034遺構の出土遺物土師器小形甕(562)は この竪穴への投棄破片と接合したため 同遺構に伴わない可能性がある



036遺構 (580)土師器杯 (582)小形粗製土器 (583,584)円筒形自然石

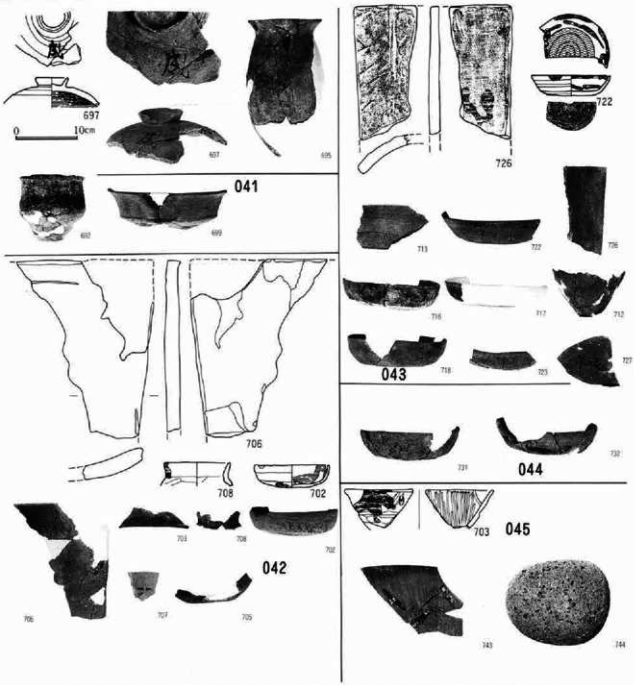
037遺構 (601)土師器杯 (603)円筒形自然石 (606)円盤形自然石 重量23.8 kg

038遺構 (609,616)土師器壺 (619,623)同杯 (625)偏平自然石 重量1.9 kg

039遺構 (639,641,643)円筒形自然石 (657)土師器杯 (658)同椀

040遺構 (664,665,667)土師器甕 (666)同長頸壺 (670,672)同杯 (673)平瓦

5 遺構に伴わない遺物 竪穴住居投棄遺物041～045遺構



041遺構 (692)土師器小形甕 (695)同甕 (697)須恵器墨書蓋「成」字 焼成やや酸化ぎみで軟質 内面スス炭化有機物付着 (699)土師器杯

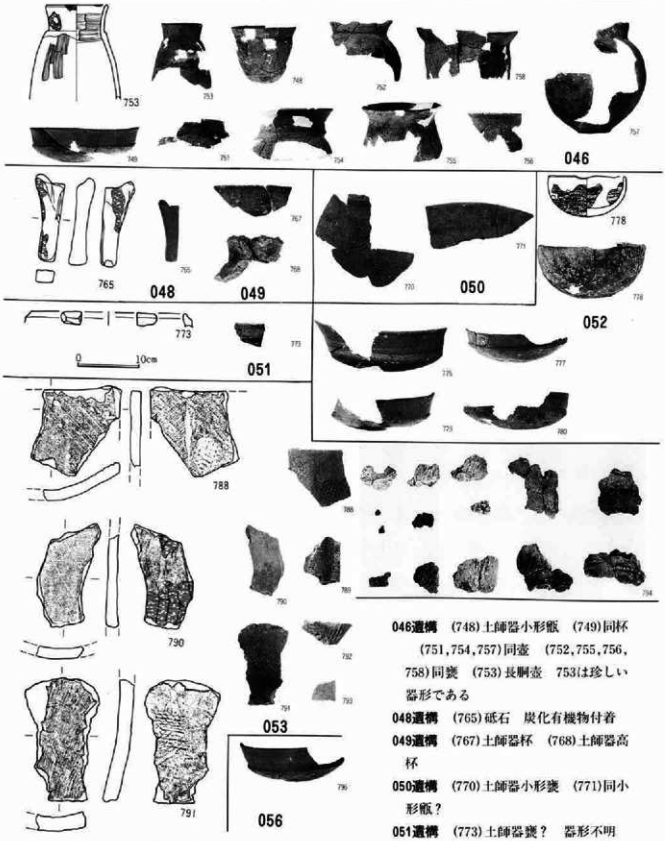
042遺構 (702)土師器杯 内外面炭化有機物付着 (703)同甕 (705)須恵器杯 (706,707)平瓦 (708)土師器小形甕 外面炭化有機物付着

043遺構 (712,713)土師器甕 (716～718)同杯 (722)須恵器杯転用硯 見込み摩耗痕 内外面スス付着 (723)須恵器杯 (725)平瓦 (726)丸瓦 内面スス付着 (727)須恵器甕

044遺構 (731,732)土師器杯

045遺構 (743)土師器壺 外面スス付着 内面研磨痕(744)小判形自然石 重量0.8 kg

5 遺構に伴わない遺物 竪穴住居投棄遺物046～056遺構



046遺構 (748)土師器小形甕 (749)同杯 (751,754,757)同壺 (752,755,756,758)同甕 (753)長胴壺 753は珍しい器形である

048遺構 (765)砥石 炭化有機物付着

049遺構 (767)土師器杯 (768)土師器高杯

050遺構 (770)土師器小形甕 (771)同小形甕?

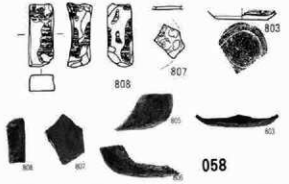
051遺構 (773)土師器甕? 器形不明

052遺構 (775,777,779,780)土師器杯 (778)同椀 内外面スス付着

053遺構 (788～793)平瓦 790は裏側に炭化有機物付着 (794)土製輪羽口 鉄滓(318) 鉄小片(319)も投棄遺物に見られる (掲載せず)

056遺構 (796)土師器杯

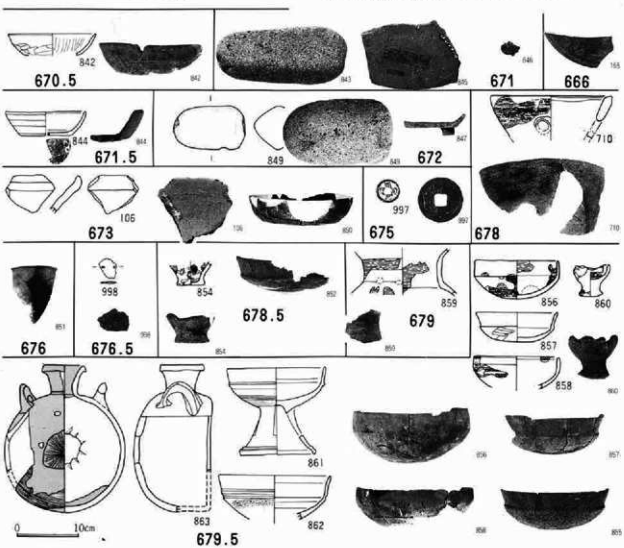
5 遺構に伴わない遺物 竪穴住居投棄遺物058遺構



058遺構 (803)須恵器杯　酸化焼成　(805,806)土師器杯　(807)同暗文杯　螺旋花文状　(808)砥石　スス付着

6遺構外遺物

調査時に用地路線区で取り上げたため、その順に南東側から記す。( ) 内は座標区画



666(F3) (165)瓦質土器火鉢？　**670.5(D4)** (842)土師器杯 (843)円筒形自然石　**671(E5)** (845)須恵器甕　削り調整　(846)鉄滓　**671.5(E5)** (844)土師器杯　**672(D5)** (847)須恵器椀 (849)円筒形自然石　**673(D5)** (106)瓦質土器鉢　(850)土師器杯　**675(D5)** (997)銅銭　熙寧元宝　**676(C6)** (851)土師器小形甑　**676.5(C6)** (998)紡錘車形鉄製品　**678(B6)** (710)瓦質土器火鉢？　外面スス付着　**678.5(B6B7)** (852)土師器杯 (854)小形組製土器　内外面炭化有機物付着　**679(B7)** (859)土師器壺　**679.5(B7)** (855～858)土師器杯　856,858にはスス付着　(860)小形組製土器　スス付着　(861,862)須恵器高杯　(863)須恵器提瓶　厚く自然釉かかる　861,862,863の須恵器は　065遺構と041遺構の中間から出土

6　遺構外遺物

680.5（Ｂ7）　(864)須恵器椀　(865)円筒形自然石

681(Ｂ7Ｂ8)　(866)土師器壺　コバメ調整　(867)土師器椀　(868)土師器小形壺　コバメ調整　(974)　鉛鉄砲玉　(999)銅銭　文久永宝

681.5(Ａ7)　(869)須恵器甕

682(Ｂ8)　(244)瀬戸美濃灰釉甕　(870)須恵器杯

683(Ｂ8)　(872)土師器甕　コバメ調整

683.5(Ａ8Ｂ8)　(871)土師器壺　コバメ調整　(873)土師質土器杯

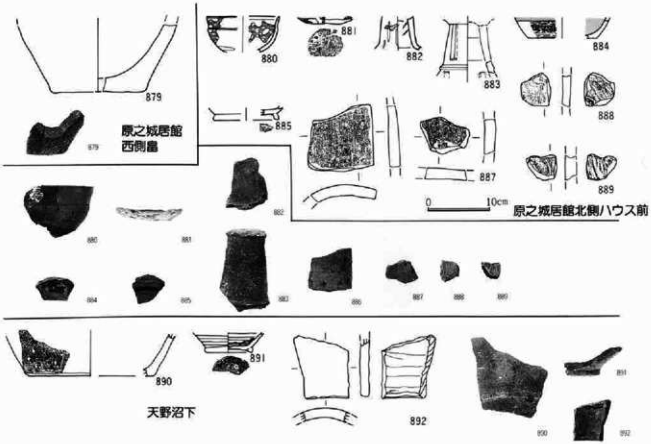
出土位置不明　(841,874,875,878)土師器杯　841は暗文　(877)須恵器杯転用硯　見込み摩耗スス付着

北西側低地試掘　(314)磁器五彩上絵椀

破片総数（路線区669欄には669と669.5を含めた数を記す）

路線区	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683
土師器甕	4	114	297	83	30	22	218	129	170	578	573	130	252	101	91
土師器杯	6	105	79	60	19	17	76	151	90	324	440	72	30	18	4
須恵器甕		5			1	1	6	6					1	2	1
須恵器杯		20	63	28	7	1	4		16		45	1	1	2	
中世以降					2									2	

6　遺構外遺物（周辺表採資料）



原之城居館西側畠　(879)石鉢

原之城居館北側ハウス前　(880)土師器杯　炭化有機物付着　(881)土師質土器杯　炭化有機物付着　(882)土師器高杯　(883)須恵器高杯　(884)瀬戸美濃柿釉鍋　ス付着　(885)須恵器椀　(886,888,889)円筒埴輪　(887)彩象？埴輪

破片総数　土師器甕72　杯24　須恵器甕1　杯5　埴輪3

天野沼下　(890)須恵器甕　(891)須恵器椀　炭化有機物付着　(892)丸瓦

破片総数　土師器甕7　杯4

資料編

縄文時代の遺構と遺物

ここに示す資料は、八寸大道上遺跡調査によって得られた多数の遺構・遺物を網羅的に掲載している。

遺構については、縄文時代に使用されたか、もしくはその可能性が高いもの全てについて報告している。

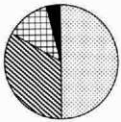
遺物については、各時期、各種類の土器・石器類を図示している。

ここに、資料報告した諸資料は、群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。

集石遺構

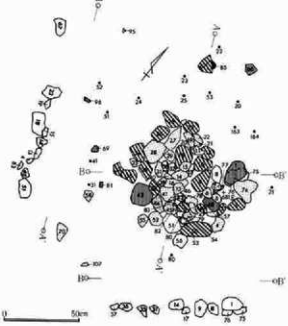
被熱礫が集積された状態で検出された一群の遺構を集石遺構としてあつかった。縄文時代の遺物包含層を調査する過程で検出され、計14基存在する。各集石下には土坑は認められていないが、いずれの礫もローム層をやや削り込んで検出されていることからみて、浅い土坑を伴う可能性が高い。礫は、火熱により赤化もしくは破砕したものが多い。赤化状態をみると、全面におよぶものもみられるが、部分的に赤化したものが多い。このことは、礫が置かれた状態で火熱を受けた結果とみられ、集石遺構の使用方法を考える上で参考となろう。

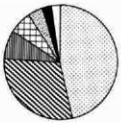
147遺構



礫はほとんどが赤化している。中にはスス状の付着物も認められる。赤化のしかたは、礫の一部のみのものもみられ、置かれた状態で加熱されたことを示している。

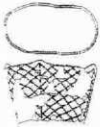
148遺構

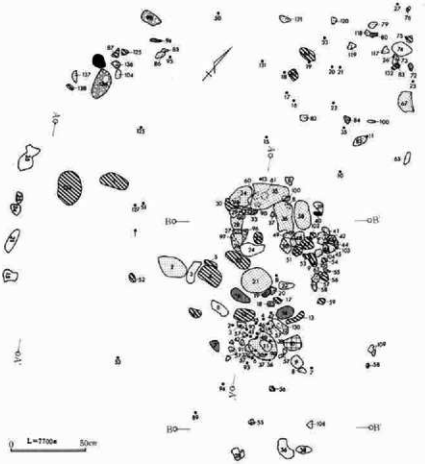




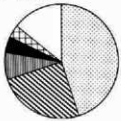
礫はほとんどが赤化している。使用礫の総重量はおよそ50kgと今回調査された集石遺構の中では大型の部類である。礫は粗粒安山岩および溶結凝灰岩が主体を占める。

149遺構





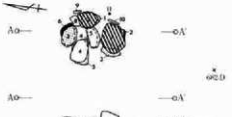
149遺構出土土器（1575）

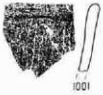


今回検出された集石遺構の中で最も規模の大きなもので、使用礫の総重量は約70kgにおよぶ。礫も広く分布し、集中部分には石組み状の構造ともみられる部分もあり、注目される。また、この遺構からは、鶴ヶ島台式土器の底部欠存する深鉢形土器が出土している。

150遺構

10個程度の礫で構成される比較的小規模の集石遺構である。礫材は、粗粒安山岩、溶結凝灰岩、ホルンフェルス、砂岩が用いられている。

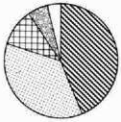




150遺構出土土器（1001）

撚糸文系土器の口縁部片。単軸絡条体Ⅰ類でRが粗く巻かれる。

151遺構



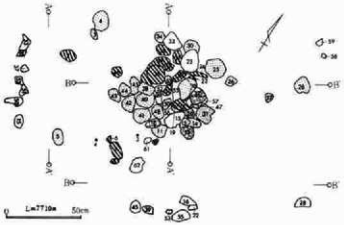
使用礫の総重量約30kgと中程度の規模の集石遺構である。焼礫の集積部周辺にも焼礫が散布している。

151遺構出土土器（1002）

細隆線による区画文内に沈線文が加えられる。また、文様の交点には円形竹管による刺突文が付される。胎土には繊維が混入する。鵜ヶ島台式土器の胴部片。

1002

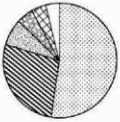
152遺構



1003

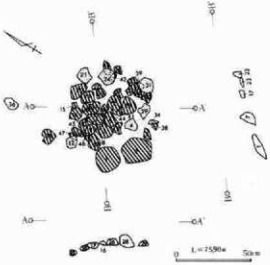
152遺構出土土器（1003）

撚糸文系土器の口縁部片。単軸絡条体Ⅰ類で、Rが巻かれる。

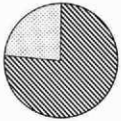


使用礫の総重量約30kgと151遺構と同程度の規模をもっているが、用礫の集中度は本遺構の方が高い。礫はかなり赤化、破砕しており、火熱を受けた痕跡が明瞭に残っている。

153遺構



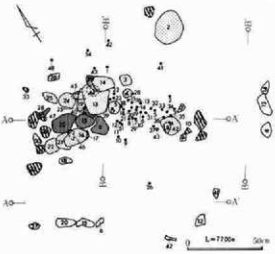
使用礫の総重量は20kg程度で、中規模の集石遺構である。礫材は、溶結凝灰岩と粗粒安山岩により構成され、他の石材を含まない。

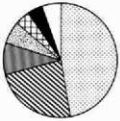


153遺構出土土器（1004、1005）

口唇部内側に面をもち、半裁竹管による刺突文が加えられる。口縁部文様帯は平行線、単一沈線により構成される。口縁部に沿って平行線文が巡り、その下に単一沈線による格子状文が施される。

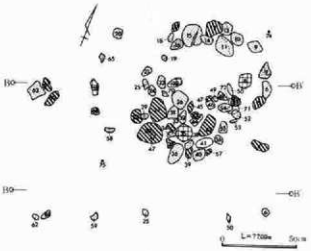
154遺構

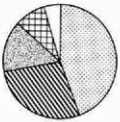




使用礫の総重量は約20kgで中程度の規模をもつ集石遺構である。集積状態をみるとやや分散的で、広がりをもっている。礫はいずれも赤化しており、火熱を受けている。

155遺構



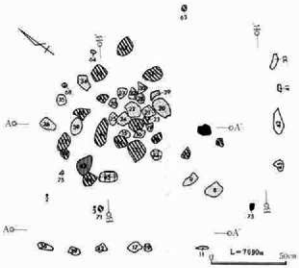


使用礫の総重量は30kg程度と中規模の集石遺構である。集積状態をみると、中央に礫の欠除する部分があり、石組炉状の構成が認められる。

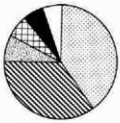
155遺構出土土器（1006）

条痕文系土器の胴部片。明瞭な文様はみられないが、粗い条痕文が加えられている。

156遺構



礫の集積状態をみると、やや分散的で、集中度は低い。礫はいずれも赤化、破砕しており、火熱が加えられた痕跡が残る。



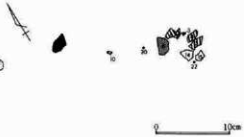
156遺構出土土器（1007）

細隆線による区画文内に棒状施文具による沈線が施される。文様の交点には円形文が付される。

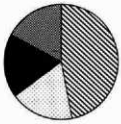
157遺構

使用礫の総重量は約8kg程度と小規模な集石遺構である。礫材は、溶結凝灰岩、粗粒安山岩、黒色頁岩、ホルンフェルスが用いられている。

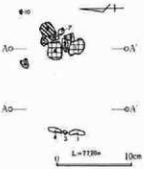
158遺構

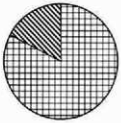


構成礫は10個程度で極めて小規模な集石遺構である。周辺にも焼礫の散布が認められていることから、本来の集積状態は失なわれているものとみられる。



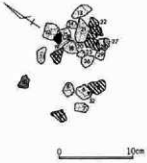
159遺構

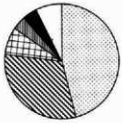




158遺構同様に小規模な遺構であるが、集中度はやや高い。礫材はチャート、溶結凝灰岩により構成される。

160遺構





使用礫の総重量は10kg程度と中規模の集石遺構である。礫材はグラフに示す通りである。

1008

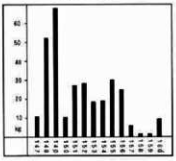
加曽利E4式土器の胴部片。縄文はRLである。

1009

撚糸文系土器の胴部片。Rが巻かれる。

159遺構出土土器（1008）

重量グラフ



160遺構出土土器（1009）

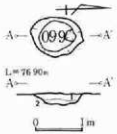
凡例　各集石遺構の用礫石材グラフのスクリーントーンは次の石材を表示している。

土坑

土坑については、所属時期を決定する情報に乏しく、用途を含め不明な遺構が多い。ここに示す土坑も、縄文時代の土坑と確定する積極的な資料に乏しいかもしれないが、遺構内から土器もしくは石器等が出土したものをまとめている。これらの分布状況をみると台地縁辺部に集中する傾向がうかがわれ、集石遺構の分布と類似している。集石遺構との関連を示すような調査所見は得られていないものの、この分布状況からも、縄文時代に存在した可能性が高いようにみられよう。

099遺構

平面形は円形をなし、径は50cm、深さ10cmである。埋没土は2層に分層された。この埋没土中から縄文土器小片が出土している。底面に小穴がみられるが、この遺構とは関連しないものであろう。

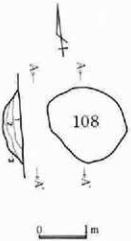


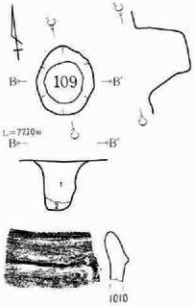
108遺構

109遺構に東接するが、重複関係はない。平面形は円形で径80cm、深さ40cm程度である。埋没土は3層に分層され、埋没土中より加曽利E4式土器の口縁部片（1010）が出土している。

109遺構

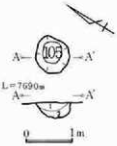
108遺構に近接する円形の土坑である。径70cm、深さ60cmで、埋没土中より縄文土器片が出土している。





108遺構出土土器（1010）

隆起線文による区画文が加えられ、整形は良好である。



105遺構

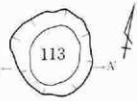
平面形はほぼ円形で、径60cm、深さ30cmである。埋没土中より縄文片（1011）が出土している。

105遺構出土土器(1011)

LR縦位の縄文を施した胴部片で、加曽利E式土器に相当しよう。

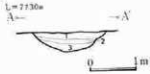
113遺構

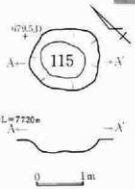
径1.8mのほぼ円形をなし、深さは40cm程度をはかる。



115遺構

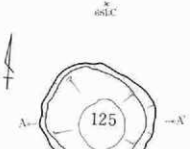
径1.4mのほぼ円形をなし、深さは約30cmである。

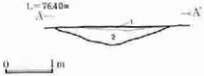




115遺構出土土器(1012)

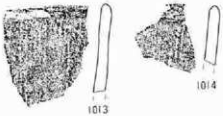
縄文はＲＬ縦位で施文は浅い。加曽利Ｅ式土器に相当しよう。





125遺構

平面形は円形で、径2.2m、深さ40cmで、すり鉢状の断面形をなす。

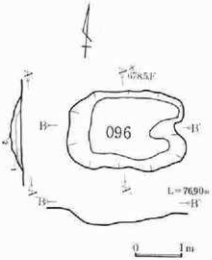


125遺構出土土器（1013、1014）

撚糸文系土器口縁部片である。いずれも単軸絡条体Ｉ類でＲがやや粗く巻かれる。

096遺構

平面形は2.4m×1.6mの長方形をなし、深さは20cmである。埋没土中から縄文土器片（中期）が出土している。

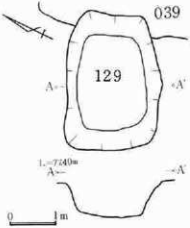


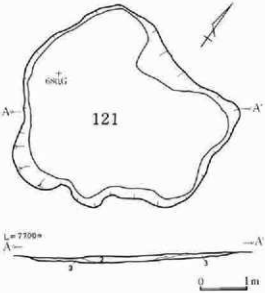
096遺構出土土器（1015）

ＬＲ縦位の縄文が施される胴部片。加曽利Ｅ式土器に相当しよう。

129遺構

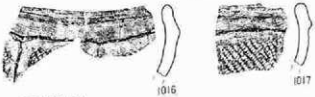
長軸2.8m、短軸2mと大型の長方形土坑で、深さは80cmである。埋没土中に縄文土器片が含まれる。





121遺構

長軸2.4m、短軸1.8mの不整円形土坑である。深さは20cmと浅い。



121遺構出土土器（1016、1017）

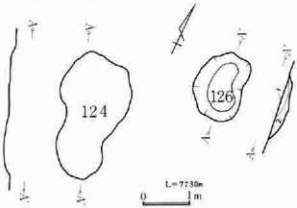
いずれも加曽利E４式土器の口縁部片である。隆起線文による区画文内にＲＬ縦位の縄文が加えられる。

124遺構

平面形は不整形をなし、深さも浅く不明瞭であるが、形状からみると、２基が重複している可能性がある。

126遺構

124遺構に近接する。1.6m×1mの不整円形をなし、深さは20cm程度である。



124遺構出土土器（1018）

ＬＲ縦位の縄文の加えられた胴部片である。加曽利E式土器に相当しよう。

126遺構出土土器（1019）

ＲＬ縄文が施される胴部片。加曽利E式土器に相当しよう。

□ 包含層の遺物

○ 縄文土器

調査によって得られた縄文土器は総数 6,290点におよび、早期、前期、中期、後期の各期にわたる。時期ごとの出土量は多くないが、比較的まとまりのある資料が得られている。以下、分類しその概要をみるものとしたい。分類にあたり、各群ではほぼ時期毎とし、さらに部位、器形、文様、縄文などの特徴により類、種とした。各群の時期は次のとおりとした。**第Ⅰ群** 早期前半撚糸文土器群、**第Ⅱ群** 早期中葉沈線文土器群、**第Ⅲ群** 早期後半条痕文系土器群、**第Ⅳ群** 前期、**第Ⅴ群** 中期、**第Ⅵ群** 後期に相当する。

○ 第Ⅰ群土器（第1・2図）

早期前半撚糸文土器群を一括する。小片がほとんどであり、完形もしくは器形復元できる資料は得られていない。部位形態、縄文などによって類、種別する。

1 類（1020～1093）　口縁部片をⅠ類とする。口唇部形態から次のa種からh種に分類する。

a 種（1020～1022）　口唇部が外反し、口唇上部に2帯の縄文帯および口縁部下より、横位の結条体回転が施される。

b 種（1023～1026）　外反する口唇部下に縄文帯が3帯にわたり施される。口唇部下は縄文施文される。

c 種（239～242）　口唇部は肥厚し、上部、外側および口唇下と各々結条体が回転施文される。

d 種（235、238、243）　口唇部および外側に面をもち、各々縄文が加えられる。口唇下も縄文帯となりJ—J—Jの組み合わせをもつ。

e 種（244～277）　形態的には前Dするものと肥厚する2形態がみられる。いずれも口唇下に結条体帯が施され、口唇上には加えられない。

f 種（1072～1090）　縄文、撚糸文とも認められない、無文の口縁部である。

g 種（1091、1092）　口唇下に撚糸圧痕文が一条加えられる。

h 種（1093）　口唇下に沈線もしくは凹面が加えられるものである。縄文、撚糸文ともみられない。

2 類（1094～1172）　胴部片を本類とする。単軸結条体Ⅰ類を縦位回転するもので、巻かれる条はRが圧倒的に多い。

a 種（1094～1171）　単軸結条体Ⅰ類を縦位回転する。巻きつける縄はRが用いられる。

b 種（1172）　〃　〃　L 〃

c 種（1158）　〃　〃　r 〃

d 種　無文もしくは擦痕をもつもの。

e 種　縄文の施されるもの。

3 類（1173～1175）　底部を一括する。3点出土しているが、いずれも実底である。

○ 第Ⅱ群土器（第3図1176～1185）

早期中葉沈線縄文土器を本群とする。29点出土している。面戸下層式土器に位置づけられる。

○ 第Ⅲ群土器（第3図1186～第4図、第5図）

早期後半条痕文土器群を本群とする。文様などにより次の7類に分類する。

1 類（1186～1230）　細隆起線による区画文内に外側竹管による沈線を充填し、交点に刺突文を加える。

2 類（1250～1261）　沈線（外側竹管）による区画文内に同一の沈線を充填し、交点に刺突文を加える。

3 類（1231～1249）　細沈線（ヘラ状工具）による区画文内に沈線（外側竹管）を充填し、刺突文を加える。

4 類（1269～1276）　沈線（外側竹管）による区画文内に刺突文を充填する。

5 類（1262～1268、1575）　沈線（外側竹管）による格子状文を施し、交点に刺突文を加える。

6 類（1282～1284）　条痕文をもつ口縁部片を一括する。

7 類（1285～1337）　条痕文をもつ胴部片を一括する。

○ 第Ⅳ群土器（第6図）

前期に属する土器を本群とし、次の3類が含まれる。

1 類（1338～1397）　繊維土器を本類とする。菱形状文および縄文を施す。

2 類（1398～1406）　胎土に繊維を含まない、集合条痕文をもつ土器である。諸磯C式土器に概当する。

3 類　胎土に繊維を含まない、縄文片を一括する。諸磯式土器の胴部片であろう。

○ 第Ⅴ群土器（第7図～第11図）

中期に属するものを本群とする。この中には五領ヶ台式土器（1類）、加曽利E式土器（2類）が含まれる。

1 類（1407～1456、1576）　中期前半五領ヶ台式土器を本類とする。

2 類（1457～1560、1577～1597）　中期後半加曽利E式土器を本類とする。出土した縄文土器中、最も量が多く、全体の70%を占める。文様の特徴から次の9種に分類する。

a 種（1457～1495）　沈線により文様を構成する。

b 種（1496～1509）　隆起線により文様を構成する。

c 種（1510～1514）　条痕文を施すもの。

d 種（1515～1541）　縄文片を一括する。

e 種（1543）　撚糸文片を一括する。

f 種（1544～1546）　無文の口縁部を一括する。

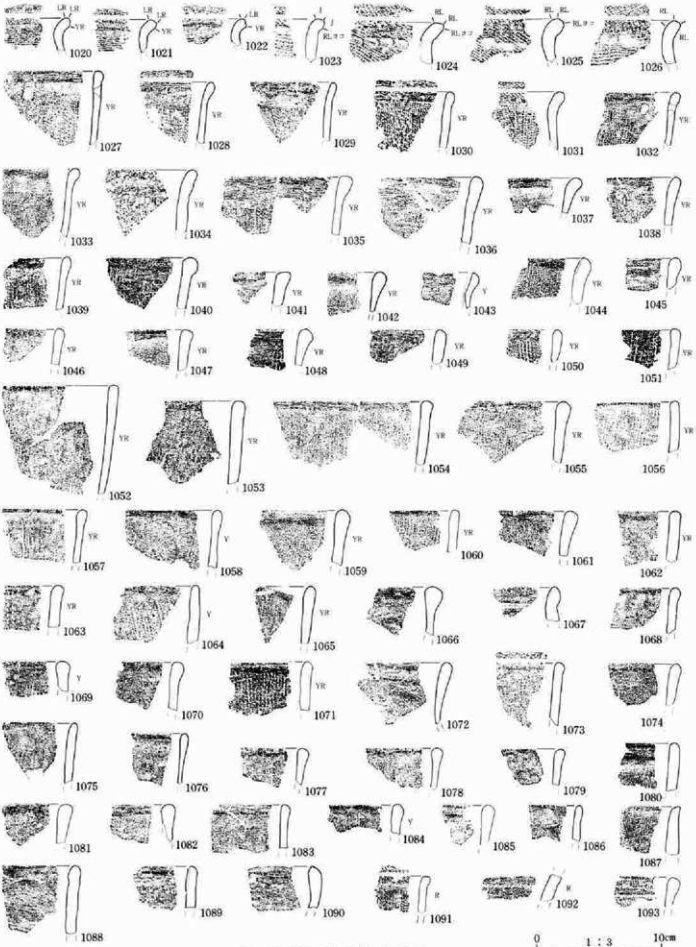
g 種　無文の胴部を一括する。

h 種（1548～1560）　刺突文の加えられる破片を一括する。主として口縁部片が含まれる。

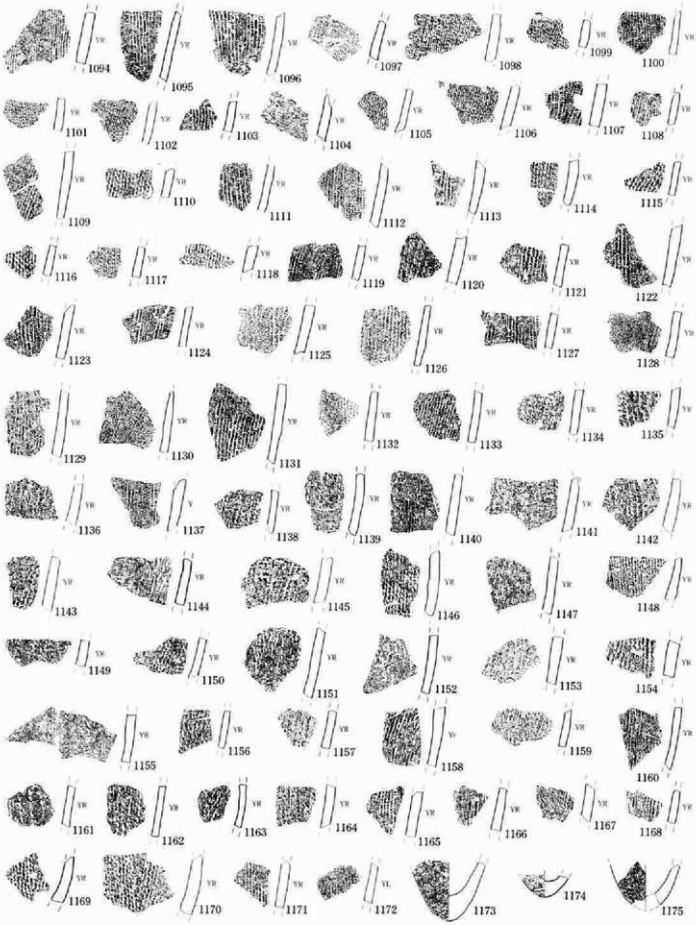
i 種（1561～1565）　底部を一括する。いずれも無文であるが、2類に伴うものとみられる。編代底となる例が目立つ。

○ 第Ⅵ群土器（第7図1566～1574、1598～1604）

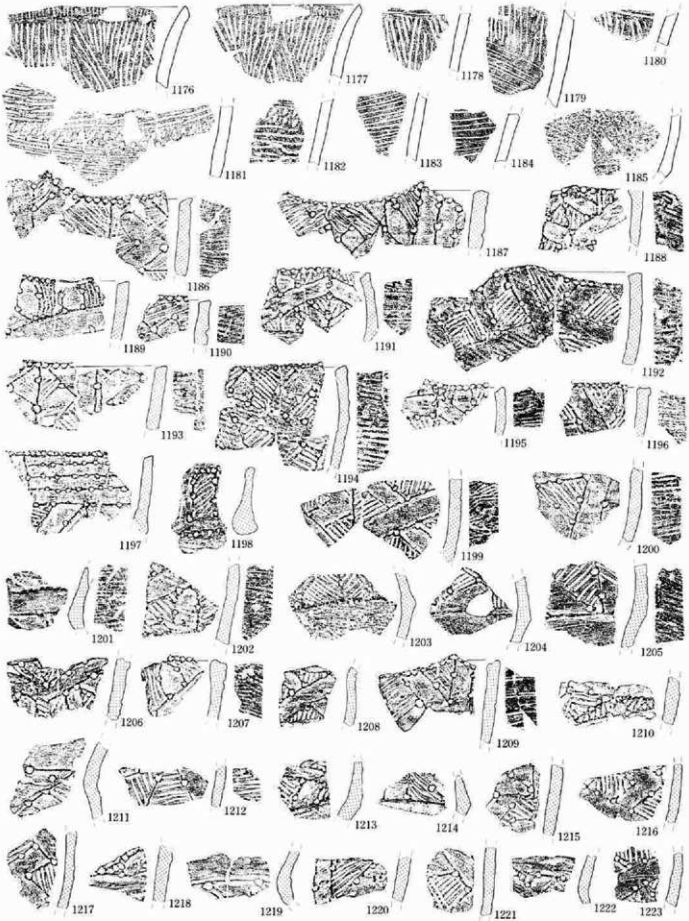
後期の土器を本群とする。量的には少なく、約50点出土している。いずれも加曽利B2式土器に相当しよう。



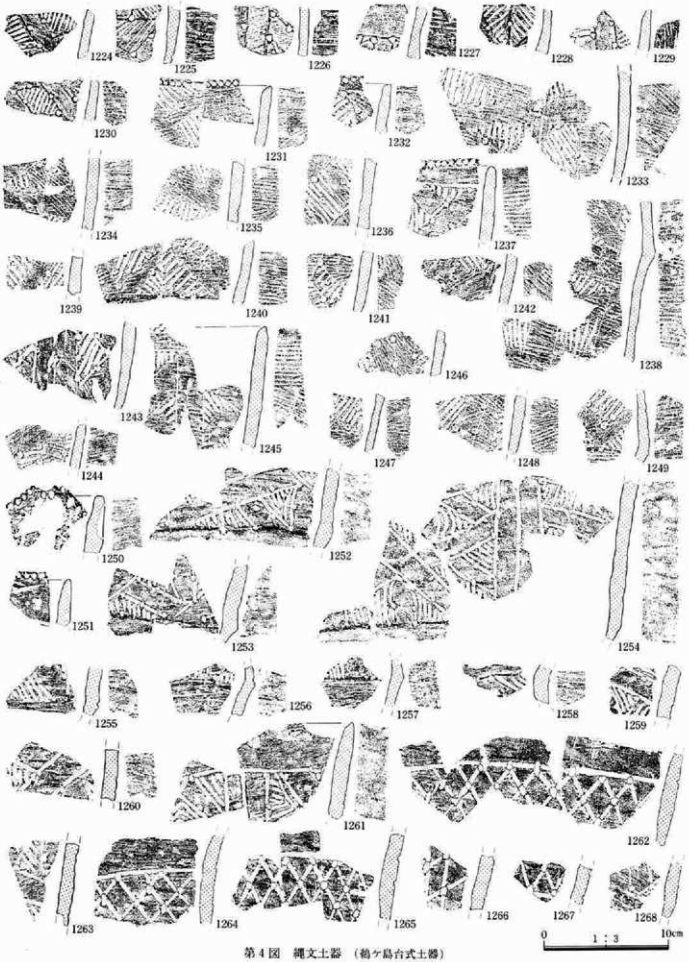
第1図　縄文土器（撚糸文系土器）



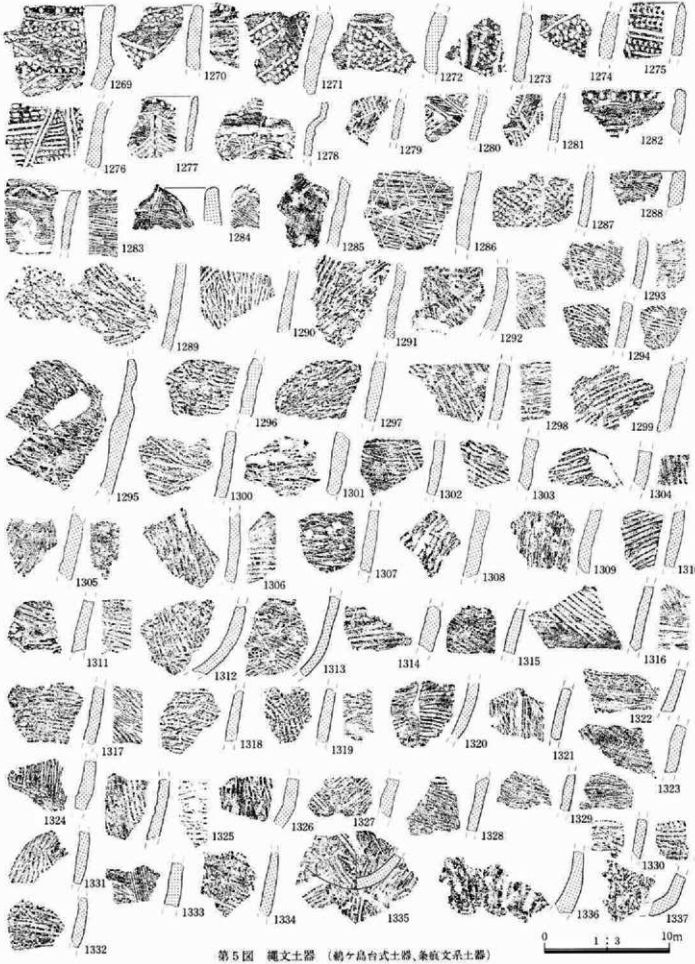
第２図　縄文土器（撚糸文系土器）



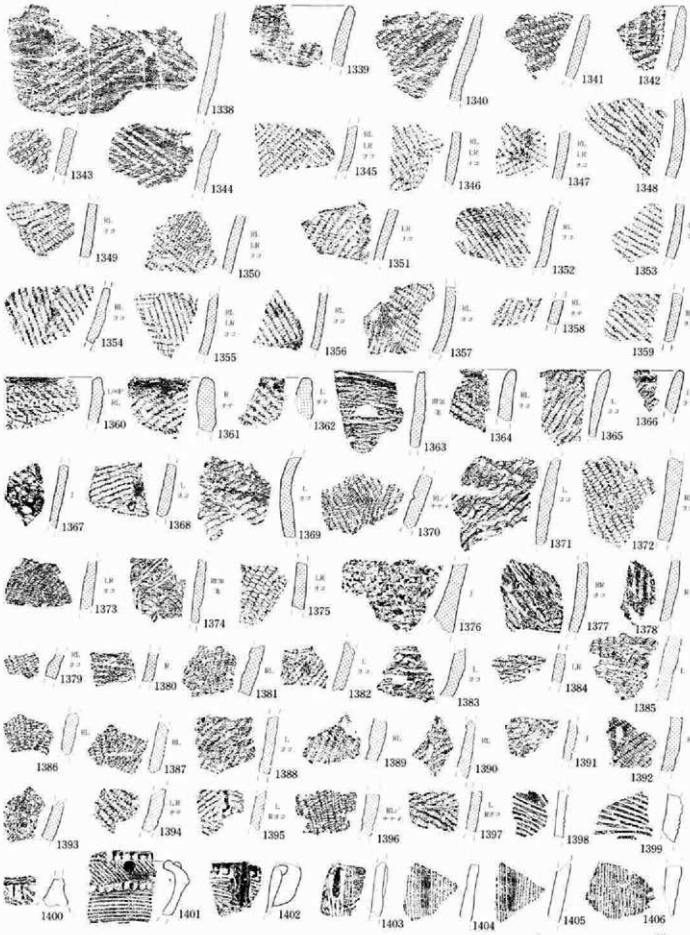
第3図　縄文土器（田戸下層式土器、菊ヶ島台式土器）



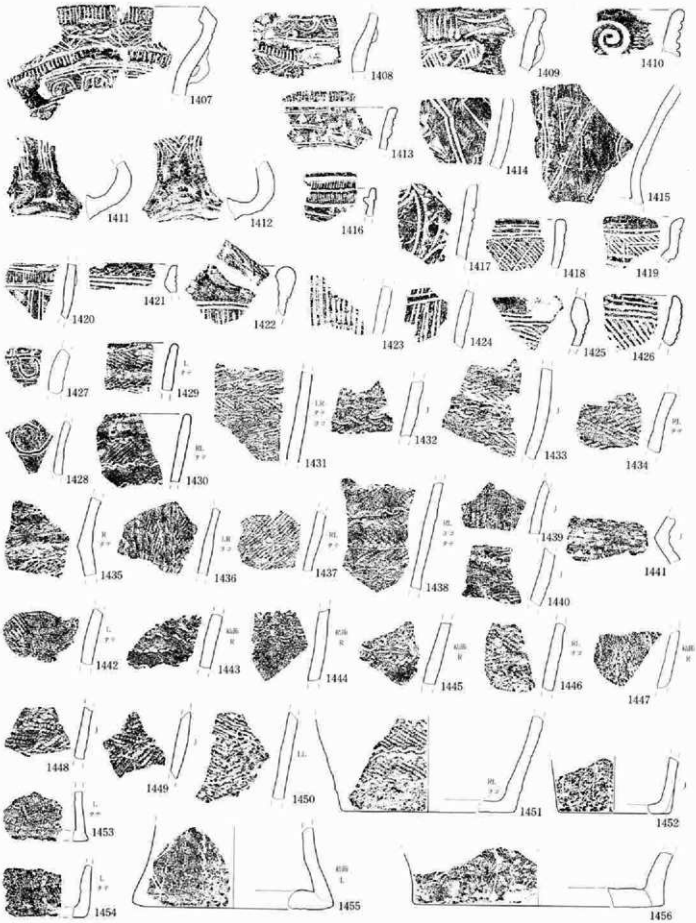
第4図　縄文土器（鵜ヶ島台式土器）



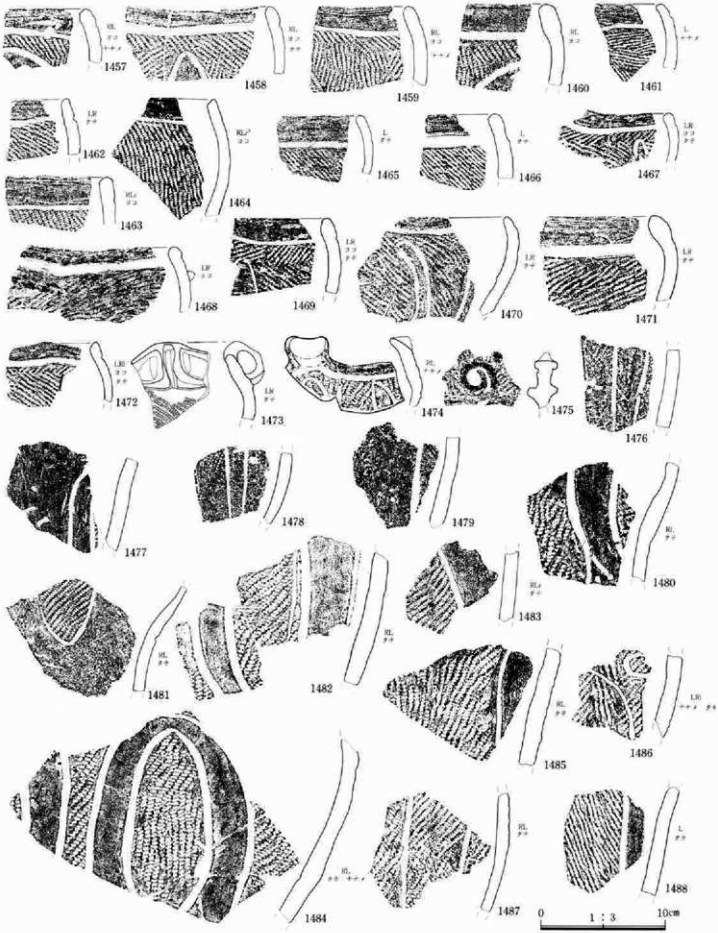
第5図　縄文土器（納ケ島台式土器、条痕文系土器）


1338
1339
1340
1341
1342
1343
1344
1345
1346
1347
1348
1349
1350
1351
1352
1353
1354
1355
1356
1357
1358
1359
1360
1361
1362
1363
1364
1365
1366
1367
1368
1369
1370
1371
1372
1373
1374
1375
1376
1377
1378
1379
1380
1381
1382
1383
1384
1385
1386
1387
1388
1389
1390
1391
1392
1393
1394
1395
1396
1397
1398
1399
1400
1401
1402
1403
1404
1405
1406
0
1：3
10cm

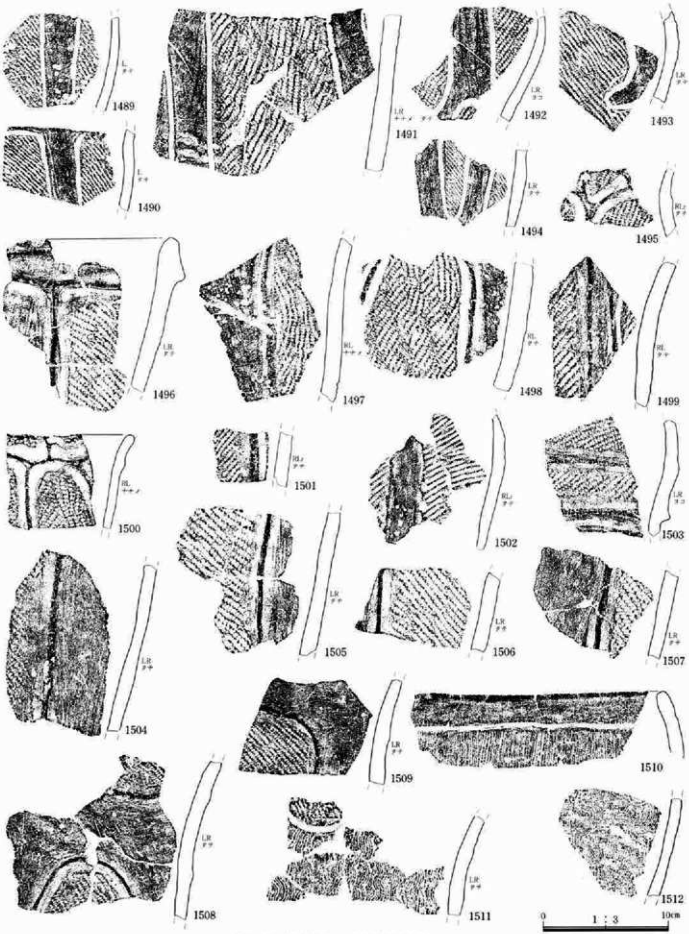
第6図　縄文土器（前期）



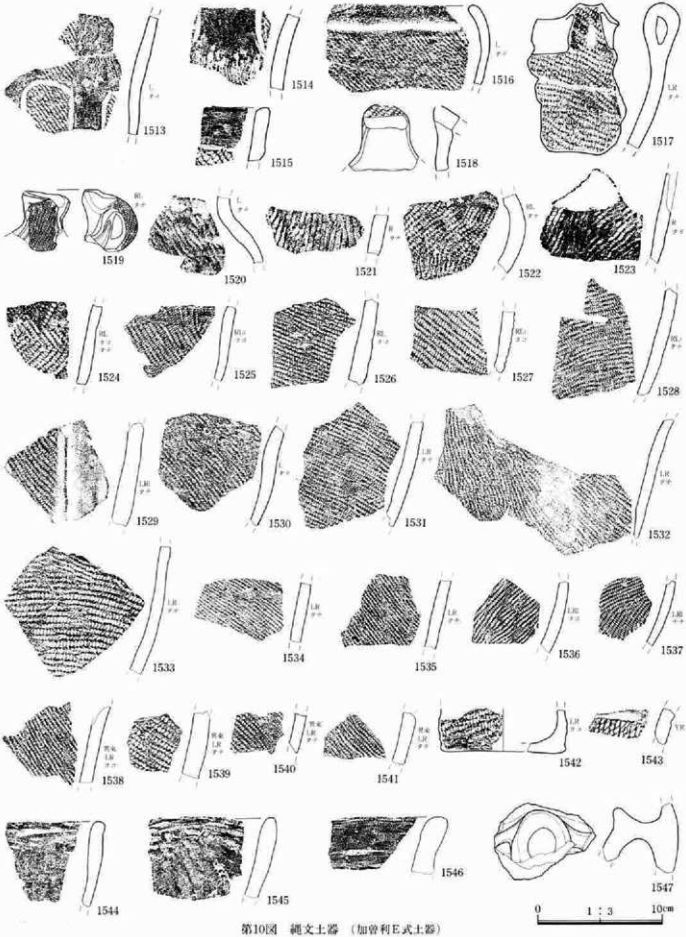
第7図　縄文土器（五領ヶ台式土器）



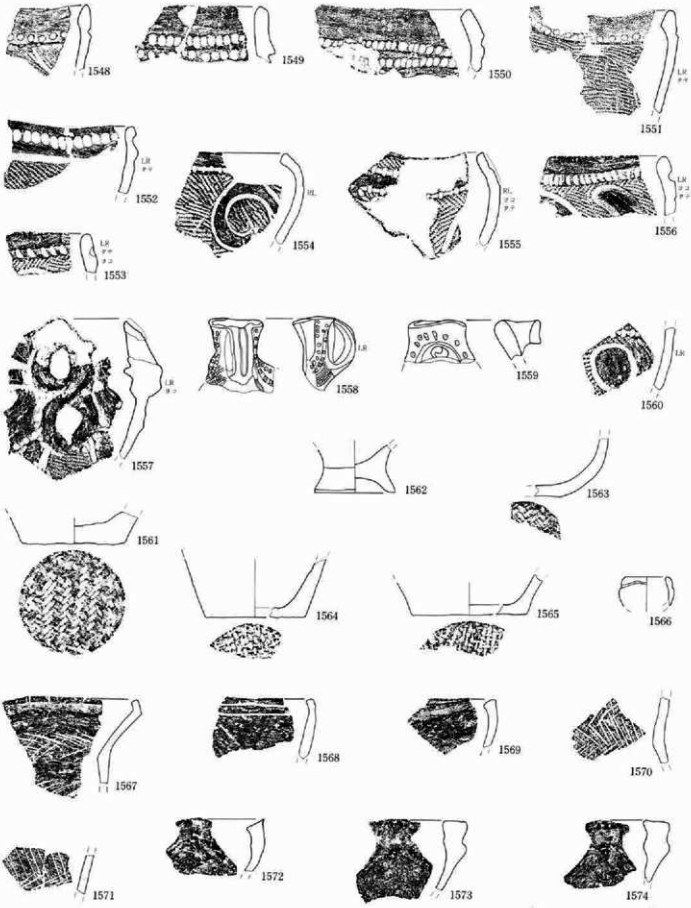
第８図　縄文土器（加曽利Ｅ式土器）



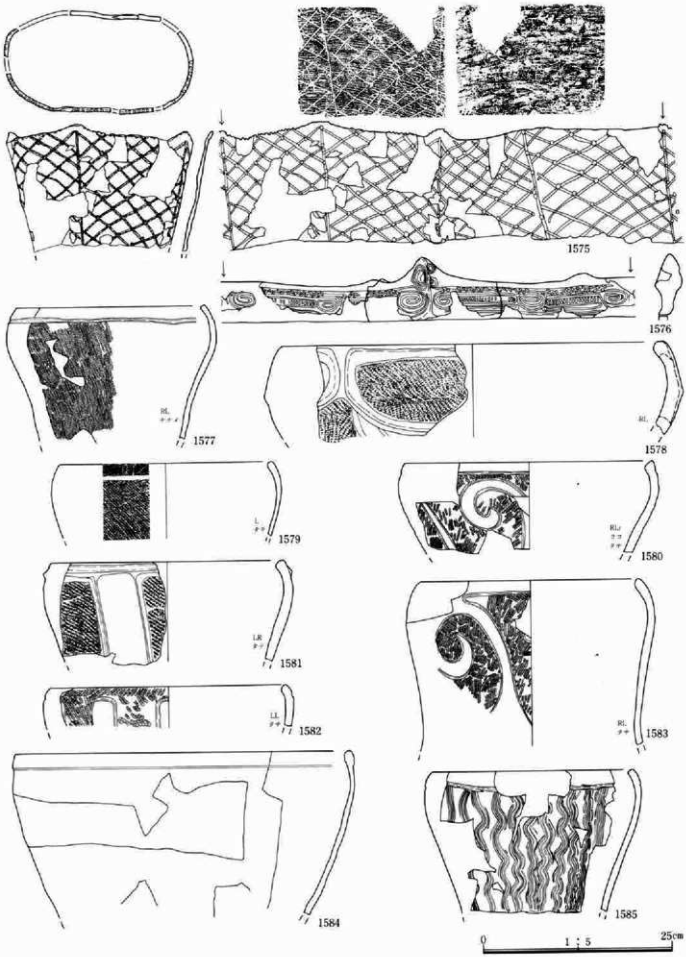
第9図　縄文土器（加曽利E式土器）



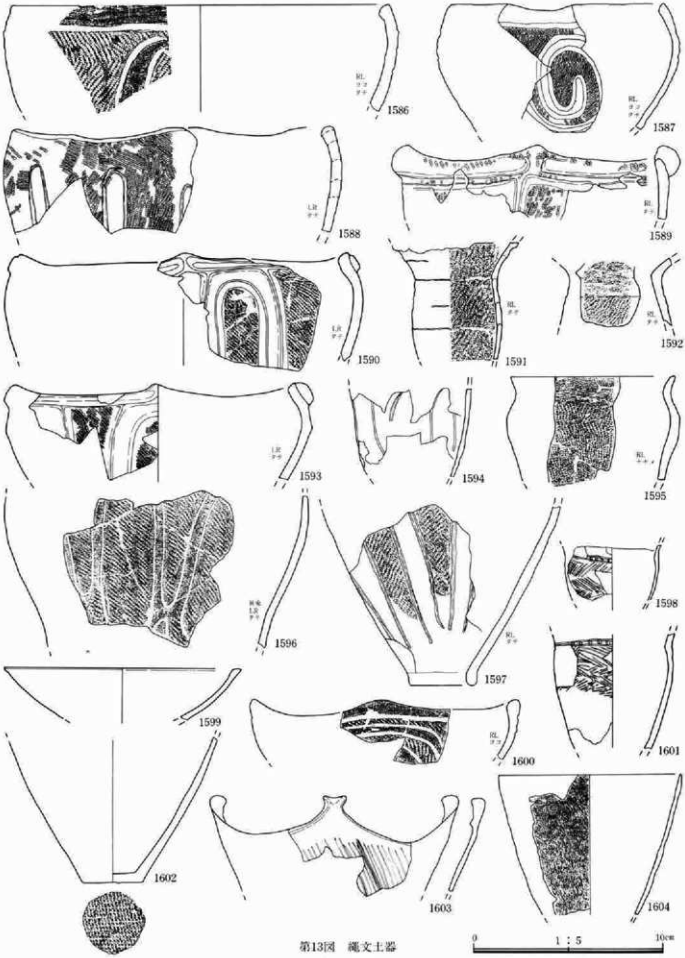
第10図　縄文土器（加曽利E式土器）



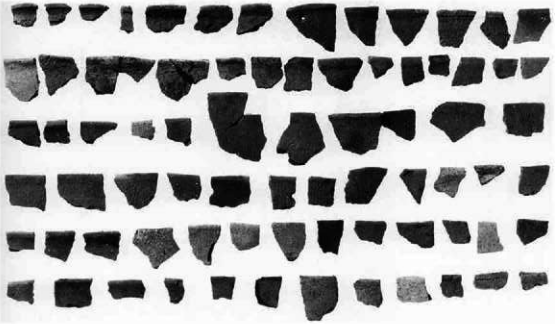
第11図　縄文土器（加曽利E式土器、加曽利B式土器）


1575
1576
1577
1578
1579
1580
1581
1582
1583
1584
1585
0
1：5
25cm

第12図　縄文土器


1586
1587
1588
1589
1590
1591
1592
1593
1594
1595
1596
1597
1598
1599
1600
1601
1602
1603
1604
0
1：5
10cm

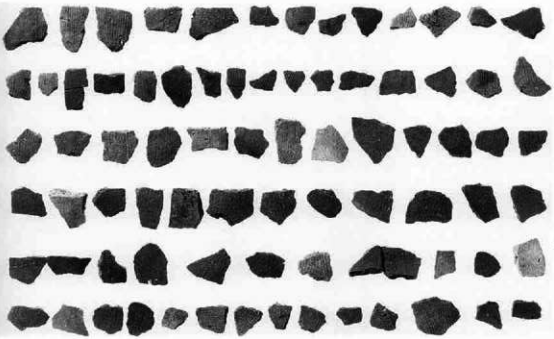
第13図　縄文土器



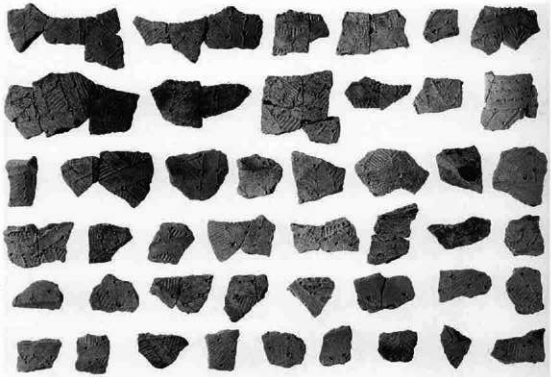
▲ 1020~1093

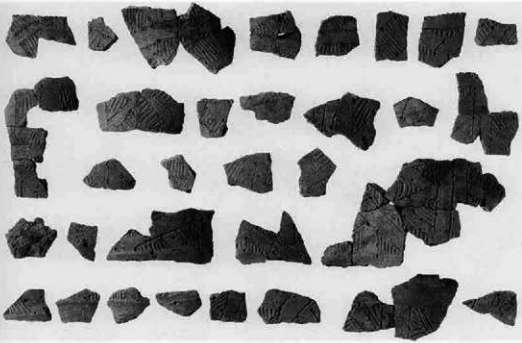
▲ 1176~1185

1094~1172 ▼



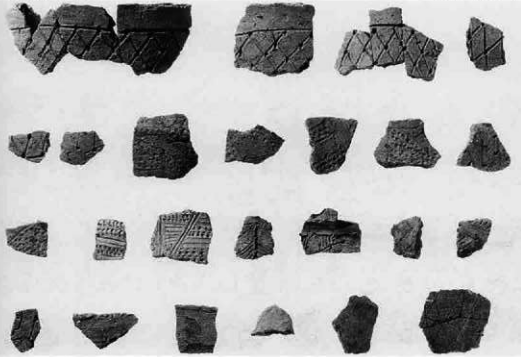
1186~1230 ▼

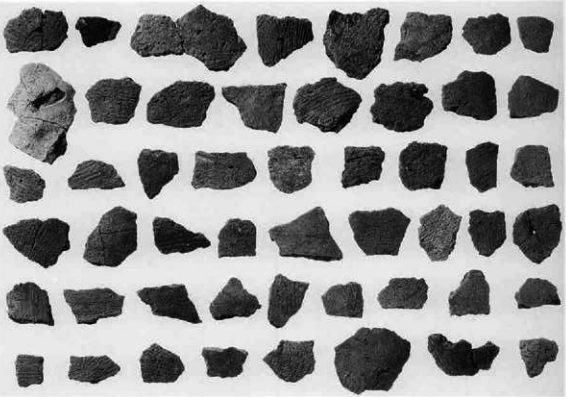




▲ 1231~1262

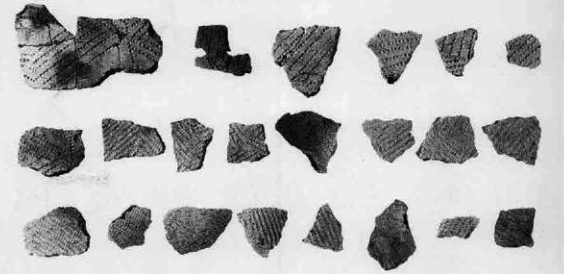
1263~1286 ▼

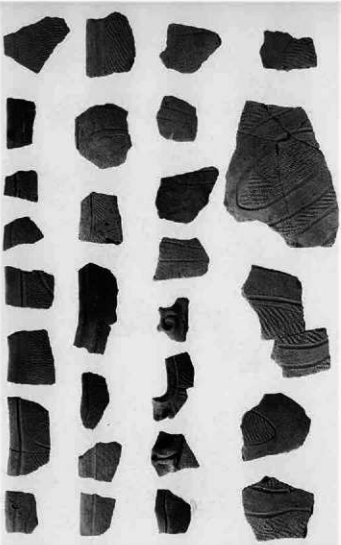




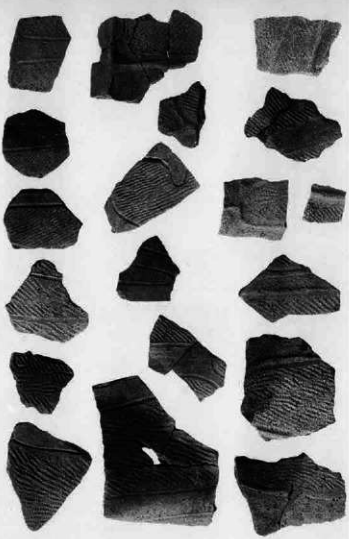
▲ 1287~1337

1338~1369 ▼

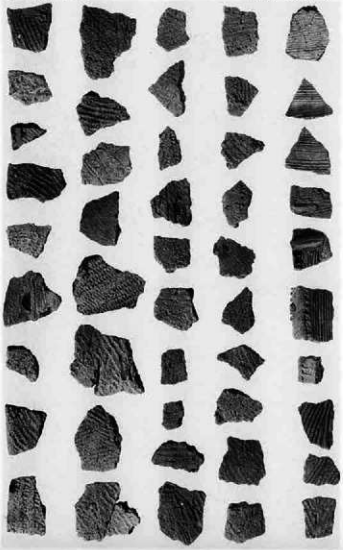


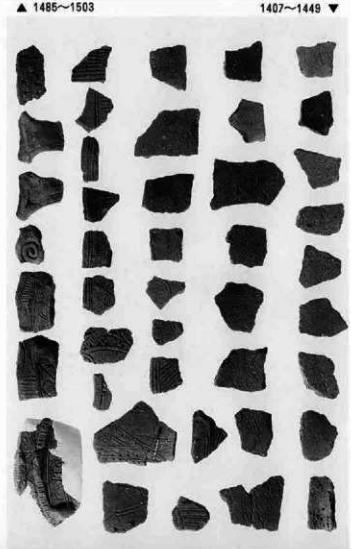


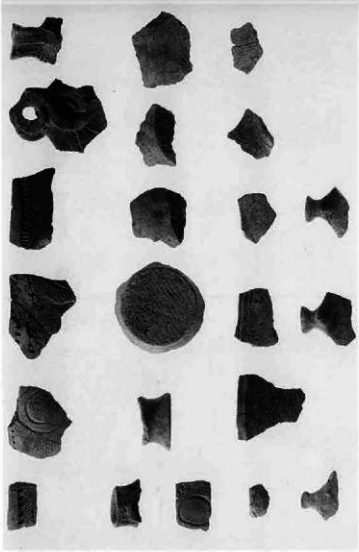
▲ 1459~1484 1360~1406 ▼

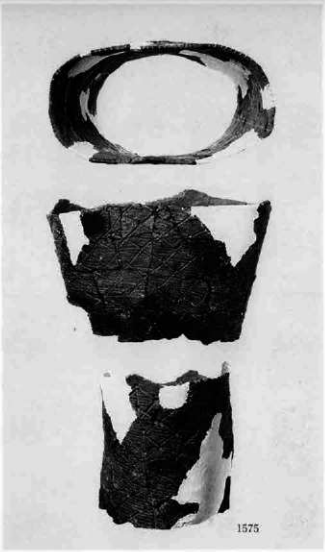


▲ 1485~1503 1407~1449 ▼





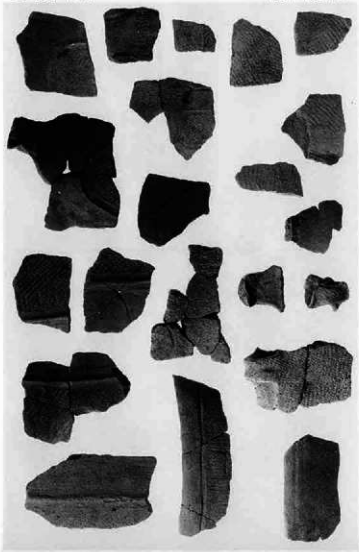


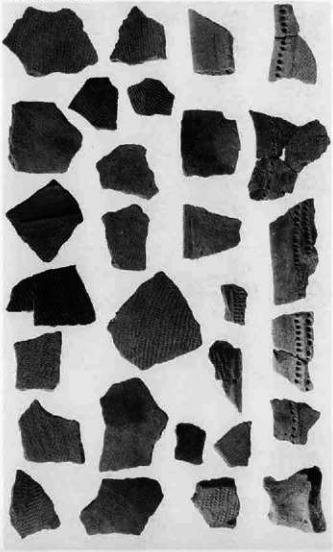


▲ 1553～1574

1504～1524 ▼

▼ 1525～1552





1576

1577

1580

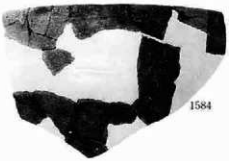
1578

1579

1581

1583

1582


1584

1585

1588

1589

1587

1593

1591

1590

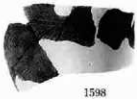
1594

1597

1596

1599

1601


1598

1600

1602

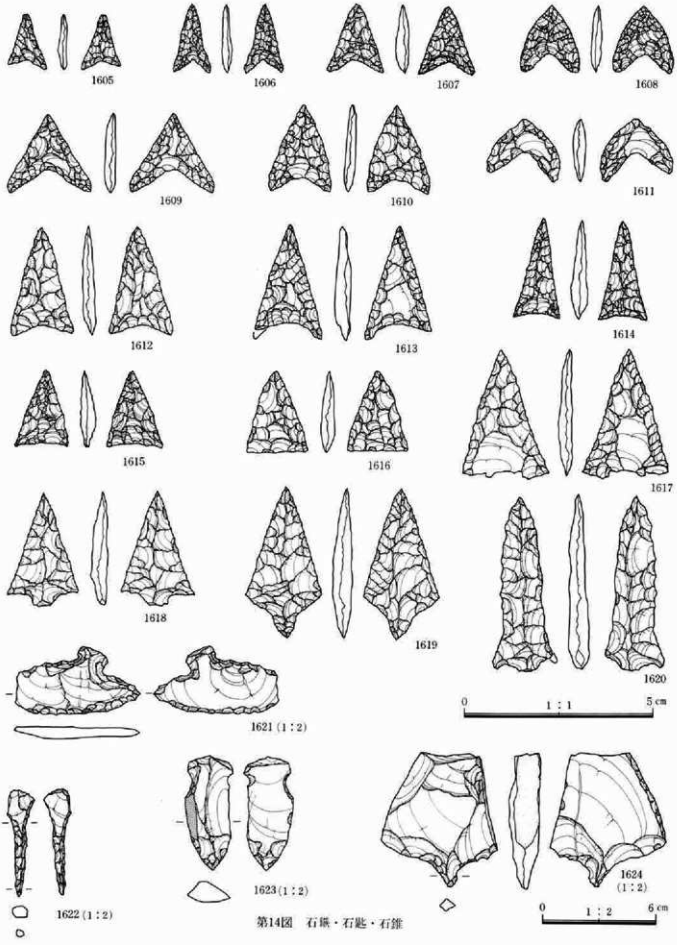
1603

1604

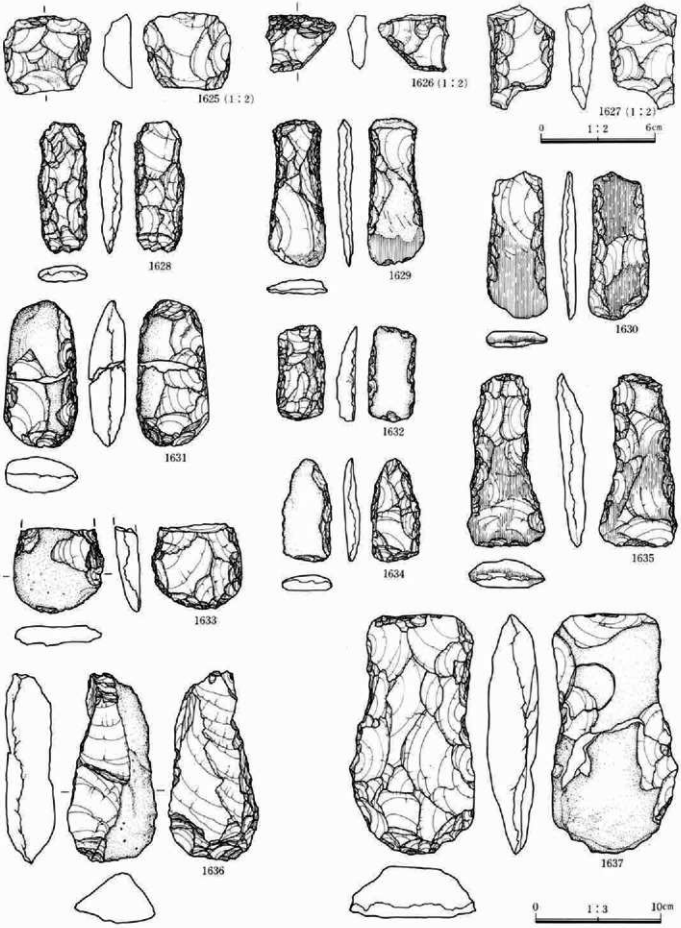
石器計測表

番号	出土位置	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
1605	Ⅲ C 680 F G	石鏃	1.45	1.05	0.25	0.49	チャート
1606	Ⅲ C 681 D G	石鏃	1.80	1.00	0.25	0.25	黒曜石
1607	Ⅲ C 681 E G	石鏃	1.80	1.00	0.35	0.53	黒曜石
1608	Ⅲ B 249 H 東	石鏃	1.75	1.60	0.30	0.54	黒曜石
1609	Ⅲ 区 C	石鏃	2.10	2.20	0.30	0.72	黒曜石
1610	Ⅲ B 249 H 西	石鏃	2.25	1.60	0.30	0.95	チャート
1611	Ⅲ 区 C	石鏃	1.65	1.50	0.35	0.72	黒色安山岩
1612	Ⅲ C 681 C G	石鏃	2.30	1.30	0.40	1.12	チャート
1613	Ⅲ C 681 S D G	石鏃	3.00	1.80	0.40	1.45	黒色安山岩
1614	Ⅲ C 679 F G	石鏃	2.60	1.30	0.45	0.80	チャート
1615	Ⅲ 区 C	石鏃	2.00	1.40	0.40	0.83	チャート
1616	Ⅲ C 8 今 G	石鏃	2.10	1.50	0.40	1.10	チャート
1617	Ⅲ C 678 F G	石鏃	3.30	2.30	0.40	2.20	黒色粘板岩
1618	Ⅲ C 681 B G	石鏃	2.90	1.80	0.40	1.60	黒色粘板岩
1619	Ⅲ C 678 S A G	石鏃	4.10	2.10	0.50	3.00	チャート
1620	Ⅲ C 678 S G	石鏃	4.50	1.95	0.60	3.40	黒色粘板岩
1621	Ⅲ A 10 今 G	石鏃	3.30	6.00	0.60	14.90	黒色粘板岩
1622	Ⅲ C 678 S B G	石鏃	3.90	5.60	0.60	3.80	黒色粘板岩
1623	Ⅲ C 682 D G	石鏃	3.20	2.80	0.70	1.10	黒色粘板岩
1624	Ⅲ C 681 S B G	石鏃	3.80	2.80	0.70	1.60	黒色粘板岩
1625	Ⅲ C 682 C G	ピエスエスキュ	4.10	4.60	1.50	34.21	黒色粘板岩
1626	Ⅲ C 679 E G	ピエスエスキュ	3.70	3.00	1.00	12.20	チャート
1627	Ⅲ C 680 S C G	ピエスエスキュ	5.50	3.60	1.80	35.20	チャート
1628	Ⅲ 677 S E G	打製石斧(短軸)	13.00	3.90	1.70	160.30	黒色粘板岩
1629	Ⅲ C 39 今 G 北	打製石斧(短軸)	11.70	4.50	1.20	82.90	黒色粘板岩
1630	Ⅲ 区 A 調	打製石斧(短軸)	11.60	4.70	1.20	95.98	黒色安山岩
1631	Ⅲ C 679 H G	打製石斧(短軸)	11.10	5.75	2.80	242.50	黒色粘板岩
1632	Ⅲ C 682 B G	打製石斧(短軸)	7.50	3.70	1.50	60.51	黒色粘板岩
1633	Ⅲ C 681 B G	打製石斧(短軸)	6.00	3.90	1.20	46.41	黒色粘板岩
1634	Ⅲ C 678 S D G	打製石斧(短軸)	13.45	6.05	1.75	183.59	黒色粘板岩
1635	Ⅲ C 11 今 東 右	打製石斧(短軸)	16.60	7.10	1.60	126.60	黒色粘板岩
1636	Ⅰ B 666 B G	打製石斧(短軸)	14.90	7.10	3.80	501.70	変質玄武岩
1637	Ⅲ C 5 今 東 右	打製石斧(短軸)	16.90	9.90	4.90	823.30	黒色粘板岩
1638	Ⅲ C 679 S F G	打製石斧(短軸)	11.20	4.90	1.35	92.47	緑泥岩
1639	Ⅲ C 683 B G	打製石斧(短軸)	11.70	5.25	1.90	106.94	黒色粘板岩
1640	Ⅲ C 679 S F G	打製石斧(磨 刃)	10.90	6.10	2.35	136.57	ホルンフェルス
1641	Ⅲ C 679 S E G	打製石斧(磨 刃)	16.40	5.30	1.30	97.90	黒色粘板岩
1642	Ⅲ C 679 S D G	打製石斧(磨 刃)	10.60	5.90	1.10	92.12	ホルンフェルス
1643	Ⅲ C 678 S F G	打製石斧(磨 刃)	11.20	6.70	1.60	120.73	細粒安山岩
1644	Ⅲ C 681 S B G	打製石斧(分刃)	12.50	8.80	3.30	404.50	黒色粘板岩
1645	Ⅲ A 672 X G	打製石斧(分刃)	12.10	7.50	2.50	238.80	緑泥岩
1646	Ⅲ C 680 G	打製石斧(分刃)	19.70	8.60	4.50	656.60	黒色粘板岩
1647	Ⅲ C 681 H G	打製石斧(分刃)	21.30	9.70	5.00	982.00	ホルンフェルス
1648	Ⅲ C 39 今 北 東	打製石斧(分刃)	15.50	6.30	3.20	337.00	黒色粘板岩
1649	Ⅲ C 679 D G	打製石斧(分刃)	15.00	8.10	1.80	183.20	緑泥岩
1650	Ⅲ C 677 S F G	打製石斧(分刃)	16.70	6.30	2.00	123.46	黒色粘板岩
1651	Ⅲ C 681 C G	片刃石斧	8.70	4.80	2.10	103.40	黒色粘板岩
1652	Ⅲ C 678 C G	片刃石斧	6.30	5.60	1.70	74.85	黒色粘板岩
1653	Ⅲ C 678 C G	片刃石斧	9.40	5.30	2.00	121.20	黒色粘板岩
1654	Ⅲ C 683 E G	片刃石斧	5.85	4.95	1.25	60.54	黒色粘板岩
1655	Ⅲ C 681 C G	片刃石斧	9.80	5.80	1.90	99.90	細粒安山岩
1656	Ⅲ C 680 B G	片刃石斧	12.25	6.10	2.40	219.70	ホルンフェルス
1657	Ⅲ C 678 G	片刃石斧	8.40	5.80	1.80	91.44	黒色粘板岩
1658	Ⅲ C 679 H G	磨製石斧	15.80	5.60	1.60	43.90	細粒安山岩
1659	Ⅲ C 682 B G	磨製石斧	(4.80)	3.60	1.10	34.30	ホルンフェルス
1660	Ⅲ C 679 H G	磨製石斧	10.60	3.70	1.80	150.00	黒色粘板岩
1661	Ⅲ C 680 B G	片刃石斧	11.15	4.15	3.20	157.90	黒色粘板岩
1662	Ⅲ C 680 S C G	敲石(敲打痕)	10.90	8.95	2.30	234.60	黒色粘板岩
1663	Ⅰ 区 表 採	片刃石斧	10.80	5.60	2.60	191.60	黒色粘板岩
1664	Ⅲ C 679 S E G	敲石(敲打痕)	9.80	5.40	2.50	159.60	黒色粘板岩
1665	Ⅲ C 681 E G	敲石(敲打痕)	10.20	7.60	2.20	245.90	黒色粘板岩
1666	Ⅲ C 678 S D G	敲石(敲打痕)	9.80	5.00	1.60	99.20	黒色粘板岩
1667	Ⅲ C 678 C G	敲石(敲打痕)	10.00	5.50	2.30	157.90	黒色粘板岩
1668	Ⅲ C 681 S E G	敲石(敲打痕)	10.00	7.20	2.20	189.20	ホルンフェルス
1669	Ⅲ B 区 1 号 溝	敲石(敲打痕)	8.00	5.50	1.40	69.66	黒色粘板岩
1670	Ⅲ C 678 S E G	敲石(敲打痕)	6.50	7.40	1.70	80.67	黒色粘板岩
1671	Ⅲ C 675 S E G	敲石(敲打痕)	7.40	6.50	3.20	133.51	黒色粘板岩
1672	Ⅲ C 678 S E G	敲石(敲打痕)	6.30	4.70	1.20	45.64	黒色粘板岩
1673	Ⅲ C 682 C G	敲石(敲打痕)	7.50	4.30	1.50	37.94	黒色粘板岩
1674	Ⅲ B 676 F G	敲石(敲打痕)	7.20	6.70	1.20	65.41	緑泥岩
1675	Ⅲ C 679 S D G	敲石(敲打痕)	6.25	6.20	1.40	78.86	黒色粘板岩
1676	Ⅲ C 682 S B G	敲石(敲打痕)	(6.70)	(5.90)	1.70	60.60	黒色粘板岩
1677	Ⅲ C 676 A G	敲石(敲打痕)	9.65	6.50	1.60	92.49	黒色粘板岩
1678	Ⅲ C 681 E G	敲石(敲打痕)	12.80	7.30	1.85	136.83	ホルンフェルス
1679	Ⅲ C 680 S B G	敲石(敲打痕)	5.10	4.60	1.00	25.31	黒色安山岩
1680	Ⅲ C 678 S F G	敲石(敲打痕)	8.50	7.50	1.70	88.17	黒色粘板岩
1681	Ⅲ C 678 S G	敲石(敲打痕)	6.20	5.70	1.50	46.33	黒色粘板岩
1682	Ⅲ B 区 9 号 住	敲石(敲打痕)	5.65	7.15	1.20	53.84	黒色粘板岩
1683	Ⅲ C 680 F G	敲石(敲打痕)	6.35	6.20	1.60	79.86	黒色粘板岩
1684	Ⅲ C 679 D G	敲石(敲打痕)	4.00	6.20	0.90	25.29	黒色安山岩
1685	Ⅲ C 681 S C G	敲石(敲打痕)	4.25	5.80	1.20	33.68	黒色粘板岩
1686	Ⅲ C 679 D G	敲石(敲打痕)	5.40	8.80	1.05	46.93	黒色粘板岩

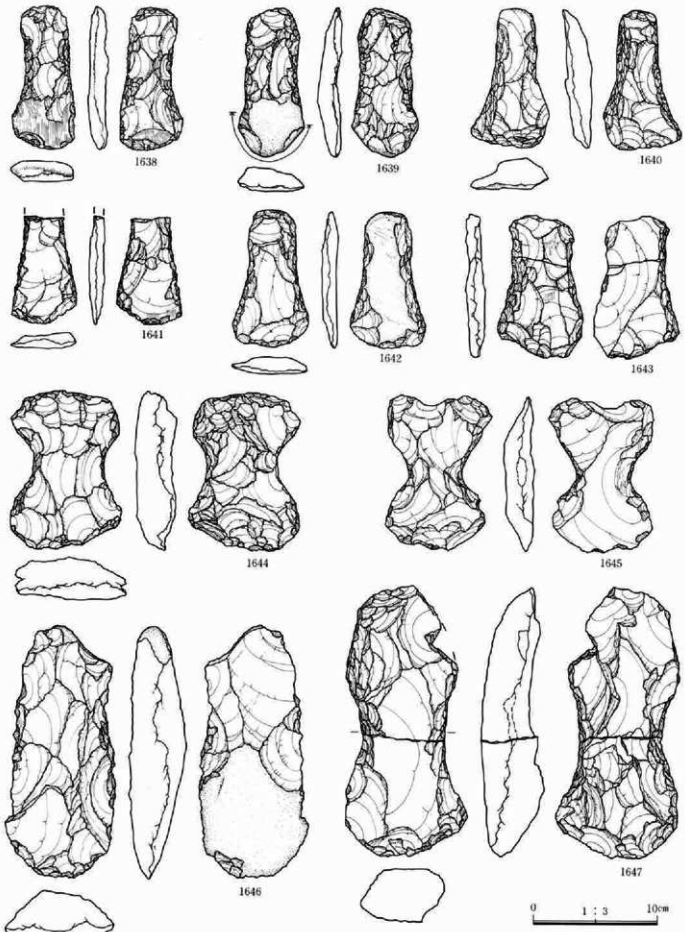
番号	出土位置	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材
1687	Ⅲ C 682 C G	削器(横長剥片)	7.20	8.30	2.10	116.30	黒色粘板岩
1688	Ⅲ C 678 C G	削器(横長剥片)	5.55	7.70	1.70	81.91	黒色粘板岩
1689	Ⅲ B 677 D G	削器(横長剥片)	5.00	8.90	1.60	75.61	緑泥岩
1690	Ⅲ A 671 S C G	削器(横長剥片)	7.50	11.60	1.90	142.10	黒色粘板岩
1691	Ⅲ C 681 H G	削器(横長剥片)	10.35	7.80	1.00	122.49	ホルンフェルス
1692	Ⅲ C 682 S B G	削器(横長剥片)	4.50	7.40	1.90	81.30	石英粗岩
1693	Ⅲ C 678 F G	削器(横長剥片)	5.90	10.40	2.30	144.30	黒色粘板岩
1694	Ⅲ C 681 G G	三角剥片石器Ⅰ a	11.30	10.30	3.20	402.60	黒色粘板岩
1695	Ⅲ C 681 S C G	三角剥片石器Ⅰ a	6.30	4.00	2.60	89.40	黒色粘板岩
1696	Ⅲ B 37 今 住 東	三角剥片石器Ⅰ a	11.80	5.60	5.70	415.30	黒色粘板岩
1697	Ⅲ A 12 今 住 東	三角剥片石器Ⅰ a	10.90	4.90	5.60	324.80	黒色粘板岩
1698	Ⅲ C 683 S B G	三角剥片石器Ⅰ a	9.30	6.70	5.40	233.80	黒色粘板岩
1699	Ⅲ C 675 G G	三角剥片石器Ⅰ a	8.20	4.20	3.40	163.00	黒色粘板岩
1700	Ⅲ C 683 B G	三角剥片石器Ⅰ a	6.20	4.30	3.40	93.90	黒色粘板岩
1701	Ⅲ C 682 B G	三角剥片石器Ⅰ a	10.40	4.40	5.00	360.20	黒色粘板岩
1702	Ⅲ C 682 C G	三角剥片石器Ⅰ a	9.00	5.35	4.40	337.40	黒色粘板岩
1703	Ⅲ C 682 C G	三角剥片石器Ⅰ a	7.60	7.10	3.70	276.50	黒色粘板岩
1704	Ⅲ C 683 B G	三角剥片石器Ⅰ a	7.30	6.20	4.20	268.00	黒色粘板岩
1705	Ⅲ C 681 C G	三角剥片石器Ⅰ a	8.60	6.80	4.80	427.50	黒色粘板岩
1706	Ⅲ A 672 X G	三角剥片石器Ⅰ a	10.60	7.75	4.00	529.40	黒色粘板岩
1707	Ⅲ C 681 S B G	三角剥片石器Ⅰ a	8.60	6.80	4.70	324.30	黒色粘板岩
1708	Ⅲ C 681 S E G	三角剥片石器Ⅰ a	8.80	3.95	3.80	156.95	黒色粘板岩
1709	Ⅲ C 679 S F G	三角剥片石器Ⅰ b	8.60	7.70	3.60	351.10	黒色粘板岩
1710	Ⅲ C 679 H G	三角剥片石器Ⅰ b	(5.90)	3.70	2.50	56.07	黒色粘板岩
1711	Ⅲ C 682 B G	三角剥片石器Ⅰ b	15.30	6.00	4.60	526.00	黒色粘板岩
1712	Ⅲ C 11 今 東 右	三角剥片石器Ⅱ b	7.70	5.50	4.90	279.40	黒色粘板岩
1713	Ⅲ C 32 今 住 東	三角剥片石器Ⅱ b	9.40	4.70	2.70	136.60	黒色粘板岩
1714	Ⅲ C 681 G G	三角剥片石器Ⅱ b	11.40	6.30	4.20	286.70	黒色粘板岩
1715	Ⅲ C 678 S E G	スタンプ形石器A	10.30	6.10	5.90	606.90	細粒安山岩
1716	Ⅲ C 681 S C G	スタンプ形石器A	8.70	5.60	2.55	196.70	輝緑岩
1717	Ⅲ C 11 今 東 右	スタンプ形石器A	(6.50)	7.75	5.30	329.40	ひん岩
1718	Ⅲ C 679 E G	スタンプ形石器A	13.30	7.00	5.00	641.00	細粒安山岩
1719	Ⅲ B 675 S F G	スタンプ形石器A	13.90	7.10	5.20	946.40	輝緑岩
1720	Ⅲ C 12 今 東 右	スタンプ形石器A	9.55	6.70	4.00	503.10	黒色粘板岩
1721	Ⅲ C 678 E G	スタンプ形石器A	10.60	6.70	4.30	678.10	輝緑岩
1722	Ⅲ C 34 今 東 右	スタンプ形石器A	9.40	7.70	4.50	577.60	砂岩
1723	Ⅲ C 683 B G	スタンプ形石器A	9.40	7.95	4.50	496.50	黒色粘板岩
1724	Ⅲ C 679 G G	石核	6.80	6.80	2.40	102.74	黒色粘板岩
1725	Ⅲ C 681 D G	石核	6.30	3.80	4.30	104.17	黒色粘板岩
1726	Ⅲ C 678 S D G	石核	10.90	6.40	3.90	277.80	黒色粘板岩
1727	Ⅲ B 675 S C G	加工板石器Ⅰ	7.30	4.70	1.60	56.23	黒色粘板岩
1728	Ⅲ C 680 F G	加工板石器Ⅰ	7.70	5.70	1.00	57.25	黒色粘板岩
1729	Ⅲ C 682 S C G	加工板石器Ⅰ	5.50	6.30	1.50	50.74	黒色粘板岩
1730	Ⅲ C 681 B G	加工板石器Ⅰ	4.70	6.50	0.80	25.78	黒色粘板岩
1731	Ⅲ C 680 S C G	加工板石器Ⅰ	10.35	10.40	2.80	187.60	黒色粘板岩
1732	Ⅲ C 678 C G	加工板石器Ⅰ	6.60	9.70	2.60	167.28	黒色粘板岩
1733	Ⅲ C 681 S B G	加工板石器Ⅰ	10.60	5.40	1.50	105.87	ホルンフェルス
1734	Ⅲ C 680 D G	加工板石器Ⅰ	3.70	4.65	0.75	12.84	黒色粘板岩
1735	Ⅲ C 679 G G	加工板石器Ⅰ	2.70	3.30	0.50	4.54	黒色粘板岩
1736	Ⅲ C 681 S E G	加工板石器Ⅰ	4.10	3.15	0.95	14.97	黒色粘板岩
1737	Ⅲ C 679 H G	加工板石器Ⅰ	5.00	4.10	1.70	36.60	黒色粘板岩
1738	Ⅲ C 680 S H G	加工板石器Ⅰ	5.80	6.10	1.90	57.22	黒色粘板岩
1739	Ⅲ C 680 F G	加工板石器Ⅰ	6.80	4.60	3.30	50.37	黒色安山岩
1740	Ⅲ C 680 G G	使用板石器Ⅰ	6.80	6.90	1.40	74.81	黒色粘板岩
1741	Ⅲ C 678 S E G	使用板石器Ⅰ	5.10	5.80	1.30	32.88	黒色安山岩
1742	Ⅲ C 680 C G	使用板石器Ⅰ	4.40	7.80	1.60	30.01	黒色粘板岩
1743	Ⅲ A 4 今 住 東	使用板石器Ⅰ	5.70	5.80	1.05	20.80	黒色粘板岩
1744	Ⅲ C 680 S D G	使用板石器Ⅰ	4.10	6.70	1.10	27.65	黒色粘板岩
1745	Ⅲ A 673 S D G	使用板石器Ⅰ	5.80	8.10	1.25	63.24	黒色粘板岩
1746	Ⅲ C 680 S F G	使用板石器Ⅰ	6.05	3.85	0.80	19.28	黒色粘板岩
1747	Ⅲ C 679 D 住 東	使用板石器Ⅰ	5.75	10.70	1.65	85.14	黒色安山岩
1748	Ⅲ C 678 H G	使用板石器Ⅰ	4.10	3.80	0.60	8.68	黒色粘板岩
1749	Ⅲ C 678 S G G	使用板石器Ⅰ	6.00	3.40	1.20	27.21	黒色粘板岩
1750	Ⅲ C 681 E G	使用板石器Ⅰ	6.35	4.20	1.30	46.07	チャート
1751	Ⅲ C 680 S C G	使用板石器Ⅰ	13.00	5.45	2.70	209.00	黒色粘板岩
1752	Ⅲ C 678 A G	使用板石器Ⅰ	8.30	4.60	1.10	31.77	黒色粘板岩
1753	Ⅲ C 679 S E G	使用板石器Ⅰ	4.30	3.15	1.25	18.08	珪質頁岩
1754	Ⅲ C 682 B G	敲石	5.90	4.40	2.40	79.70	黒色粘板岩
1755	Ⅲ C 681 S D G	円石	17.40	15.60	7.40	3040.0	細粒安山岩
1756	Ⅲ C 681 G G	円石	11.70	7.50	6.20	727.40	細粒安山岩
1757	Ⅲ C 679 D G	円石	9.30	8.50	3.30	492.80	細粒安山岩
1758	Ⅲ C 4 今 東 右	円石	12.65	11.70	5.90	1506.90	細粒安山岩
1759	Ⅲ C 679 S B G	円石	8.40	8.40	4.65	452.20	細粒安山岩
1760	Ⅲ C 678 S D G	円石	11.40	6.80	3.50	345.70	細粒安山岩
1761	Ⅲ B 675 S E G	多孔石	(9.80)	(7.40)	(6.00)	361.00	細粒安山岩
1762	Ⅲ B 24 今 東 西	磨石	11.20	6.05	2.80	258.50	細粒安山岩
1763	Ⅲ C 679 S H G	多孔石	19.20	14.50	11.00	2880.00	細粒安山岩
1764	Ⅲ C 4 今 東 右	多孔石	18.80	11.10	10.40	3250.00	細粒安山岩
1765	Ⅲ C 681 S B G	石錘	(8.20)	(5.90)	(2.30)	145.00	細粒安山岩
1766	Ⅲ B 677 C G	砥石	(7.60)	(6.60)	(1.60)	91.40	砂岩
1767	Ⅲ B 29 今 住 東	砥石	(8.60)	(3.30)	(1.70)	41.60	砂岩
1768	Ⅲ C 681 D G	砥石	(6.50)	2.60	1.40	23.40	砂岩
1769	Ⅲ C 680 H G	砥板岩	(2.60)		1.30	3.40	ちり石


1605
1606
1607
1608
1609
1610
1611
1612
1613
1614
1615
1616
1617
1618
1619
1620
0 1:1 5cm
1621 (1:2)
1622 (1:2)
1623 (1:2)
1624 (1:2)
0 1:2 6cm

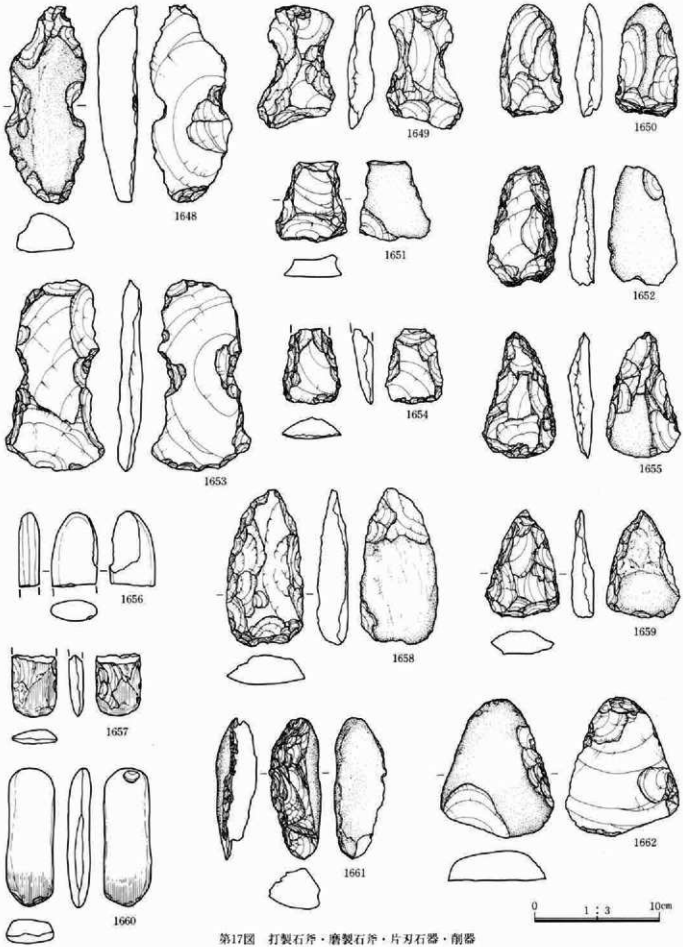
第14図　石鏃・石匙・石錐



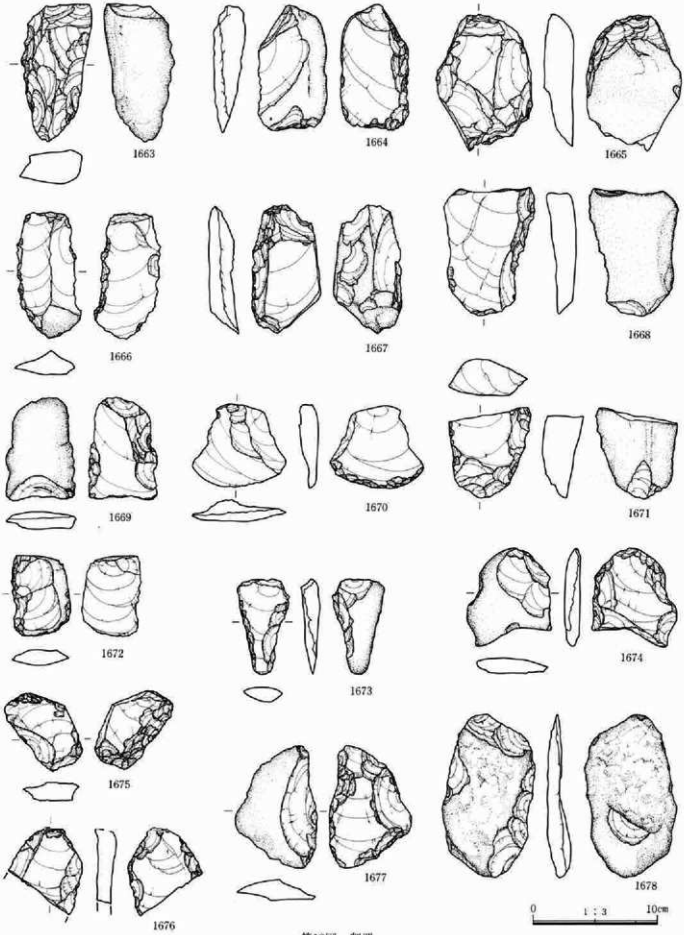
第15図　ピエスエスキーユ・打製石斧



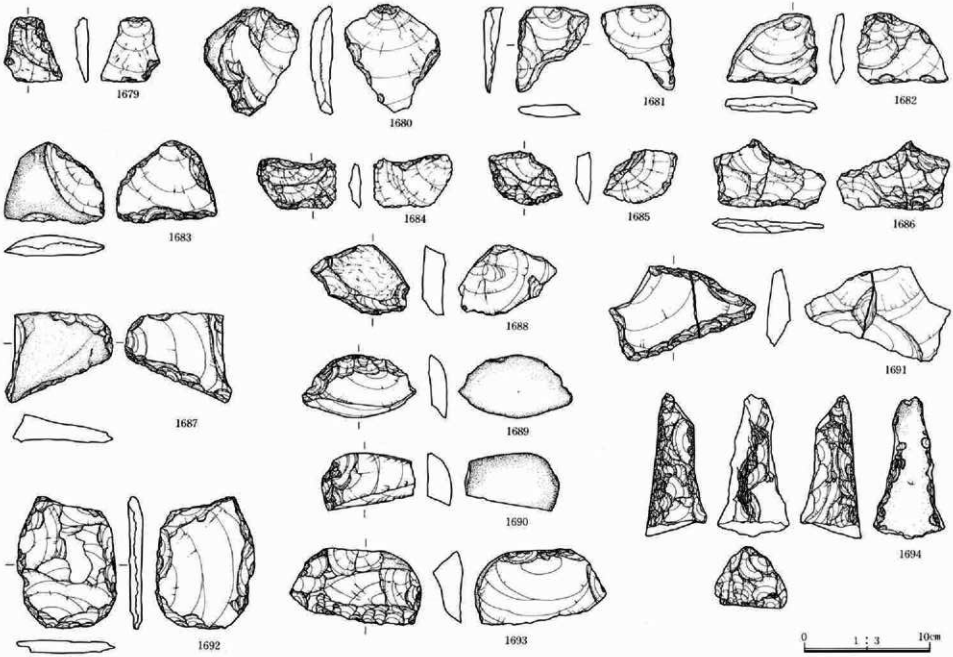
第16図　打製石斧



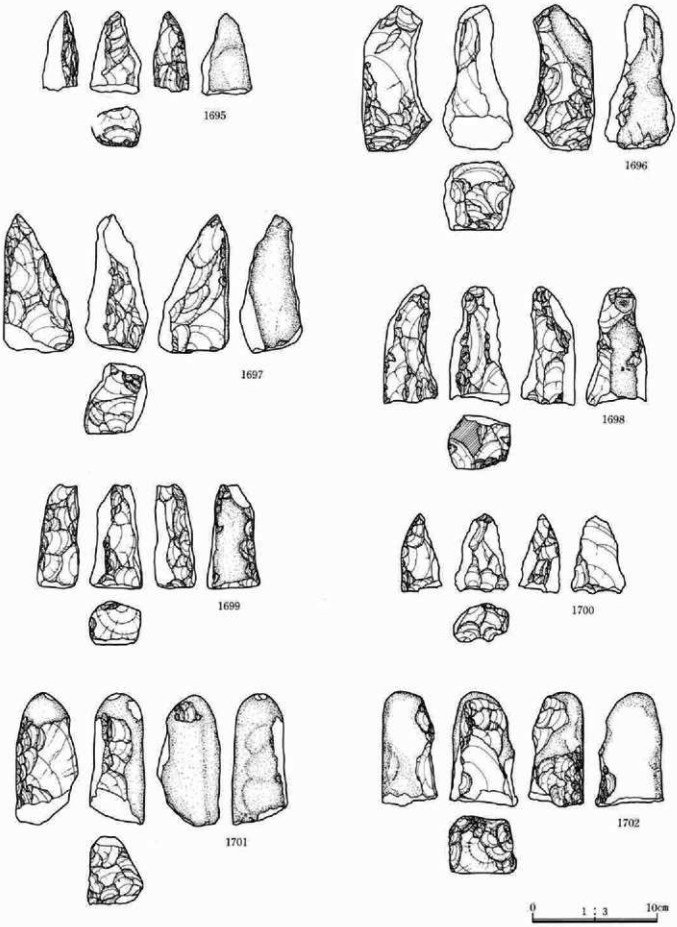
第17図　打製石斧・磨製石斧・片刃石器・削器


1663
1664
1665
1666
1667
1668
1669
1670
1671
1672
1673
1674
1675
1676
1677
1678
0
1：3
10cm

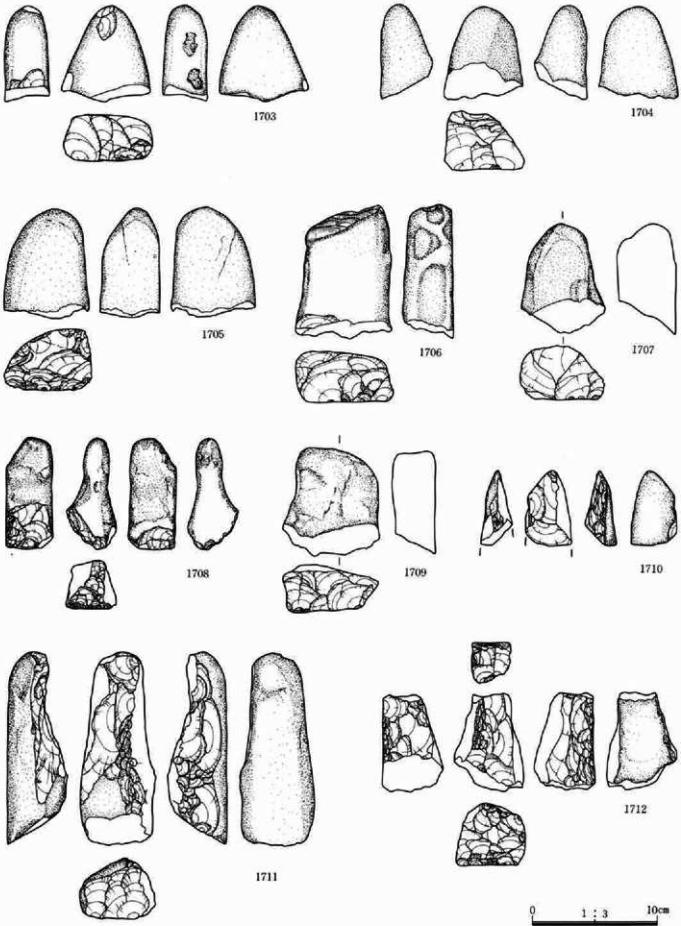
第18図　削器



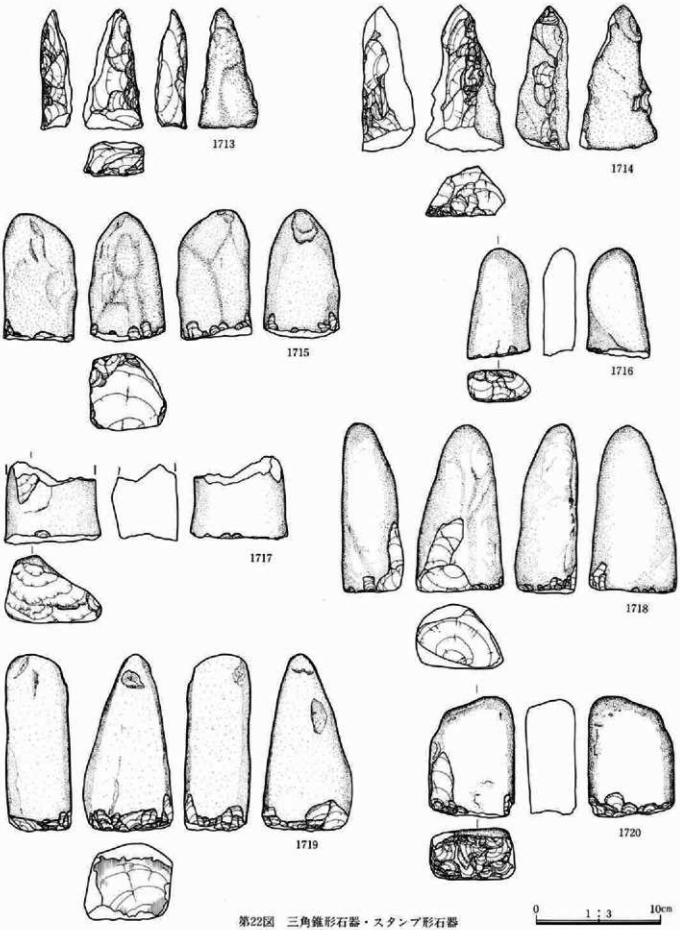
第19図　削器・三角錐形石器



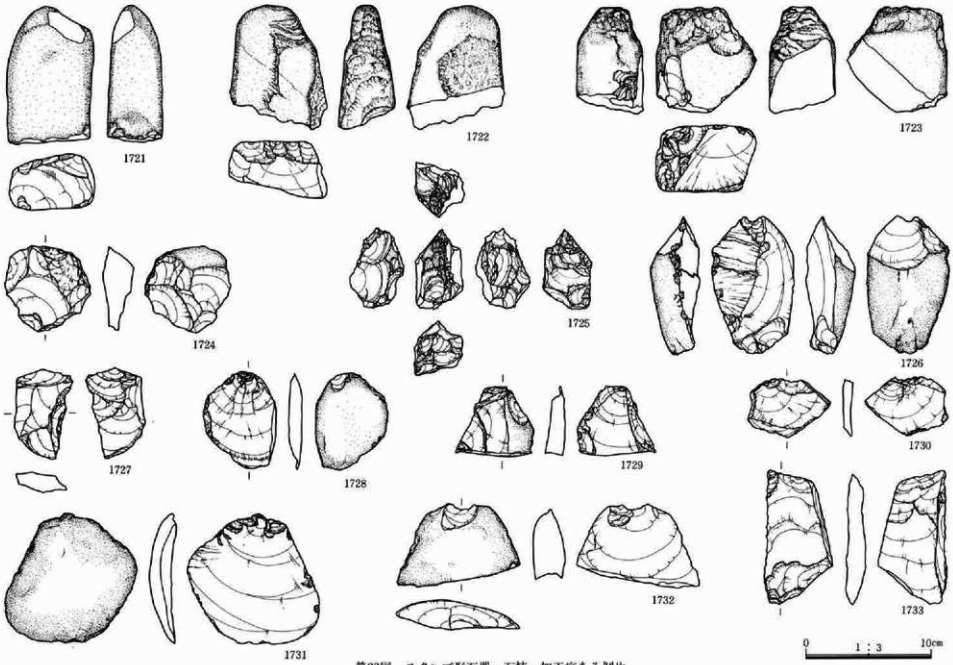
第20図　三角錐形石器



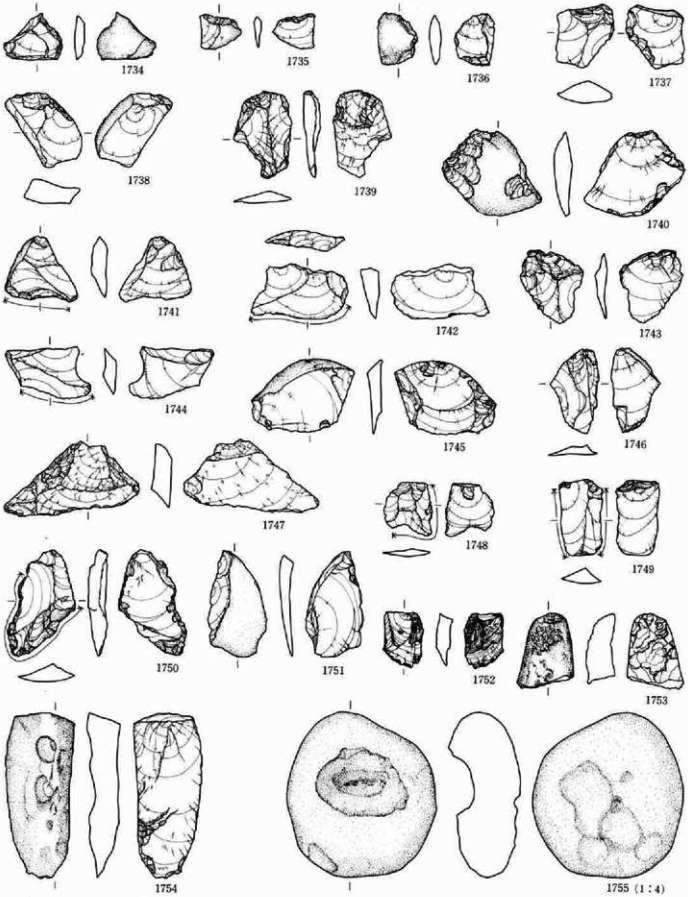
第21図　三角錐形石器



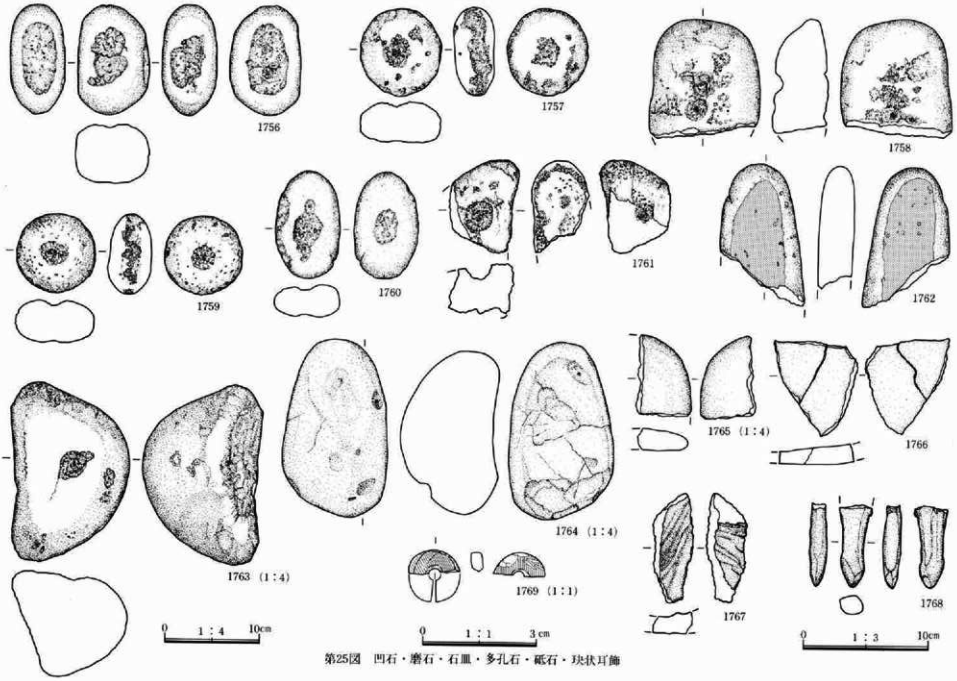
第22図　三角錐形石器・スタンプ形石器



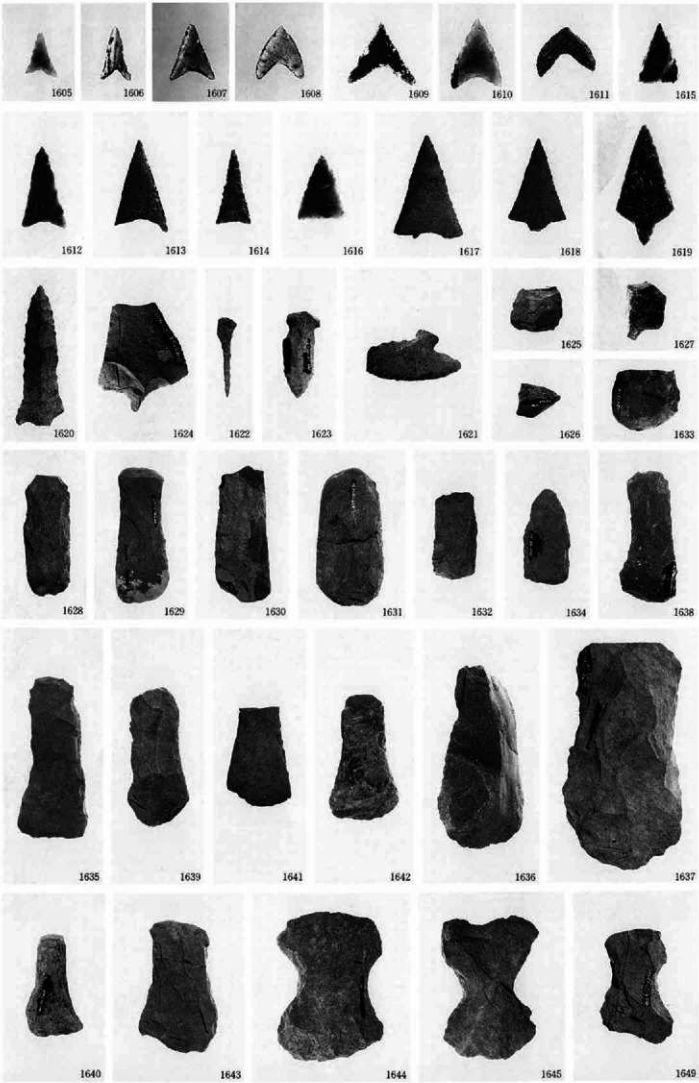
第23図　スタンプ形石器・石核・加工痕ある剥片

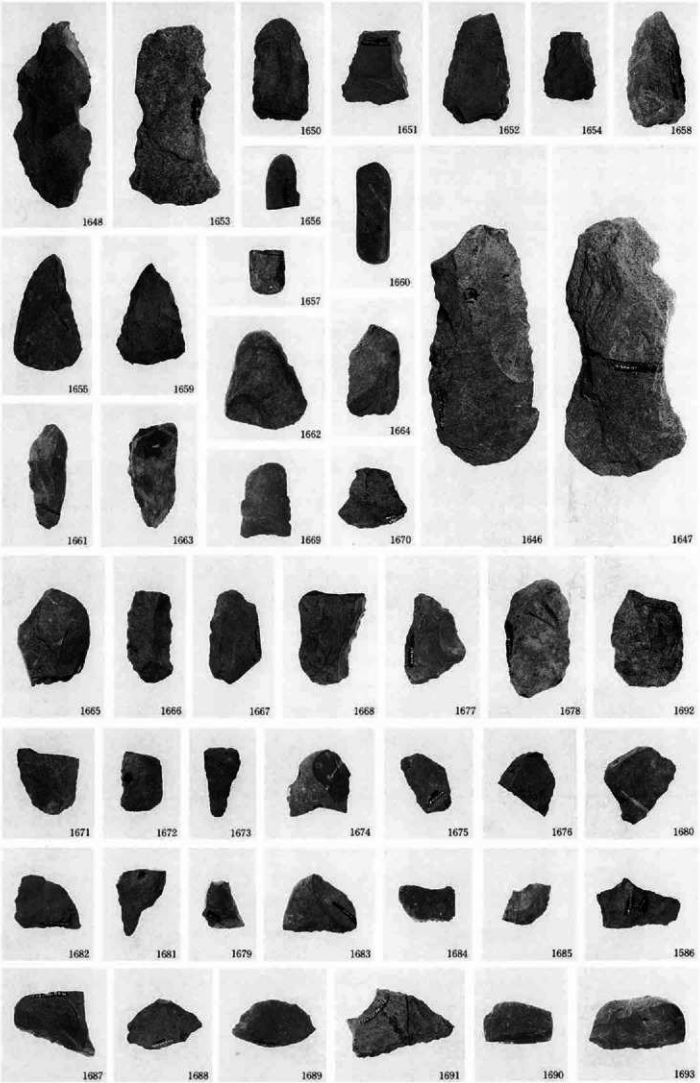


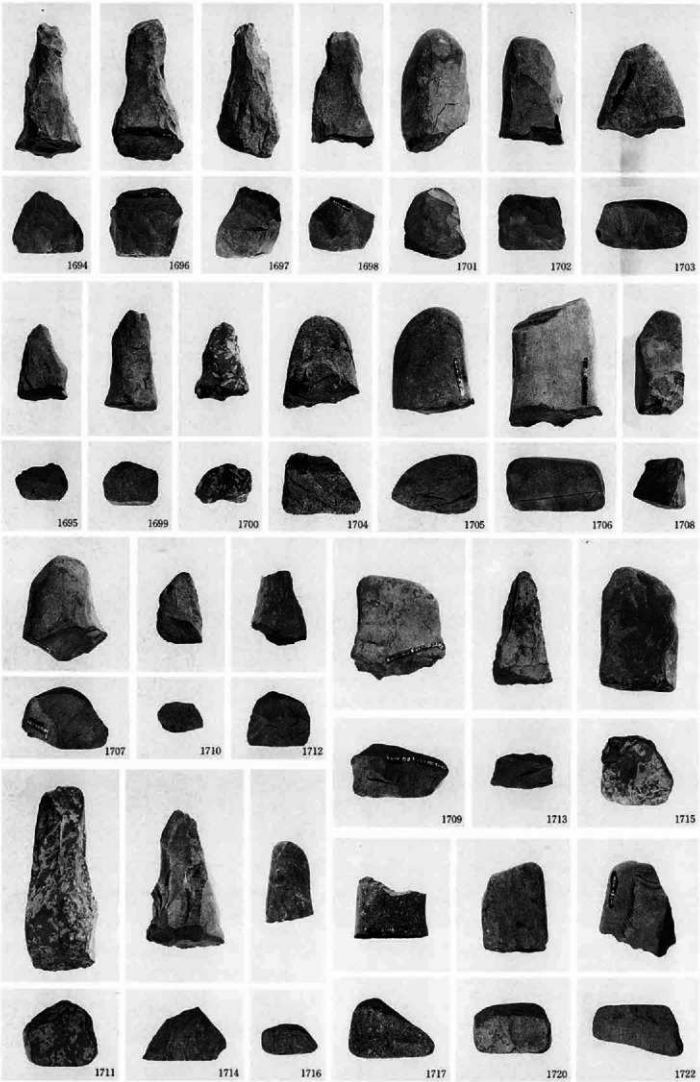
第24図　加工痕ある剥片・凹石

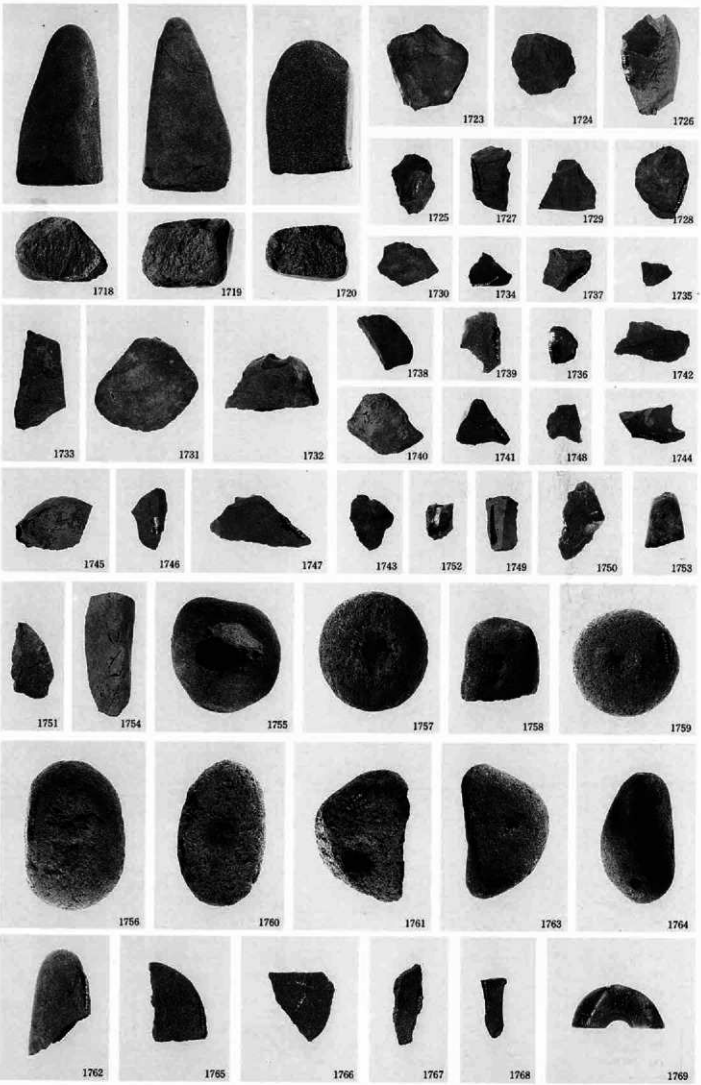


第25図　凹石・磨石・石皿・多孔石・砥石・玦状耳飾


1605
1606
1607
1608
1609
1610
1611
1615
1612
1613
1614
1616
1617
1618
1619
1620
1624
1622
1623
1621
1625
1627
1626
1633
1628
1629
1630
1631
1632
1634
1638
1635
1639
1641
1642
1636
1637
1640
1643
1644
1645
1649


1648
1653
1650
1651
1652
1654
1658
1656
1660
1655
1659
1657
1662
1664
1646
1647
1661
1663
1669
1670
1665
1666
1667
1668
1677
1678
1692
1671
1672
1673
1674
1675
1676
1680
1682
1681
1679
1683
1684
1685
1586
1687
1688
1689
1691
1690
1693


1694
1696
1697
1698
1701
1702
1703
1695
1699
1700
1704
1705
1706
1708
1707
1710
1712
1709
1713
1715
1711
1714
1716
1717
1720
1722


1723
1724
1726
1725
1727
1729
1728
1718
1719
1720
1730
1734
1737
1735
1733
1731
1732
1738
1739
1736
1742
1740
1741
1748
1744
1745
1746
1747
1743
1752
1749
1750
1753
1751
1754
1755
1757
1758
1759
1756
1760
1761
1763
1764
1762
1765
1766
1767
1768
1769

遺構索引

番号	種類	時代	頁	位置	番号	種類	時代	頁	位置	番号	種類	時代	頁	位置
001	竪穴	古墳	71	D4	056	竪穴	古墳	139	D3	111	土坑	不明	150	B8
002	竪穴	古墳	72	D4	057	竪穴	古墳	139	D3	112		欠	番	
003	竪穴	古墳	74	D4	058	竪穴	古代	60	D4	113	土坑	縄文	182	B7
004	竪穴	古墳	76	D4	059	堀立	古代	61	D5	114	土坑	不明	151	B7
005	竪穴	古墳	77	D4	060	堀立	古代	63	D5	115	土坑	縄文	182	B7
006	竪穴	古代	48	D4,5	061	堀立	古代	64	C6	116	土坑	不明	151	B7
007	竪穴	古墳	78	D4,5	062	堀立	不明	156	C6	117	土坑	不明	151	B8
008	竪穴	古墳	80	E4,5	063	堀立	不明	157	C6	118	土坑	不明	151	B7
009	竪穴	古墳	82	D5	064	堀立	不明	157	C6	119	土坑	不明	150	B7
010	竪穴	古墳	83	D5	065	堀立	不明	158	B6,7	120	土坑	不明	150	B7
011	竪穴	古代	49	D4,5	066	堀立	不明	158	C5,6	121	土坑	縄文	183	B7
012	竪穴	古代	51	D4,5	067	溝	古代	66	C5,E4	122	土坑	不明	150	B7
013	竪穴	古代	52	D5	068	溝	古代	66	D4,E4	123	土坑	不明	149	B6
014	竪穴	古墳	84	D5	069	溝	不明	66	D4	124	土坑	縄文	183	B8
015	竪穴	古代	53	D4	070	溝	不明	66	D4	125	土坑	縄文	182	B8
016	竪穴	古墳	86	C5	071	道路	不明	66	D4	126	土坑	縄文	183	B8
017	竪穴	古墳	87	C5	072	溝	古墳	141	D6,6	127	土坑	不明	151	C7
018	竪穴	古墳	89	C5	073	溝	不明	159	BC7	128	土坑	古墳	152	B7
019	竪穴	古墳	91	C5	074	溝	不明	141	D5	129	土坑	縄文	183	B8
020	竪穴	古墳	92	C6	075	溝	不明	69	C6	130	土坑	不明	147	C6
021	竪穴	古墳	94	C6	076	溝	不明	66	D3,4	131	土坑	不明	147	C6
022	竪穴	古墳	95	D6	077	溝	不明	66	D4,E4	132	土坑	不明	145	D5
023	竪穴	古墳	97	D6	078	溝	不明	66	E5	133	土坑	不明	145	D5
024	竪穴	古墳	98	C6	079	畠	不明	160	C6	134	土坑	不明	145	D5
025	竪穴	古代	54	D4	080	井戸	古代	70	D4	135	土坑	古代	152	C6
026	竪穴	古墳	100	C6	081	井戸	不明	70	D3	136	土坑	古墳	151	B7
027	竪穴	古墳	103	C6	082	土坑	不明	143	D4	137	土坑	不明	146	C6
028	竪穴	古墳	105	C6	083	土坑	不明	143	D4	138	土坑	不明	148	C7
029	竪穴	古墳	107	B6	084	土坑	古代	143	D4	139	土坑	古墳	152	B7
030	竪穴	古墳	109	C6,7	085	土坑	不明	143	D4	140	土坑	不明	146	C6
031	竪穴	古墳	111	C7	086	土坑	不明	144	D4	141	土坑	不明	153	D3
032	竪穴	古墳	112	C7	087	土坑	不明	144	D4	142	土坑	古墳	152	B7
033	竪穴	古墳	114	B7	088	土坑	不明	144	D4	143	土坑	不明	153	D3
034	竪穴	古墳	115	B6,7	089	土坑	不明	145	D5	144	土坑	不明	146	E4
035	竪穴	古墳	117	B6	090	土坑	古墳	145	D6	145	土坑	不明	153	B8
036	竪穴	古墳	118	B7	091	土坑	不明	146	D4	146	土坑	古代	153	D6
037	竪穴	古墳	120	B7	092	土坑	不明	146	D4	147	集石	縄文	175	B7
038	竪穴	古墳	122	C7	093	土坑	不明	146	C6	148	集石	縄文	175	B7
039	竪穴	古墳	124	B7,8	094	土坑	古墳	147	C5	149	集石	縄文	176	B8
040	竪穴	古墳	127	C7	095	土坑	古代	147	C6	150	集石	縄文	176	B8
041	竪穴	古墳	128	B7	096	土坑	縄文	182	C6	151	集石	縄文	177	B7
042	竪穴	古代	56	B7	097	土坑	古墳	148	C6	152	集石	縄文	177	B8
043	竪穴	古代	57	B7	098	土坑	不明	148	C7	153	集石	縄文	178	B8
044	竪穴	古代	58	B7	099	土坑	縄文	181	C6	154	集石	縄文	178	B7
045	竪穴	古墳	131	B7	100	土坑	不明	147	C7	155	集石	縄文	179	B7
046	竪穴	古墳	132	B6,C6	101	土坑	不明	148	C7	156	集石	縄文	179	B7
047	竪穴	不明	154	B7	102	土坑	古墳	149	C6	157	集石	縄文	180	B6
048	竪穴	古墳	134	C5	103	土坑	古墳	149	B6	158	集石	縄文	180	B7
049	竪穴	古墳	135	B7	104	土坑	不明	149	B6	159	集石	縄文	180	B7
050	竪穴	古墳	136	C7	105	土坑	縄文	181	B6	160	集石	縄文	180	B7
051	竪穴	不明	155	B7,C7	106	土坑	不明	149	B6	161	溝	不明	12	EF3
052	竪穴	古墳	137	C7	107	土坑	古墳	149	B6	162	溝	不明	12	EF3
053	竪穴	古代	59	C6	108	土坑	縄文	181	B6,7	163	溝	不明	12	F2,3
054	竪穴	古墳	138	C7	109	土坑	縄文	181	B7					
055	竪穴	不明	155	D4	110	土坑	不明	150	B7					

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第91集

八寸大道上遺跡 一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成元年9月25日　印刷
平成元年9月30日　発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52－2511（代表）

印刷／株式会社上毛新聞社